OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	1920－1940年代の満洲におけるロシア人と日本人の「満洲経験」に関する思い出 : 1920－1940年代の満洲において居住したロシア人と日本人の回想記の比較研究
Author(s)	ヤキメンコ, レギーナ
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67062
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

2016 年度博士学位申請論文

1920‐1940 年代の満洲におけるロシア人と日本人の「満洲経験」に関する思い出

――1920‐1940 年代の満洲において居住したロシア人と日本人の回想記の比較研究――

大阪大学大学院言語文化研究科

言語文化専攻

ヤキメンコ　レギーナ

目次

第1章　序論……11
1.1. 本研究の課題、特徴と意義……12
1.2. 本研究の構成……13
1.3. 方法論……14
1.4. 先行研究……15
1.4.1.「ディアスポラ」に関する先行研究……15
1.4.2.「日常性」に関する先行研究……16
1.4.3. 「回想記」に関する先行研究……16
1.4.4. 満洲におけるロシア系ディアスポラの日常生活に関する先行研究……17
1.4.5. ロシア人の「回想記」に関する先行研究……19
1.4.6. 日本人の日常性に関する先行研究……19
1.4.7. 満洲経験についての記憶、そして日本人の回想記に関する先行研究……19
1.4.8.「移民者の心理的問題」に関する先行研究……20
1.4.9.　先行研究の問題点……21
1.5. ディアスポラの定義……22
1.5.1. 「ディアスポラ」の定義を巡る議論……22
1.5.2.「ディアスポラ」の定義へのアプローチ……23
1.5.3. ディアスポラの分類方法……23
1.6.　ロシア系ディアスポラ、日系ディアスポラ……26
1.6.1. ロシア系ディアスポラ……26
1.6.2. 日系ディアスポイラ……27
1.6.3. ロシア系ディアスポラ、日系ディアスポラの特徴に関する対照分析……28
1.7. 「日常性」という定義を巡る考察……35
1.8. 歴史学、社会学、文化論などにおける、「日常生活」の研究の意義
1920－1940 年代の満洲に存在していたロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの研究における、個人の「日常生活」の検討の適用性を巡る考察……35
1.8.1. 20 世紀の歴史学、社会学における新しい見方……35
1.8.2. 「社会史」の生まれ……36
1.8.3. 人間を中心にした研究へ……37

1.8.4. A.ルトゥケによって行われた、「日常性」の実践的研究の結果
1920－1940 年代の満洲において存在していたロシア系と日系ディアスポラの研究への適用の試み……38
1.9. 満洲についての記憶の重要性。ロシア人の視点……45
1.10. 満洲についての記憶の重要性。日本人の視点……46
1.11. 回想記というジャンルの定義及び、回想記の文学的・歴史的重要性に関する議論…50
1.12. 満州におけるロシア人の回想記……52
1.12.1. 満州におけるロシア人の回想記の著者……53
1.13. 日本人の回想記……56
1.13.1. 純粋な回想録……57
1.13.2. 満州における日本人の回想記の著者……59

第1部 日常性……64

第2章 ロシア人の日常性……64

2.1 仕事……65

2.1.1. 貴族・「白系軍人」の就職の問題： エミグラントの社会における地位の無益性…65
2.1.2. 「白系」と「赤系」ロシア人の職場の雰囲気における相違点：信頼関係を維持していた「白系」ロシア人と、緊張した雰囲気で活動していた「赤系」ロシア人……67
2.1.3. プロパガンダ活動：政治的、社会的変更を要求するロシア人……69
2.1.4. 教員としての仕事：ロシア系ディアスポラの知的発展への貢献……71
2.1.5. 創造的仕事：一方で、ディアスポラにおける文化レベルの高揚、他方で、個人の不幸な運命……73
2.1.5.1. 芸術専門教育機関の活動、教員の大きな役割……73
2.1.5.2. 文学者、詩人のクラブ活動……75
2.1.5.3. 詩人、文学者の不幸な運命……76
2.1.6. ハルビンにおけるロシア女性の就職問題： 精神的偉業の達成……78
2.1.7. 家族の経済的サポートへの子供の貢献……80
2.1.8.「満洲国」時代における就職状況： ロシア人にとっての雇用状況が次第に悪化、満洲からの移住の動機……81
2.1.9. 終戦後の満洲における労働条件：一方では、混乱状態において生き残る方法を探していた人が多かったが、もう一方では、通常の生活様式を送り続けていた人も存在していた……84

まとめとして……87
2.2. 住宅、アパート……87
2.2.1. 中東鉄道の職員の住宅：職場における地位を反映する住宅……88
2.2.2. 上流社会ロシア人の住宅、アパートメント：ロシア帝国とヨーロッパスタイルの混合……89
2.2.3. 貧乏な「白系」亡命ロシア人のアパートメント、住宅：ロシア系ディアスポラにおける下層「白系」ロシア人の無力性が表面に見出されている……90
2.2.4. 上流社会、ミドル・クラスのアパート・住宅のインテリア：本物の「家らしさ」を目指すこと……93
2.2.5.　ロシア人の価値観を反映する住宅：贅沢さより、幸せな雰囲気の重要性……95
まとめとして……96
2.3. 着衣……97
2.3.1. ロシア系のデォアスポラの上流社会のファッション：エリート層のコード……98
2.3.2. ハルビンにおけるファッションのイデオロギー性：「功利主義的」ソ連の哲学とのコントラスト……99
2.3.3. ハルビンにおける貧乏な「白系」ロシア人：「ドレス・コード」の抑圧……101
まとめとして……104
2.4. 食事……104
2.4.1. 1920－1940年代:　様々な社会層に適する食料品の多種多様性……105
2.4.2. ハルビンにおける「外食の習慣」、「レストランの文化」が形成された：カフェー、レストラン、食堂……106
2.4.3.「満洲国」、第二次世界大戦の時代における飲食料の状況:下中流社会層の生活レベルが次第に悪化……108
2.4.4. 日常の食事：中国食文化との共生……112
2.4.5.　満洲風の「味」についてのノスタルジアを表す方法としての食事の記述……114
まとめとして……117
本章のまとめとして……117

第3章　日本人の日常性……119
3.1. 仕事……121
3.1.1. 職場における雰囲気：日本特有の「仕事哲学」の大陸への持ち込み……122
3.1.2. 転勤生活は家族の一員に多くの不便さをもたらしていた……123
3.1.3.「満洲国」における「教員」というのは、生徒に対して国家のイデオロギーを伝える

べきものであった……123
3.1.4.「満洲国作り」、「民族協和の達成」という活動に従事した日本人は社会への自分自身の影響力を享受した……128
3.1.5. 第二次世界大戦の時に、生徒を労働力として使用：大人になった時に、自分のことに対する政府の扱いの不当性について把握すること……129
3.1.6.「開拓団」における仕事の特徴：田舎の生活に慣れていない人は適応できない……131
3.1.7. 敗戦後の日本人の労働状況：機知、コネクション、そして勇気の重要性……132
まとめとして……135
3.2. 住宅、アパート……136
3.2. 1. 日本人の官吏に当てられた市営住宅の様子：設計の同一性、和室の雰囲気の再現……137
3.2.2. ロシア人によって建てられたマンションのアパートと平屋住宅：日本人のミドル・クラスに相当する快適さと珍しさが感じられた……139
3.2.3. ロシア人のアパートを借りた日本人：　ロシア人の中で生きる経験の重要性……142
3.2.4. 転勤生活を送る日本人の住宅の様子：本物の「家らしさ」の不足……144
3.2.5. 開拓団に属する日本人の農民の生活条件：本来の意味での「自給自足」の生活の実感……146
3.2.6. 日本人特有のホスピタリティ：ゲストを誘うことは、主に夫と子供の「特権」であった……148
3.2.7. 第二次世界大戦の時代に、満洲国のイデオロギーは、日本人の住宅にも染み込んでいた……150
まとめとして……150
3.3. 着衣……151
3.3.1. 「自由への憧れ」、「西洋文化に接触する意欲」の表現としての日本人女性のスタイル……152
3.3.2. 西洋風なスタイルの裏面：自国における奇異のものとしての受け止め……153
3.3.3. 満洲における着物の意義：自分の文化の保持方法に限らず、戦争後に生き残る手段……154
3.3.4. 満洲における厳しい気候への適応することの必要性：ロシア風なシュバという「苦肉の策」……155
3.3.5. 満洲における日本人の都会人と農民の生活基準に見られる「ギャップ」：服装の様子における相違点……156
3.3.6. 日本人の引き揚げ経験の辛さ：適当な靴を選択する必要性……158

まとめとして……159
3.4. 食事……160
3.4.1. 満洲国にける日本人の都会人と「開拓団」の農民の食文化の対照：表面には同種性、裏面には数多い相違点……161
3.4.2.「外食」における好み：ロシアの食文化の発見。乳製品、チョコレートなどという新しい味の体験……164
3.4.3. 満洲における「贅沢な食料品」についての回想……166
3.4.4. 日本人難民の「生き残る」方法：知恵を生かすこと、中国人の支援……168
まとめとして……170
章のまとめとして……171

第4章　1920－1940 年代の満洲におけるロシア人と日本人の日常性
ロシア人と日本人の経験を基にした対照分析……174
4.1. 仕事……174
4.1.1. 厳しい労働条件の下でのロシア人と日本人： 満洲の環境への適応過程の特徴……175
4.1.2. ロシア人と日本人の活動家：仕事の内容を通じて、人生のプライオリティを分析する試み……176
4.1.3. ロシア人と日本人の女性：「家庭主婦」、「働き者」、「英雄母」などの社会的役割における対照分析……178
4.1.4.「満州国」時代：「支配者」日本人と「被支配者」ロシア人の労働条件……179
4.1.5. 終戦後の満洲：ロシア人と日本人の極端な状況への適応能力における対照比較……180
まとめとして……181
4.2．住宅、アパート……181
4.2.1. 安定性のインディケータとしての住宅事情：「住宅」を通じてロシア人と日本人の生活様式の分析の試み……182
4.2.2. 住宅様子において反映される「貧者」のアイデンティティ……183
4.2.3. 住宅様子において反映される上流社会のアイデンティティ：ロシア人と日本人の「贅沢さ」の見方における対照分析……184
4.2.4. 満洲特有の国際社会における、「異文化の人」と接する経験：ロシア人と日本人の「プライベートな空間」と「馴染みのない異文化園」での区別の仕方の対照分析……185
4.2.5. 満洲経験の影響について：住宅の様子についてのステレオタイプ的な見方の崩壊……186
4.2.6.「住宅の空間」の欲求に対する対照分析……186

4.2.7. ロシア人と日本人のインテリアにおける対照分析：伝統と個人のライフ・スタイルを焦点に……187
4.2.8. ロシア人と日本人のホスピタリティ文化における対照分析……188
4.3. 着衣……189
4.3.1. 満洲における社会生活と服装：「ドレス・コード」の問題……190
4.3.2. 満洲におけるファッションのイデオロギー性：ロシア人と日本人に及ぼす影響について……191
4.3.3. 貧富の差のインディケータとしての着衣事情、個人のアイデンティティに及ぼす影響について……192
まとめとして……194
4.4. 食事……194
4.4.1. ロシア人と日本人の「家庭料理」と「外食」における好み……195
4.4.2. 貧富の差のインディケータとしての食事事情……196
4.4.3. ロシア人と日本人の社会的生活における「レストラン」文化の重要性……197
4.4.4. 第二次世界大戦、終戦後の時期：食事事情における対照分析……198
まとめとして……199
本章のまとめとして……200

第2部 精神的状態、心理的防衛方法……203

第 5 章　ロシア人の精神的状態、心理的防衛方法……203

5.1.「異文化環境」として見た 1920－1940 年代の満洲：ロシア人の視点……205
5.2. 1920－1940 年代―「白系」亡命ロシア人：新しい生活空間の構築……207
5.2.1. 不安感……208
5.2.2.「心理学的双対生」の問題：　自欺傾向のある「白系」ロシア人……209
5.2.3. パーソナリティ障害：胸においては「穴」があるような感覚……210
5.2.4.　人生が停滞したかのような感覚……210
5. 2.5. 満洲における孤独感……211
5.2.5.1. 女性の孤独……211
5.2.5.2. 子供の孤独……213
5.2.6.　貧困の問題：恥、自尊心の侮辱……214
5.2.7. 親子の対立……215
5.2.8. 人生における意味、意義を探すこと……217

5.2.9. 失望感……218
5.2.10. 時間の特別な感覚:「過去に生き続ける」こと……219
5.3. 1945 年以降：ソ連軍により満洲占領期、ロシア系ディアスポラの解散プロセスの活発化……221
5.3.1. 素朴な考え方、歴史的教訓を無視することに関する後悔……221
5.3.2. 喪失感の痛み……222
5.3.3. 人間関係における問題……222
5.3.4. 反ソ連的なイデオロギーを普及した記者の逮捕、尋問。精神的抑圧、処罰の不当性に関する後悔……223
5.3.5.「白系」ロシア人の文化的遺産の崩壊:過去についての記憶の喪失……224
5.3.6. 樹立されたソ連社会における異分子としての立場……225
まとめとして……226
5.4. 心理的防衛の方法……226
5.4.1. 団結性の維持……226
5.4.2. 地域的特徴の利益的扱い……227
5.4.3. 創造的活動……227
5.4.4. 信仰告白、日記の執筆……228
5.4.5. 周り環境から自己を隔離すること、自己離脱……229
5.4.6.「自己の運命を甘受するしかない」という決意……229
5.4.7. 「現実」から逃げる方法：信仰心……230
本章のまとめとして……231

第 6 章 日本人の精神的状態、心理的防衛方法……233
6.1.「異文化環境」として見た 1920－1940 年代の満洲:日本の視点……233
6.2. 1920 年代－1930 年代 －日中戦争、第二次世界大戦までの時期：「青春の満洲」の時代……234
6.3. 満洲の環境に早く適応できた日本人：満洲における生活を「満喫」すること……234
6.4. 子供の孤独、遊ぶ方法の不足、同年齢の友人がない……235
6.5.「開拓団」の農民:回り環境の「わびしさ」、単調な仕事の大変さ……236
6.6.「心理学的双対生」の問題。「王道楽土」、「五族協和」のイデオロギーの影響：イメージされた「理想的な」世界で生きること……237
6.7. 1930 年代－1945 年－第二次世界大戦の時期……238
6.7.1. 一般市民の警察の観察下での暮らし、行動の自由がないという状態……238

6.7.2.　学校の教育プログラムの変更、生徒において規律、厳格な性格を培うこと.....239
6.7.3.　価値観の歪み、献身的な態度の育成.....240
6.7.4.　生徒に「責任」、「罪悪感」を教え込むこと.....240
6.7.5.　子供の精神的トラウマ:日本人の警察により、満人のいじめ、殺人、拷問の目撃....241
6.7.6.　女性への抑圧 : 国家にとって多くの子供を出産する義務.....242
6.7.7.　社会における「個人」が価値を失うという感覚.....242
6.7 8.　親子の対立の問題。将来の見方、価値観における相違.....243
6.7.9.「国家」に頼りすぎること、警戒心の喪失.....244
6.8. 1945 年以降－日本の敗戦、満洲国の崩壊、ソ連軍による満洲占領、日本人の日本への引き上げ.....245
6.8.1. 今後の進路に迷ったかのような感覚.....245
6.8.2.　日本人の自尊心の傷つき.....246
6.8.3.　パーソナリティの歪みという問題。自殺の繰り返し.....247
6.8.3.1. 自分の将来に関するコンセプトの歪み.....247
6.8.3.2.　集団の団結性を維持する行為としての自殺.....248
6.8.3.3. 自殺行為への説得.....248
6.8.3.4.「行き詰まり」の状態、我慢の限界の達成.....249
6.8.4.　子供の悩み : 生活の通常のリズムが混乱している状態.....250
6.8.5. 喪失感の痛み.....251
6.8.6.　女性の問題 : 自分の子供の悩みを目撃すること.....251
6.8.7. パーソナリティの歪み:女性は「男性らしい」性格を身に付ける.....252
6.8.8.　避難生活の特徴 : 集団的行為における問題.....253
6.8.9. 日本への帰国後 : 予測を超えた状況の厳しさ.....254
まとめとして.....255
6.9. 心理的防衛の方法.....255
6.9.1.　開拓団における「退屈さ」との戦い方 : 日本風の伝統的な祭り.....255
6.9.2. 創造的活動.....256
6.9.3. ネガティブなシチュエーションに対する態度の変化、ユーモア感の使用.....256
6.9.4. 価値観の歪み : 人の死亡、悩みに関する無関心.....257
6.9.5. 通常な生活様式を模倣すること.....258
6.9.6.「あきらめる」能力を身に付けること.....259
6.9.7. 学生の精神的な支援としての教師の重要性.....260
6.9.8. 日本人の母親:子供に見つけた生きる動機.....260

まとめとして.....261
本章のまとめとして.....261

第 7 章　1920－1940 年代の満洲におけるロシア人と日本人の精神的状態、心理的防衛方法
ロシア人と日本人の経験を基にした対照分析.....263
7.1. 精神的状態、適応の問題、自己アイデンティティについての考察における、対象分析.....264
7.1.1. 満州の気候と地理的特徴が精神的状態へ及ぼす影響について.....264
7.1.2.「歴史的トラウマ」: 自分の「世界」が崩壊したという感覚.....265
7.1.3.「心理学的双対性」の問題の多種多様性.....266
7.1.4. 異郷における生活状況への適応が完遂できなかった人：ロシア人と日本人の経験.....267
7.1.5. 落ち込んでいる状態の理由についての考察.....269
7.1.6. 孤独の問題.....270
7.1.7. 親子の対立の問題.....271
7.1.8. 自分のアイデンティティについての考察.....272
7.1.9. 自殺行為.....271
7.1.10. 終戦後の満洲: 社会における信頼不足、団体における対立の問題.....277
まとめとして.....277
7.2.　心理的防衛方法、精神的サポートにおける対照分析.....278
7.2.1. 他者の前で、感情を見せることに対する態度: ロシア人と日本人の見方における相違点.....278
7.2.2. 宗教の意義.....279
7.2.3. 創造的活動.....280
7.2.4. 精神的に強い女性:子供から神的サポートを得る能力.....281
7.2.5. 団結性を維持すること、ロシア人と日本人の人生における社会的関係の重要性....282
まとめとして.....283
本章のまとめとして.....283
結論.....286
参考文献.....301

第 1 章

序論

世界の歴史において、民族の移動は、昔から現在に至るまで絶え間なく行われてきたプロセスである。ミグレーションの理由、またその地域と規模に関しては、原則として、具体的な政治に関する要因、また社会的、経済的、宗教的な要因に条件付けられていた。

「国内ミグレーション」とは異なり、「国際ミグレーション」とは、「ドナー」国[1]から「レシピエント」国[2]への移動を意味するプロセスである。多くの場合、「国際ミグレーション」の結果、「レシピエント」国において、「ディアスポラ」という、共通起源を有する移民の安定した集団が形成される。[3]

本研究の対象としては、20 世紀前半の満洲において存在していたロシア系ディアスポラと日系ディアスポラを選んだ。1920−1940 年代の満洲においては、ロシア人と日本人の移民者の人数が特に大きかったため、当年代に着目する。満洲に存在していたロシア系ディアスポラと日系ディアスポラに関する関心は、次のように説明することができる。

満洲は、19 世紀末から、ロシア人と日本人にとって、収入を得るところ、旅行先、住む所、「植民地」となっていた。時間が経つにつれて、両方の民族の人口が増え続け、満洲において、ロシア人と日本人の影響力も出てきた。満洲における最初の日本の人々は、ロシア人の被雇用者として働いていたが、1932 年に満洲国を樹立してから、支配者として巨大なロシア系ディアスポラを管理するようになった。また、ロシアの人々は、1903 年に中東鉄道が営業を開始してから、経済的に、文化的に充実した人生を送っていたが、1917 年のロシア革命とそれに伴った内戦を受け止めることのできなかった、様々な社会層に属する「白系」ロシア人が満洲に押し寄せ、ロシアのコロニーに加入してきた。ソ連という新国家にとって不要となった多数のインテリ層に属するロシア人は、ハルビンにおいて文化的活動を盛んにした。

そして、1945 年に、日本は敗戦状態となったため満洲国が崩壊し、ソ連兵の占領地となる。ソ連の敵であった日本人と「白系」ロシア人両方とも、ソ連兵により様々な方法で「罰せられた」ことがある。

このように、様々な社会層に属する多数の日本人とロシア人にとって、満洲は単なる居住地ではなく、運命を変える場ともなった。ここでは、ロシア人と日本人は、文字通り「隣人」

---

[1] 「ドナー」国とは、国民が外国へ流出する国のことである。

[2] 「レシピエント」国とは、外国からの移民者を受け入れた国のことである。
http://turboreferat.ru/economics/posledstviya-trudovoj-migracii-dlya-stranydonora/261438-1460611-page1.html、最終アクセス日: 2013/11/02

[3] Ревякина Т.（2004）Проблемы адаптации и сохранения национальной идентичности российской эмиграции в Китае（начало1920 - середина 1940-гг）. Институт Дальнего Востока РАН. С. 31.

として共生し、様々な歴史的な出来事を共有するようになった。

本研究においては、1920－1940 年代の満洲に存在していたロシア系と日系ディアスポラにおける日常生活を検討する。具体的に言うと、ディアスポラの一員である一般人の個人経験を踏まえ、「衣食住」という日常性の物質的な面と、移民者の精神性：イミグレーション環境への心理的適応の問題、アイデンティティについての考察などにも着目する。そして、ロシア人と日本人の経験に関する、対照分析を試みる。

20 世紀後半の人文科学において「人間中心主義」の傾向が浮き彫りになり、特に「回想記」に関する関心が高まってきた。ロシアの文芸批評家のＶ.ベリンスキーは、1835 年に、「回想記」というジャンルについて、「これは歴史、これは小説、これは戯曲、これは、あなたが望むすべてである」[4]と記している。

ロシア人と日本人によって執筆された回想記は、一般人の個人経験を扱う本研究の主な情報源として、選んだ。

1.1. 本研究の課題、特徴と意義

既に述べたように、本研究においては、1920−1940 年代の満洲において居住していたロシア人と日本人それぞれにおける日常性、精神性、心理的防衛方法の検討に限らず、ロシア人と日本人の経験に関する対照分析を試みる。

20 世紀前半の満洲の領土においては、共通点の少ない、本当の意味での二つの「別の世界」が存在していた。それはロシア系ディアスポラと日系ディアスポラのことである。当時の満洲の国際社会においては、ロシア系ディアスポラは、西洋文化を、日系ディアスポラは、東洋文化を代表していた。

一方では、ロシア人と日本人は「満洲」経験を共有していたが、その「満洲」経験が、多くの点においては、異なっていた。

そしてさらに、ロシア人と日本人にとって、「満洲」経験は、どのような意味があったのか。その疑問点について更に深く考察したい。

ロシア系ディアスポラと日系ディスポラに関しては、多くの研究が行われているが、二つのディアスポラは、個別の現象として取り扱われている。例外としては、ロシア人と日本人が関わっていた特別のケースに関する研究が挙げられる。例えば、生田は、満州国時代、ロシア人の生活をコントロールしていた「白系露人事務局」の活動を検討し、当局が一般のロシア人の生活状況にどのような影響を及ぼしていたかについて、考察している。藤原は、「白系」ロシア人と日本人の交流の特徴については検討していたが、満洲におけるロシア人と日

[4] Белинский В. (1953 - 1956) Полное собрание сочинений. М. С. 159.

本人の日常生活の特徴、それらの構成員の思想、精神的状態を、全体像として扱い、そして対照比較を試みる研究はまだない。

本研究においては、満洲に居住していたロシア人と日本人の経験に関する、対照分析を試みる。

本研究の特徴として、「民族」、「ディアスポラ」、「社会」といった抽象的なカテゴリを超えて、「一般人」に着目すること、そして、日本人とロシア人の回想記を総合的な現象として扱い、その上で、文化学的、社会学的、哲学的、歴史学的な事象の比較研究をするという点が挙げられる。

このようにして、一般のロシア人と日本人の例を通じて、「ディアスポラ」という現象を、その存在期間中、様々なステージを超えるべき生体として扱うことができる。

本研究の意義としては、ディアスポラの研究に貢献することが挙げられる。「ディアスポラの定義」の項目における、20 世紀の社会学、文化論、歴史学においては、その現象に関心が集中する理由について述べている。Milton J.Esman、Warwick R.Cohen、G.Sheffer などの学者は、その社会的現象を把握することの難しさ、その現象に関する、一面的な見方の不適当性、的確な定義を巡る議論の繰り返しについて示している。

この点においても、20 世紀前半の満洲に存在していたロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの研究の重要性が見られる。しかし、本研究において強調したいことは、ディアスポラの最も重要な要素としては、一般人も登場するべきことである。その理由により、ディアスポラの研究においては、その「表面」（社会的構造、社会的組織、様々な活動）の検討に限らず、様々な社会層に属している個人の人生にも注目すべきだと思われる。

1.2. 本論文の構成

本論文の構成は、２つの部、そして、８つの章からなっている。

第１章は、入門章である。そこでは、本研究の目的と意義を示し、方法論を記述し、先行研究と先行研究の問題点を説明する。そして、本研究において、基本的な概念である「ディアスポラ」、「日常性」と「回想記」の特徴とその研究の意義を説明する。そして、本研究の対象であるロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの特徴及び、それらのディアスポラの一員の回想記の概要を記述する。その次に、ロシア人と日本人の回想記の分析に移る。

第１部は、ロシア人と日本人の「日常性」を扱う。第２部は、ロシア人と日本人の精神的状態、心理的防衛方法というテーマを中心とする。

第１部：「日常性」（２−４章）

第２章では、ロシア人の日常性に着目し、「仕事」、「住宅」、「着衣」、「食事」という生活面を検討する。第３章では、同様の方法で日本人の日常性を検討する。そして、第４章では、日常性における、ロシア人と日本人の経験に関する対照分析を試みる。

第２部：精神的状態、心理的防衛方法（5−7 章）

第５章では、満洲における日常性を、心理的な視点から分析し、ロシア人の精神状態の特徴と、精神的防衛方法を分析する。第６章では、同様の方法で、日本人の経験を検討する。そして、第７章では、ロシア人と日本人の精神状態、心理的防衛方法における対照分析を試みる。

第８章では、本稿で行われた比較研究の全ての結果をまとめ、1920－1940 年代の満洲に居住していた日本人とロシア人が体験した経験を、全体像として取り上げ、今後の課題を示す。

1.3. 方法論

本稿においては、1920－1940 年代の満洲において居住していたロシア人と日本人の回想記の分析を通じて、「仕事」、「住宅」、「着衣」、「食事」という生活面を中心とした、彼らの日常生活、又は、精神的状態、心理的防衛方法に関する全体像の分析を試みる。

ロシア人と日本人の日常生活の多種多様なアスペクトを検討するため、研究の方法としては、事例研究アプローチ、そして、伝記的な面からのアプローチ、社会学的なアプローチ、文化的アプローチ、比較アプローチを適用する。

事例研究のアプローチを通じて、特別な時期における、そして特別な場所に居住していた様々な個人の人生における、具体的なエピソードに着目し、これらの様々な「エピソード」を基に、ある一つの社会グループの生活状況、具体的な出来事などの全体像の形成を試みる。回想記から抽出されたエピソードについて、個別的分析、そして、現象全体の一部として分析したい。事例研究の方法は、一方では、ある一つの社会グループが共有する問題、生活状況に関する貴重な情報を与えているが、もう一方では、個人経験が示すように、例外が多かったことも、表面に表れている。例えば、「満洲国」の時代においては、一般人のロシア人全員が、支配的な立場をとっていた日本人の抑圧の下に置かれていたことに関する一般の認識が形成されていったが、日本人と協力して、相互理解を達成できたロシア人も存在していた。そのことについては、回想記を記した人の経験の検討により明らかになった。

そして、伝記的な面からのアプローチを通じて、個人とその個人が属している社会グループの日常生活について、時系列に沿って分析することにより、長い期間を取り上げることで、絶え間なく変化しているプロセスとしても見ることができる。個人の伝記の検討は、個人が移り変わる生活条件に適応するため、どのような行動をしていたのか、そして、歴史的、社

会的変化の影響により、その個人の生活において、どのような変化が必要であったかについて辿ることができる。

文化的アプローチを通じては、満洲におけるロシア人と日本人を、「ロシア文化」と「日本文化」の代表者として扱い、文化論においては「普遍的な」カテゴリである「仕事」、「住宅」、「着衣」と「食事」などを検討する際、ロシア文化と日本文化においては、その人生のアスペクトがどのような意義を持っているかということも考慮に入れ、比較分析を試みる。

そして、社会学的アプローチを通じては、個人の人生における経験が、その時代を反映しているものとして検討することができる。例えば、勝山は、自分が勉強していた学校についての記述を通じて、戦争時代の大日本帝国によるイデオロギー的抑圧の下に置かれていた教育機関の活動の特徴について考察している。

本稿の目的は、1920－1940 年代の満洲に居住していた日本人とロシア人の経験の対照分析の試みである。研究方法としては、比較アプローチを選択した。比較アプローチの利点としては、「有り触れた」ものごとを、新しい視点から見ることができ、その価値も再評価することができることである。このアイディアを根拠にして、満洲におけるロシア人と日本人の「日常性」を、再把握することができ、「仕事」、「住宅」、「着衣」、「食事」という生活面の記述の分析を通じて、ロシア人と日本人の価値観、人生における目標、人生におけるプライオリティについても、共通点と相違点を見出すことができる。

同様に、精神的状態における、ロシア人と日本人の経験を比較する際、「移民生活者」特有の問題であるパーソナリティの歪み、心理的双対性などのような状態は、どのような形をとっていたかについて検討したい。更に、心理的防衛方法においても、相違点が多いロシアと日本の文化、育成の仕方などが個人の行為、考え方の特徴に反映されていたかどうかについても考察したい。

比較研究アプローチのもう一つの利点としては、「一般的概念」が、どれ程相対的なものであるかを明らかにしていることである。このように、満洲に住居していたロシア人と日本人の「贅沢さ」、「家庭の快適さ」、「珍味として見られる料理」、或は、抽象的な「悪」と「善」の見方、それぞれにおける相違点と共通点を見ることができると思われる。

1. 4. 先行研究

本研究のキーワードは、「ディアスポラ」、「日常性」と「回想記」である。そのため、具体的な研究対象の分析をする前に、「ディアスポラ」、「日常性」、「回想記」という現象の意味、そして、それに関連している様々な学問的見方についても検討を行う。

1.4.1.「ディアスポラ」に関する先行研究

「ディアスポラ」に関する学問的関心は、20 世紀に高まってきた。本研究において用いた M.Esman（1986）、J.Toshenko、T.Chaptikova（1996）、R.Cohen（2008）、G.Sheffer（2003）などの著書では、「ディアスポラ」という現象の中の矛盾性、その形の多種多様性などに関する貴重な情報を提示している。その著書に関する詳細な分析は、「ディアスポラの定義」の項において取り上げる。

1.4.2. 「日常性」に関する先行研究

「日常性」とは、各個人に直接関わる、意味の広い現象である。そのため、「日常性」のテーマは、社会学、哲学、文化論、歴史学など、幅広い分野において取り上げられている。そして、「衣食住」という問題は、個人のプライベートな生活に限らず、個人が属している社会生活にも関わるものである。つまり、当時の社会における価値観、イデオロギーなどは、個人の生活様式にも反映されている。

本研究の基盤としては、日常性のことを、哲学的、文化論的な視点から分析された、M.Shubina（2006）、A. Shutz（1962）、I.Kasavin（2004）、A.Kuminov（2005）、M.Maruskina（2013）などの著書を扱った。

しかし、その中で、A.Lüdtke（1980）の著『ドイツにおける日常性の歴史：労働、戦争と権力の研究への新しいアプローチ』を、特に注目に値する著書として示したい。Lüdtke は、初めて日常性に関する実践的研究を行い、歴史における一般人の役割に関する仮説を検証し、日常性の研究の意義においても証明してきた。

以上、挙げた研究者の論理についての更に詳しい分析は、「日常性の研究の意義」の項、そして、「1920－1940 年代の満洲におけるロシア人と日本人の日常性。ロシア人の経験を基にした対照分析」の章において取り上げる。

1.4.3. 「回想記」に関する先行研究

本研究において提起された問題点を考察するため、ロシア人と日本人によって執筆された回想記の分析を行う。その際、「回想記」というジャンルの特徴を調べることに限らず、「回想記」の学術的な価値についても、検討すべきである。その問題点を明らかにしている著作（L.ギンツブルグ（1971）の著『心理的散文について』、Paula R.Backscheider（2013）の著『Reflections on biography』、J.Barrington（1997）の著『Writing the Memoir』）を本研究の基盤とした。

L.ギンツブルグの著書においては、回想記のいうジャンルに関する、存在している全ての理論が取りまとめられており、回想記の研究に関する見通しも説明されている。L.ギンツブルグが強調しているように、回想記は、具体的な歴史的事実の復元に向けられているジャン

ルとしても評価されるべきである。

Paula R. Backscheider は、人間に関する研究の意義についての説明を取り上げている。著者が主張していることは、個人の人生を巡る学問的研究が、見通しのある分野であるということである。

Barrington J.は、読者に、回想記を記述するように説明している。このように、読者は、回想記というものを、読み手、つまり、観察者の立場としてだけではなく、読者が、作者の立場となり、回想記の裏側をも見ることができるものであると述べている。J.Barrington の著作は、回想記の作者の思い、動機などを更に深く分析することを促している。

それ以外には、Y.Frances（1966）の著、『The art of memory』、A.Tartakovsky（1999）著『文化の現象として見た回想記』、S.Mashinsky（1960）著『回顧録・伝記というジャンルについて』なども本研究の基盤として用いた。

1.4.4. 満洲におけるロシア系ディアスポラの日常生活に関する先行研究

I.Kapran（2007）は、19 世紀末 - 1945 年までの時期に焦点を当て、ハルビンで暮らすロシア人の「日常生活」の研究を行った。異文化の影響についても考察し、中国の環境の中で育ったロシア人の食文化、ファッションなどを検討している。

T.Revyakina（2004）は、中国におけるロシア系ディアスポラを多面的に研究している：形成過程、人口、法律上の地位、文化的・社会的・経済的・宗教的な活動等である。研究の主な目的は、異文化状況へのロシア人の適応過程を辿ることである。

N.Staroselskaya（2006）は、ハルビン市における「白系」亡命ロシア人の日常生活を記述している。記述の目的は「移民者の教訓」を現代社会に伝えることであり、ロシア人の日常生活をハルビンの一般市民の自伝を通じて、描いている。そこには「万人」の歴史的な重要性が強調されている。しかし、一般の読者に向けられたこの出版物は、学術研究に含まれない。

A.Hisamutdivov は、ロシア革命、内戦後には全世界に離散した「白系」亡命ロシア人に関する記憶を復元すること、その多くの研究に身を捧げている。満洲に存在していたロシア系ディアスポラの生活様式も、研究の対象である。そして、ディアスポラの一員に対して特別の関心を示しており、個人の伝記に注目し、ディアスポラの一員に関する詳しいデータ・ベースの作成を目指している。満洲におけるロシア系ディアスポラについては、多くの記事が執筆されている。

「白系」亡命ロシア人によって書かれた回想記は、アメリカ、オーストラリアなどにおいても出版されているが、その出版物へのアクセスが、出版地域によって限られる場合が多い。

そのような状況下において、資料を収集することについても、研究者の貢献は注目に値する。

生田美智子は、満洲から世界の様々な国へ再移住したロシア人を、アメリカ、オーストラリア、ロシアなどで探し、その人とのインタビューを記録した。このように、生田は、満洲におけるロシア系ディアウポラに関する、「オーラル・ヒストリー」の形成に、大きな貢献をした。生田は、個人の歴史を通じて、ディアスポラの歴史を記述している研究者の例である。

O.Goncharenko（2009）は、『ロシアのハルビン』を執筆する際、多くの歴史家によって行われていた「中東鉄道を巡る歴史」の記述を避け、「人々の人生を通じて」満洲とハルビン市の歴史を語ることを選択した。しかし、反ソ連の極端な推し進めであると本書に言及された、ある人物の活動に対する著者の個人的興味を基にしたものであるという批判は、本書の内容の公平的な調査の妨げとなっている。

坂本秀昭（2013）の著書では、共同研究に参加した人々の論考がまとめられている。扱っている題材は、二十世紀初頭から第二次世界大戦後までの期間である。その著には、満洲に居住していた多くの民族の関係、日本人と現地中国人との交流、ロシア人社会と日本の特務機関との関係が検討されている。満洲に居住したロシア人やユダヤ人の日常生活や信仰、経済生活の実態も明らかにされている。そこには、主に亡命ロシア人の生活が描写されている。

A.Zabiyako、G.Efendieva（2009）は、ハルビンで暮らしていたロシア人の書いた文学作品を研究し、ロシア人の生活様式とその精神の問題について考察している。この研究においては、幅広い現実的な問題が提起され（生活の問題、女性の問題、ファッション、イデオロギー、文化、異文化の表象、アイデンティティの問題、移民社会のイデオロギー的、宗教的な分裂の問題等）、文学作品においてはその問題がどのように表現されているのか、という分析が行われている。

生田（2010）、「白系」ロシア人に関する、多くの研究を行っている。『満洲の亡命ロシア人女性の表象。着衣と裸体』という記事において、「着衣」という「白系」ロシア人女性の生活面に着目し、着衣・裸体を権力関係というコンテクストで検討し、それをイデオロギー戦略の手段として見ている。例えば、モダン・ガールのイメージは、欧米的な生活様式と結びついていた働く女性のタイプと連想されたため、「満洲国」の近代性を強調するために、マスコミによって広く使用されていた。

『セーヴェル』誌に 1995 年から 2002 年にかけて掲載された記事（生田美智子、内山ヴァル―エフ紀子、今井由紀子、ヴデャコバ・エレーナ、広谷和夫等の著作）の中で、ハルビンにおけるロシア人の生活が多面的に描写されている。アイデンティティ、文化、教育、有名人の伝記等に関する貴重な情報が挙げられている。

1.4.5. ロシア人の「回想記」に関する先行研究

E.Voronova（2007）は、1917 年から 1939 年にかけてヨーロッパとアジアに亡命したロシア人の回想記を分析している。一つの文学ジャンルとして回想記を捉えた上で、「日常性の神話」の形成過程を研究している。そして、異文化空間における移民の「空間の枠」と「行動のモデル」、「時間の感覚」などの問題を考察している。このように、イミグレーションの状況下においての日常性は、どのような新しい意味が生まれるのか、そして、移民者のアイデンティティは、どのような変化が見られたのか、についての考察を取り上げている。しかし、主にヨーロッパに亡命したロシア人の回想記の分析が行われており、ハルビンに居住していたロシア人によって執筆された回想記はそれほど詳しく検討されていない。

1.4.6. 日本人の日常性に関する先行研究

塚瀬進（2004）は、19 世紀末−1940 年代の時期を扱い、満洲に移住してきた日本人の政治経済情勢という広いスケールにおいて、そして、社会生活という個人の日常的生活の問題を取り扱っている。

貫志俊彦、村上史紀、松重充浩編（2012）『20 世紀満洲歴史辞典』において、研究者は、19 世紀末から東北地方政権・満州国・中華人民共和国による統治までの歴史に関する、800 項目を厳選した。

もう既に言及された『セーヴェル』誌は、創刊 20 周年という歴史を持ち、「満洲で暮らしていた日本人の個人史にも注目していた。『セーヴェル』において、「満洲」を多角的に捉えるための「画像」を形成している。

山本有造編著（2007）「満洲」記憶と歴史において、研究者は、満洲帰還者・未帰還者（中国残留日本人）の「語り」を基に、満洲における日本人の生活の様子についての復元を試みた。このように、開拓団やハルビンなどにおける日常生活の特徴について明らかにした。この研究を「オーラル・ヒストリー」の形成の例としても、見ることができる。

1.4.7. 満洲経験についての記憶、そして日本人の回想記に関する先行研究

日本人の研究者は、満洲の経験に関する記憶の再構築過程において、時間軸に沿ってどのような変化が見られるのかについての多くの研究をしている。その場合、「回想記」というジャンルは、その記憶の再形成の手段の一つとしても示されている。

『歴史人』雑誌は、『満洲帝国の真実』という特集版を出版した。その目的として、「夢の国の満洲とは一体何だったのか」という疑問を提起することであった。

山室信一（2009）の『キメラ。満州国の肖像』、歴史家の子林英夫（1966）の『〈満洲〉の

歴史』などの著作においても、「満洲」の秘密を解こうという試みがあった。

坂部晶子（2008）は、「植民地の歴史は現代のある種の現実を規定している」と述べている。研究者によれば、植民地の経験を、ただ歴史的出来事の分析を通じて評価するだけでは、完全な結果にならないと言う。研究者は、「陳腐で平凡な日常」に生きていた人にも注目すべきだと主張している。[5]

1.4.8. 「移民者の心理的問題」に関する先行研究

本研究の対象として、一般人の日常性を挙げている。そして、「日常性の定義を巡る議論」項において、日常性の哲学的意味について検討した際、個人の思考と精神的状態というのは儚いものであるにも関わらず、個人の日常性の重要な側面であることが明らかになった。移民者の精神的状態も、本研究の重要なテーマであり、研究の基盤としては、以下の著書を用いた。

N.Hrustalyova（1996）は、移民者の「心理」に焦点を当て、「同化」の過程の特徴及び、社会的・心理的現象として見た移民のプロセスの特徴、そして、イミグレーションの状況におけるアイデンティティの変更のプロセスなどの問題を分析している。理論的分析の際、1920－1990 年代の時期に世界各地に離散した、ロシア人移民者の精神的状況の比較研究を行った。結果として、異文化適応プロセスの段階（幸福；探検；オリエンテーション；うつ病；回復）が整理され、各段階と個人の特異性（年齢、性格、専門、社会の地位）との深いつながりの存在が、明らかにされた。同化の過程に影響を及ぼす要素として、①表面的なファクター（周りの環境）と②内面的なファクター（個人の努力）が取り上げられた。そして、異文化の状況の影響により起こり得る、性格とアイデンティティの変化の特徴も記述された。例えば、ノイローゼ；自殺；飲酒依存病；孤独；コンフリクト；郷愁；劣等感、犯罪行為などが挙げられる。

そして、その研究おいて、更に重要なポイントとして、著者はイミグレーションの環境に存在している個人の心理的な問題について、十分な研究がまだなされていないということに注目していることが挙げられる。

生田美智子（2009）は、『植民地主義の表象:「満洲」のロシア人ディアスポラの場合』という記事において、ハルビン市におけるロシア人の民族的アイデンティティの問題について考察している。

ハルビン市におけるロシア人の多さと、ロシア語の明らかな優位性から判断すれば、ロシア人の立場と、アイデンティティの感覚の安定性は疑われるべきものではない。しかし、

[5] 坂部晶子著(2008)「満洲」経験の社会学：植民地の記憶のかたち、京都：世界思想社、1–7 頁。

1917 年の革命の結果として起こったイデオロギー的亀裂は、中国に存在していたロシア人ディアスポラにも悪影響を及ぼし、ディアスポラにおける人間関係を悪化させることになった。

生田は、アイデンティティという認識が、「民族的属性」のアイディアに限らず、政治的、宗教的等、様々なファクターの影響によって揺らぐ可能性があると述べている。

ここまでは、「ディアスポラ」、「日常性」、「回想記」、「移民者の精神的状態」を扱う先行研究と、満洲におけるロシア系ディアスポラと日系ディアスポラに関すること、そのディアスポラの一員によって執筆された、回想記に関する先行研究を分析してきた。

次項では、本研究が、満洲におけるロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの研究に、どのような貢献ができるかについて、説明する。

1.4.9. 先行研究の問題点

歴史的な研究の優位性について、本研究では、回想記の研究枠を拡大し、歴史的な問題に限らず、文化学、心理学の視点からも検討を行う。

「白系亡命ロシア人」[6]の研究の優位性については、本研究では、ロシア系ディアスポラにおいて様々な政治的な立場を取った人の回想記を検討する。

満洲における「ロシア系ディアスポラ」と「日系ディアスポラ」の生活様式の対照比較はまだ行われていない。満洲における日系ディアスポラの生活条件とロシア系ディアスポラの生活条件は、区別されて研究されている。しかし、『セーヴェル』に搭載されている記事の例などが示しているように、1920−1940 年代の満洲に居住していた多くのロシア人と日本人は、隣人として共生したこともあり、様々な意味での相互影響も、避けることができなかった。

本研究においては、二つのロシア系ディアスポラと日系ディアスポラにおける生活状態、また精神的問題、心理的防衛方法においても対照分析を試みる。

満洲におけるロシア人と日本人の日常生活を検討する際、様々な物事に関する、判然とした評価が挙げられていることが多い。ロシア人と日本人の経験における、対照分析を通じて、同じ生活面に対する、ロシア人と日本人の視点を比較することができる。このようにして、例えば、贅沢、ホスピタリティなどのような事柄の相対性についても考察できる。

---

[6] 白系ロシア人（英語: White Russian）とは、ロシア革命後、ロシア国外に脱出あるいは亡命した非ソヴィエト系旧ロシア帝国国民（ロシア人）のことである。
https://ja.wikipedia.org/wiki/白系ロシア人　アクセス日:　2013/11/20

もう既に述べたように、本研究の「キーワード」としては、「ディアスポラ」と「日常性」という現象が登場する。次に、この二つの現象について、更に詳しく考察する。

1.5. ディアスポラの定義

「ディアスポラ」（ギリシャ語の *"diaspeirein"*「離散」から由来している）というのは、歴史的故郷の枠外で形成された、同一の起源を有する人間の安定的なグループを意味している。[7]

ユダヤ系などのような、多くのディアスポラは、古代から存在しており、長い歴史があるにも関わらず、「ディアスポラ」という現象に対する学問的関心は、アメリカでは、1970 年代に、ロシアでは、1990 年代に生まれた。つまり、学問的関心は、歴史が浅い。

1.5.1. 「ディアスポラ」の定義を巡る議論

ロシア社会学者、Y.Obidinaが述べているように、「ディアスポラ」に関する的確な定義を定めることの困難さの主な理由は、「ディアスポラ」という言葉自体が、まるで定義であるかと思わせるようなことである。それは、ディアスポラは、特別な歴史的プロットを示すものであると著者が主張しているからである。 その理由により、Y.Obidinaは、ディアスポラについて、最初に単一の社会グループにおける離散のプロセスとして、或いは、自己のことを「ディアスポラ」として見ている、そして、原住地の「外」に居住している社会グループとしても示していると述べている。 このように、研究者は「ディアスポラ」について、社会グループという「生体」としても、「プロセス」という、儚いものとしても見ている。

それにも関わらず、様々な研究者は「ディアスポラ」の多くのアトリビュートを明確にしてきた。ユダヤ系などのように、ディアスポラの研究が始まった時、その重要な特徴としては、同一民族性が挙げられていた。しかし、例えば、満洲におけるロシア系ディアスポラの構成員の中には、タタール人、ウクライナ人、ジョージャ人、ユダヤ人などが挙げられる。そのため、一つのディアスポラにおいても、多民族性であることが可能である。その理由により、民族性ということを、全てのディアスポラの第一のアトリビュートとして見るべきではない。そのことを考慮に入れ、統一性の条件として、優先的な立場を取っている文化、言語、出身地の同一性、というファクターが挙げられる。

そして、既に述べたように、ディアスポラのそれ以外の重要なアトリビュートとしては、

---

[7] Ревякина Т., 同上、1 頁。.

団結性への傾向、「ディスプレースメント」という感覚、自分の文化への属性を保とうとする欲望（その理由により、自分の言語、儀式が重視されている）が示されている。

1.5.2. 「ディアスポラ」の定義へのアプローチ

ディアスポラの定義においては、様々なアプローチが存在する。Milton J. Esman は、ディアスポラを特徴付けている重要なクライテリアとして、ディアスポラの一員の故郷との関係の密接度を取り上げている。故郷との密接な「繋がり」の基盤としては、エモーショナルなファクター、或は物質的ファクターが登場している。[8]

ディアスポラの定義に社会学的アプローチを適用している学者は、ディアスポラの真偽を示す重要なインジケータとしては、ソーシャル・インスティチュートの存在を取り上げている。

ロシア社会学者の J.Toshenko と V.Chaptikova は、ディアスポラの最も重要な特徴として、その存在が組織化された形として成し遂げられたということを取り上げている。例えば、コミュニティ、そして、様々な社会的、政治的運動の存在がある。[9]

そして、ディアスポラの重要な機能は、そのナショナルなアイデンティティを保持すること、特別な民族への属性を感じる欲求である。それは、ディアスポラの一員の自己の呼び方においても、反映されている。その場合には、ディアスポラの構成員の認識においては、「我々」は「彼ら」と対峙しており、構成員を統一させることは、共通の起源、共通の歴史、母語、母国との精神的つながりを持つことである。

1.5.3. ディアスポラの分類方法

ディアスポラの分類の仕方においても、様々なアプローチが存在している。ここでは、ディアスポラの分類の仕方の様々な例を取り上げる。

ロシア民族詩学者、S.Arutyunov、S.Kozlov は、ディアスポラを「年代」により分類している：

1. 古代のディアスポラ（紀元前の時代、中世時代に存在していた、ギリシャ系、インド系、中国系ディアスポラなど）
2. 相対的に「若い」ディアスポラ（トルコ系、モロッコ系、韓国系、日本系ディアスポラ）
3. 新しい、出稼ぎから形成されているディアスポラ（1970 年代から、ペルシャ湾、とアラビア半島に位置している産油国において形成が始まったインド系、パキスタン系などのデ

[8] Esman M. (1986) Diasporas and international relations // Modern diasporas in international politics. Ed. by Sheffer G. – N.Y. P.
[9] Тощенко Ж., Чаптыкова Т. (1996) Диаспора как объект социологического исследования // Социс. – М., – №12. Сс. 33–42.

ィアスポラのこと）[10]

Warwick R. Cohen はディアスポラについて、4 つの種類を取り上げている：

1.「犠牲者」・ディアスポラ（ユダヤ人、アルメニア人、アフリカ人、パレスチナ人）

2.「労働者」・ディアスポラ（インド人）

3.「貿易者」・ディアスポラ（中国人）

4.「帝国」・ディアスポラ（イギリス人、フランス人、スペイン人、ポルトガル人）[11]

G.Sheffer は、以下のような区別を提供している：

1. 深い歴史的ルーツを有するディアスポラ（アルメニア人、ユダヤ人、中国人）

2.「休眠している」ディアスポラ（例えば、米国におけるスカンジナビア人）

3.「ホームレス」ディアスポラ（パレスチナ人、ジプシー）

4. エスノ・ナショナルなディアスポラ（優先的な立場を取っているタイプである。このタイプのディアスポラの特徴としては、異郷の領土に滞在しているにも関わらず、故郷の存在を、強く意識していることである。）

5. 離散されたディアスポラ、或は、コンパクトに団結されたディアスポラ[12]

ロシア社会学者の V. Popokov は、更に詳細な類型方法を提示している：

1. 移住先との歴史的繋がりの有無

①国家が変わってしまうも、その領土に留まる場合

「物質的」移住はなかったが、個人の法的ステータスが変更する。（例えば、ソ連が崩壊した後のカザフスタンに在留しているロシア人）

②自分の故郷から他の国への移住（例えば、現代のドイツにおけるトルコ系ディアスポラ）

2. 法的地位

①異郷において、法律上の居住権を有すること

②ディアスポラの一員の中の無法居住者の存在

（V. Popokov が強調しているように、各ディアスポラにおいては、両方のタイプの人が存在するため、このような区別方法は、相対的な性格を持っている。）

3. ディアスポラの形成方法：

---

[10] Арутюнов С., Козлов С. (2005) Диаспоры: скрытая угроза или дополнительный ресурс //Независ. газ.– М.,- 23 нояб. http://arirang.ru/news/2005/05155.htm 最後アクセス日：2017/03/12

[11] Cohen R. (2008) Global diasporas: An introduction // Global diasporas /Ed. by R. Cohen. - Second edition. - N. Y. P. 219.

[12] Шеффер Г. (2003) Диаспоры в мировой политике // Диаспоры. – М., – №1. Сс. 162–184.

①人の移住

②国境の「移動」

この場合、ある社会グループは、新しい国家においては、「マイノリティ」の立場になる。（例えば、旧ソ連に加入していた国に在留しているロシア人）

4. 移住の動機：

①自発的移住（例えば、経済的理由）

②新しい国家から強制的に追い出された国民（例えば、白系亡命ロシア人）

5. 異郷における移民者の見通し：

①永住の希望

②滞在地を、「トランジット・ゾーン」として見ること（その後は、リミグレーション或いは、帰国が予定されている。）

③故郷と移住地の間の絶え間ない移動（例えば、ロシアとアゼルバイジャンの間に、シャトル・ビジネスに従事しているアゼルバイジャン人）

6. ディアスポラの滞在地における、経済的、社会的、文化的などの基盤の存在の有無

①異郷においての長い期間滞在しているディアスポラ一員による、社会的組織、教育期間、ネット・ワークなどの成立

②まだ経済的、社会的、文化的などの基盤の設立ができなかった「若い」ディアスポラ

7. ディアスポラの一員と原住民との文化的距離の有無

①原住民との相互の文化的ディスタンスが薄いディアスポラ（例えば、トルコにおけるアゼルバイジャン系ディアスポラ）

②原住民との相互の文化的ディスタンスがミドル・レベルであるディアスポラ（例えば、ドイツにおけるロシア人）

③原住民の地域の文化的ディスタンスが大きいディアスポラ（例えば、ドイツにおけるトルコ系ディアスポラ）

8. ディアスポラの出身地で、いつでも戻ることができる国家の存在

①いつでも戻ることのでき、支援を要求できる故郷を持つディアスポラ。

②元故郷であった国家が、もう既に存在していない、「国家を失った」ディアスポラ（ジプシー、パレスチナ人、1947 年まで　–　ユダヤ人）[13]

それ以外には、「国家における大変動の結果で形成されたディアスポラ」（R.Brubaker）

[13] Обидина Ю. (2012) Концептуализация понятия «Диаспора» в современных научных исследованиях // «Запад-Восток». Научно-практический ежегодник No. 4-5. Сс. 13−14.

[14]の取り入れ、「動員されたディアスポラ」－「プロレタリアートのディアスポラ」[15]（J. Armstrong）という区別の方法などが挙げられる。

以上、「ディアスポラ」という現象に関しては、様々な見方が存在する。Y.Obidina が述べているように、「「ディアスポラ」の定義の使用自体は、世界に様々な形で、起こっている民族の分裂を、一つの現象として扱う試みである」[16]。

しかし、全ての「ディアスポラ」の重要なアトリビュートとしては、「同一の起源」を持つこと、民族的な自覚或は特別な民族への属性に関する感覚を持つこと、「団結性」、連帯性への傾向と、その「団結性」を維持するソーシャル・インスティチュートを設立すること、統一されるファクターの存在と、その保持への傾向（言語、宗教、文化など）、そして、「故郷」とのエモーショナルな関係を保持することへの傾向が挙げられる。しかし、それと同時に、ディアスポラの一員が、自分の文化、言語などを保持することに全力を注いでいる場合にも、異郷の環境において存在することが、個人を変更させる。[17]

各ディアスポラは、自分特有の「性格」の持ち主である。そして、ディアスポラの構成員の中には、様々なタイプの人が存在するため、全ての分類方法は、ある程度想定的なものである。

ここまでは、「ディアスポラ」の定義に関する論述を取り上げてきた。次に、20 世紀前半の満洲に存在していたロシア系と日系ディアスポラの略歴を取り上げ、1.5.3.において記述された分類方法を基に、ロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの特徴に関する、対照分析を試みる。

1.6. ロシア系ディアスポラ、日系ディアスポラ

ロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの歴史については、もう既に多くの研究が存在しているため、ここでは、簡潔な記述にとどめる。

1.6.1. ロシア系ディアスポラ

満洲におけるロシア系ディアスポラの形成の要因としては、19 世紀末にロシアが満洲において治外法権を獲得し、中東鉄道を建設したこと、そしてハルビン市と満洲の他地域において、ロシア人の文化的生活を確保する施設が確立されたことを指摘できる。1920 年代にロシアで国内戦が始まると、難を逃れた 6 万人近くにのぼる「白系」ロシア人が、既存の在

[14] Brubaker R. (2000) Accidental diasporas and external "homelands" in Central and Eastern Europe: Past a. present. – Wien. P.19.
[15] Armstrong J. A. (1976) Mobilized and proletarian diasporas // American political science review. – Wash., – Vol. 70, №2. Pp. 393 – 408.
[16] Обидина Ю., 同上、6 頁。
[17] Ревякина Т., 同上、2 頁。

満ロシア系ディアスポラに参入した。しかし満洲国建国後は、資金に余裕があるロシア人は続々と満洲を脱出していった。そして 1935 年にソ連が中東鉄道を売却すると、中東鉄道で勤務していた多数のソ連人がソ連に帰国し始めた。

在満ロシア人は、満洲で永住することを目指しておらず、中東鉄道の社員は高い給料と様々な恩恵を受けたためそこに居住していた。そして「故郷」を失った「白系」亡命者の多くは、満洲に留まる以外の選択肢を持っていなかった。

1.6.2. 日系ディアスポイラ

塚瀬進は、在満日本人を「出入りの激しい、流動性の高い集団」として定義した。[18] その理由として、「渡満した日本人の多くは満州に骨を埋める覚悟がなく、やがては日本に戻ることを念頭に置いていた」ということを指摘している。[19]

そして、塚瀬進は、満州における日本人のディアスポラを次のグループに分類した：満鉄社員、関東庁の官吏、（後の 1932 年に建国する満州国の行政官）、主に日本人の顧客を扱う中小商人、そして、教育、治療などのサービスに従事した日本人である。[20]

生田によると、第一世界大戦終結やシベリアからの日本軍撤兵により、満州における日本人の勢力は衰退しはじめる。1931 年に満州事変が勃発して、関東軍は満州の領土に侵入する。同年、関東軍によって、満州国が建国され、日本人の満洲国官吏、建設業者などが大挙して、満洲に押し寄せた。[21]1937 年、満洲拓殖公社「満拓」が作られ、本格的に日本本土から開拓団への移民の受け入れを開始する。[22]

多くの日本人は満州で収入を得る方法を探した。しかし、大陸での生活を体験したかった人も存在した。20 世紀前半には、ヨーロッパへの旅行はかなり高額の経費が掛かったため、ヨーロッパ系民族に溢れた「ロシアのパリ」と名づけられたハルビンは日本人を魅了した。[23]柳田桃太郎が回想するように、「満州国の建国」という神聖なミッションも多くの日本人を引きつけた。[24]そして、加藤淑子は、日本人の女性にとっての満州の利点を取り上げている。1920 年代の日本においては、お見合い結婚のような女性の自由を制限する伝統が存在したため、女性は「籠」に閉じ込められていた。満州においては、日本の女性たちは自由を感じていた。[25]面白いことに、塚瀬進は、満州で生まれ育った日本の女性を、「自主、独立の

---

[18] 塚瀬進（2004）満洲の日本人、吉川弘文館、171 頁。
[19] 同上、171 頁。
[20] 同上、171－200 頁。
[21] 生田美智子（2007）「植民地主義の表象：「満洲」のロシア人ディアスポラの場合」//『ロシア・東欧研究』、№(12) 8、87 頁。
[22] 勝山妍子（2007）夕映えのスンガリー．光陽出版社、27 頁。
[23] 加藤淑子(2006) ハルビンの詩が聞こえる、藤原書店、15 頁。
[24] 生田、同上、88 頁。
[25] 石村博子（1995）ハルビン。新宿物語、講談社、15 頁。

気概に富み、古い習慣にとらわれない」、「新しいタイプの日本人の女性」として定義づけている。[26]

また、満洲におけるロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの人数に関しては、ロシア系ディアスポラの場合、T.Rebyakina の著に、日系ディアスポラの場合、塚瀬進、坂部の著に詳しく記載されているため、こちらを参考されたい。

1.6.3. ロシア系ディアスポラ、日系ディアスポラの特徴に関する対照分析

もう既に言及したように、「ディアスポラ」という現象は、様々な形を取ることができるため、全ての学者を満足させる一般的な定義は、まだ存在していない。

満州における、ロシア系と日系ディアスポラの特徴としては、1.5.3.に取り上げた分類方法を適用すれば、次のようなポイントが挙げられる：

1. Warwik R. Cohen によって提供された区別仕方：

ロシア系ディアスポラ：

19 世紀末−1917 年：「帝国」・ディアスポラ、「労働者」ディアスポラ

1920 年代：「白系」亡命ロシア人 ー「犠牲者」ディアスポラ

1930 年代：「被植民者」ディアスポラ

ここで注目すべきことは、中国とロシアの歴史学者の間には、19 世紀始末の満洲が、ロシア人によって植民地化されたかどうか、という疑問点を巡り、議論が続けられている。

日系ディアスポラ：

19 世紀末－1920 年代：「労働者」ディアスポラ、「貿易者」ディアスポラ

1932－1945 年：「帝国」ディアスポラ、「植民者」ディアスポラ

2. G.Sheffer によって提供された区別の仕方：

ロシア系ディアスポラ：

エスノ・ナショナルなディアスポラ（自分の民族的アイデンティティに関する高い意識を有すること）

日系ディアスポラ：

同上

[26] 塚瀬、同上、189 頁。

3. ロシア社会学者 V.Popkov によって提供された区別方法：

①移住先との歴史的繋がりの有無：

ロシア系ディアスポラ：

ロシア系ディアスポラの滞在地である満洲は、ロシア人にとって別の国、国家であった。

日系ディアスポラ： 同上

②法的地位

ロシア系ディアスポラ：

1903 年以降：約 20 年間、ハルビンは完全にロシアの支配下にあった。中東鉄道は、鉄道沿線で「絶対的かつ排他的な行政権」が認められていた。ロシアは、それを軍隊駐留、警察権、司法権、徴税権、通信権などに拡大した。

ロシア人は帝政ロシアの国民であった。[27]

1919 年 7 月：ソ連はカラハン宣言[28]を出した。中東鉄道の経営権を除き、帝政ロシア時代に獲得した全ての利権を返還する。

このように、商店、学校、住宅、病院、寺院などは、中東鉄道支援を失った。

1920 年：ロシアの政治行政機関は中国が接収した。鉄道付属地内の露国裁判所閉鎖、露国司法権が完全に解消される。[29]

1924 年：中ソは正式に国交を樹立する。ロシア人は、ソ連国籍、中国国籍を取得、或いは、エミグラント地位に留まるという選択肢があった。[30]

1935 年：ソ連は中東鉄道を「満洲国」に売却する。ソ連国籍のロシア人は「満洲」から引き揚げた。「満洲」に残留したロシア人はエミグラントになった。[31]

日系ディアスポラ

1901 年：満洲における日本人居留民が松花会を設立する。その組織は、居留民の代表機関となる。

1903 年：北満における勢力はロシア帝国の手中にあった。[32]

1906 年：関東都督府には民政部と陸軍部が置かれている。満洲の様々な地においては、日

---

[27] 生田、同上、84 頁。

[28] 1919 年と 1920 年の 2 回にわたってソ連外相代理 L.カラハン(L.Karakhan) (1889-1937) が発した中国問題についての宣言。民族自決の原理に基づき、帝政ロシアが中国で獲得した全ての領土・利権の放棄を宣言し、中ソの友好関係樹立を提議し、以降の国交回復(1924)の契機となった。（百科事典マイペディアから、https://kotobank.jp/word/カラハン宣言-47233 アクセス日: 2017/03/23）

[29] 生田、同上、85 頁。

[30] 同上、85 頁。

[31] 同上、85 頁。

[32] 同上、85 頁。

本総領事館が設置される。[33]

1913 年：大連における日本人市民による自治組織が設立される。

1921 年：満鉄付属地に地方委員会が構成される。[34]

1932 年以降：日本統治時代。[35]満洲国においては最後まで国籍法が制定されなかったこと、イデオロギー的影響が大きかったこと（山室が述べているように、「王道楽土満州国とは、国民なき兵営国家ならざるをえなかったのだろう」）[36]、そして、日本国内の法律が、二重国籍を認めなかったため、満洲に移住した日本人は、日本国籍を持ち続けていた。[37]

1940 年：国内の住民の身分関係を明らかにする必要があったため、暫定的に「暫行民籍法」が樹立され、民籍に記載された者は満洲国人民として扱われた。ただし、この法は、「戸籍」ではなく「民籍」を定めていた。[38][39]

③ディアスポラの形成方法：

ロシア系ディアスポラ：

ミグレーション、つまり、移民者は、異郷の領土に移住する。時間とともに、形成されてきたディアスポラに、新しい移住者が加入する。

日系ディアスポラ：

同上

④移住の動機：

ロシア系ディアスポラ：

19 世紀末－1920 年代：自発的移住

1920 年以降：ソ連人の自発的移住

1920 年代：「白系」亡命ロシア人の必然的移住

日系ディアスポラ：

殆どの場合：自発的移住

---

[33] 塚瀬、同上、13－83 頁。
[34] 同上、13-83 頁。
[35] 生田、同上、88 頁。
[36] 山室信一（2009）キメラ。満州国の肖像、中公新書、298 頁。
[37] 遠藤正敬(2007)「満洲国草創期における国籍創設問題」//『早稲田政治經濟學』誌 No. 369、10 月、43-161 頁。
[38] 同上
[39]「戸籍」の代わりに、「民籍」の方が定められた理由としては、移民国家である満州国においては、家族の一部のみが満州国に居住している場合が多かった。家族単位の戸籍が編成できなかったため「民籍」の用語が採用された。（https://ja.wikipedia.org/wiki/暫行民籍法#cite_note-1　アクセス日：　2017/03/23）

⑤異郷における移民者の見通し：

ロシア系ディアスポラ：

中東鉄道従業員：長期的滞在を予定していた。

白系「亡命」ロシア人：臨時的滞在地として見ていた。

日系ディアスポラ：

塚瀬進は、一方で、満洲における日系ディアスポラを、「流動性の高い」[40]社会グループとして定義している。もう一方で、満洲で生まれ育った日本人は、満洲を故郷として見ていたこともある。

⑥ディアスポラの滞在地における、経済的、社会的、文化的などの基盤の存在の有無

ロシア系ディアスポラ

経済的、社会的、文化的基盤が、ある程度設けられた。

しかし、法的地位は、時間とともに変化していたため、安定性がなかった。

日系ディアスポラ

経済的、社会的、文化的基盤は、強かった。

日露戦争における勝利時点以降には、満洲における日本人の勢力が伸びていった。

⑦ディアスポラの一員と原住民との文化的距離の有無

ロシア系ディアスポラ

中国人、満人、モンゴル人は相互の文化的ディスタンスが大きかった。

日系ディアスポラ

日本人、中国人、満人などは東洋文化園に属してはいるが 、中でも日本人は、満洲の原住民とは距離を保っていた。

⑧ディアスポラの出身地において、いつでも戻ることができる国家の存在

ロシア系ディアスポラ

ロシアにおいては、ソ連制度が樹立する時点から、「白系」亡命ロシア人は、特別の許可が出ないと、故郷に戻ることができなかった。

日系ディアスポラ

いつでも、日本へ戻ることができた。

---

[40] 塚瀬、同上、171 頁。

（しかし、1940年代の満洲に居住していた日本人農民は、食料の供給者であったため、自由な移動が制限されていた。その上、農民にとっては、旅費が、巨額であった。）

以上、満洲におけるロシア系ディアスポラと日系ディアスポラは、山あり谷ありという運命を持っていた。ロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの共通点としては、民族意識が高いこと、 団結性を保つ意志の強さ、社会的組織を設けることへの努力、自分の国の文化、言語、伝統を保持する意志、原住民との同化を希望しないことなどが挙げられる。

しかし、最も深刻な問題点としては、ロシア系ディアスポラと、日系ディアスポラを、全体像として扱うことができるかどうかということである。ロシア系ディアスポラの一員を分裂させているファクターは、「白系」と「赤系」社会グループの対立が挙げられる。日系ディアスポラにおいては、日本人都会人と、1930年代の満洲へ流入する開拓団農民の間の溝も深かった。

それと同時に、ロシア系ディアスポラにはイデオロギー的対立が存在していたにも関わらず、自分の政治的属性を主張しなかったロシア人も存在し、政治的見方を変更する人も少なくはなかった。このことから、満洲におけるロシア人の社会を、判然と区別できるとは言えない。

日系ディアスポラにおける、都会人と農民の関係においても同様である。日本人の農民の中に努力して都会に移住する人も存在し、また、第二次世界大戦の時代に、多くの日本人の都会人が労働力として開拓団に送り込まれたこともあったため、この場合にも、判然とした区分は適用できるかどうか、疑問として残る。

以上のことを考慮に入れ、本稿においては、ロシア系ディアスポラと日系ディアスポラには「白系」ロシア人と「赤系」ロシア人の場合にも、日本人都会人と農民の場合にも、民族性、言語、文化的基盤、メンタリティーなどの共通点が多く存在するため、ロシア系ディアスポラと日系ディアスポラについて対照分析をする場合において、ロシア系ディアスポラと日系ディアスポラを全体像として扱うことが出来ると考える。

本研究では、満洲におけるロシア系ディアスポラと日系ディアスポラについての検討をする際、一般人の日常性に注目する。次項では、「日常性」という定義の意味と、それを研究する意義について論述する。

1.7. 「日常性」という定義を巡る考察

現在、哲学において、「日常性」という定義の意義への関心が高まっている。世俗性、平凡

さとも関連付けられる、この定義は、生き物の中で、人間しか見られない、人間特有の主観性を捉える役割がある。ここでは、様々な学者の見方を取り上げ、「日常性」の研究の意義について、考察する。

「日常性」の哲学的な意義については、以下の通りである。

・日常性は個々の再生ということである。

「日常性」の意味を明確化すること、そして、その分析については、歴史学者の貢献が大きかった。フランスの歴史学者の**フェルナン・ブロデール**（Fernand Braudel）は、人間の日常生活の条件、又は、人生の基盤である、歴史的・文化的コンテクストと、その歴史が、人間の行動と振る舞いにも決定的な影響を与えるものであると述べている。[41]ドイツの歴史学者の**アグネス・ヘラー**（Agnes Heller）は、「日常性」の最も重要な特徴としては、個々の再生であることを取り上げている。このように、社会的再生の条件が形成されている。[42]

・日常性は、物質的な意味を超えている。

上に挙げた研究者の最終的な結論は、「日常性」が人間全体の世界であるため、それを研究する際、衣食住という物質的文化に限らず、人間の日常的振る舞い、思想、感情なども考慮に入れるべきであるということである。

・日常性は現実的なことである。

哲学者も「日常性」について論述し、ロシア人の**ボリス・マルコフ**（Boris Markov）が、「日常性」を、「現実性、事実性、通常の人生の世界」として定義している。自分の論述を発展させ、「習慣、ステレオタイプ、規則、思想、体験、そして様々な社会的組織によって調整されている振る舞い、活動」についても、「日常性」の一部として位置付けている。[43]**ヴァシリー スィロフ**（Vasiliy Sirov）は、「日常性」を現実性の形成方法として見ている。[44]

・「日常性」とは、周りの世界に意味を与えている、個人の意識で生まれるコードである。

「日常性」は、あらゆる問題が発生する場合、その解決のために必要な、個人の意識において生まれる特別なコードである。この場合、日常性は様々な意味の作成、様々な対象の創造と変容という、作業を行う機械のような形として登場する。[45]

---

[41] Шубина М. (2006) О понятии и природе повседневности. // Известия Уральского государственного ун-та. No. 42. С. 55.
[42] 同上、56 頁。
[43] Марков В. (1999) Храм и рынок. Человек в пространстве культуры. Спб. С.191
[44] Сыров В. О статусе и структуре повседневности (методологические аспекты) // [Электрон. ресурс]. http: //siterium/trecom.tomsk.su/Syrov/s_text11.htm　最終アクセスの日：2017/03/16
[45] 同上

・日常性の主な機能は、現実的な世界に存在する様々なものごとをつなぐことである。

イリヤ・カサヴィン（Ilya Kasavin）と**セルゲイ・シャベレフ**（Sergey Shavelev）も、「日常性」の機能的性格について記している。この研究者たちは、「日常性が、様々な種の意識、活動とコミュニケーションというものをつないでいるが、それは、それらの間の空間の中にしか存在していない」という意見を述べている。[46]

・日常性は、プライマリ・リアリティーである。

多くの研究者は、「日常性」をプライマリ・リアリティーとして定義し、それが様々な経験の既存の基盤であるという意見を述べている。ドイツの**アルフレッド・シュッツ**（Alfred Schütz）は、「日常性」を至高の現実として定義している。[47] シュッツは「社会科学」と「日常生活世界」という根本的テーマの関係において主格を入れ替え、「日常生活世界」を至高の現実として前面に位置させ、「社会科学」をその周縁的現実として後方に位置させた。

・日常性とは、意識されるべきものである。

そして、「日常性」が「ものごとを理解すること」とも関連付けさせている。この場合、「理解」というものは特別の意味を持ち、「認識」のシノニムとなっている。A.シュッツは、この「認識」を、状況の認識として定義していた。状況の理解・認識は、状況に応じており、実利的なものであるが、反省が不足している。そして、日常的認識の特徴は、それが解明されたものではないと述べている。

・日常性は、実践的活動により生まれているものである。

そして、A.シュッツが示しているように、「日常性」が、「労働」という実践的活動の基で形成されている経験の分野でもある。

・日常性は、個人と周りの世界との「コミュニケーション」でもある。それと同時に、周りの世界は、個人によって意味づけられているものである。

「日常性」というのは、対象と、周りの物に向けられたその対象の知性のことに限らず、その対象の知性が向いている周りの世界というものにおいても影響を与えているものである。

---

[46] Касавин И., Щавелев С. (2004) Анализ повседневности. М. С. 21.

[47] Shutz A. (1962) Constructs of thought objects in common sense thinking. Shutz A. Collected Papers. The Hague. Vol. 1、10頁。

外界は、「主体性」という定義の一部であるが、この場合、外界は独立したものではなく、対象の視点から捉えたものであり、その対象の世界観を反映し、対象によって意味づけられているものである。

そして、日常性におけるコミュニケーションの役割に関しては、それは、ただ日常的世界の重要な様子に限らず、その日常的世界の存在の方法として見られている。

・「日常性」とは、「外」に向けられた個人の世界である。

ロシア人哲学者のミハイル・バフチン（Mikhail Bakhtin）は、人間が「自分自身の世界」の中で存在できず、「外界」との交流を目指していると主張している。その理由で、人間の日常性というものを、外へ向けられたその人間の「内の世界」としても見ることができる。つまり、日常性というのは、「私の世界」、「近い」、「親しい」、「自分の」、「通常の」、「慣用の」というものである。[48]

以上から分かるように、哲学者も、歴史学者も「日常性」の意義を認めている。「日常性」の定義は多く存在するが、それらを共通させることは、「日常性」が物質的世界に限らず、人間の思考方法、振舞いといったものも含んでおり、ただ現実世界ではなく、至高の現実という価値を持つ、というアイディアとなる。そして、「日常性」が、「ものごとを理解する」ことにも繋がり、周りの世界に関する人間の認識の表象にもなる。その理由により、「日常性」は、主体的なものであり、各個人が、「日常性」を自分なりに理解し、自分自身の「日常性」を持っている。そして、コミュニケーション、再生、繰り返しというものは、「日常性」の最も重要な要素であることが、多くの学者によって認められた。

次項では、日常性の学問上の意義について考察する。

1.8. 歴史学、社会学、文化論などにおける、「日常生活」の研究の意義
1920－1940 年代の満洲に存在していたロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの研究における、個人の「日常生活」の検討の適用性を巡る考察

1.8.1. 20 世紀の歴史学、社会学における新しい見方

景観論者ジェイ・アップルトン(Jay Appleton)は、歴史学のアプローチを、大雑把に「眺望型 (prospect)の歴史学」と「閉じこもり(refuge)型の歴史学」という、二つの種類に区分してきた。「眺望型」の歴史学は、広大で大規模な景観を調査し、物事を超越的な視点か

[48] Шубина М., 同上、61 頁。

ら記述する。そのような歴史学の好例は**チャールズ・ティリー**(Charles Tilly)に名付けられた『巨大な構造、大きな過程、大規模な比較』であろう。[49] J . ブルーアが示しているように、眺望点の高さ、検討される対象の大きさ、そして研究者と対象の間に距離があるために、「眺望型」が行う観察や記録は特定されたものではなく、一般的なものであり、その輪郭や表層は見えるが、細部については明瞭さを欠いたものとなる。しかし、その画一的な型または総体的な傾向が記述される。[50]

20 世紀の初頭までの歴史学の主流として挙げられていた、政治史と経済史が「眺望型」的アプローチを代表するものである。この中心には、著名な歴史上の人物（国王、英雄）が置かれた。そして、彼らが行った戦争、侵略、政治政策、文化的貢献などといった大きなテーマばかりがクローズアップされ、名もなき民衆の様子は研究の対象として注目される機会は少なかった。[51]

「眺望型」の歴史学と異なり、「閉じこもり型」の歴史学は対象に肉薄するが、小規模である。その力点は、空間よりむしろ特定の場所、特殊事情と細部の念入りな描写、一定の囲い込みに置かれている。閉じこもりの中では、互いに関係し合う多くの視点が存在する。そこでは相互依存の形態や、表層や距離感よりも内面性や親密さが強調される。[52]

1.8.2. 「社会史」の生まれ

20 世紀になると、政治史と経済史の代わりに、新しい研究手法の導入が期待されたため、「社会史」という新しいアプローチが登場する。

「社会史」というのは、特定の人物や国家、あるいは経済政策といった事柄を多く扱う事件史と異なり、そのような諸々の事象を生んだ社会構造そのものとその変遷を解き明かすことを研究の目的としている。そのため、特に政治史、経済史で対象とされてこなかった民衆を取り上げることが多く、しばしば「下からの」歴史学とも呼ばれている。[53]

社会史は、家族、性、出産、育児、衣食住、貧困、犯罪、心性といった領域を対象とするため、哲学、心理学、文化論等の研究分野にまでもまたがる学際的アプローチである。「個人」の歴史を通じてある一つの社会グループを研究することも、社会史に関する手法である。

平凡さとも関連付けされる「日常性」への関心に移行した原因としては、グローバルな政

---

[49] フルーア J.（水田大紀訳）（2005）ミクロヒストリーと日常生活の歴史 、22 頁。
[50] 同上、22 頁。
[51] セイン P.（**柏野健三訳**）（1988）福祉国家の建設（上・下）、海声社、131 **頁。**
[52] クルーア J.、同上、22 頁。
[53] セイン P.、**同上、**34 **頁。**

治政策において、人々の期待が裏切られたということが挙げられる。

哲学者・数学者の**エトムント・フッサル**（Edmund Gustav Albrecht Husserl 1859-1938）は『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』において、20 世紀の科学の問題としては次のようなことを示した。「ガリレオ・ガリレイによって物理学の基礎付けに数学が導入されて以降、自然は数式によって理念化されて「数学的・記号学的理念の衣」によって被われてしまった」。[54]その問題を解決するため、フッサルは、「生活世界」の取り戻しを提供した。このように、フッサルは「超越論的現象学」の創立者となっている。

オアルフレート・シュッツ（Alfred Schütz, 1899- 1959）は「生活世界」に関するフッサルのアイディアを発展させ、「現象的社会学」というアプローチを提唱する。もう既に言及したように、「日常性」という領域を社会学の主題として導入したことは、シュッツの大きな功績である。「人間集団共有の経験」の要素を含む「日常的常識」というコンセプトはシュッツによって導入されたものである。[55]

1.8.3. 人間を中心にした研究へ

1960 年末-1970 年初頭の頃、西ドイツの歴史学者は、人間を中心にした研究の方法に注目するようになった。新アプローチを「Alltagsgeschichte」とドイツ語で名付け、その意味は「下からの歴史」、或は「日常性の歴史」という。同時期に「日常史」の研究の規模が拡大し、英語圏では文化人類学へ影響を与えた「新しい社会史」、（ジェンダーや人種、性行動に関する、新しい社会運動を背景として記述された歴史学を意味した）、イタリアでは、アナール学派の「長期持続」的歴史学の発展を促した「小さな歴史学」、（ミクロヒストリー、microstoria）、フランスでは、ポスト・アナール学派の文化史というような動向が浮き彫りになった。[56]

「日常性」の研究のアプローチに反対する学者も現れ、ドイツの歴史家の H.ヴェーラー、J.コッキは、この手法を「つまらないものを収集する」、「ロマンチックなプセウド・リアリズム」と例えた。構造性を欠いている断片的な物語の蓄積においては、歴史学の視点から重要不可欠なコンセプトが不足していたことも批判の対象となった。[57]

しかし、それと同時に、「全体史」と「日常史」を、最終的に一種のものとして定義した学者も現れた。『ミクロヒストリーと日常生活の歴史』という記事において、ジョン・ブル

---

[54] フッサル E.（細谷恒夫訳）（1995）ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学、中公文庫、72 頁。
[55] Шютц А.（2003）Смысловая структура повседневного мира: очерки по феноменологической социологии. М.: Институт Фонда «Общественное мнение». С. 33.
[56] 同上、19 頁。
[57] Людтке А.（1998/99）Что такое история повседневности? Ее достижения и перспективы в Германии // Социальная история: Ежегодник. М. Сс. 3−27.

ーアは叙述の理論家の意見を取り上げ、「「大きな物語」と「小さな物語」の間には「フォーマルな」違いがない」という結論を出した。その理由について、「すなわち、あらゆる話に完全に無垢なものはなく、すべての叙述にプロットが編み込まれているのである。叙述は必然的に選択、包摂と排斥を伴う」と記している。

このように、「日常性」の研究のアプローチは、発展し続け、文化人類学の研究の対象ともなった。例えば、文化人類学者の**クリフォード・ギアツ**（Clifford Geertz）は、日常性を階層的に形成された行動、シンボルと記号のネットとして定義している。

19 世紀に普及した「日常生活」の研究方法と異なり、20 世紀の研究の特徴として、「日常生活」を、その背景にあるダイナミックな歴史とも離さずに分析していることが挙げられる。

「日常生活」の研究においては、「個人」だけでなく、その個人を囲む全ての環境も重視されている。そこには、消費、物質的、精神的要求の満足、そして、それに関係する習慣、儀式、固定された行動パターン、認識のモデルといったアスペクトも含まれている。[58]

1.8.4. A.ルトゥケによって行われた、「日常性」の実践的研究の結果

1920－1940 年代の満洲において存在していたロシア系と日系ディアスポラの研究への適用の試み

1980 年代、ドイツの歴史家の**アルフ・ルトゥケ**（Alf Lüdtke）は、「日常史」という歴史における一般人の役割に関する仮説を検証した。「日常史」の研究への A.ルトゥケの貢献は、具体例を通じて、一般庶民の歴史発展への影響力を証明し、このように「日常性」の研究の意義を説明したことに見られる。[59]

19 世紀末 - 20 世紀前半の時期を扱い、A.ルトゥケは、ドイツの企業に勤務する一般人の労働者の活動を検討した。研究者によれば、歴史のプロセスにおいては、ベクトルが多いため、「人間－社会－権力者」という構造における相互作用の分析を、日常的活動の研究を通じて行わなければならないということだ。

ドイツの企業における労働団体の中の人間関係、労働者と営業部の関係、労働者の活動と、その人物の個性の特徴、そして、第二次世界大戦などに参戦したドイツの軍人の活動と部隊における人間関係を検討してきた A.ルトゥケは、「日常性」の研究のアプローチに見られる、利点と「全体史」との相違点を明らかにした。

ここでは、本研究における、分析対象となった回想記からの実例を通じて、1920－1940 年

---

[58] Капран И.（2011）Повседневная жизнь русского Харбина. Конец XIX-50-е гг XXв. Владивосток. С. 15.

[59] Людтке А.，**同上、77 頁。**

代の満洲におけるロシア系と日系ディアスポラの日常性を検討することにおいても、A.ルトゥケが提案したアプローチが適用できることを証明する。

1. 様々な社会グループにおける人間関係の多種多様性を見せること

ロシア系と日系ディアスポラにおいては、貧富の差、イデオロギー的対立、前世代と次世代との間の葛藤などの問題が存在していたため、両方のディアスポラについての記述を一般化することが難しかった。一般人の回想記は、それらディアスポラに関する一般的な知識の相対性を示している。

2. 権力を持っていない一般人が行動の選択肢を持つことを証明すること

「満洲国」の時代に「被支配者」の立場にあった多くのロシア人は、長い時間は、日本人の存在を全く感じていなかった。

3. 一般人の行動を分析するプロセスにおいては、状況の特異性への注目の必要性の主張：同じ人物は、様々な状況（例えば、職場と家）において異なった振る舞いをする場合が多い。

例えば、柳田桃太郎は、満州国の行政機関に勤務していたが、居住先は、「白系」ロシア人のアパートの部屋をレンタルしていた。このように、「支配者」であった柳田は、「被支配者」ロシア人によって催された誕生日などの祝祭にも誘われ、ロシア風のスタイルで遊んでいた。[60]

4. 歴史における、下層に属する人物の役割を高める必要性の主張

安い食料品を売っていた中国人の「物売り」は、多くのロシア人と日本人を、飢餓から救ったことがある。

5. 工業の作業団のような、小さな社会グループにおける人間関係とその一員の行動に注目する必要性の主張：労働者のように、「下層」に属する人物が、自分の存在感を示すため、様々な方法を使用する。

在満日本大使館においては、日本人とロシア人の職員の間には、友好的な関係が結ばれていた。下村領事は、「父」であるかのように、ロシア人の職員の面倒を見ていた。

この事例は、「満洲国」の時代におけるロシア人と日本人の不平等な関係に関するステレオタイプを崩している。

[60] 柳田桃太郎（1986）ハルビンの残照、原書房、220 頁。

6. 小さな社会グループに注目すれば、ある民族や社会層などの心理の特徴を示す「キーワード」を見つけ出すことができるということを証明すること：その後、様々な状況に置かれた人物の行為を分析すれば、その「キーワード」の信憑性を確認できる。（例えば、工場と戦場といった異なった状況において、ドイツ人は頑固（ドイツ語の「eigensinn」の直訳）という性格の特徴を発揮したということを A.ルトゥケが発見した。）

ロシア人と日本人の回想記は、「白系」ロシア人の信仰心の深さを強調している。例えば、ロシア人は、パスハという祝祭を、食糧不足の問題が厳しかった戦争時代にも祝い、祝祭料理のために、貧乏なロシア人さえも材料を見つけることができた。

7. 小さな社会グループを検討する際、フォーマルな関係に限らず、インフォーマルな関係にも注目する必要性を証明すること

例えば、永井は、自分の教師でもあった稲毛先生の授業の仕方に限らず、生徒に対する態度にも注目している。クラスの一員であった自分の息子に対しても、粗暴に扱うことは、当時の日本が戦争に負けることを恐れていた、極端な愛国者であった稲毛の怒りを表す態度としても見ることができた。[61]

8.「全体史」特有の「アイディアルなモデル」の形成を避け、人間の生活様式などのような、「つまらない物事」にも注目する必要性の主張（例えば、工場の職員の生き方への注目）

満洲に居住していた日本人は、自分の国特有のライフ・スタイルを送っているという一般的な認識があるが、回想記では、ロシア料理に対する関心も高かったことについても言及されている。

9. 政治体制の一般人の生活状況への影響力を検討する際、「日常性」の空間の検討の必要性を証明すること

1945 年、満洲に侵攻するソ連兵は、日本人の市民を敗戦国民として扱い、自分の支配下に置いたが、多くの一般の日本人は、ソ連兵に対してお金を稼ぐ相手としても接したことがある。例としては、ソ連人購買者に向けられた手作り人形などである。

10. 一般人の日常生活の様子である、シンボルの重要性を強調すること：政府は、労働者の意識のマニピュレーションの目的で、その人間の人生に存在するシンボルの中で何を使用

[61] 永井瑞枝（2005）おばあちゃんの満洲っ子日記。信濃毎日新聞社、128 頁。

したのかについて検討することが可能である。（例えば、A.ルトゥケは、労働者の同情を買うことを目指した、ナチ政府によって使用された握手の手法について記している。）
「満州国」政府は、「五族協和」、「王道楽土」というイデオロギーに対する、一般の人の関心を引くため、様々なシンボルを使用していた。例えば、生田が示しているように、当時の満洲で出版されていた絵葉書に載せられた、洋服姿の「白系」ロシア人のモダン・ガールのイメージは、満州国の近代性を強調するシンボルとして、日本人の好奇心を高めていた。[62]

11. 産業発展時代においても、一般労働者の役割の重要性を主張：A.ルトゥケは、K.マルクスの「工業の発展により、人間の役割は、「付属物」に過ぎなくなる」という表現に反論している。戦争時代における生産の最適化のプロセスには、一般人の労働者の貢献が完全に評価されなかったと主張した。
柳田が、具体的な例を取り上げており、満洲国の国造りの作業を徹夜で行うために事務室で過ごしていた、日本人職員の貢献についても述べている。[63]

12. 歴史における個人の責任を認める必要性の主張（例えば、「全体史」において、人道的なことに関する犯罪を起こした政府のイデオロギーの犠牲者として定義された、庶民の日常的行動を分析する必要性が挙げられている。）
1945 年に、ソ連兵は「白系」ロシア人の住宅に突入し、貴重品を奪うことが頻繁にある出来事であったが、例えば、E.ラチンスカヤは、泥棒が入るアパートメントに関する情報を提供する「白系」ロシア人の存在についても言及している。[64]

13. 政府側にとって利益的な「概念の置き換え」という問題への注目（例えば、A.ルトゥケは、ドイツ政府によって賞賛されていた、企業の労働者の「勇敢な行動」の「裏面」には、生き残るための努力という動機以上のものが見つけられなかった。）
同様に、満洲国において唱えられていた「五族協和」のイデオロギーの裏面には、日本人による中国人などへの侮辱的な接し方という問題が存在していた。

14. 日常性の研究を通じて、異なる活動の分野に属する人の間に共通点を見出すことができるという可能性の主張：A.ルトゥケは、第二次世界大戦に参戦した兵士と企業の労働者に

[62] 生田、同上、83−103 頁。
[63] 柳田、同上、202 頁。
[64] Рачинская Е.（1982）Перелётные птицы. Воспоминания. США. Сс. 44-55.

共通する思考様式、行動のパターンの特徴を明らかにした。

日本が第二次世界大戦に突入する時点からは、満洲における一般の日本人は、「国民的行為」を見せることを、職場に限らず、住宅という「プライベートなスペース」においても、義務付けられていた。

15. 一般人の間のコミュニケーションの特徴の分析の必要性の主張：ルトゥケは、戦場に置かれた兵士の心理と動機について、検討を行ってきた。

加藤淑子は、ロシア人との密接な関係を維持していた。このように、自分の例を通じて、「東洋の世界」と「西洋の世界」に属する個人の間の相互理解を進化することの可能性を見せることができた。

16. 精神状態を検討する際、個人の回想記の重要性の主張：A.ルトゥケは、ドイツ人兵士の回想記の分析を通じて、戦争という、極端な状況に置かれた人間の精神状態における変遷を辿ることができた。

日本人の回想記を通じては、敗戦国の国民となった日本人の精神状態についても、検討できる。

17.「政府－庶民」の関係を明確化する可能性の主張：A.ルトゥケは、行政府によって表明された約束とイデオロギーが、一般人からはどのような反応を受けたのか、又は、行政府のプロジェクトが、実際に実現されたかどうかという疑問点を明らかにしている。

「満洲国」の行政機関に勤務していた後藤春吉は、満洲国のイデオロギーである「五族協和」のアイディアに相当するべき村を建設することを任された。後藤は、そのプロジェクトの成り行きと、その結果についても記している。このように、「五族共和」に関する夢が、現実に実現されたかどうかついても検討できる。

18. 民族交流の問題を考察する際、「日常性」の研究の重要性の主張：A.ルトゥケは、ドイツ人の一般人の中で、ラシズム、他民族に対する偏見という問題について、第二次世界大戦が終わってから、どのぐらい長く存在し続けたかを明らかにしている。

「満洲国」の時代には、日本の警察は、ソ連人のスパイ活動に対して、警戒心がさらに高まっていた。この状態の背景には、ロシア語の教師であるワシリー先生と日本人の生徒の後藤春吉との間に発生する誤解が、注目すべき場面である。ソ連の新聞を教材として使用することを希望していた後藤のアイディアによって、日本人警察からの嫌疑を恐れていたワシリー先生は、日本人警察に後藤の活動について密告することを促されている。このように、後

藤春吉は、当時の満洲における不信感の問題を取り上げている。[65]

19. 社会的問題を研究する際、研究のエリアの枠の拡大に関する提案（例えば、就業の問題に関しては、正式な職場に限らず、「趣味」、「プライベートなビジネス」に注目する必要性の主張：A.ルトゥケが示しているように、1980 年代のドイツにおいては、失業問題が深刻化したが、正式に雇用されなかった男性は、趣味を仕事にすることで、社会における自分の存在意義と存在価値を証明することができた。

柳田は、満洲で働いていた日本人男性の趣味として、ロシア人女性から、ロシア語のプライベートレッスンを受けることを取り上げている。このように、日本人男性は、美しい「ロシア人娘」との関係を結ぶことを目指していた。[66]

20. 人間のことをもっと深く調べることの提案（例えば、A.ルトゥケは、「労働者」が、工場の職員以外にも、多くの社会的役割を果たすものであると主張している。）
加藤淑子は、満洲への移住を、当時の日本特有の保守的な社会制度からの「逃れ」としても見ていた。このように、加藤は、自分の例を通じて、当時の日本国内の社会的問題に限らず、満洲において存在していた価値観にも注目している。

21. 社会と文化の進化のプロセスにおける、個人の貢献の主張：A.ルトゥケは、社会の近代化への志について考察する際、社会的努力ではなく、個人の具体的な行動を分析した。
加藤夫婦は、満洲において、ロシア人との密接な関係を結ぶことができた。加藤幸四郎は、日本に帰った後、ロシア料理店協会を設立して、その理事長にもなった。日本における自分の役割を「ロシアとのかけ橋」だと定義した。[67]　このように、加藤夫婦は、日本国内におけるロシア文化の促進に大きな貢献をしたと思われる。

このように、「日常性」に着目する研究のアプローチは、次のような新しいアスペクトをもたらした:

1. 歴史の記述に「主観性」の導入
2. 社会的・経済的構造というプロセスのみに着目する、「全体史」に対置された研究方法としての発展
3.「ミクロヒストリック」的な現象とプロセスへの関心：小さな社会グループ、労働団体の

[65] 後藤春義（編集者）、(1973) ハルビンの想い出、協和印刷株式会社、220 頁。
[66] 柳田、同上、220 頁。
[67] 石村、同上、263 頁。

ような小さな組織、そして、家族と個人の伝記への着目

4. 歴史における個人の役割について、歴史の主体と客体の役割を重ねるものとしての見方

5.「全体史」の研究者の出来事に対し、「意図的な行為」の結果としての視線の代替案として、反対にその出来事が多い場合、人物の意思と行動に関係せず、「偶然に」起こるものとして適用

6. 出来事の記述の方法について、内面性と親密さの重要性の承認

7. 読み手の帰属意識の向上：ミクロヒストリーの創設者の G.リーヴァイが述べているように、読み手は「対話に巻き込まれ、歴史に基づく議論を構築する全過程に参与する」ようになる。

8. 研究の対象に対する、研究者の情緒的感情である愛着、共感、状態を理解する意志の表現

9.「推測法」の適用性を認めること:「断片」、「逸話」（語りを台無しにする叙述の形態）、「取るに足らない細部」、「うわすべりな発言」

10. 日常生活の慣習を実演する人々に対し、発言権と認識能力、さらには世界を変革する力と役割を与えること

11. 経験の分析、社会の記述に焦点を当てること

12. リアルに描かれた人間の行動の動向

13.「人間らしい」活動の研究への関心：平凡な人生においても、英雄談の存在が認められている。

14. 心情的な親密さ（または同一化）と知的な距離感を両方とも保つ傾向があること

15. 歴史的資料の収集の活動に、自分の「小さな故郷」の歴史に関心を持つ一般人の参加も促すこと：このように、「集団的記憶」と「個人のアイデンティティ」の形成のプロセスを促進させる。

16. 多種多様な家博物館、歴史家の団体、研究者の団体の増加

そして、本研究における分析対象である回想記の例を通じて、1920−1940 年代の満洲において存在していたロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの日常性と、個人の心理的問題、心理的防衛方法を検討することの妥当性についても証明できたと考える。

20 世紀の歴史学においては、「一般人」の役割が見直され、「名もない人」も歴史の発展に影響力を有する者として認められた。「一般人」の歴史を検討する際に、取り巻く環境、その環境に対する個人の反応と態度、そして、その環境に応じて個人の行動にも注意を払う必要がある。20 世紀前半に、中国に存在したロシア系と日系ディアスポラの歴史にも不明なところが残っており、歴史の「ギャップ」を埋めるため、一般人の回想記を検討する必要がある。

以上、本研究の対象であるロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの一員の「日常性」の研究の重要性について明らかにした。

次に、「回想記」というジャンルの分析へ移る。次項では、「満洲の経験」は、日本人とロシア人にとって、どのような理由で重視されていたかについて考察する。「回想記」というジャンルは、自分の経験についての記憶の保存方法であるため、「回想記」というジャンルの特徴についても取り上げる。そして、最後には、本研究において提起された問題点を検討することにおいて、情報源として選択されたロシア人と日本人の回想記の概要を取り上げ、その代表的な作者に関しても、説明する。

1.9. 満洲についての記憶の重要性。ロシア人の視点

「満洲の経験」を記述する回想記は、ロシア人と日本人によって、沢山執筆されてきた。本項と次項では、満洲の記憶を記録する動機に関して、ロシア人と日本人の視点を取り上げる。

満洲におけるロシア系ディアスポラを記述した回想記の意義として以下の様な点が見られる。

・ロシア系ディアスポラに関する記憶の保持

1945 年の満洲に侵攻するソ連兵は、「白系」ロシア人の文化的・知的遺産の崩壊を目指していた。例としては、図書館の本を消滅させることが挙げられる。[68]

1966 年から中国で始まった文化大革命は、中国における外国人の存在の跡の根絶を唱え、ハルビン市ではロシア人によって建設された教会が 10 軒、ハルビン市の辺境にあったロシア人の墓地を破壊した。ロシア人によって残された多くの貴重な歴史材料と文学作品も消失した。[69]

ソ連兵と中国政府で行われたそのような行為は、満洲におけるロシア系ディアスポラに関する記憶の保持の重要性を明らかにした。

・歴史的正義の復活、汚された名誉の回復

1917 年の革命後、外国に亡命したロシア人は故郷で「敵」と「裏切り者」という汚名を着せられ、1980 年代まで、厳しい批判の対象のままであった。回想記を通じてロシア人は自分の行為を正当化することができた。そして、ソ連政府は、満洲における出来事を政府の

[68] Рачинская Е., 同上、59 頁。

[69] Гончаренко О.（2009）Русский Харбин. ВЕЧЕ. Сс. 199－214.

利益通りに解釈していたため、今現在においても満洲の歴史について不明なところが沢山残っているが、回想記を通じて、多くのロシア人は事実の復元を目指していた。

・ロシア系ディアスポラの業績に関する記憶の保持

1917 年以後にアジアとヨーロッパに形成されたロシア系ディアスポラを社会的地位の視点から比較すれば、最も有名な貴族、芸術家、学者、作家などの亡命先として、ヨーロッパが選択された。そのため、満洲に居住していたロシア人の様々な活動（文化的、文学的活動など）は、ヨーロッパのロシア人に劣っているものとして見られていた。回想記を通じて、作者はそのような固定された意見を変更させることを試みた。

・ロシア系ディアスポラの一般人についての記憶の保持

多くの作者は、回想記の目的として、自分自身の経験の記録を選択した。ノンフィクションである回想記においては、歴史的に有名な人物に限らず、一般の人も登場したため、回想記では満洲の社会について完全な描写がされている。

・ロシア系ディアスポラの学問研究への貢献

満洲へ移民した、或は、亡命したロシア人の中には、科学者もいた。科学者の回想記には正確なデータを挙げ、またディアスポラの生活様式と活動の科学的な記述が対象となった。

・政治的質問の明確化

既に述べたように、満洲におけるロシア系ディアスポラにおいて、「白系」ロシア人と「赤系」ロシア人が共同生活を送っていた。その理由で、多くの作者によって回想記の中で政治的な問題にも触れられていた。多くの「白系」ロシア人は、ソ連人に対する敵意を持ち、回想記でソ連政府の責任を訴えた。それと同時に、満洲に居住していたソ連人も、自身の回想記で「白系」ロシア人の犯行の例を挙げていた。しかし、自己の政治的属性に関して迷っていたロシア人も存在していた。回想記の著者は、ロシア系ディアスポラにおける複雑な社会関係を正直に描いている。

以上、多くの回想記において、個人的な生活が記述されているが、ロシア人の著者を統一させることは、もう既に存在していないロシア系ディアスポラについての記憶を残す希望である。

ロシア革命後には、全世界に離散した「白系」ロシア人ディアスポラに関する歴史が保持されていることにおいて、ロシア人によって書かれた回想記の貢献を見ることができる。

1.10. 満洲についての記憶の重要性。日本人の視点

「満州」という経験は、多くの日本人のパーソナルな歴史において、特別な地位を占めているものである。10 年以上満州で暮らしていた日本人も少なくないため、満洲の経験は、多くの日本人にとって個人の歴史となったと思われる。

ここでは、満洲の歴史を扱う研究者と回想記の著者の意見を基に、満洲についての回想記の執筆の動機づけについては、以下の通りである：

・ 自分の過去を見直すこと

多くの日本人にとっては、満洲の経験が、痛ましい思い出と連想されている。坂部が述べているように、「命がけで、又家族を失いながら引揚できた人々の多くは、戦後の日本社会のなかで新たな生活を立て直しに追われた。多くの人にとって、満洲の経験は語りがたいものであった」。[70]

しかし、時間が経ってから、満洲で起きた出来事を見直す必要性を意識するようになった人も多かった。

山室は『キメラ。満州国の肖像』という自身の著作において、「満洲」での経験の記憶の重要性について、「ソ連軍の侵攻、引き揚げ、あるいはシベリア抑留―その生死の境をさまよう筆舌を尽くしがたい凄惨な体験を経て、満洲国とは何であったのか、それに自らはどうかかわっていたのか、それぞれの人々の中で問い返され、様々な満州への思いとして形づけられていた」と記している。[71]ここで、山室が主張したいのは、満洲で暮らした日本人にとって「国家の終焉こそ、むしろ真の満洲国体験のはじまりであった」ということである。[72]「満洲国」崩壊後の悲惨を乗り越えた日本人は、時間が経ってから、「満洲」の経験を見直し、その真実を「時間」という距離を置いて客観的に「外」から理解できたということである。

・歴史的教訓を与える希望

永井は、「満洲」の経験を教訓として評価する。永井は「満洲」という言葉を聞く際、中国人の「痛み」を思い、「胸を痛めた」。[73]「関東軍」への批判、日本人移住者のナイーブ性について反省し、「戦争を知らない年齢の人たち」に自分の経験を語りたいと記している。[74]

・「満洲」についてのノスタルジックな感情を表す希望

加藤淑子は、過去の記憶に対してノスタルジックな感情を抱いており、新婚生活、ロシア人との交流、新しい体験と満州における生活を結びつけている。加藤は、太郎という主人と一緒にハルビンでは幸せな人生を送っていたため、ロシアへの愛情をずっと保ち続けていた。[75]

---

[70] 坂部、同上、197 頁。
[71] 山室、同上、4 頁。
[72] 同上、4 頁。
[73] 永井、同上、1−4 頁。
[74] 永井、同上、1−4 頁。
[75] 加藤淑子（2006）ハルビンの詩が聞こえる、藤原書店株式会社、11−18 頁。

・「満洲」の発展に貢献をした日本人についての記憶を保持する希望

柳田桃太郎は、若い日本人にとって「満洲国」というのはどれ程大きな意味を持っていたのか、「満洲国」の国造りに従事した日本人は、どれ程努力したかを次世代に伝えたかった。[76]

・「一般の人」の運命における「国家」の役割についての考察

小宮は、満洲の経験について「私の体験で強く感じていることは、国家を代表する政府や指導者、役人、そして日本人を保護するためにあったと思われる軍隊までが、じつは底辺の日本人の幸福を決して守ってくれなかったということである」。永井と同じく、小宮も、日本人が自分たちの過ちを反省しないと、未来に向かって動けないということを、「満洲」の経験を通じて理解していた。[77]

・自分の経験を通じて、満洲についての真実を語る希望

勝山好子も、著者自身も含め、日本人の生徒などを危険にさらした満州国の政府を咎めている。しかし、それよりも、教師という立場にあった大人たちは、真実を語らなかったということを許すことができない。勝山は、全体的に満州における経験を「嘘」という言葉とつないでいる。その上、日本人は自分自身にも偽装的なアイディアを強いられたと主張している。例えば、勝山は自分の父について、次のような回想を取り上げている：

> 学校帰りに列車を待つ私の目に、栗せんべいやアイスクリームの入った箱を首から下げて、……駅の長いホームを走り回る父の姿がありました。到着した列車の窓から大声で名前を呼ばれ駆け付けた父は、ハルビン時代の同僚の裕福ぶりをホームから見上げて、なにかに耐えながら、せいいっぱいの笑顔で手を振っていました。父の姿は痛ましく、思い出すと涙が溢れます。[78]

このように、勝山にとって「満洲」の経験は、真実の隠蔽、嘘というようなことと連想されたものであり、父の記念に捧げられた、回想記の執筆の一つの目標として、その嘘を暴くことを掲げた。

・「満洲」の経験の一面的な評価の不適当性を示すこと

山崎倫子は、青春時代を過ごしたハルビンを自分のふるさとと名付け、そこでは幸せなことも、不幸なこともあり、その全てを乗り越えて一生懸命生きたと記している。しかし、当

---

[76] 柳田、同上、2–3 頁。
[77] 永井、同上、204–205 頁。
[78] 勝山妍子（2007）、夕映えのスンガリー、光陽株式会社、277 頁。

時の軍当局や警察、特高の横暴、人権の侵害や差別ということにも目を背けることなく、事実をそのまま描き出すことを決めた。

・満洲における日本人の日常性の「物質的な」面を描き出す傾向

福山郁子も山崎と同じく、満洲を自分の故郷として見ているが、個人の生活世界の枠に限定して記述している。福山の「満洲」の経験は、学校の壁の色、雛という最も好きな玩具、ハルビンにおける父のオフィスのソファーなどのような物質的なものである。このような「つまらない」日常性のものは、当時の小学生の福山の「世界」であったため、記憶に強く刻まれた。

・自分のアイデンティティを復元する希望

高野悦子は、ハルビンを「故郷以上の存在」として定義し、自分自身のアイデンティティについては、「人は私を大陸的だと思う。私の血は日本人かもしれないが、私は一生、中国大陸で育まれた「なにか」を抱いて生きていくであろう」と述べている。[79]生活の重要なレッスンも、ハルビンの先生に教えられた高野は、「満洲」の経験の記憶を、幸せな年月を過ごしたハルビンとその店、通り、スンガリー川などと連想している。

・「避難生活」などの痛ましい経験に関する悲しい思いを「言い尽くす」こと

藤原ていにとって、「満洲」の経験に関する記憶は、戦争という言葉と強く結びついている。引き揚げという悲劇さを詳細に記述した藤原にとって、満洲に関する記憶に、特に住み慣れた生活が崩壊された一夜のことが、刻み込まれた。[80]藤原は、自分の恐ろしい経験を新世代に伝えるために自分の回想を記述した。

以上、坂部の意見によると、「満洲」の経験の記憶というものは、歴史の流れとともに変化してきた複雑な現象である。多くの日本人は、「満洲」の経験を通じて記憶しているが、それと同時に、日本人の個々の人生において、自分自身の「満洲の歴史」が形成され、「満洲」の経験の意味も、各個人、自分の立場から定義するものである。

ロシア人と同様に、日本人も、もう既に過去になった日系ディアスポラについての記憶を保持することを希望している。

日本人にとって満洲の記憶の重要性を証明することは、満洲の再訪問をする、或いは、親戚に、死後は自分の遺灰を満洲の土に散骨することを託す、元の在満日本人が多く存在している、ということである。

ここまでは、「満洲」についての記憶を保存することの必要性に関し、ロシア人と日本人の視点を取り上げた。次に、歴史的記憶を保持する方法としても見ることができる、「回想

---

[79] 高野悦子（2009）ハルビンへの旅行。岩波書店、10 頁。
[80] 藤原てい(2002)流れる星は生きている、中公文庫、269 頁。

記」というジャンルの特徴と、満洲の経験を記述してきたロシア人と日本人の回想記の概要を取り上げる。

1.11. 回想記というジャンルの定義及び、回想記の文学的・歴史的重要性に関する議論

回想記または**回顧録**（フランス語の"mémoires”「記憶」、その元はラテン語の"memoria"の語源を有する）とは、記録あるいは文学作品の一形式として、ある事件、事象や時代に関する自らの経験を記したものである。語源が示すように、回想記は作者の個人性と、作成時代の社会的・政治的思想の傾向に沿って認識された個人経験を基に書かれたものである。

回想記の意義は、ロシア文学の歴史研究者である A.タルタコフスキによって次のように表現された：「回想記（広い意味で）は具体化された歴史的記憶、世代間の精神的連続の一つの道具、文明社会の様子、その社会の過去に対すること、すなわち自分の存在に対する意識的態度の証明である」。[81]

回想記というジャンルはノンフィクションであって、語り手としては、実在人物が登場する。回想記の特異性をなしている「事実性」と「主体性」という要素は、回想記を歴史的ナレーションとフィクション「小説」という、ジャンルの間の空間に位置づける。
主観的なナレーションでありながら、回想記はナレーターの個人性を「反映」するものである。「告白」の役割も果たし、作者が表現したい弁明、批難、反省、考察等様々な形を取ることができる。V.カバノフが示すように、多くの回想記の極端な主観性はそのジャンル特有の要素であり、その要素がなければ、回想記というジャンルの価値もなくなってしまう。[82]

主観的な立場を表すことに関する、著者の権利を L. ギンツブルグも守っており、回想記を、ジャンル的欠点として批判することで、それを損害させる行為とさえ例えている。[83]

回想記には時代の「跡」が刻まれているので、回想記の創造時代による作者の誠意や感想の深さ、物事の見方などを見ることができる。

その他の文学ジャンルと異なり、回想記には固定された文体的基準がないため、専門家の文学者に限らず、一般の人も回想記の執筆に自分の能力を試すことができる。その場合、回想記は文学作品として認められないかもしれないが、時代の物事を「医者」、「歌手」、「教師」

---

[81] Фрайман И. (2010) Русские мемуары в историко - типологическом освещении: к постановке проблемы (Доклад по материалам семинара, под. Ред. Р. Лейтмана).
https://go.mail.ru/search?fm=1&test_id=214&q=Русские+мемуары+в+историко+-+типологическом+освещении%3A+ 最終アクセス日: 2017/03/22

[82] 同上。

[83] Гинзбург Л. (1979) О психологической прозе. Л. С.10.

等様々な分野に属する人々の目で見る機会が与えられるため、その点においても回想記の重要性を見ることができる。

文学理論においては、回想記のジャンル的な枠の曖昧さに関する問題は残るが、回想記というジャンルの文体的な自由性にこそ、多種多様な作品の創造を促進するファクターとなる。

回想記の多様性

創造方法を基準にすると、回想記は以下のような種類に区分できる：

1. 純粋の回想録
2. 小説の形で書かれた回想録
3. 記録：

－音声記録

－語り手の口述の筆記

－日記

4. アンケートの作成
5. インタビュー
6. 回想記の形で書かれたフィクション[84]

本研究においては、回想記と小説の形で書かれた回想記を検討する。

回想記というジャンルは、自伝に共通する要素も沢山あるため、本研究においては自伝による回想記も検討に入れる。

以上、回想記とは、矛盾性の多いジャンルである。回想記において著者の存在が強く感じられ、全ての出来事の記述においては、主観的な態度が反映されている。多くの回想記は、歴史的記録であるが、記述には生活感覚が強く、そして、歴史の記述方法も、それが出来事の時系列という形ではない。歴史というのは、更に多面的、多層的、完全に把握することができないものとして登場する。しかし、回想記の最も重要な特徴としては、著者が関わっている歴史的出来事のスケールにも関わらず、最終的に、著者にとって、自身の日常生活、精神性が最も近く、更に重要なこととして挙げられている。このように、回想記の例が示しているように、個人にとっては、A. シュッツが述べた通り、日常性がプライマリ・リアリティーであるということが明らかになった。

ここまでは、「満洲」の経験の記憶の意義において、ロシア人と日本人の視点を取り上げてきた。そして、「記憶」を保持する方法である、「回想記」というジャンルの特徴を分析し

[84] Кабанов В.（1997）Источниковедение советского общества. Курс лекций. М. С. 57.

てきた。次に、「満洲の経験」を記述してきたロシア人と日本人の回想記の概要を取り上げる。

1.12. 満州におけるロシア人の回想記

1930 年から 1940 年代は、満洲とその他の中国の地域に居住していたロシア人が、徐々に中国を去り始めた時期である。多くのロシア人は再移民の道を選び、アメリカ、オーストラリア、ラテン・アメリカ、ヨーロッパ等へ移動し、そして、多くのロシア人はソ連への帰国を決めた。

イミグレーションの経験について語った回想記の創造の時期は、作者によって異なる。最近書かれたものも少なくない。

満洲におけるロシア系ディアスポラを記述した作者を、専門分野ごとに区分すると、以下のような結果が出た：

1. 文学者　－　A.ネスメーロフ；V.ペレレーシン；N.イルイナ；N.バイコフ；V.イワノフ；V.ヤンコフスキー
2. 言語学者：V.スロボッチコフ
3. 英語の教師、新聞記事の翻訳家：E.ヴォエイコヴァ
4. 軍人：I.セレブレニコフ
5. 歌手、ダンサー：L.アンデルセン；L.ロパト
6. 中国研究家：G.メリホフ
7. 司祭：S.トロイツカヤ；N.パデリン
8. 日本外務省の事務員、東洋文化研究家：E.シリャーエフ
9. 記者：M.シャピロ；N.タスキナ
10. ピアニスト、バイオリニスト等の音楽家：V.ベロウソヴァ；G.シドロフ；O.ルンドストレム
11. 演劇者：S.チェルニャフスキイ；A.ドヴォルジツカヤ
12. バレエのダンサー：N.ネズヴェツカヤ；N.コジェブ二コヴァ
13. 画家：N.リョーリフ
14. 「一般人」：大学の時代を思い出した：クニャゼフ；メデヴェーディヴァ
15. 貧乏な独身の「白系」ロシア人仕立屋の娘：N.モクリンスカヤ

以上のリストから分かるように、回想記の著者は、様々な社会層を代表する者として登場した。

1.12.1. 満州におけるロシア人の回想記の著者

本研究においては、特に以下の作者の回想記を資料として取り上げる。

1. 文学者：

N.イルイナ（1914－1994 年）『様々な道、様々な運命』（1985）、『帰国』（1957）

N.イルイナは 1920 年からハルビンに居住していた。中華民国における経験は、故郷に対する愛国心の形成を促したため、1943 年にソ連に帰国する。ロシアで有名な記者（風刺的記事）及び作者にまでなった。ロシアで執筆された回想記（1985 年）において、自身の４世代にもわたる家族の歴史、次第に激変していった時代の特徴を記述した。イミグラントとしての生活は、様々な人々の運命にどのような影響を及ぼしたのかについても正確に記されている。本書では、満洲のロシア系ディアスポラが直面した多くの問題が挙げられた:異文化への適応の難しさ、イミグラントの心理的状況、アイデンティティなどである。

ロシアにおいて革命が勃発した時、N.イルイナはまだ子供だったので、作者として意識的に極端的な反ソ連であるような考えは形成されなかった。

政治的質問で中立的な立場を取った N.イルイナは、ロシア系ディアスポラの客観的な記述を行っている。その点においては、それらの記述は貴重な研究材料として見られている。

V.ペレレーシン（1913－1992 年）『2 つの途中駅』

V.ペレレーシンは「満洲文学」を代表する詩人である。創造活動に限らず、V.ペレレーシンはハルビン市の活発な文化活動の表象となった、『チュラエフカ』文学サークルのレギュラー的な参加者であったため、ペレレーシンをハルビン市の文学活動の内部から知っている者として名づけられた。『２つの途中駅』という回想記において、個人的な生活は記述していないが、ハルビン市の文学活動の詳細を記述している。詩人としてロシアと多くの国で承認を得た、信頼される作者は、ハルビン市の文学界と文学者の日常生活を鮮やかに描いている。A.ペレレーシンはある程度中国文化への成功的な適応を果たし、中国の哲学と文化を研究し、中国の誌の翻訳も行っていた。

I.アブロシモフ（生年、死亡年月日不明）『異国の空の下に』（1992）

中東鉄道の職員の息子であったアブロシモフは、自伝に基づいて『異国の空の下に』という小説を執筆した。幼い頃から国を離れ、満洲における自分自身の人生について鮮やかに記述している。

この著では、異文化空間で育ったロシア人の性格がどのように形成されていったのか、そして、取り巻く環境が著者の愛国心とアイデンティティの形成にどのような影響を与えたのかが観察できる。

L.アンデルセン（1911－2012 年）『橋に立つ一人の女性』

「満洲文学」を代表する女性詩人である。貴族の出身であり、満洲においてはダンサーとし

て収入を得ていた。『橋に立つ一人の女性』という回想記においては、ハルビン市の「娯楽世界」の様子、女性のイミグラントの精神的苦労を記述した。

2. 英語の教師、雑誌の記事の翻訳家

E.D.ヴォエイコヴァ（1887－1965 年）『永久に故郷と離れることはあり得ない』

E.D.ヴォエイコヴァは、既に言及した N.イルイナの母であり、有名な科学者でもあった古代貴族の出身である。ロシアで一流のギムナジウムを卒業し、ロシア貴族を表すマナーの上品さがあり、そして知性の高い女性である。ハルビン市においては、多くの貴族と同じく、自分の地位を失い、様々な屈辱に直面する生活を送るようになった。E.D.ヴォエイコヴァの手紙と日記からは、亡命人の立場に立った貴族の生活様式の特徴についての情報が得られる。アイデンティティについての探求、故郷についての考察、女性イミグラントに見られる特有の恐怖等についても記録がある。

E.ヴォエイコヴァの日記と手紙の価値については、その出版物を手に入れた娘の O.ヴォエイコヴァが、以下の様な説明を挙げている：

「彼女の日記、回想と手紙には－我々の家族の日常生活、（略）満洲の珍しさだけでなく、「心の悲しい記録」、ロシアの歴史の渦の試練を受けた精神の成熟もある」。

N.イルイナ、E.D.ヴォエイコヴァと L.アンデルセンの回想記には、ロシア人女性の異文化への適応の問題が提起されている。

3.「白系」軍人：

I.セレブレニコフ（1882 年－？（1940－1953 年の間））、『私の回想』

I.セレブレニコフは全ロシア地理学会のシベリア部のメンバーとして、また科学者、作家等として有名である。1917 年の革命後の内戦でソ連側と闘っていた A.コルチャーク「白軍」総司令官の部隊の一員でもあった。回想記にはハルビン市のディアスポラの状況にどのように適応していったのか、中国における個人の成長はどうやって進められていたかについて執筆している。多くの亡命ロシア人と異なり、セレブレニコフは中国の文化に対抗せず、その反対に、化学的関心を抱くようになり、中国の文化を科学的研究の対象とした。

4. 記者：

E.ラチンスカヤ（1904－1993 年）『わたり鳥』

E.ラチンスカヤは、貴族の出身者であり、1918 年に家族でハルビンへ亡命する。ハルビンの法律大学で学んだことがあり、中東鉄道付属商業代理店などで働いたことがある。それと同時に、ハルビンの様々な出版物に、自分の記事、詩を投稿したこともある。E.ラチンスカヤは、満州国の時代、そして、終戦後の時期にも、ハルビンに滞在していたため、当時の日常生活、日本人との関係の特徴について記述している。

M.シャピロ（1900（？）－1962（？）年）『ハルビン、1945』

M.シャピロは、ハルビン市の大学における法律論の教師及び記者として働いていた。記事でソ連政府を批判したため、1945 年にハルビン市に進攻したソ連軍によって「故郷の裏切り者」として、約 10 年の懲役を科された。

N.シャピロの回想記は、ソ連人によるハルビン市の占領時代（1945）を記述している。「満洲国」終焉期のロシア人ディアスポラの日常生活、そして、ソ連軍によって「白系ロシア人」の実際の扱いなどを露骨に記述している。M.シャピロの回想記は、ハルビン市で居住していた多くの「白系」ロシア人の運命を描く。回想記の目標を M.シャピロは以下の様に説明している：

何のため、私は逮捕され、10 年間の懲役を宣告されたのか？どうぞ、この資料を見て：見て、覚えて、心の中に治らない傷が残るまで自分でそれを体験して、そして、それについて人々に誠実的に話して（略）[85][86]

5. ソ連大使の娘：

A.スラブツカヤ（1925 年－？）『大使の娘の日記』

A.スラブツカヤは在満洲ソ連外交官の娘であり、父の任期の終わりまで中国に居住していた。「ソ連人」のメンタリティーの持ち主である著者の回想には、ハルビン市における「白系」ロシア人とソ連人の共同生活の特徴が記述されている。

6. 外務省の職員

E.シリャーエフ『門にライオン石像が立った建物』

E.シリャーエフは中国研究家、記者として有名であるが、1930 年代、ハルビン市に居住した時、日本外務省の「満洲国」代理店に勤めた経験がある。回想記には、日本外務省での仕事の特徴を記述している。

ロシアの歴史には、1930 年時代の日本人は「敵」としてイメージ化されていた。しかし、E.シリャーエフは、自身の経験を踏まえて、ロシア人と日本人の関係が異なる点を見せている。そして、ハルビン市の「白系」亡命ロシア人が、日本政府のために反ソ連活動を行ったことを批判されたが、E.シリャーエフは、その固定された意見に反論している。

E.シリャーエフの回想記は、「満洲国」時代のロシア人と日本人の関係に関する問題に触れているため、貴重な歴史的資料として見るべきである。

7. 科学者：

G.メリホフ『遠い満洲。近い満洲』（1991）、『白いハルビン』（1997）

---

[85] Шапиро Н. (1978) Харбин, 1945. Память: ист. сб. - Нью - Йорк: Хроника. С. 4.

[86] 本稿で取り上げられる全ての引用の日本語の翻訳は本稿の著者によって行われたものである。

G.メリホフは有名な中国研究家で、中国歴史家である。ハルビン市において「白系」亡命ロシア人の生活様式を観察し、回想記に「白系」ロシア人のロシア伝統の保持のための努力、他民族との関係作りの特徴、満洲発展への貢献などについて記している。歴史に関する情報の豊かさと提起されたテーマの多様性が、この回想記を貴重な情報源として位置づけることになった。

そして、別の回想記のグループとしては、満洲から全世界に再移民したロシア人の回想記を取り上げたい。アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアなどにおいて、「満洲」の経験を共有するロシア人は、サークルなどを設立し、その活動の一つとしては、そのサークルの一員の回想記が載せられている雑誌を出版することが挙げられる。本研究の材料としては、オーストラリアで出版されている『Русская Атлантида』、『Австралиада』、ロシアで出版されている、『На сопках Маньчжурии』雑誌も、貴重な情報源として用いる。

以上、1917 年の革命後、全世界に離散したロシア人の回想記は、多くの研究者によって「在外ロシア」人が残した最も重要な遺産として認めることができる。満洲に居住していたロシア人の回想記も貴重な歴史的資料として、ある場合には、文学作品としても評価された。

満洲におけるロシア系ディアスポラを記述した代表的な作者の個性と人生観の特徴、そして彼らの回想記のテーマの特徴の分析の結果、ハルビン市の回想記のテーマの多種多様性と、その回想記に指摘された問題の範囲の広さがわかった。このように、満洲におけるロシア系ディアスポラの日常性の特徴、そして異文化への適応の特徴、イミグラントの精神的状況、アイデンティティに関する考察等の問題を分析する際、ハルビン市に居住していたロシア人の回想記を、研究資料として適用できることを証明することができた。

1.13. 日本人の回想記

「満洲」での経験に関する記憶は、回想記の執筆を通じて、多くの日本人によって現代の人々に伝えられた。ほとんどの場合、回想記を記したのは、著者が高齢になってからであったため、70－80 代の人が回想記の著者となった。「満州」で過ごした、その過去と執筆時期との時間的な距離は、近いとは言えないため、意図的ではないが、必然的な事実の歪みという問題も存在する。しかし、それと同時に、自分自身の人生と歴史、経験を積んできた、高齢者の視点から考察すれば、記述されたものごとは、より妥当的で考え抜かれた評価を受けることができるものであると思われる。

満洲における日本人の作者を、専門分野ごとに区分すると、以下の通りである：

1. 満洲国の行政機関の事務員：柳田桃太郎；後藤春義

満洲国の行政機関の事務員は、自分の子供の回想記にも登場している：永井瑞江、福山郁子

2. 南満洲鉄道株式会社の職員：油谷顕；ニシデハジメ；加藤幸四郎；杉山公子

3. 店、店舗の職員：宅忠次郎；龍志良；新谷信裁

4. 教師：清水三三；吉田弘恵

5. ロシア語の通訳師：有働寛

6. 軍人：田村文隆、古山秀男

7. 家庭主婦：藤原てい

8. 満州の銀行の職員：武田英克

9. 仕立て屋：加藤淑子

10. 学生：村山道子；林井三

11. 開拓団の農民：森茂；小宮清

12. 医者：山崎倫子

13. 商社の職員：木村平一；中村福造

14. ホテルの職員（『モデルン』ホテル）：田村文隆

そして、年齢に着目すると、ハルビンにおいて自分の幼い頃を描いた著者は、次の通りである：

満洲国行政機関の事務員の子供：永井瑞江

南満洲鉄道株式会社の社員、後で、満州国行政機関の職員の子供：福山郁子；高野悦子；勝山妍子

満洲における日本人の回想記をジャンルごとに区分すると、以下のような結果が出た：

1.13.1. 純粋な回想録

永井瑞江の『おばあちゃんの満州っこ日記』、藤原ていの『流れる星が生きている』、加藤淑子の『ハルビンの詩がきこえる』、山崎倫子の『回想のハルビン』、小宮清の『満州メモリー・マップ』、福山郁子の『私の満州。思い出すままに』、勝山妍子の『夕映えのスンガリー』、三宅忠次郎の『ハルピン回顧』、吉田弘恵の『ハルピン募情』、新谷信哉の『満州の想い出』、龍志良の『哈爾賓キク』、清水三三の『北満学院の想い出』、有働寛の『ハルピン学院断想』、林井三の『哈爾賓での青年時代』、田村文隆の『モデルン夜話』

・歴史的記述も含む回想記：

油谷顕の『思い出のハルビン』、後藤春義の『哈爾賓日本小学校』、中村福造の『大正時代

のハルピン』、後藤春義の『浜江省公署』、大田信一の『幾度かの死線を越えて帰るまで』、佐々木四郎の『終戦の記録』、古田節子の『十七才の終戦』、三宅忠次郎の『終戦の前と後』、酒牧幸子の『ハルピンへの回想』、清水三三の『露語の通訳官の死』、田村文隆の『終戦から引揚まで』、新谷信哉の『ニッタニ　カントーラ奮闘記』、後藤晴吉の『終戦雑話』、杉山公子の『哈爾賓物語』、小関久道の『ハルピン・回想』、柳田桃太郎の『ハルビンの残照』、森茂の『北満開拓民救援隊始末記』、満拓会編の『満州引揚・戦後自分史を語る』回想記集、古山秀男の『一日本人の八路軍従軍物語』、加藤幸四郎の『風来漫歩』、武田英克の『満州脱出』、溝口筋の『さよなら楡の街はるびん』。

・小説の形で書かれた回想記：

加藤淑子の体験に基づき石村博子が記したドキュメンタリー『ハルビン新宿物語』

・他者の「ポートレート」を描く回想記：

後藤春義の『清水三三先生素描』

・他者の「ポートレート」を描くエッセイとしての回想記：

松田衛の『清水三三を偲ぶ』、福山夏次の『わが師わが友』

・エッセイの形としての回想記：

清水三三の『清水三三先生随筆集』、木村平一の『兼田商工に勤めて』、中村福造の『人の和』、ニシデハジメの『釣三味』、後藤春義の『ロシア語学習の想い出』、木村富美子の『フリージャの花』

7. 日記、手紙の集合としての回想記：

村山道子編の『望みを託して―ハルビン学院と井田父子の生涯』

そして、日本では、満洲の経験をシェアする様々な連合会が存在し、様々な日本人の回想を掲載する雑誌が存在する。その中で、『マローズ』、東京ハルビン会の『東京ハルビン会報』、大同学院同窓会の『大いなる哉　満州』、大連二中光兵会の『晨光　大連二中創立五十周年記念号』、ハルビン同窓会の『ハルビン』、ハルピン富山高等女学校同窓会の『すずらんー終戦の想い出』、『同窓会だより』、『あの時、そして今ー戦後 50 年を記念して』、本渓湖会の『本渓湖会会報』、奉天楡の実会の『楡の実会の会報』、奉天敷島会の『奉天敷島小学校創立九十周年記念誌附会員名簿』、『創立三十周年記念誌』、満マグ会の『満マグ会誌』、満蒙を語り継ぐ会の『下伊那のなかの満洲　聞き取り報告集』、満洲移民史研究会の『日本帝国主義下の満洲移民』、満洲回顧集刊行会の『あっ満洲ー国づくり産業開発者の手記』、満洲開拓史刊行会の『満洲開拓史』などが挙げられる。

そして、『ハルビン・回想』を記した小関久道と『夕映えのスンガリー』を記した勝山妍子は、回想記に自分自身の回想以外に、「満州」の経験を語る様々な日本人とのインタビューからなる章を付け加えた。

本研究において分析対象とするのは、当時満州に住んでいた日本人が著した回想記である。具体的には、杉山公子の『哈爾賓物語。それはウラジオストクからはじまった』、小宮清の『満洲メモリー・マップ』、柳田桃太郎の『ハルビンの残照』、森茂の『北満開拓民救援隊始末記』、小関久道の『ハルビン回想』、勝山妍子の『夕映えのスンガリー』、藤原ていの『流れる星は生きている』、加藤淑子の『ハルビンの詩が聞こえる』、加藤の経験に基づいて記された石村博子の『ハルビン新宿物語』、高野悦子の『黒竜江への旅』、福山郁子の『私の満州。思い出すままに』、後藤春義編の『ハルビンの想い出』回想記集、村山道子の『望みを託して－ハルビン学院と井田公子の生涯』、マローズ編集委員会の『マローズ』回想記集、永井瑞江の『おばあちゃんの満洲っこ日記』、満拓会編の『満洲引揚・戦後自分史を語る』、古山秀男の『日本人の八路軍従軍物語』、加藤幸四郎の『風来漫歩』である。

以上から分かるように、「満州」の経験を記述する著者は、満洲に存在した日系ディアスポラの様々な社会層を代表する者として登場した。年齢に着目しても、満洲において幼い頃、青年時代、そして成人期が記述されているため、満洲における日系ディアスポラの日常生活は様々な視点から記述されていると思われる。

1.13.2. 満州における日本人の回想記の著者

本研究においては、特に以下の回想記を資料として取り上げる。

1. 仕立て屋

加藤淑子（1915 年－）の『ハルビンの詩がきこえる』、加藤の体験に基づき石村博子が記したドキュメンタリー『ハルビン新宿物語』

加藤淑子は 1915 年に京都で生まれ、堀川高等女学校卒業後、洋裁学校に通う。1935 年、20 歳で結婚すると同時に、当時の満州ハルビンへ夫とともに渡る。11 年間のハルビン生活を経て 46 年に帰国後は、洋裁などを手がけながら、3 人の子供を育てる。

加藤は、ハルビンではロシア語、そして裁縫の学校に通い、日本系ディアスポラよりロシア系ディアスポラと積極的に交流していた。自身の回想記においては、自分の例を通じて、当時の日本人の女性の生活状況を記すことを目指していた。そして、自分とロシア系ディアスポラとの交流の例を通じて、民族交流の問題、異文化の他者を理解する必要性についても考察している。

2. ロシア系ディアスポラに関係する仕事に従事した日本人（ハルビン特務機関の職員、ハルビン鉄道局人事課の職員、ハルビン露語教育隊教頭など）

加藤幸四郎（1910－1992 年）『風来漫歩』

加藤幸四郎は、前に言及された加藤淑子の主人である。加藤幸四郎は、1910 年に京都に

生まれ、1932 年にハルビンにある日露教会学校を卒業する。1935 年に、ハルビン特務機関に就職する。ハルビン特務機関は南満洲鉄道株式会社と強くつながっていたため、同年の８月にハルビン鉄道局人事課に入職する。当時、幸四郎は淑子と結婚し、ハルビンで新しい生活を始める。1941 年に幸四郎は、陸軍に応召され、浅野情報隊に少尉として入隊する。1942 年、幸四郎は、神武屯露語教育隊長として、そして同年６月にハルビン露語教育隊教頭として就職する。1944 年、奉天防衛司令部に入り、1945 年から朝鮮羅南師官区司令部に勤務する。

以上、挙げられた仕事の内容から分かるように、満洲における幸四郎の全ての活動は、ロシア系ディアスポラと結びついていた。幸四郎は、ロシア語もロシア文化も深く理解し、ロシア系ディアスポラとも積極的に交流していた。そして、内地帰還後に、ロシアとの関係を維持し、ロシア料理店を開設、1973 年に日本ロシア料理店協会を設立した。

回想記の内容から分かるように、日常について詳細に記述した妻の淑子と異なり、幸四郎は政治的、社会的問題を取り上げ、自分の人生において、仕事という面を最も詳しく描写した。

3. 満州国の行政機関の職員

柳田桃太郎（1907－2004 年）の『ハルビンの残照』

柳田桃太郎は、1907 年に北九州市門司区に生まれ、長崎高等商業学校を卒業する。1928 年に、大連市の国際運輸株式会社に入社し、1931－1945 年の期間に、満洲国官吏（ハルビン市、官需局、興農部、経済部）地方行政、農林行政、鉱山行政を担当していた。

柳田は、「満洲国」政府によって唱えられた「王道楽土」というイデオロギーを深く信じ、満洲国の建設活動に全力を尽くしていた。

柳田は、ロシア系ディアスポラとも交流したことがあるが、政治的な問題を、自分の視点から考察することは、回想記の大部分を占めている。

4. 医者

山崎倫子（1919－2015 年）の『回想のハルビン。ある女医の激動の記録』

山崎倫子は、1919 年、滋賀県に生まれた。1943 年、東京女子医学専門学校を卒業する。1943 年より 1945 年までハルビン医科大学付属市立病院内科に勤務する。1945 年、ハルビンに国際病院を設立し、1946 年 7 月まで一般市民及び避難民診療にあたる。

山崎は、満洲における多くの出来事を医者の視点から記述し、敗戦時期に国際病院に勤めた時、日本人の避難民の悲惨的な状況を目撃した。山崎自身と山崎の父は、満洲における様々な政治的な出来事にも関わっていたことから、満洲における個人の生活の描写にも触れている。

5. 日本人学校の学生、戦争時代に軍需工場における生徒労働団体、そして開拓団の一員

勝山妍子（1931 年－）の『夕映えのスンガリー』

勝山は、1931 年に横浜で生まれる。勝山が 4 歳だった頃に、父は南満洲鉄道株式会社に就職し、資材部に就いたため、家族全員で満州へ移住する。1937 年に勝山は奉天の葵尋常小学校に入学する。その後、ハルビンへの転居によって、ハルビンの桜尋常小学校に転校し、三年生の時に桃山尋常小学校に転校する。

戦争の時期に、学校において教育内容に変化が見られるようになる。当時の学生は、日本帝国に身を捧げるべき労働力として見られていたため、教育プログラムが変更されてから、授業の後、生徒たちは軍需工場で働くようになった。勝山は、学校の変貌のプロセスを目撃し、それを詳細に回想記で記述する。1945 年、根こそぎ動員の勅令が発せられ、報国増産の拠点である満州開拓団の重要な働き手である日本中学生・女学生も、援農として、それぞれの開拓団に配属されることになった。

勝山は、軍需工場、そして開拓団における自分の経験を記述している。さらに、1945 年、満洲を占領するソ連軍の作業団に動員された父の日記も加え、ソ連軍の作業団における日露関係について父の視点を取り上げている。

勝山妍子は、中学校まで浸透した満州国のイデオロギーの圧迫性という問題について、自分の考察を取り上げている。

6. 満洲国行政機関の職員の娘

永井瑞江（1933 年－）の『おばあちゃんの満州っ子日記』

永井は 1933 年、中国東北部シンヤンに生まれ、1945 年に佳木斯高等女学校に入学する。8 月のソ連侵攻敗戦状況となり、1945 年の 8 月から 1946 年の 10 月にかけての期間中、難民生活を送る。長春で越冬し、翌年の秋に日本に引き上げる。

永井の父は、満洲において、8 つの地域で働いていたため、永井は満州における様々な地域での生活を体験することができた。永井の回想記では、満洲国における行政機関の職員の避難生活の大変さ、父の転勤生活に巻き込まれた小学生・中学生の新しい地域、新しい学校への適応過程の特徴、そして、敗戦難民の問題は特に強調されている。この回想記の執筆の主な目的は、日本人を危険性にさらした関東軍と満州国行政機関に対し、責任を取ってほしいという訴えである。

7. 満洲国の開拓団の一員の子供

小宮清（1936 年－）の『満州メモリー・マップ』

小宮は、1936 年、北海道に生まれ、1940 年に満州へ渡った。1946 年に日本へ引き揚げる。小宮は、開拓団における生活様式を詳細に描写し、「衣食住」の問題に限らず、農民の権利、敗戦の時期における農民の状況に関しても記述している。著者は、開拓団における生活状況の描写を通じて、自分自身の人生におけるその経験の意義についても考察している。

8. 満洲国の行政機関の職員

後藤春義（生年月日不明）の『哈爾賓日本小学校』、『ロシア語学習の想い出』、『浜江省公署』、『終戦雑話』

後藤春義は、1927 年に満州教育専門学校を卒業し、奉天高女に一学期、撫順中学に一学期、国語担任教員として務めた後、1928 年に哈爾賓小学校に転勤した。1934 年に、浜江省が「設置され」、後藤は浜江省公署視学官に調任される。後藤の浜江省視学官時代の主な仕事の一つは、白系ロシア人諸学校の整理統一及び教育プログラムの改革であった。1938 年、後藤は珠河県の副県長に任命され、1941 年までそこで活動する。この役を任命された後藤は、自分自身が直接的ニコラエフカ村の創生活動に参加し、この活動を通じて「五族協和」に従った理想的な社会モデルを創造することを目指していた。

後藤は、満洲国の日本の学校の様子についても、「満洲国」の行政機関の活動の特徴についても詳しく調べ、それを回想記で記述している。後藤は、「五族協和」というイデオロギーを強く信じ、その実現のため、自分自身も努力していた。また、後藤はロシア人を信じており、ロシア人の友人をもできた。ロシア人との友人関係というテーマも回想記で取り上げられている。

9. 満洲国の行政機関の職員の子供

福山郁子（1923 年－？）の『私の満州。思い出すままに』

福山郁子は、1923 年、大連に生まれた。幼稚園から小学校３年までを撫順市で、さらにハルピンで約 6 ヶ月過ごし、吉林市に移る。吉林日本人小学校を卒業し、そして新京敷島高等女学校を卒業する。満州国時代は、通化省通化市、奉天市などに、父の転勤で移転する。そして 1947 年に日本に戻る。福山は、幼い頃、小学校の時代を記述している。当時、子供だった福山郁子の生活状況は、父の影響を受けるものであった。福山の父は、若い頃、自分が勤務していた撫順炭鉱での事故により、大怪我をし、足が不自由になる。1923 年に、福山の父は、撫順で技術屋として就職する。満洲事件が起きる前の頃、父は技術者育成所に教師と舎監として活動していた。この機関に限らず、いくつかの機関で社員のために授業をしていた。「満洲国」が樹立された時期に、福山の家族はハルビンに転居し、父は満州国政府の民生部のハルビン弁事処の所長として入職する。その後、父は新政府の省財務課長として吉林に転居する。

福山郁子は、回想記で、主として「物質的政界」を描写している。自分の住宅、学校、父の職場などの様子から始め、学校までのルート、街の様子にも触れている。著者は、詳細に描写しているため、回想記では、当時のリアルな雰囲気が再現されていると思われる。

10. 日本人の学生

小関久道（1923 年－？）の『ハルピン・回想』

小関久道は、1923 年に、旧満州の撫順市に生まれた。ハルビンにある日本人中学校に通い、東海大学卒業後、旧満州電信電話株式会社に入社する。軍隊への入隊後、長野県野辺山で終戦を迎える。

前述した著者と異なり、小関久道は、父の仕事の内容を説明していないが、満洲における様々な街で暮らした自分の家族の生活の様子を描いている。小関久道は、少年期を過ごしたハルビンの思い出を語っている。ハルビンの歴史や都市の特徴も 1 章を割いて年代別に説明している。後半は入院手記、戦争体験記などから構成されている。

以上から分かるように、「満州」の経験に関する回想記は数多く存在する。出版された長編小説の形を取る回想記に加え、日本の様々な地域で形成された「満州人」のコミュニティによって出版された雑誌、インターネットのサイトもある。これらの雑誌とサイトにおいても、新しい回想記が載せられている。

回想記の作者としては、様々な年齢、社会における位置、幅広い専門分野に属する人が登場しているため、この回想記は満州における状況が多面的に描かれている。このことから、日本人の回想記が、本研究で提起された問題点の分析において、貴重な材料であることが言える。

以上、ここまで、本研究の目的と意義、特徴についての説明を挙げてきた。そして、本研究において用いる研究方法についても記述してきた。

「日常性」、「ディアスポラ」、「回想記」という概念が本研究の中心に置かれているため、これらの現象についても詳しい分析を取り上げてきた。そして、「日常性」に着目することの適当性についても考察し、「ディアスポラ」を検討することについて、そのアプローチがどのような役割を果たせるか、についても検討してきた。

本研究における情報源として、ロシア人と日本人によって執筆された回想記が登場するため、その概要も取り上げてきた。

次章において、ロシア人と日本人の回想記の分析に移る。本項で提起された問題点を明らかにするため、ロシア人と日本人の経験における対照分析を試みる。

第1部　日常性

第１部は、ロシア人と日本人の「日常性」を扱う。（第２−4 章を含む）。

第２章では、ロシア人の日常性に着目し、「仕事」、「住宅」、「着衣」、「食事」という生活面を検討する。第３章では、同様の方法で日本人の日常性を検討する。第 2 章と第 3 章では、歴史的記述、ディアスポラの一員の伝記を焦点に、記述する。そして、第４章では、日常性における、ロシア人と日本人の経験に関する対照分析を試みる。第 4 章では、ロシア人と日本人の日常性について論述するが、「イミグレーション状況への適応の問題」、「イデオロギー」、「アイデンティティ」、「価値観」などという、文化論、社会学に関係するカテゴリに着目する。

第2章　ロシア人の日常性

本章では1920‐1940年代の満洲において居住していたロシア人の日常生活を検討し、「仕事」、「住宅」、「着衣」、「食事」といった生活面に着目する。

「仕事」という生活面を検討する際に、特に「白系」亡命ロシア人の就職状況について論述し、そしてロシア人の職場における雰囲気について考察する。満洲においては、特に「白系」ロシア人女性と、貧乏な家族の子供にとって、イミグレーション状況への適応プロセスが大変だったため、満洲におけるロシア人女性と子供の労働状況を、特別の事項として扱う。

そして、「社会的活動」をする人としても見られる教師、プロパガンダ活動に従事する人、文化活動をする人について詳しく述べる。

1920−1940年代の満洲におけるロシア人の労働状況を検討する際、ロシア人の生活状況に影響が強かった「満洲国」の時代と、終戦後にも焦点を当て、検討する。

「住宅」という生活面を検討する際には、満鉄社員向けの社宅の特徴を明らかにする。そして、上流社会層、中流社会層及び下流社会層における住宅状況を比較検討する。「満洲国」の時代に、多くのロシア人の収入レベルが下がったため、この時期を、特別の項目として扱う。そして、ロシア人の住宅の「インテリア」の特徴も分析し、ロシア人の価値観、生活様式が、インテリアにどのように反映されていたかについて、考察する。

「着衣」という生活面を検討する際には、特に女性のファッションのテンデンシーに着目する。回想記の分析が示しているように、「ファッション」のテーマは、基本的に女性の関心事の対象であったため、本項においては、男性の服装についての言及は多くない。

「着衣」について検討する際、上流社会層、中流社会層と下流社会層における特徴を明らかにする。満洲において、格社会グループ特有の価値観を反映するものとしては、いわゆる

「ドレス・コード」に示される。その理由により、ロシア系ディアスポラにおいて、どのような「ドレス・コード」が識別されているのかについても、検討する。

「食事」という生活面を分析する際には、日常食生活におけるロシア人の好み、上流社会層、中流社会層と下流社会層における食生活を比較する。満洲におけるロシア人の食事状況は、当時の政治的、経済的状態にも依存していたため、ロシア人の生活状態に変化をもたらす「満州国」の時代に特に注目を当てる。

満洲における自分の人生を回想する際、ロシア人は、記憶の中に特に刻まれた食料品の味を、満洲における幸せな瞬間として記述し、いわゆる「満洲の味」について回想している。満洲についてのノスタルジーが、どのような食料品を連想されているかについても検討する。

2.1 仕事

20世紀初頭に、ハルビンには、約10万人のロシア人が居住していた。このロシア人の就職状況に注目すれば、男性は中東鉄道の職員、テナント、技師、ブローカー、商人、請負人、管理人、大工、教師、医師等の職に就いており、貧困、無職の問題を知らなかった。 そして、女性の中では、医者、教師、芸能人、裁縫師、企業経営者、料理人、メイド、乳母、洗濯屋が多く見られ、家庭夫婦もいた。

1917年以後、「満洲」に亡命したロシア人は次のような社会層からなっていた。一番多かったのが農民（44.8%）、次いでコサック（17.5%）、労働者（6.4%）、貴族（3.6%）、商人（9.5%）であった。生田が示すように、パリなどへ亡命した貴族は裕福であったのに対し、ハルビンへ亡命したロシア人の多くは貧しかった。

多くの貧乏な農民とコサックは、合併して自力で部落を作った。このように、1920年代に山河村、1936年にロマノフカ村が生まれた。

ソ連人も満洲に移住し、外務省の職員、そして1924年に、中東鉄道が中ソ共同経営となり、中東鉄道の経営者、一般労働者などとして勤務していたため、困窮を知らなかった。

回想記においては、貴族、インテリ（作家、記者、大学の教師など）、外務省の職員、中東鉄道職員の子供、在満洲ソ連総領事の子供などが、ハルビンにおける「衣食住」の状況を記述している。回想記の情報から、1920年代から1940年代にかけて、ハルビンにおけるロシア人の仕事の状況について、以下のようなことが明らかになっている：

2.1.1. 貴族・「白系軍人」の就職の問題： エミグラントの社会における地位の無益性

ハルビンに到来した多くの「白系」ロシア人は、新地において自分の立場を固定化させるため、心理的問題を乗り越える必要があった。一方では、「白系」ロシア人は、支援なしで

は残れなかった。その人は、1920年代に、幅広い権益を持っていたロシアの企業、組織から支援を得ることができ、職場が提供されるという場合が多かった。例えば、N. シャロヒンの母はハルビンに移住してから、中東鉄道に属する学校に教師として就職し、学校が閉鎖された時点まで、そこで働いていた。[87]

しかし、多くの「白系」ロシア人は、満洲で自分の「不適用性」を強く感じていた。医者と作家のV.スモルニコフが説明するように、人生の大部分を戦争（第一次世界大戦、ロシア内戦）に捧げたロシア人の軍人は、軍事以外の技術を取得していなかった。その他の貴族出身の多くも業務水準があまり高くなかったため、イミグレーションの社会において、就職の競争に耐えることができなかった。[88]

ロシアの革命と内戦から満洲に逃亡した「白系」将校、貴族出身者は、ロシアで最高の教育機関を卒業した。例えば、ロシアの有名な作家である N.イルイナの母は、女性対象の一流の「ベステゥジェフのコース」で教育を受けた。例としては、中東鉄道職員の家族を養うアナスタシヤが挙げられる。アナスタシヤは貴族出身であるが、全ての財産はロシアに残されたため、ハルビンでは貧困に陥り、メイドの仕事で生活費を稼ぐ必要があった。アナスタシヤを雇った家族の一員の I.アブロシモフが記すように「その細くて神経質な女性はなかなか新しい立場に慣れなかった」。アナスタシヤが、仕事を任せられた時に、いつもため息をつきながら、苦しげな表情をしていたことから、不幸そうな人物として著者の記憶に残った。時間が経ってから、著者は、酒に溺れ乞食となったアナスタシヤとビーチで偶然出会う。[89]

「白系」将校のI.セレブレニコフは回想記において、様々な軍人の運命を記述した。元陸軍将官の N.ソボレフスキイはシベリアに家族を残し、ハルビンに着いてから、クワスの製造作業を開始した。著者が説明するように、ソボレフスキイは自分の「企業」で、社長として、また、たった一人の職員として仕事を兼ねた。

> しばしば私は、陸軍将官が水のバケツを持っていく、又はクワスの瓶を洗っている様子を目撃していた。[90]

ロシア内戦の「英雄」として称えられた元陸軍将官の A.ペペリャエフは、ハルビンで馬車の仕事をするようになった。

多くの場合、このような、軍人の家族においては、女性がイニシアチブを取って、家計の

---

[87] Шарохин М.（2007）Мой Харбин. Русская Атлантида, 26, с. 29.
[88] Смольников В. (2001) Записки шанхайского врача. М, с. 41.
[89] Абросимов И. (1990) Под чужим небом. Молодая гвардия, с. 79, с.110.
[90] Серебренников И.（1995）Мои воспоминания. Военная литература, с. 81.

支えとなった。例えば、元陸軍大将の P.ボブリクは、ハルビンで就職できなかったため、外国語の知識を持っていた妻が一人で家族を支えていた。収入を得る方法を一生懸命考えた妻は、一人でウラジオストクにも行ったことがあり、ハルビンに帰った時、列車が匪賊により射撃され、妻が生き残れたのは、幸運的なことであった。自分の家族を支えるため、様々な冒険に挑戦したロシア人女性を英雄とし、I.セレブルニコフは、尊重するべき性格の強さであると取り上げている。[91]

作者の N.イルイナの父の I.イルインも、サンクト・ペテルブルグの海兵隊の専門コースの卒業生であって、第一次世界大戦に参加した時、中佐にまで昇進したが、娘の回想記によると「イミグラントになって戸惑った。人生の全ての厄介な重圧が母の肩にのしかかった」。N.イルイナによれば、母の方が生き残る能力を見せたという。[92]

回想記においては、現実的に適用できる専門知識を身に付けることの必要性について述べられている。E.ラチンスカヤは、多くの白系ロシア人の家族を困窮の底から克服する為の一つの手段として、タイプライターを示している。プロのタイピストを要求していた会社が多く存在し、E.ヴォエイコヴァは、貴族出身の母であったため、自分の子供には一般的な高等教育を与えることを目標としていたが[93]、ハルビンにおいて長年過ごした娘の N.イルイナは、それを現実的ではない、空想として見るようになり、エミグラントが、特技を受けることに目を向けていかなければならないと分かってきた。[94]

移民者の心理学を研究した N.フルスタリョヴァによれば、異郷において新しい人生を始める多くの移民者が、専門的知識が不適用であるという、悲しい事実を把握する際、精力を失うことが多い。しかし、自分の専門分野の枠を超えて、それ以外の活動で自分を試し、それに挑戦できる人は、ネガティブなエネルギーを原動力に変換し、このように異郷においても大きな成功をおさめることができると述べている[95]。例えば、この章で言及された、元陸軍大将の P.ボブリクは、クワスの販売者という、不名誉の活動を通じて、時間が経ってから、良い稼ぎをするようになった。[96]

2.1.2. 「白系」と「赤系」ロシア人の職場の雰囲気における相違点：信頼関係を維持していた「白系」ロシア人と、緊張した雰囲気で活動していた「赤系」ロシア人

回想記の作者は、ハルビンの企業、会社などの職場における雰囲気の特徴にも触れており、

[91] Серебренников И., 同上、86 頁。
[92] Ильина Н., 同上、9 頁。
[93] Рачинская Е.（1982）Перелетные птицы. Воспоминания. США. С.69.
[94] Ильина Н., 同上、11 頁。
[95] Хрусталёва Н.（1996）Психология эмиграции. Диссертация.Спб. Сс. 225-232
[96] Серебренников Н., 同上、 81 頁。

労働条件は、E.ラチンスカヤが定義しているように、「非常に帝政ロシア的、保守的」だった。著者が中東鉄道の管理局の様子を取り上げている：

職員の働き方は意欲と責任を備えたものだった。相互支援も実施され、管理者は労働者に対して、非常に礼儀正しいだけではなく、友好的な態度でもあった。ストライキについては言及することもないほどだった。だれも営業部を敵、つまり支配者とは見ていなかったのだが、それはインテリ層に属するロシア人移民者が、職員である労働者を奴隷と連想するプロレタリア心理学に対する拒否が、明確な理由の一つである。[97]

著者が、自分の事務室においても、悪計、噂の普及、密告という問題が存在しない所だったと記している。同僚の間には、インフォーマルな関係が禁止され、相手にあだ名をつける癖も実施されなかった。[98]

そして、回想記の著者は、仕事を得るため、コネクションを使用した経験について語ることを恐れていない。N.ヴォエイコヴァは、知り合いが多いことを、自分の利益のために頻繁に使用していた。このように、N.ヴォエイコヴァは、自分だけに限らず、娘のためにも、仕事を見つけようとしたことがある。[99]

N.セレブレニコフも、ハルビンに着いた時、仕事を探すため、第一に、ロシアの時代からの知り合いを訪問し、ハルビンにおける就職状況に関する情報を得たり、知り合いに支援も直接頼んだりした。[100]

コネクションに任せることは、ロシア人のメンタリティーの特徴であり、そして、イミグレーションの状況においては、多くのロシア人は相互支援の重要性を信じていたと考えられる。

「赤系」ロシア人の仕事に関する条件は、「満州国」が樹立する時点から、次第に悪化していた。本稿では既に述べたように、「満州国」の政府がソ連人によるスパイ活動を警戒していたため、ソ連人の全ての行為が観察下に置かれていた。在満ソ連総領事の娘の A.スラブツカヤの回想記では、総領事館の職員により作成された1934年4月19日付けの備忘録が取り上げられ、当時の在満ソ連人に対する、日本人の行政機関の次のような行為が批判されている：中東鉄道付属学校の内務活動への日本人警察官の介入、中東鉄道会館の館内活動の禁止或いは制限、日本人警察官による幼稚園の攻撃事件、中東鉄道付属図書及び専門学校など

[97] Рачинская Е., 同上、30 頁。
[98] Рачинская Е., 同上、31 頁。
[99] Ильина Н., 同上、11 頁。
[100] Серебренников Н., 同上、75 頁。

の図書館の閉館、私立学校におけるソ連人職員の解雇、ソ連製映画の上映禁止、そして、ソ連人向けの食堂の閉館である。それにより、多くのソ連人職員は、失望及び無力を、そして自分の権利が侵害されていることを感じていた。[101]

そして、A.スラブツカヤは、1930年代の在満ソ連総領事館における雰囲気について回想し、ソ連人の職員は、日本人の挑発的行為（例えば、総領事館の館内公園への中国人の切断された頭部の持ち運び事件)、外国人の相手との関係における信頼度の低さ（A.スラブツカヤの父は、中国人の通訳者の仕事に対し、不信感を表明していた)、精神的抑圧（日本人警察による永続的な追跡活動)、職員の自分自身と子供の安全性に関する不安感（例としては、領事館において暗号通信職務を担当した職員の誘拐、拷問の事件)、職員の健康にも悪影響を与えた。また、仕事の内容に関わるストレスなどのような問題を抱えていた。[102]　このように、A.スラブツカヤによれば、在満ソ連人は、非常に緊張する出来事の中で活動していたが、その理由としては、「内的」要因ではなく、当時の満洲における政治的状況により促される「外的」要因が取り上げられている。

このように、「白系」ロシア人は、職場における労働者の関係という面においても、自己をソ連主義に対比させていると思われる。

そして、就職活動においては、多くのロシア人は、知り合いの支援に任せることも多かった。

その一方、ソ連人の仕事状況は、「満州国」の時代に、関東軍政府の抑圧的行為による影響を受け、ソ連人の職員は、職場における雰囲気においては、不安感、警戒心が漂っていた。

2.1.3. プロパガンダ活動：政治的、社会的変更を要求するロシア人

中国に亡命した多くの「白系」軍人及び「白系側」を取ったロシア記者、文学者などは、中国においても、社会的活動に取り組んでいた。ロシアの歴史家の O.ゴンチヤレンコは、1920年代の実態を次のように描写する:「ハルビンに残ることを決めたロシア人の移民者は、複数の派に分裂して、1917年までのロシアにおける「習慣」であった、政治的レトリックで競争を始めた」。[103]

I.セレブレニコフによれば、満洲に移住した「白系」ロシア人の中で、今後の進路に迷ったかのような状態にあった人が存在し、彼らは自分の政治的属性について深刻に考え、その結果としては、社会的予測を覆す方向に自分の思考を向けたこともあった。[104]

---

[101] Славуцкая А.（2002）Все, что было. Записки дочери дипломата. Москва. Книга и бизнес. С.55.
[102] 同上、57 －61 頁。
[103] Гончаренко О.,　同上、156 頁。
[104] Серебренников А., 同上、132 頁。

I.セレブレニコフの回想記においては、卓越したシベリア地方の研究者と作家の N.コジミンという人物が登場する。ロシアに住んでいた時、N.コジミンは「社会革命党員」の運動を維持していたが、ハルビンに来てから、政治的見方を変えてしまい、その結果として、コジミンは、ソ連のイデオロギーとして普及していた『前進しよう！』という新聞社に記者として就職した。そのようなコジミンの行動は、回想記の著者にとって驚かされるものであった:

一体何が、最高レベルの教育と文化を持ったコジミンをボリシェビキの新聞への移動を促したのか、私には分からなかった。[105]

回想記の著者の予想通り、「恐らく、彼が最近体験した様々な苦労は、「白系」運動に対し嫌悪感を募らせ、反対の政治派の正統性を信じることによって励まされた」。
I.セレブレニコフは、ロシア系ディアスポラにおけるイデオロギー的対立を利益的に使用したロシア人の例も取り上げている。V.ウストリャロフ教授は、ハルビンに移動する前、「白系衛軍」の総司令官の A.コルチャックの運動を維持していたが、ハルビンにおいては『生活のニュース』というボリシェビキの新聞に就職し、大騒ぎを起こしたソ連政府を支持した記事の執筆に着手した。しかし、V.ウストリャロフは、ハルビンに居住していた「白系」亡命ロシア人とも関係を切らなかったため、「両方の側から金融的利益を取った」[106]。
満洲における「白系」ロシア人は、反ソ的活動おいては、危険だとは見ていなかったかのように、露骨に自分の思想を述べていた。 N.シャピロは、ハルビンにおいて大学の教師と記者の仕事を兼ねた。ドイツが対ロシア戦争を始める時点まで、ソ連制度を批判する記事を多く書いていた。1945年に、N.シャピロはソ連警察によって逮捕され、懲役10年という罰を受けた。1945年にソ連の裁判官に渡された記者、社会的活動者は多かった。N.シャピロは、「いつも真実だけを書いた」と述べ、自分の行為の妥当性を強く信じており、ソ連側がソ連制度に関し嘘を煽ぐ人のみを犯罪者として見るとさえ思い込んでいたため、それほど重い罰を受けると予測しなかったと告発している。[107]

「白系」ロシア人の反ソ的見方は、極端な形を取ったこともあり、このように満洲におけるロシア系ディアスポラ特有の「ファシスト」が現れてきた。作者、詩人、記者の A.ネスメロフは、満洲国時代に、ハルビンに形成されたファシスト党に加入し、反ソ的プロパガンダを積極的に普及していた。1945年、ソ連兵により逮捕された著者は、中ソ国境の辺りに

[105] Серебренников А., 同上,、165 頁。
[106] 同上、165 頁。
[107] Шапиро Н., 同上、27 頁。

位置された拘留施設の床で、肺炎により死去する。[108]

このように、満洲におけるロシア系ディアスポラにおいては、反ソ派、反日派、プロファシスト派等、多種多様な立場を表すロシア人が活動していた。反ソ的活動に従事したロシア人が多かったことは、イミグレーションの状況においても、ロシア人は、社会的プロセスに影響できるという自信が残っていたこと、ロシア国内政治状態が変更する可能性があるという信念を示している。

2.1.4. 教員としての仕事：ロシア系ディアスポラの知的発展への貢献

ハルビンにおいては、様々なレベルの私立、国立教育機関が活動し、そこで学んだロシア人は、回想記で自分の教師について高い評価を表している。ロシア人の教員の中で、帝政ロシアに居住した時、最高レベルの教育を受けた「白系」亡命ロシア人、満洲で樹立された教育機関に、ロシアから特別に派遣された人も存在しており、彼らは、在満ロシア系ディアスポラの知的発展に大きく貢献したと思われる。

学生の視点から見れば、ロシア人教員の良い点は、レベルの高い専門的知識を有すること、学生に自分のイデオロギー的見方を押し付けないこと、責任感を持っていることである。教師の努力により、ハルビンの教育機関の卒業生は、高いレベルの教育を受けていたため、満洲及び、そこから移住した後、様々な国にある企業で活躍していた。

中学校と高校の教員についての記述から分かるように、教員の中で、厳しい性格も、またその反対に、クラスで規律を守らせられなかった心の優しすぎる教員もおり、ロシア風の一般的な学校のイメージで形成されている。[109]

N.イルイナの母は、満州国の時代、貧乏なロシア人エミグラントの子供用に向けられた学校で勤務したことがあり、N.イルイナが回想するように、この職場には、給料が安く、その上業務も多いという欠点があったにも関わらず、母は、「本当の先生を特徴付ける特技を発揮できた。それは、生徒の自己啓発に対する関心を表すこと」であった。N.イルイナが述べているように、「母にとっては、クラスが、自分自身特有のタレント性を持つパーソナリティのグループであった」。母は、各生徒に特別の注意を払い、面倒を見ることにも、時間と努力を惜しまなかった。[110]

満洲における「白系」ロシア人の教育制度の特徴の一つとして、精神教育をも重視されたことである。その特別の科目を神父が担当していた。正教の学習を専攻していた A.ネフスキ・リツェイの生徒であった G.ラジガエフは、自分の教員について、生徒に精神教育を与

[108] Рачинская Е., 同上、62 頁。
[109] Лалетина Н. (2010) Юности прекрасная пора. Русская Атлантида, 37. Сс. 24-25.
[110] Ильина Н.,、同上、24 頁。

えることに全力を尽くしていたと書いている。[111]教員は生徒が精神教育に関心を失っていることに気づくと、失望感に強く襲われたこともあった程、自分の活動に対しても態度が厳しかった[112]。

信仰的教育は、理科系を専門に指導する教育機関においても行われていた。 P.ドブリニンは、ハルビンの第1ロシアの実科学校の教員について、「自分の仕事に深い忠誠心を見せ、この仕事を自分の使命として見ていた」と述べている。[113]

しかし、最高レベルの大学は、ロシアから特別に派遣された教授を雇っていた。I.パセンコフが回想しているように、1920年代に、自分の子供に専門的知識を与えることに熱心である親達は、教育機関の本質の善し悪しについて考えるどころではなかったため、専門学校の数は「危ないスピード」で増えていった。[114]

しかし、高いレベルの教育機関も存在し、ウラジミル聖人大学がその一つとして挙げられている。この大学を樹立するきっかけとして、1920年代の中東鉄道などにおいて、中国語及び、中国の地理、経済などに関する知識を有する専門家が沢山要求されていたことが挙げられている。この課題を解決するため、ロシアからは、7人の教授が送られた。I.パセンコフは、全ての教師の活動と能力を高く評価し、極東地域諸国の経済に関するレクチャーをしていた G.アヴェナリウスを、そして、学識の高い、経済理論を教えていた V.マラクリンを、「学生の中で、一番の「お気に入り」」であった国際権利の先生、V.ゴリツンを、それぞれ「美しい話し方」をする人として評価している。[115]

しかし、満州国で活動したロシア人のインテリ層については、ソ連政府が疑念を抱いていたため、1945年、その大学の教授、F.ダニレンコ、と V.ゴリツンは、ソ連兵によりロシアに連行され、「スタリンーベリアの「アカデミー」に預け入られた」。[116]

「満州国」の時代、地域の支配者となった日本人の政府は、ロシア人の教育活動にも介入し、プログラムの改革を押し付け、日本の天皇と天照像への日常的礼拝を義務付けていた。しかし、殆どの場合、ロシア人の教員は、特に抵抗しなかった。例えば、本項で既に言及された N.イルイナの母は、日本人の下で活動していた中学校において、義務的な天照像への拝礼をしながら、自分の仕事に集中していた。

しかし、大学教授の中で、学生に対し、自分の意見を述べることを恐れなかった人も存在した。在ハルビン聖ウラジミル極東経済大学で学んだ I.パセンコフが回想しているように、V.

---

[111] Разжигаев Г. (1999) Лицей имени Александра Невского. Русская Атлантида, 2. Сс. 26-27.
[112] 同上、26-27 頁。
[113] Добрынин П.（2001）Первое Хабинское реальное училище, РА, 5. С. 33.
[114] Пасынков Н.（2007）Харбинский Восточно-экономический факультет. РА, 26. С. 9.
[115] Пасынков Н., 同上, с. 13
[116] 同上、11-13 頁。

マラクリン教授は、「禁止された」テーマについても学生と議論を頻繁に行い、ある時、日本の殖民地政策について、革命前のロシアの政策と比較したテーマを取り上げ、強く批判していた。時間が経ってから、その教授が行方不明となり、学生の推測によれば、この事件においては日本警察も関わっていた可能性が高かったと言う。[117]

このように、満洲におけるロシア人は、高いレベルの教育を受けることができた。そこでは、ロシア人の教員の貢献も大きい。

そして、高等教育を受けた「白系」ロシア人にとっては、教師としての仕事を見つけることは、問題ではなかったと思われる。

ロシアの教育システムの特徴は、専門的知識を与えることに限らず、精神教育にも注意を払ったことである。ロシア人の教員は、満州国の時代、「否応なく」ということもあったにもかかわらず、ロシアの教育システムをもコントロールしていた日本人とも、協力していた。しかし、多くのロシア人の教授は、反日的活動を疑っていた日本の警察により監視されていたこと、1945年の満洲を襲うソ連兵により逮捕されたこともあり、満洲においては、教師としての仕事がいつも安全なものだったとは言えない。

2.1.5. 創造的仕事：一方で、ディアスポラにおける文化レベルの高揚、他方で、個人の不幸な運命

ハルビンにおける「白系」ロシア人の創造的活動に注目すれば、多種多様な芸術専門学校の学生が成功を収める一方で、独立して活動していた詩人や文学者は不幸な運命を辿る、という人生が両極端であることがわかる。

2.1.5.1. 芸術専門教育機関の活動、教員の大きな役割

1920年代のハルビンにおいて、文化的活動が盛り上がる理由として、「白系」亡命人の中で、芸術界に属する人が多かったこと（彼らの中で、一流のオペラ歌手であった、ソプラノのL.リポフスカヤ、テノールのラビンスキー、バスのマジェーヒン、作者のA.アチャイル、A.ネスメロフなどは、言及すべきであろう）、そして、行政機関のレベルでハルビンにおける文化的活動を管理した官僚の熱意と、教師の努力が挙げられる。1921年に中東鉄道長官として就任したB.オストロウモフの社会的活動により、ハルビンにおいてコンサートが増えた。G.メリホフが回想するように、「派手好きだったオストロウモフは、この時代、時局に不相応ともいえるほどオーケストラやオペラの上演に力を入れ、ここにハルビンの音楽

[117] Пасынков Н., 同上、9頁。

歴史は一つの頂点を迎える」。[118] バイオリニストであった G. シドロフの「バイオリニストの回想及び音楽のハルビン」という回想記においては、「1920年代以降ハルビンは文化活動で有名だった。すなわちハルビンに住み着き、コンサート広場をいっぱいにした大勢のアーティスト、歌手、音楽家たちによって有名になっていった。だが、この町が1920年代から1930年代にかけて「小パリ」と呼ばれていたわけではない」と記されていた。[119]

それにも関わらず、1930年代に満洲国の政府も、「白系」ロシア人の文化的活動を、金銭的にも支援していた。

「白系」ロシア人の回想記においては、授業の雰囲気が「再現」されている。

ピアニスト、音楽教師としてハルビンで働いていた V.ベロウソヴァ によって記された『私の人生と音楽』という回想記においては、ベロウソヴァが学んでいた音楽専門学校の教師について以下のように記述されている：

教師の仕事において A.バツリナの熱意は珍しいものだった。彼女は、放課後も授業を実施し、深夜まで、自分の仕事に熱中し、学生たちも熱中させた。[120]

そして、音楽学校長の L.アプテーカレヴァについても挙げている。

彼女は精力的で、まれに見る組織力のある人柄だった。彼女は好きな仕事に思い切り取り組むことができた。彼女は専門学校で音楽に対する真の愛や芸術に対する献身的な奉仕の雰囲気を作り出した。[121]

ロシア人の作者の N.イルイナは、満洲における最大の運搬会社社長の二人目の妻であり、ハルビンへの移住までモスクワの芸術座で演奏した E. コルナコヴァの演技スタジオについて記述している。スタニスラフスキー自身からも授業を受けたコルナコヴァは、ハルビンでごく一般の学生に演技を教え、彼らが参加した演劇を上演した。そのスタジオは、愛好クラブに過ぎないものであったにも関わらず、コルナコヴァは、生徒たちが本当の芸能人であるかのように、完璧さを求めた。

コルナコヴァは、私たちが（略）本当の芸能人であるかのように、厳しい先生だった。

---

[118] Мелихов Г.（2003）Русский Харбин. М. С. 113.
[119] Таскина Е.（2005）Русский Харбин. Москва: Изд-во Московского Ун-та. С. 146.
[120] Таскина Е., 同上、146 頁。
[121] 同上、147 頁。

欠席についても言うまでもないが、リハーサルへの遅刻を気にした。（略）演劇を崇拝して、同じような態度を私たちからも要求した。[122]

現在、オーストラリアに居住している L.ヤストレボヴァは、ハルビンにおいてバレエのクラスに参加した。自身の回想記において、バレエの先生の E.クヴァトコフスカヤについて回想している。

ハルビンにおいて彼女自身はプリマ・バレリーナとして出演し、振付師としても働いており、自分のバレエ・スタジオを持っていた。（略）E.ヴァシリエヴナは、多くの演劇を上演して、その演劇はいつも好評を得た。（略）彼女は自分の教え子をステージに送った時、いつも心配していた。私たちが平気だった場合も、彼女は自分の心配する気持ちを私たちに伝えた。[123]

満洲におけるロシア人は、芸術に対する熱心な態度と、自分の努力を通じて、ハルビンという小さい街の文化レベルを、大都市の高い文化レベルと比較できるほど、文化レベルを上げることができたと思われる。

2.1.5.2. 文学者、詩人のクラブ活動

音楽家、女優、ダンサー等のように、作者、詩人も創造活動に、全力を尽くした。回想記では、『チュラエフカ』というクラブが記述されている。そこでは、「詩術のスタジオ」があり、世界の文学や哲学、歴史、政治の問題を巡る議論が行われた。「朗読会」では1000人もの人々が参加していた。V.スロボッチコフが回想するように、詩術を取得するため、厳しい練習を繰り返すことは『チュラエフカ』クラブの第一の条件であった。

各クラブの一員は自分の著作を朗読しなければならなかった。その作品は、直ぐに詳細な分析を受けた。

V.スロボッチコフは『チュラエフカ』の参加者の熱心さについても言及している：

ある日、例会後に、若者のグループは、離散することを希望せず、（クラブの会場であったアパート）の家の近くで、まだ長い間話し合いをした。（略）そして、詩人の A.ア

[122] Ильина Н., 同上、25 頁。
[123] Таскина Е., 同上、14 頁。

チャイルはこのグループに近づいて、青年のキリスト教会ギムナジウムの建物の中でディスカッションの延長を提案した。[124]

『チュラエフカ』クラブ活動の成功と長い生活が続けられた原因としては、有名な詩人である A.アチャイルなどのクラブの創設者が、クラブの参加者に自分の経験と知識を与え、自分の「教え子」の詩人としての成長を促していたということである。

それ以外の芸術を教えた教員の献身的態度も、将来における、自分の教え子のキャリアに貢献した。V.ベロウソヴァが回想記で、音楽専門学校の教師と生徒の今後の運命についても記している：

1935年にハルビンの専門学校は殆ど全ての教師がソ連に引き上げた結果、閉鎖された。生徒の大部分もまた祖国へ帰還し、彼らの全てがソ連の文化活動において然るべき地位を占めていた。S.バツリナのクラスで歌った友達はソ連のオペラ劇場で歌うチャンスを得た。（略）バツリナ自身は（略）スベトロフスクのオペラ劇場で働いた。私は（略）1935年の春に音楽教育を続けるために日本の首都へ向かった。[125]

音楽学校の生徒に限らず、『チュラエフカ』という文学サロンの参加者、バレエ学校の卒業者など、様々なハルビンの芸能人は、ハルビンを去った後も、世界のあらゆる所で創造活動を続け、活躍することができた。世界最高のステージに出演したロシア人移民者の中には、ハルビンにおいて教育を受けた人が多かった（例としては、ジャズ・メンの O.ルンドストラムが挙げられる）。回想記の実例が証明するように、ハルビンにおけるロシアのディアスポラで、高い文化レベルに達したことは、教育活動に従事したロシア人の貢献も否定することはできない。

2.1.5.3. 詩人、文学者の不幸な運命

本項で既に述べたように、ハルビン市で活動していたインテリ層の中では、ロシア帝国の崩壊と故郷の喪失という歴史的トラウマを乗り越えられず、ソ連制度に対する嫌悪感を抑えることもできず、日常的困難性の抑圧により心が折れてしまった人も存在した。特に、このグループにおいては、精神的に敏感な詩人が多かった。

A.ネスメロフ、L.エーシン、A.アチャイルなどは、悲惨な運命を辿った詩人であった。

---

[124] Таскина Е., 同上、67 頁。
[125] 同上、146 頁。

E.ラチヌスカヤは、V.ロギノフという詩人について次のように回想している：

裕福な実業家の息子だったV.ロギノフは、努力を求める移民者としての生活に適応し難いタイプだった。性格から見ても、スケジュールにより定められた日常的仕事に対しては不適応だった。彼は、典型的なボヘミアの代表者だった。軍隊に努めることを希望しなかったというより、できなかったと言った方が正しい。記者としての活動で生きており、時々大変な困窮に陥ったことがある。[126]

そして、これらの詩人を抑えつけたこととしては、イデオロギー的思考に限らず、創造活動のための時間的余裕が残されていなかった、最低限の生活レベルを支えるために必要な、単調な仕事というものが挙げられる。E.ラチンスカヤは、詩人の V.オブホフについて次のような回想を残している：

オブホフは自らの人生を、グレーで退屈なものとして嫌った。生活の糧を得るために、単調でねっとりした仕事が永久的に続くのだ。[127]

そして、文学者に限らず、自己の才能を完全に発揮できなかった芸能人としては、俳優、歌手なども挙げられる。それらの中で、キャリアの視点から見れば、最も「生産的な」年代を異郷で過ごした、オペラ歌手のM.アレクサンドロヴナと、モスクワ劇座の女優のE.カルナコヴァが言及されている。

このように、ハルビンにおいては、最高のレベルの芸術活動は行えたが、自分のタレントに相当する大成功を収めることができないと理解していたロシア人は、自分の輝かしいキャリアがもう過去のことである、という事実を痛ましく受け入れていた。そして貧乏な芸術家は創造活動とは言えない生活のための仕事に追われ、また、自分自身の心理的問題を乗り越えることができなかった。そうした影響により、ここで活動した多くのロシア人は、自分の夢を実現できないという不満を長く抱いていた。

このように、芸術活動に従事した多くのロシア人のキャリアの発展を遮ったのは、世界の「僻地」としても呼ばれていたハルビンの不利な位置づけというファクターであると思われる。

---

[126] Рачинская Е., 同上、66頁。
[127] 同上、64頁。

2.1.6. ハルビンにおけるロシア女性の就職問題： 精神的偉業の達成

前項で既に述べたように、ソ連人を除けば、ハルビンにおいては、帝政ロシア時代の文化と生活様式が保持されていた状況であった。そして、帝政ロシア社会の一つの特徴としては、女性の主な役割は、良い母親、妻、ということにより限られ、生活費を稼ぐことは男性の義務だった。その理由により、L.チェルニコヴァの主人が、異郷においても「ロシアの古い伝統に従って、妻に働くことを許さなかった」という回想が残されている。[128]しかし、イミグレーションの厳しい状況は、価値観と社会的ルールの見方を変更させ、女性は、「稼ぎ主」としての役割を身につけることになった。

G.エフェンディエヴァが記したように、「イミグレーションの状況における女性の運命は、分析的瞑想、出版物での議論、そして文学的考察の対象となっている」。1930年代に、ロシアの極東地方の記者が記したように、「移民者が居住している所には、女性の運命は、羨むべきものではない。至る所で、女性労働の供給は需要を上回っている。そして、各女性の夢である、「家庭」は、多くの女性にとって、そのまま、夢として残っている」。そのため、G.エフェンディエヴァは満洲におけるロシア人の女性について「男性と異なり、女性の適応能力は低かった」という意見を述べている。

女性の雇用問題の解決は、現地政府の主なプライオリティではなかったため、見通しのないロシア人女性の生活はますます悪化し、自殺の件数も増えた。N.ゴルコヴェンコの意見では、1920年代の終わりには自殺者数がピークに達した。自殺者の中には、零落した貴族、プチブレ、インテリの階級に属する20‐40歳の女性が多かった。[129]

このような状況の影響により、多くの女性たちは、失望し、中東鉄道において列車の火夫、又は燃料倉庫における薪の運搬人として務めていた。そして、L.グセヴァは、ハルビンにおける最初の女性ドライバーとしてお金を稼いだ。多くの女性は、就職できず、売春生活を始めた[130]。N.アブロシモフ は、自分の回想記において、そのようなハルビンの生活の「裏」について記述を挙げている：

因みに、その（生活の）裏面はいつも私には興味をそそられた。毎朝、私は新聞を開いて、興味を抱いて広告を読んだ：

「太陽」キャバレー。水着を着るバー・ギャル

「ファンタジー」キャバレー。女性のジャズ・バンド。人からできたシャンデリア。

「ムレン・ルージ」キャバレー。立派なダンス・パートナー。

---

[128] Забияко А., Эфендиева Г. (2009) Меж двух миров. Русские писатели в Маньчжурии. Благовещенск. С. 48.
[129] Капран И., 同上、78 頁。
[130] Капран И., 同上、154 頁。

「オデオン」レストラン。ロシアとコーカサス料理。[131]

I.カプランによれば、1920年代から1930年代にかけてのハルビンの新聞には、上記のような広告は沢山あり、バー、ダンスクラブとカフェーの店員としては、主に教育を持った女性が優先された。I.カプランの意見では、インテリの女性労働者の価値低下の問題は、ロシアのイミグレーションの一つの悲劇であったという。[132]

ロシアの作家の N.イルイナは、離婚後に、一人で、2人の娘を育てていた母の苦労を記述している:

(母について)一日中仕事に奔走したり、手早く食べたり、ある時、家まで間に合わないので、何も食べずに、トラム亭で寒さを我慢したりして深夜まで働いていた。心臓が弱かったのに、どうやって我慢できたのか、ハルビンに住んでいた時、病気がちである母を憶えていない。(略) 時々、彼女は、強い意志を持っていたため、病気に耐えられたと思う。(略) 彼女が病気に負けたら、私たち (二人の娘について) も滅びるからです。[133]

N.イルイナの母は、大学の教師、家庭教師、翻訳家といった三つの仕事を兼ねて、家族のためにお金を稼いだ。そして、特に大変な時代に (娘の卒業式、中国の犯罪グループによって拉致された弟を解放するための資金探しなどのために)、貴重なものを質屋に入れたこともある。

E.エフェンディエヴァが示すように、ハルビンにおけるロシア人女性が専門的労働を開始したのは、「経済的な困難」によって促されたことであった。『チュラエフカ』という詩朗読サロンの参加者の L.ハインドロヴァが回想するように、「私は、自分の価値を評価したのは、他の女性と同じように働き始めた時の頃だった」。[134]

帝国ロシア時代から定着した「家族のために生きている」者としての女性の役割は、イミグレーションにおいて、既に重視されなくなったケースが多かった。イミグレーションの状況に適応するため、ロシア人の女性たちは、男性特有の様々な特技を取得する必要があっ

[131] Абросимов И., 同上、122 頁。
[132] Капран И., 同上、156 頁。
[133] Ильина Н., 同上、13 頁。
[134] Хаиндрова Л. (2003) Сердце поэта. Калуга: Изд-во Палиграф-Информ. С.38.

た。しかし、イミグレーション状況における、女性雇用の問題においては、ポジティブな面もあり、多くの女性は、社会における自分の役割を見直し、「家庭主婦」以上のレベルを達成できると強く信じるようになった。

2.1.7. 家族の経済的サポートへの子供の貢献

満洲に移住した「白系」ロシア人の家族は、生き残るため、家族全員を「動員させた」ことがある。例えば、中学生であった L.アンデルセンは、画家としての専門知識を活用し、俳優のポートレートを描くこと、お菓子屋にとって売り上げに効果的である模様をキャンディボックスに付けることを通じて、家計を支えていた。[135]

N.モクリンスカヤにとっては、幼い頃から働くことが、必然的であった。著者の母は、異郷における生活の大変な条件と精神的抑制に適応できず、自分の二人の娘の面倒を放棄し、お金を浪費するようになった。二人の娘は最低限の必需品をも不足し、飢えていたこともあった。母の一つだけの収入源は刺繍としての仕事であり、個人的注文の数が多い時は、家族の家計の大きな支えとなった。N.モクリンスカヤは、母のアシスタントになり、スケッチの作成、外国人の注文の翻訳、注文の一部の引き受けなどの仕事に従事していた。[136]

N.イルイナも、家族が、お金が不足していた時、外国語の知識が、教師のレベルに達していないと自覚しながらも、「生意気に」英語のプライベートレッスンをしていた。[137]

第二次世界大戦の時期とその後には、満洲における多くのロシア人の経済的状況がさらに悪化し、多くの子供にとって、学校に通うことより、両親を助けることのほうが重要であった。K.ズダンスキーは、1945年のことを振り返る際、冬の到来前に家族は、お金が完全になくたったと述べている。母の収入を得る方法であった、プライベートで行っていた中折れ帽の縫製は、当時の状況においては無意味なものとなったため、K.ズダンスキーは、家族を支えていた：

> 私はスヴィデルスキさんのワークショップに鍵屋として雇われたため、学校に、一日は出席、一日は欠席、というスケジュールで通っていた。彼が（ここでーワークショップのオーナ)、私の家族の状態を理解したからこそ、辞意的に私にこの仕事を提供してくれた。[138]

前章で述べたように、1930年代、多くのロシア人は、生活費を稼ぐ方法を探すため、上海

---

[135] Андерсен Л. (2006) Одна на мосту. М. Русский путь. С. 143.
[136] Мокринская Н.（1991）Моя жизнь. Нью-Йорк С.186.
[137] Ильина Н., 同上、13 頁。
[138] Зданский К. (2007) Ваня. РА, 27. С. 60.

に移住する。ロシアの文化が優先的な立場を取っていたハルビン市と異なり、巨大なコスモポリタンであった上海においては、快適さは不足し、就職競争も厳しかったが、幼いころから働くことに慣れてきたロシア人は、忍耐力を鍛えてきたため、新しい状況に適応できたと思われる。

2.1.8. 「満洲国」時代における就職状況:　ロシア人にとっての雇用状況が次第に悪化、満洲からの移住の動機

前章で述べたように、「満洲国」の樹立は、ハルビンに居住していた全ての民族の生活に変化をもたらした。ハルビンにおける日本軍の出現に一般市民はあまり注目しなかった。E.ラチンスカヤは、当時について、「状況が徐々に変化しながらも、人生は自らのペースで流れていく。すべてはそのまま留まり続けているかのような感じだった。しかし戦争によって、日本人の支配者の厳しい性格を知ることになる」ということを述べている[139]。あるロシアの事務室において導入された義務的な日本語の学習は、その明らかな状況変化の一つであった。

満州国の政府は、ロシア人を圧迫していなかったが、ロシア人が直面した問題の中にあるロシア人と日本人の給料の不当な差異、どのような手段を使っても、日本人にとって有利になるロシア人職員の解雇が例に挙げられる。N.イルイナは満洲国の時代を以下のように回想する:

> 母はハルビンの「外国語の全図書館」の監査役として就職した。（略）しかし、1933年に満洲を占領した日本人は至る所で日本軍と関係のある人を浸透させ始め、1933年の夏に母は自分の職場を失った。そのかわり、ハルビンの政府は、市立学校で英語の教師としての仕事を提供した。（略）（学校の）給料で生き残ることはあり得ないことだった。[140]

1930年代に、N.イルイナの家族の経済状況が悪化したため、多くのイミグラントと同じく、N.イルイナも、稼ぐため、どんな仕事でも受けるしかなかった。回想記においては、ハリウッド向けのシナリオ翻訳の経験の記述を挙げている：

> （ハリウッドからの）返事は一つもなかった！しかし、仕事の明らかな無意味さ

[139] Рачинская Е., 同上、42-43 頁。
[140] Ильина Н., 同上、14 頁。

にがっかりしたわけではなかった。（略）なぜなら、当時、私の人生自体にも意味がなかったと思われたからである。[141]

N.イルイナの母は、生活費を稼ぐ方法を一生懸命探した時、絶望的な状況に正気を失い、成功のチャンスが殆どないオプションも試したことがある。このように、母はコネを使って、娘を科学者向けの雑誌社に就職させた。専門記事をロシア語から英語に翻訳するためのN.イルイナの言語能力は不足していた。職場における「不快感」を N.イルイナは以下のように記述している：

アリョシャ（事務所の職員）は、私が翻訳しなければならなかった記事を渡した。（略）この専門記事には、（気候？土？）ロシア語でさえも、私が分からない言葉が沢山あったので、英語について言うまでもなかった！私はペンを取ったが、最初のフレーズも翻訳できなかった。ガリャとアリョシャは横目で私を眺めている、私は働いているというよりも（略）私は、何もできない、ここに就職したのは、誤算だったということが暴露されないように、一生懸命隠さなければならないというような気持ちを抱いていた。[142]

ハルビンの詩人とダンサーの L.アンデルセンも、同様の状況を記述している。女性向けの雑誌で働いていた L.アンデルセンは、「美肌の秘密」というコラムを担当して、英語の雑誌の記事を翻訳した。英語の知識が薄かった L.アンデルセンは、回想記で「私の相談に乗る人がいないように祈った」と冗談めかして記した。
I.アブロシモフも、満洲国時代に家族が直面した、問題を記述している：

バシリーセルゲエヴィッチ（継父）はタクシードライバー、私は客引きです。（略）タクシードライバーになったのは、使命ではなく、悪運のいたずら。バシリイがドライバーとして就職したのは、大豆業者での職場を失った結果です。[143]

回想記では、負債者の追及者、メイド、キャバレーのダンサー等、余儀なく受けさせられた仕事について記述されている。負債者の追及者として務めた L.アンデルセンはある実務日について以下のように記述した：

---

[141] Ильина Н., 同上、15 頁。
[142] Ильина Н., 同上、14 頁。
[143] Абросимов И.., 同上、58 頁。

数時間に渡り応接室で待ちながら、負債者をうるさく攻め立て口説き落とした。[144]

N.イルイナの家族は、ハルビンにおけるロシア人の無職という問題が深刻化するばかり、という理解に達したため、上の娘の N.イルイナは、上海への移住を決意する。1930年代に、数千人の「白系」ロシア人は、同様の理由により、満州から移住した。

満洲国の時代に、上流社会に属するロシア人もダメージを受けた。V.スロボッチコフが、「満洲国」の政府によって行われた改革が、弁護人の家族にどのような影響を与えたかについて以下のように記している：

日本の占領者の命令で、ロシア人エミグラントが関わっていた訴訟事件をロシア人弁護人も（私たちの父も含めて）関与した中国の裁判所の活動は中止された。全ての裁判所の仕事の中止は私たちの家族にも悪い影響を与えた。父が担当した訴訟事件は終わり、それに伴って家族を支えていた収益もなくなった。[145]

「満洲国」における状況へのもう一つの適応方法として、日本人と協力することも選ばれた。例えば、反ソ的イデオロギー戦を続けていた作者、詩人の A.ネスメロフは、日本人の下で働き始め、反ソ連的プロパガンダの普及に従事していた。
日本の企業、領事館などにおいても、ロシア人は勤務していた。日本の外務省に務めていた E. シリャエフ は「思いやりのある」日本人の同僚と円滑に協力活動を実施していた。[146]
N.ラレティナの母は、友人の相談に乗り、1942年に、日本人の管理下にあった『満鉄』の倉庫に、掃除婦として就職した。母は、日本人の職員と友人関係を結び、企業から、当時の戦争時代において非常に貴重な食料品をも配給された。著者が回想するように、仕事は大変ではなかったが、盗難で捕まった職員に対する、罰であった暴力的行為を目撃することは、母にとって精神的抑圧のようなものであった。[147]
日本が第二次世界大戦に突入した時点から、関東軍の軍需を補うため、多くの日本人の学生である子供を、工場などの労働者として使用していた。そして、多くのロシア人の若者も、学校の授業が終わってから、日本人の生徒と同じく、様々な労働に送られたことがあった。
このように、「満洲国」の樹立は、様々な社会層に属するロシア人の生活にも変化をもたらし、転業、満州からの移住などを促した。しかし、それと同時に、満洲国における「白系」

---

144 Андерсен Л., 同上、174 頁。
145 Слободчиков М. (2005) О судьбе изгнанников печальной. М.: Русский путь. С. 65.
146 Шиляев В. (1997) Дом с каменными львами у ворот. Россияне в Азии. С. 211-235.
147 Лалетина Н.（2009）Японцы. РА, 35. Сс.43-51.

ロシア人の生活状況が急激に悪化したとは言えない。ロシア人の生活を変化させる理由としては、複数のファクターが取り上げられるが、その中で、1935年にソ連が中東鉄道を日本に売却したこと、第二次世界大戦が開始したこと、そして、離婚などのようなプライベートなことにより、ロシア人の適応能力が悪化したことなどをも取り上げられる。

2.1.9. 終戦後の満洲における労働条件：一方では、混乱状態において生き残る方法を探していた人が多かったが、もう一方では、通常の生活様式を送り続けていた人も存在していた

本稿で既に述べたように、1945年8月に、戦争におけるロシア軍の勝利後の興奮状態にある多くの「白系」ロシア人は、警戒心を無くしてしまっていた。

しかし、ソ連軍は満洲領土の占領を完遂してから、「反ソ的」、「親日的」活動で疑われていた「白系」ロシア人の大量の逮捕を開始したため、多数の雑誌、新聞などの出版社が相次いで閉鎖され、多くの会社の営業も停止してしまう。それに加え、満洲に存在した様々な企業、工場、そして教育機関の営業権は、ソ連人の手元に移され、1945年9月から始まる在満洲ロシア学校などは、新学期からソ連の教育プログラムが実行されていた。

前章で既に言及されたように、「満洲国」の時代に、多くの「白系」ロシア人の生活状況が悪化したため、1930年代に、ロシア系ディアスポラの大部分が上海などへ移住していった。そして、1945年には、ソ連兵により「白系」ロシア人の大量の逮捕が始まった。残りの「白系」ロシア人は、激変した生活条件に適応しなければならなかった。

回想記の分析は、1945年における労働状況を明らかにしている。

「白系」ロシア人の運命は、言葉通り、ソ連人の「手中」にあったと思われる。一方では、夫が逮捕されたため、孤独になった多くの女性たちが、パンとミルクを買うため、一生懸命努力していたが、もう一方では、ソ連兵からの被害を避けた劇場、『チューリン&Co.』雑貨店などは、目立った変化がなかったかのように、活動を続けていた。

多くの「白系」ロシア人の大きな助けとしては、1945年の混乱状態で生きながらも、自己教育に関心を失わなかった人が存在したことが取り上げられる。それは、家庭教師としての仕事で、それを続けることが可能であった。

N.シャピロは、最低限の生活を維持するため、家庭教師として英語を教えていた。しかし、インフレーションの理由により、生徒の支払い能力が低かったばかりでなく、生徒の人数に関しても、強制的動員、必然的就職などのような予想外のことも発生したため、次第に減少していった。このように、家庭教師としての仕事が安定した収入をもたらすものだった

とは言えない。[148]

大舞台での演奏に値するオペラ歌手として認められたM.アレクサンドロヴナは、ハルビンのレストランでの演奏で収入を得ていたが、終戦後の時期に、主人がソ連兵により連行されたこと、演奏できるところがなくなったことなどの理由により、極端な困窮に陥った。それにも関わらず、ある建物の屋根裏で、ボーカル教室を開くことができた。M.アレクサンドロヴナが不適切に見えていた収入を得る方法を、選択しなければならない理由となったのは、歌うこと意外の特技を持っていなかったことである[149]。

「白系」ロシア人のもう一つの収入を得る方法としては、いまだに活動を続けていた『チューリン&Co.』雑貨店などのような大きい会社が取り上げられる。例えば、『チューリン&Co.』雑貨店は、一般の人に対しても、様々な製品の作成に関する注文をしていた。このように、画家のO.ドミトリエヴナは、主人が逮捕され、主人を失ってからも、生き残ることができた。[150]

回想記の作者は、現実に適応するのが難しいパーソナリティのタイプである、アーティスト、芸能人の将来の運命については、非常に心配をしていた。E.ラチンスカヤは、タレント性に恵まれた、非常に敏感な心を持つミュージシャンのT. イノケンティエビッチについては、終戦後も、移住できたところがなかったため、ハルビンに残る他なく、自分の小さなオーケストラの指揮者として、人生の終わりまで働いていたと回想している。[151]

もう一つの収入を得る方法としては、自分のアパートの部屋をレンタルすることが取り上げられている。A.ポストニコヴァは、二人の息子の逮捕後には、孤独な生活を送り、自分の小さなアパートメントの一部を、中国人の家族にレンタルしたが、賃貸料として、その家族の手作り料理によって支払われていた。[152]

隣人のA.ラレティナは、このような生活様式を目撃し、自分のもつ印象を以下のように記述している：

A. ポストニコヴァは、台所に移り、長持ちの上で寝るようになった。レンタルされたこと前にも狭く見えていた、この部屋の空間が、様々な荷物によって埋められ、多数の子供に溢れる中国風の住まい所のように見えていた。[153]

---

[148] Шапиро М., 同上、12頁。
[149] Рачинская Е., 同上、70頁。
[150] 同上、71頁。
[151] Рачинская Е., 同上、72頁。
[152] Лалетина Н.（2009）Японцы. РА, 32. С 34.
[153] Лалетина Н.（2009）Японцы. РА, 32. С 34.

しかし、1945年の満洲においては、全ての「白系」ロシア人の生活状況が悪化した訳ではない。中東鉄道の開業時期からそこに勤務していた多くのロシア人は、1935年の満鉄の新しい経営者となった日本人により解雇されていたが、1945年に、ソ連軍の斡旋により、自分の職場に戻ることができた。

そして、1945年においても、「白系」ロシア人の文化的活動はなくなっていなかった。もちろん、1930年代に、ソ連、上海などへ離散した多くのロシア人の中に、ハルビンにおけるロシア文化の「基盤」であった芸能人も多くいたため、その繁栄期は終焉に向かっていたものの、残りのロシア人は、コンサート活動を止めなかった。R.オクサコフスキー音楽スタジオは、1945年にも、当機関の伝統に従い、年次的な報告コンサートを開催していた。[154]

その上、1945年以降には、演劇活動を続けていたばかりでなく、この後のコンサート・プログラムにおいては、ロシア風のものが増えてきたという、ポジティブな変化さえもあったという意見が述べられている。ハルビンの劇場で活動していた俳優のY.クリボルツキイは、当時について、次のような回想を残している：

長い時期にかけてアクセスが制限されていた、我々ロシアの文学、歌、映画にとっては、まるで開幕のような時期となった。新テンデンシーが流入し、特に若者の愛好クラブ活動が発展してきた。[155]

Y.クリボルツキイは、1945年のハルビンの文化活動における最も幸せな出来事として、中東鉄道会館の再開とそれに伴う、交響楽団、合唱団の再編成、バレエ活動の復活ということを取り上げている。[156]

以上のことから、終戦後の満州に留まっていた「白系」ロシア人の運命は、ソ連兵の「手中」にあり、逮捕されるなどのような被害を避けられた人は、幸運であったと思われる。最も弱い立場に置かれた人としては、主人、息子などがソ連に連行された女性と、芸術以外の特技を有していない芸能人が示される。

それと同時に、劇団などは、コンサート、演劇を続けられたことに限らず、満洲におけるロシア人の文化活動が開花するようになったということも明らかになった。しかし、ソ連兵の到来後に、最も利益的な立場にあった社会グループとしては、1935年に職場を失ったロシア人が取り上げられる。ソ連兵の支援により、このロシア人は、中東鉄道に再就職できた。

---

[154] Кожевников Ж.（2002）Ф.Е. Аксаковский - выдающийся музыкант и педагог. На сопках Маньчжурии, 92 Сс. 4-5.
[155] Криволуцкий Ю.（2007）Последний Театр Харбина. РА, 22. С. 59.
[156] Криволуцкий Ю.，同上、59 頁。

まとめとして

以上のことから、満洲における「小さなロシア」であったハルビンにおいては、全てのロシア人が希望通りに就職できたわけではなかったことが明らかとなった。その上、高収入をもたらす安定した仕事についても、政治的状況が絶え間なく移り変わる満洲においては、幸福な状況が永久的に続くことは保証されなかった。

満洲におけるロシア人の就職状況が悪化した主な時期としては、ロシア内戦後に満州に流入した「白系」ロシア人による満洲のロシア系ディアスポラにおける混乱の誘起、多くのロシア人にとって経済的な基盤となった中東鉄道の経営権の移り変わり、「満洲国」の樹立、第二次世界大戦の開始といった終戦に伴う混乱状況を挙げられる。

しかし、回想記が示しているように、満洲に移住した多くのロシア人の経済的状況は、「外」からの影響ではなく、個人的適応能力、自己を変えさせる意志の強さというファクターによって決められたものであった。N．イルイナは、このような人生の教訓を受け継いでいため、「イミグレーションは人間の本質を表面に出した」という考えを述べた。そして、長い期間を通じて、満洲に住んでいた G.メリホフは、ロシア人の移民者の全体活動を以下のように評価した:

> 人々は、労働がどれ程卑しくても、嫌悪感を抱けず、稼ぎと発展が望める仕事を掴んだ。しかし、それよりも、最も重要なことは、彼らが空しくても手を束ねることなく、新しい専門を身に付けたり、一所懸命働いたり、（略）頑強に無数の障害を乗り越えたり（略）した。[157]

ここまでは、1920－1940 年代の満洲におけるロシア人の労働状況を検討してきた。次項においては、当時におけるロシア人の住宅状況について追究する。

2.2. 住宅、アパート

ロシア人移民者の作家の V.ペトロフは、「スンガリー河畔の町」において、ハルビンの建設速度をアメリカの「ワイルド・ウェスト」と比較している。I.カプランによれば、帝国ロシアの政府による巨大な投資のおかげで、ハルビンは、短期間的に、小さい田舎町から満洲における産業の中心地までに拡大した。技師の希望通り、ハルビンは「街－庭」の形で建設された。ロシアの伝統に従って、多くの住宅は庭で囲まれ、住宅の間のスペースに、公園のある小道が設けられた。そして、全ての企業は町の郊外に建設された。回想記において、ハ

[157] Мелихов Г., 同上、61 頁。

ルビンは「住むための快適な街」として評価された。[158]

ロシア革命後の亡命人の流入の結果、ロシア系ディアスポラにおける社会地位のコントラストが深まった。ロシアから財産を輸出することができたロシアの実業家は、高級アパートメントを購入した。その一方で、E.ヤコブソンが回想するように、「(ロシアの革命後に逃亡した) 貧乏な「白系」軍人はハルビンの郊外で、手早くあばら家を作った」。

1920年代に中東鉄道に務めたロシア人の給料は高かったため、彼らは安定した生活をしていた。その一方で、1917年の革命後に、ハルビンに逃亡したロシア人の中に、上流社会に属する人も、貧乏な人も多かった。本章では、ハルビンに居住したロシア人の回想記を分析し、様々な社会層に属するロシア人の居住条件及び、住宅のインテリアを飾る際のロシア人のテーストの特徴、そして、ロシア人移民者の理想的な家の見方を検討する。

2.2.1. 中東鉄道の職員の住宅：職場における地位を反映する住宅

中東鉄道に勤務したロシア人が、異郷である満洲において長い期間留まった理由としては、給料が高かったことと、住宅が利益的条件で提供されたという、二つのファクターが挙げられる。1924年に、中東鉄道の経営が、中国側に渡された時、ロシア人の職員は、多くのベネフィットを失ったが、ロシアから逃亡した多くの「白系」ロシア人と比較すれば、まだまともな生活を送っていたと思われる。

中東鉄道の営業部に属していたロシア人は、想像を超える贅沢さに恵まれたといっても過言ではない。在満洲ソ連外交官の娘、A.スラブツカヤが記すように、父の友達の中に、中東鉄道において高いポストを占めていた人々は沢山いた。中東鉄道の営業部職員の家を記述する際に、その住宅について帝政ロシアの田舎の屋敷と比較する:

> 家は広々として快適であった。特に飾りつけはしておらず、コーニスと土台には歯状の装飾をなしている煉瓦の積立がある、そのような建築物である。窓は広くて、入口の階段は石で作られていた。そして、大きくて、よく手入れされたガーデンには孔雀等の珍しい動物が歩いている。[159]

もう一人の中東鉄道の管理員の夕食会に訪問した時、豪華な二階建ての一戸建て住宅を記憶していた:

---

[158] Капран И., 同上、91 頁。
[159] Славуцкая А., 同上、16 頁。

ガラスの壁と同様の扉で、熱帯植物が植えられていた巨大な温室から離れたところにあった、噴水のある宴会場がどれ程私を感動させたか、未だに覚えている。二階には、ベッド・ルームと小さいラウンジがあった。[160]

中東鉄道長官の代理人も「巨大な庭」と「孔雀と七面鳥もいる鳥小屋」を持っていた。そして、ランクの高い職員の居住状況も、一般人の職員を凌いでいだ、と述べている:

ランクの高い中東鉄道の従業員は、ハルビン市内に位置する個人住宅に居住していた。その住宅は、同じランクの、帝国ロシア時代の官僚から受け取ったものである。勿論、彼らの給料は、官僚と比較できない程少なかったが、立派な住宅に住めるため、ちょうど足りるものであった。[161]

その豪華さの背景に、中東鉄道の一般人の労働者の生活状況が、非常にシンプルなものとして見えていた。A.スラブツカヤの父の友人であった、エフィーモフのランクが低かったため、「平屋の家と果樹園は、前より、質素で、小さかった」と記している。[162]

そして、中東鉄道の一般の職員であった、A.クドリャフツェフが回想するように、中東鉄道にサービス・アパートメントを提供される前、一か月の給料に相当する家賃を払って、窮屈なアパートメントに住むしかなかった。中東鉄道の一般人の職員の居住状況は、営業部と比較できないほどシンプルなものであったにも関わらず、それに不満でロシアに帰国したいという人が存在しなかったため、満州における中東鉄道の職員全員、自分の居住状況に満足していたと思われる[163]。

2.2.2 .上流社会ロシア人の住宅、アパートメント：ロシア帝国とヨーロッパスタイルの混合

在満洲ソ連外交官の娘、A.スラブツカヤは、自分の家族の私邸の描写を挙げている。大きくて広々とした住宅にはテニス・コート、果樹園、スケート・リンク、トルコのサウナと、メイドなどのスタッフのための三つの別棟があった。著者によれば、その私邸は古典的なロシア住宅のスタイルで建設されたものである。[164]

外交官は、行政府により提供された住宅において、定められた期間のみ居住しているが、

---

[160] Славуцкая А., 同上、16 頁。
[161] Славуцкая А., 同上、25 頁。
[162] Славуцкая А., 同上、25 頁。
[163] Кудрявцев А. (2005) Мирное житие в Китае: Воспоминания. РА, 14. С. 52.
[164] Славуцкая А., 同上、26 頁。

ハルビンにおいては、「資本主義的」文化が繁栄していたため、実業家、弁護人などのような、高収入をもたらす活動に従事したロシア人は、自分の経済的成功と、豪華な生活様式を強調していた。この点においては、満州における「資本主義的」な雰囲気と、ソ連国内の「共産主義的」な雰囲気の間には、明らかなコントラストが存在したと思われる。

弁護人の息子のV.スロボッチコフが回想するように、家族がハルビンに到着後すぐに、6つの部屋からなるアパートに住むようになった。父はビジネスを拡大したため、家族は10部屋あるアパートに引っ越した。一つの部屋は父のオフィスとして使用された。[165]

N.イルイナは、満洲の有名な実業家のブリンナーの6部屋あるアパートメントを頻繁に訪問した。著者の意見では、そのアパートのインテリアは、中国に居住したアメリカ人とイギリス人のアパートに似ていた。一つの部屋は以下の様に描写されている：

壁の広さに相当するソファー、二ス塗りの座卓、油紙からできたフロア・ランプ、フロア・ランプがおいてあるテーブルには鈴メッキの蝶の巨大な翼が堂々とたっていた。至る所に単色のカーペットと輝いている銅の灰皿。[166]

そして、N.イルイナによれば、そのアパートのインテリアは、ハルビンの他のアパートには似ておらず、特別なものであった。

上流社会に属するロシア人の住宅においては、中国人又は、ロシア人のメイドが務めていた。回想記から分かるように、家主とメイドの関係は友好的であり、ロシア人の主人が中国人のスタッフにあだ名をつけていた程、インフォーマルな関係が形成されていた。
回想記の事例から分かるように、中東鉄道のトップ・ランクのロシア人は帝国ロシアの私邸に似ている住宅を選択したが、実業家のブリンナーは、アメリカ的なデザインのアパートに住まっていた。

住宅の位置づけ、そしてサイズ、インテリの豪華さを通じて自分の社会的地位を誇張するという、ロシア民族特有のメンタリティーが、満州における高収入を持つロシア人の生活様式においても反映されていると思われる。

2.2.3. 貧乏な「白系」亡命ロシア人のアパートメント、住宅：ロシア系ディアスポラにおける下層「白系」ロシア人の無力性が表面に見出されている

貧乏な「白系」ロシア人の居住状況に注目すれば、満洲におけるその社会層がどれほど困

[165] Слободчиков В., 同上、41 頁。
[166] Ильина Н., 同上、26 頁。

窮な状態に陥ったかが明らかである。満州において、貧乏な生活を送っていたロシア人の回想記においては、インテリアの記述は、あまり取り上げられていないが、居住条件は詳しく描かれている。そのことから、貧乏な「白系」亡命ロシア人にとっては、インテリア装飾、住宅の地理的位置づけ、様々な便利性は二次的な意義を持っていたが、多くの場合、住宅を持つこと自体が、幸運として見られていたことが伺える。

1917年の革命後の「白系」ロシア人の到来後に、ハルビンにおける住宅の建設作業は活発化し、建設中の住宅の階数を増やすことも実施されていた。しかし、レンタル住宅の需要が増えたため、多くの家主は家賃の値上げをした。そして、様々な政治的な理由で、家賃は、その後も上昇が続くようになった。このファクターの影響により、貧乏な「白系」ロシア人にとっては、まともな住宅をレンタルすることが、最大の悩みとなった。

N.イルイナは、自分の家族の「無数」の住宅を記述している。親が離婚する前に、家族はかなり良い住宅を借りることができた：

> 漆喰が塗られた鉄屋根の一階建ての家で3つの小さな部屋があった。窓はエゾノウワズミザクラが咲いている小さな庭のほうを向いていた。お風呂、ペチカの暖房、薪によって焚かれていたコンロのキッチンもあった。[167]

1920年代に、両親が離婚して、著者が回想しているように「我々の家族の生活に亀裂が発生した」。その時から無数の引っ越しが始まり、「それらのアパートは前より悪かった」。

> 1932年の春、家主の名前に因んで名づけられた「ヤグノフ」という家に住むようになった。キッチンはなく、アパートでは給食が提供された。（略）1934年に、借金をこしらえたが為に、（略）市立学校の空き教室へ引っ越した。（略）一時的に主な経費であった家賃の負担から解放された。それは、せめてもの救いで、若干の負債の返済を助長した。[168]

多数の貧乏な「白系」ロシア人に支援されたものとしては、多くの家主が家賃支払いの延期を許可したことであった。しかし、長期間家賃を滞留したロシア人は、家主より追求され、侮辱的な扱いの対象ともなった。

N.モクリンスカヤは、幼いころに母と妹と一緒にハルビンに移住したが、母は、安定した

---

[167] Ильина Н., 同上、4 頁。
[168] 同上、9 頁。

仕事を持っていなかった。著者は、当時住んでいた家における雰囲気を、次のように記述している：

私たちは、三人で一つだけの、低いベッドに寝ている。そのベッドは、足が三つしかなく、一つの足の代わりに、切り株のログが使われた。マットレスの代わりに、ダンプで発見した古着の塊ばかりを、その上には、私たちが持っていた二枚だけのきれいなシーツが掛けられていた。ブランケットは、温暖を保持することを助けた、全ての持ちものを使用していた：穴だらけの薄いブランケット、私たちの好きな毛皮コート、服装としては見られない衣服。[169]

K.ズダンスキーは、自分の家族の無数の引っ越しを記述しており、その中のそれぞれの住宅の様子に注目すれば、満洲における「白系」ロシア人の人生の浮き沈みをも辿ることができる。K.ズダンスキーの家族の人生においては、幸運な時代と悲運な時代が移り変わったことが分かる。一つ目のアパートは、ハルビンの良い地域に位置されていた。その次のアパートは、前より小さく、壁には深い穴が沢山あったため、雨が降った際、雨漏りし、雨水が壁に流れていた。その次のアパートのサイズは、前より大きかったが、住宅は非常に汚い区域に立地した。その次のアパートは、4つ部屋があったため、2つの部屋を貸し出していた両親は、家賃の負担を減らすことができた。その次のアパートのトイレの壁は、冬になると氷ができ、それ以外の部屋においてはストーブを使わないと、非常に寒かった。しかし、夏期には、この部屋は非常に暑くなったが、太陽光は部屋の中に入らなかった。著者が回想しているように、両親が快適なアパートメントを見つけられなかった理由は、家賃が非常に高かったからである。[170]

家賃を節約した「白系」ロシア人は、住宅に一つだけ部屋を借りることができた。そのような住宅には、安い給食も提供された。

貧乏な「白系」ロシア人農民は、郊外で住宅を作り、「ナハロフカ」という小さな村が現れたという。[171]

A.スラブツカヤは母と一緒に「ナハロフカ」を訪問したことがあった。作者が記述しているように、ロシア人は屋根の低い住宅に住んでいた。そして、村の道には車も馬車も通行していなかった。「ナハロフカ」の一つの住宅のインテリアを以下のように記述している:

[169] Мокринская Н., 同上、82 頁。
[170] Зданский К.（2007）Мое Харбинское прошлое. РА, 26. Сс. 26-29.
[171] Якобсон Е. (2004) Пересекая границы. М. С. 54.

純白までに磨き抜かれた床、質素で数の少ない家具、窓台の上には花瓶、そして至る所に（略）様々な白い編み物。（略）部屋の角には飾り品とランプが掛けられていた。[172]

以上のことから、貧乏な「白系」ロシア人農民でさえも、自分の質素な家において秩序を保っていた。

このように、貧乏な「白系」ロシア人の生活状況は、多くの場合、極端な貧困に近かった。満州においては、20世紀の初頭から住み着いたロシア人の中に、下層に属する一般の労働者もいたが、本当の困窮に直面したのは、多くの場合教育レベルの高い「白系」ロシア人であった。

2.2.4. 上流社会、ミドル・クラスのアパート・住宅のインテリア：本物の「家らしさ」を目指すこと

多くの「白系」ロシア人の女性は、ハルビンに移住してからは、住む所において、家らしい雰囲気を創造することを目指していた。例えば、ダンサー、詩人の L.アンデルセンの家族は、ハルビンに到着して一年ぐらい、列車の一流の車両に住んだことがあり、その時「家らしさ」の不足を強く感じた母は、ロシアから持ってきた全てのティー・セットを取り出し、テーブルと棚をそれによって飾った。[173]

「白系」ロシア人の住宅のインテリアの重要な特徴としては、インテリア品の大部分が、ロシアから持ってくることができたということが挙げられる。N.ラレティナは、リューバという自分の叔母の住宅を記述する際、この家族は、多くの「白系」ロシア人と同じく、「（ロシアにおける）居住地から移住した時、（略）財産を、細かくてつまらないものまでも、全てを持って行かれた」と述べている。[174]

そして、著者の叔母は、複数の大きくて豪華なティー・セット、様々なサイズの皿などのような食器を沢山持っていた。「白系」ロシア人は、多数のゲストを招待することを好み、晩餐会を頻繁に開催していた。沢山の食器を持つことは、ロシア文化特有のホスピタリティのシンボルとしても見ることができる。

叔母の住宅のもう一つの重要な特徴は、レンタルされた住宅内部にも、持ち家のように飾られていたということであった。N.ラレティナは、自分の印象を次のように表現している：

（この家族が住まっていた）この全てのアパートメントのインテリアは、（因みに、私

[172] Славуцкая А., 同上、32 頁。
[173] Андерсен Л., 同上、14 頁。
[174] Лалетина Н. (2009) Сестры чулковы. РА., 33. С 8.

が覚えているのでは、家族が三回くらい引っ越した)、このオーナは亡命者ではなく、移住した経験もなかったように見えていた。この家族は、この地域で完全に住み着いていた。[175]

叔母の住宅においては、いつも完璧に秩序が保たれ、食器もいつも輝いていた。N.ラレティナの記憶においては、叔母のアパートの次のような「ディテール」が残されている：黒いスピッツ、自分の手によって刺繍されたソファーのピッロー、倉庫に保管された手作りのマリネードの小包。[176]

N.ラレティナは、自分の叔母の住宅を評価する際、その快適さとインテリアの豪華さにおいては、オーナの心の広さ、人との付き合いに関する関心の深さが反映されていると述べている。

「白系」ロシア人のインテリアのもう一つの不可欠なディテールは、社会層に関係せず、一品か複数のアイコン、或は、部屋の角に掛けられた複数のアイコンの棚、というものがある。

回想記に登場するロシア人は、住宅のインテリアをロシア的なスタイルで飾っていた。在満洲ソ連外交官の娘、A.スラブツカヤが回想するように、母は、ハルビン郊外に住む貧しいロシア人女性の作るロシア的スタイルの編み物製品を好み、定期的にその女性を訪ねて、様々なテーブル・クローズ、カーペット等を注文した。

N.イルイナの家では、「記憶」の役割を担った卓上写真は重要なインテリア品として見られていた。N.イルイナが回想するように、「無数の引っ越しにもかかわらず、お祖母さん、お爺さんの写真を、相変わらず、テーブルに飾っていた」。しかし、家族が持っていた家具を記述する時に、N.イルイナは「無数の引っ越しで不変であった長持ち（ベッドとしても使用された）と、コット、剥げた食器戸棚」といったものだけを挙げている。

友達の家を訪問した時、N.イルイナは「白いテーブル・クローズ、黄色いランプシェード、サモワール」といったロシア的なインテリア品を思い出している。

東洋風のエキゾチックなインテリア品もロシア人の関心を引いていた。その理由で中国製瀬戸物、花瓶、食器、ファン、照明、オットマン、マット等は多くのロシア人のアパートに飾られていた。東洋風のインテリア品は、特に上流社会に属するロシア人に好まれていた。A. スラブツカヤは、中国のインテリア品を買うため、ハルビンの「中国の街」を定期的に訪問した。

満洲における巨大なタバコ工場長の娘の L.ロパトは、自分の家を以下のように記述して

---

[175] Лалетина Н. 同上、6-7 頁。
[176] 同上、6-7 頁。

いる：

中国人の召使と東洋風の細工品は、ハルビンにおける私たちの家を極めてエキゾチックなものにした。それらはクリスマスの祭りに（略）家におとぎ話の着色を加えた。[177]

このように、満洲における上流社会とミドル・クラスに属する「白系」ロシア人は、まるで自分が満洲において生涯ずっと居住したいかのように、本物の家らしいインテリアを創造することを目指した。ロシア人の住宅のインテリアにおいては、快適さへの憧れ、ロシア風の雰囲気を創造すること、それと同時に、東洋風の「味」を加える希望、信仰心の深さ、過去に関する記憶を保存する欲望、ホスピタリティ、ゲストに良い印象を与える希望が反映されていた。

2.2.5. ロシア人の価値観を反映する住宅：贅沢さより、幸せな雰囲気の重要性

ロシア人は、異郷に住みながらも、ロシア風のホスピタリティの文化を維持することができた。イミグレーションの状況においては、コミュニケーション、団結性が特に重視されていたため、多くのロシア人は、居住条件に完全に満足していた場合においても、ゲスト、様々な祭りのお祝いがなければ、その住宅は「家らしい」味を失っていた。

満洲における自分の住宅についてのロシア人の回想は、次のような特徴を持っている。E.ラチンスカヤが、第一に思い出していることは、インテリア、部屋の位置づけ等の物質的な面ではなく、それよりも自分の家に集まった友人との晩餐会、祝祭の豪華な祝い方、その人とその行事により創造された楽しい雰囲気であった[178]

E.ラチンスカヤが述べているように、ハルビンにおいては、小規模な町特有の人間関係が形成され、相手に対して親しくし、純粋な態度が大切であるという、暗黙のルールがあった。この理由により、予約なしに、突然家に誘うこと、或いは誰かの家に「サプライズの訪問」をすることは、頻繁な出来事であった。E.ラチンスカヤは、当時を次のように記述している：

夏の夕方、ガラス張りのベランダには、黄色いランプシェードがライト・アップされた。多くの場合、人々は、睡眠前にお茶会を、家の近くにあった庭で催していた。そこには、テーブルと「必然的な」サモワールも運び出された。その所からは、親しく、

[177] Лопато Л.（2003）Волшебное зеркало воспоминаний. М. С. 23.
[178] Рачинская Е.，同上、25 頁。

楽しそうな声、ギターのくぐもったメロディーが聞こえ、開けた窓からピアノの音も届いてきた。この家を通った時、ちょっとだけ寄ってみたいと思う。この欲望を抑えることが大変だった。家に入ったら、家主は、ゲストがご馳走に応じないと、退出することを許さなかった。[179]

L.ロパトは、自分の豪華な家を回想する際、そこにはレセプション、そしてコンサート、夜の演奏会のための部屋があったと述べている。この家においては、「商人、俳優、音楽家、ドイツ人、イギリス人が集まった」。著者は、住宅に面白そうなパーソナリティ、活動的な人を招くことに、20世紀初頭のロシアの文化の特徴を見ていた。[180]
同じく、在満州ソ連総領事の娘の A.スラブツカヤの母も「ファイブ　オ　クロック」（英語の"five o clock"の直訳）という茶話会を開催し、ゲストとしては、ハルビンに勤務していた様々な国の大使の妻を誘っていた。[181]

N.イルイナの母は、ハルビンに在住する知的、文化的エリートを代表する詩人、作者、記者などを、頻繁に自分の家に招待し、ゲストと一緒にお茶を飲みながら、文学、哲学、歴史などのようなテーマについて、意見交換、議論を行っていた。N.イルイナの家族が、困窮に陥った時、母にとって失望的なことは、居住状況が悪化した、という問題ではなく、そのような集会が過去のものになってしまった、ということである。[182]

回想記の著者は、必要な食料品さえも不足するという非難をもたらす戦争時代においても、パスハのような伝統的祝祭を開催し、この祭りの開催を通じて、大変な時代をも乗り越えることができた。

以上のことから、満洲におけるロシア人の家が、自分自身の「要塞」というより、親しい人と交流できる所として意義が深いものであったと思われる。

まとめとして

「小さなロシア」ハルビンにおけるロシア人は、ロシア風の住宅に居住し、ロシア的なインテリアを作ることも目指していた。上流社会は、豪華な住宅を持ち、そのインテリアの上品さを東洋風のインテリア品により補足し、このように、資本主義的社会特有の、贅沢な生活様式を誇張することができた。金持ち階級とミドル・クラスは、まるでハルビンを生涯居住する地として見たかのような、「家らしい」雰囲気を創造していたが、貧乏な「白系」ロ

[179] Рачинская Е., 同上、26 頁。
[180] Лопато Л., 同上、23 頁。
[181] Лопато Л., 同上、21 頁。
[182] Ильина Н., 同上、14 頁。

シア人は、居住地を保つためにも、一生懸命努力しなければならなかった。回想記において取り上げられている記述は、満洲における貧乏な白系ロシア人がどれ程無能であったのかが、表面に表れている。しかし、回想記を通じて、ロシア人の価値観について検討すれば、コミュニケーション、団結性を重視していたロシア人にとっては、親しい人との集合、様々な祝祭を欠いている住宅は、「家」としての価値を失っているという態度が形成されていたと思われる。

本項においては、1920－1940年代の満洲においけるロシア人の住宅状況を検討してきた。次項においては、「着衣」という生活面の描写を行う。

2.3. 着衣

衣服、振る舞いは、多くの場合、マーキング、分化としての機能も果たしており、社会の様々な層においての理想を表すものである。[183]

歴史、文学などによって形成されたハルビンにおける「白系」ロシア人女性のイメージは、個性を表すファッションのセンスの卓越性と敏感な美しさが連想されている。ハルビンに居住していたロシア人女性たちは流行のファッションを追ったり、理髪店等を定期的に訪問したりした。1920年代から、給料の高い中東鉄道の従業員による大規模な需要を見込み、仕立のサービスを提供する民間企業及び既製服や靴を販売する専門店が増えてきたため、ロシア人の女性は、広い選択肢を持っていた。それに加え、ハルビンには70店舗以上の美容サロン、理髪店が営業していた。視覚メディアも、若くて綺麗な外見を目指したロシア人女性の要望に応え、ハルビンに出版された『ルベジ』などの雑誌には、「顔にぴったり合うヘア・スタイル」を提供したサロンの広告も沢山出された。

ロシア人の男性も、ファッショナブルな着衣に関心を持ち、作者の V.ヤンコフスキーはその一人であった。V.ヤンコフスキーは回想記において、ハルビンの店のサービスを高く評価している：

ハルビンの店は、(略) 拒否できない程豊かな選択を提供した。しかも、商品の質はとても良く、服と靴は、客の注文に応じて、どのサイズでも至急に出来上がった。[184]

『チューリン&Co.』という最も大きいデパートも含め、多くの販売店には後払いのサー

[183] Забияко А., Эфендиева Г., 同上、98 頁。
[184] Янковский В.（2006）Харбин-папа Рубеж: Тихоокеанский альманах, 6. Сс. 367-374.

ビスが提供され、質屋なども沢山あった。

外見の美しさを崇拝することは、ハルビンの一つの特異性であった。ロシアからハルビンに到着したばかりの著者の V.ヤンコフスキーは、ロシア人の女性について以下のような印象を述べた:

私は、キタイスカヤ通りに出た。(略) すると、あっけにとられた。舗装全幅にわたり生きている美人の絶えまのない流れは私の方へ向かっていた！　毛皮のコート、帽子、マントウ。(略) 私は韓国と日本に行ったことがあるが、ヨーロッパ人女性のそのようなパレードを目撃したのは始めてのことだった。[185]

ロシア人の回想記においては、「着衣」というテーマが、白系ロシア人ディアスポラの生活における二つの側面を明らかにしている。

一方では、上流社会、中流社会における、生活様式、価値観が記述されているが、もう一方では、貧乏なクラスの心理的問題が表面に表されている。

2.3.1. ロシア系のデォアスポラの上流社会のファッション：エリート層のコード

満州における上流社会を代表するロシア人の中では、大企業、世界的な規模で貿易を行う会社の経営者が沢山存在し、そのロシア人は、贅沢な生活を送っていた。そして、ハルビンにおいては　社会的交流が活発的に行われ、オペラ、バレエなどのコンサート、社交ダンス会、晩餐会などのような社会的行事が頻繁に催されていた。本項で既に述べたように、ロシア文化特有のホスピタリティの規則通り、ロシア人は、自分の住宅においても小規模、大規模のお茶の会、晩餐会などを催していた。このように、小さな街のハルビンにおいても、ロシア人の富者は、世間に出る機会が多く存在し、ロシア人のエリートは服装を通じて、自分の高いステータスを強調することができた。

例えば、タバコ実業家の娘、L.ロパトは母の服装について以下のように回想している:

彼女は (母について) 優雅なドレスが大好きだった。(略) 絹からできたゆったりした紫、グリーン、オリーブ色のドレス、鍔の広い帽子、アンティークなスタイルのドレス、緻密な細工で作られた貴重な服。[186]

---

[185] Янковский В., 同上、267-374 頁。
[186] Лопато Л., 同上、23 頁。

その上、L.ロパトの家族が上海に引っ越した時に、母の全ての服を運ぶため、数十個のトランクが使用された。

在満洲ソ連外交官の娘の A.スラブツカヤの母もハルビンの仕立屋のサービスを定期的に利用した:

> 母の服は地味だったが、彼女はドレスの作成をハルビンの最高級の縫製工房に注文して、粋な身なりをしていた。ドレスを「アンツアネッタ」サロンで、無数の帽子を「エスキンド」で、上着を「ポリジャック」で注文した。[187]

このように、エリートに属する女性たちは自分の住宅で巨大なワードローブを持ち、自分の服装を通じて、小さい街、ハルビンにおける様々な社会的行事に、豪華さを与えただけではなく、自分の卓越性も表すことができた。

2.3.2. ハルビンにおけるファッションのイデオロギー性:「功利主義的」ソ連の哲学とのコントラスト

衣服は、個人の経済的可能性、スタイルのオリジナル性を表す方法に限らず、社会全体の価値観を反映するものでもある。前章で既に述べたように、満洲に移住した「白系」ロシア人は、帝政ロシア特有の文化と価値観を異郷の地にもたらした。衣服を通じて、個性を表す権利も、「白系」ロシア人の価値観の一つである。

その一方、ソビエト・ロシアにおいては、功利主義のアイディアがプロパガンダ化されたため、個人性のいかなる表現方法も(「宗教」、「ファッション」)禁止されていた。ソ連の雑誌には、女性のイメージは一般化されて、雑誌のカバーを見ると、名前も持っていない「自発的にコルホーズへ向かった労働者」の写真に気づくことができた。また、もう一方では、回想記の事例が証明するように、ハルビンにおけるロシア人女性たちは、「個人性」を表現するため、流行のファッションも使用していた。

満洲における「白系」ロシア人の文化、価値観は、優先的な立場を取っていたため、個人の外見に関する社会的基準の影響は、ソ連人も避けることができなかった。もちろん、満洲に存在したソ連風の教育機関などにおいては、ソ連のスタンダードに相当する制服が使用され、殆どのソ連人は、満洲においてもソ連風の衣服スタイルに忠誠心を見せていたが、満洲においては彼らの外見と「白系」ロシア人のスタイルとのコントラストが明らかであったため、自分の価値観を裏切らなかったソ連人は強い批判の対象となった。しかし彼らの中で

---

[187] Славуцкая А., 同上、32 頁。

も「白系」ロシア人の価値観に適応する方法を選んだソ連人も存在していた。
ソ連人と「白系」ロシア人のスタイルにおけるコントラスト性は、特に満洲に短い期間訪問した人の注目を引いた。1930年代にハルビンを訪問したアメリカ人俳優の W.ロジェルスは、その後に、U.ボラという上院議員に宛てられた手紙において、以下のような印象を表現した:

私は「白系」女性と「赤系」女性を見分けられるようになった（略）彼女は可愛かったら、「白人」だよ！（略）その「赤系」は非常に荒っぽく見える。[188]

在満洲ソ連大使の娘、A.スラブツカヤが回想するように、ソ連からハルビンに来たばかりの母は、自分の外見がハルビンに住んでいたロシア人女性たちを驚かせた:

アンツアネットというハルビンのクチュリエは、母に「そのようなコートで（母がソ連から持ってきたコートについて）（略）世間に出るのはみっともないことだ」と囁いた。[189]

著者が加えているように、批判の対象となったコートは、ハルビンへの移住の前、ソ連において、長年にわたって使用されていた好きな服装であった。
A.スラブツカヤは、母と一緒に、ハルビンにおいて「支配していた」「白系」ロシア人の価値観が染み込んでから、ソ連人の女性のスタイルに関する、自分の見方が変わってきた。時間が経ってから、著者は、ソ連人のスタイルを強く批判するようになった:

夏にソ連からハルビンに派遣された若い女性たちは、ソビエトの制服を着て到着した：ブルーニットジャージとスカート、そして白い布の靴。列車から彼女たちはすぐに領事館に案内されたが、（略）町に出ることが禁止された。やがて、彼女たちが外に出られるようにと、アクティビストの中から誰かが選ばれて、皆のために完全なセットの服を買ってきてくれた。[190]

「衣服」というコードを通じて、「白系」ロシア人は、ソ連から全ての「ニュー・カーマー」を見分けていた。N.イルイナが回想するように、ソ連から来たばかりの『ブリンナー&

[188] Забияко А., Эфендиева Г., 同上、98 頁。
[189] Славуцкая А., 同上、33 頁。
[190] 同上、33 頁。

Co』という満洲の大規模な運搬会社の経営者の新しい妻が、著者が勉強していた学校にはじめて現れた時、生徒たちは彼女の外見を以下のように評価した:

若い未完成人であった私たちは、帯で締められた地味で短い毛皮外套、カールされなかったブロンドっぽい髪の房、短いヒールの茶色の靴に注目した。それら全ては、私たちが考えるエレガントさについて相当しなかった。[191]

そして、B.ブリンナの前妻との比較を挙げて、

マリヤはもっと立派で、もっとエレガントだった。いつも姿勢が良く、高い自尊心も感じられた。その一方、彼女は（新しい妻について)、背中を屈めて、座っている。帽子をそこそこにかぶって、そこから髪の房は出ている。毛皮外套も特別に珍しいものではない。灰色のヤギの毛皮、最も地味で、半分は男らしい、スポーツ的なスタイル。[192]

このように、「外見」というファクターは、満洲における「ソ連人」と「白系ロシア人」の間のビジュアル的なものに限らず、イデオロギー的な相違点をも、表面に表されていた。それと同時に、「白系」ロシア人ディアスポラにおいて定められた「外見」に関する基準は、「白系」ロシア人の価値観を完全に排斥していたソ連人の見方さえも変えさせる程、強い影響力を持つものであったと思われる。

2.3.3. ハルビンにおける貧乏な「白系」ロシア人：「ドレス・コード」の抑圧

前項で既に述べたように、ハルビンにある「白系」ロシア人ディアスポラにおいては、綺麗な外見を持つことが、暗黙のルールであった。そして、多くの貧乏な「白系」ロシア人も、衣服のことを、「自尊心」、「ステータス」のシンボルとしても見ていたため、日常的な服装に対する軽率な態度を自分に許さなかった。

作者の N.イルイナが回想するように、親の離婚後に、良い服を買うことは大きい問題となったため、服装についての心配は、永遠に続く問題として見られていた:

私にとって、ストッキングを買うことはいつも問題だった。そして、靴の不足の問題も永遠的に悩まされた。[193]

---

[191] Ильина Н., 同上、25 頁。
[192] 同上、25 頁。
[193] 同上、12 頁。

多くの貧乏なロシア人に共通させる問題としては、教育機関の制服というものがあった。私立教育機関はもちろんのこと、国立教育機関においても制服が要求されていた。

N.モクリンスカヤは、妹のタマラと一緒に、節約を目指した母により、低価なソ連の学校に通わされた。この学校においても、ソ連特有の制服が義務付けられたが、母が両方の娘に対して、まともな制服を供給することができなかったために、下の娘のタマラだけに、買うことを決めた。上の娘の N.モクリンスカヤは、新しい制服も持っていなかったため、学校時代を、不幸な思い出として回想している：

私はタマラ（妹の名前）を恨んでいた。彼女はきれいな制服を常に着ていた（母は、それを買うため、持っていたお金を全て使い切った)。そのドレスの色はグレーで、黒いアプロンも付けられ、衿とカフスは白いレースで飾られていた。[194]

1930年代に、N.イルイナの家族は窮境に陥った。しかし、母は、娘たちに最高の教育を与えることを目指していたため、コネなどを使用して私立学校へのアクセスを見つけた。しかし、私立学校においては、制服の制度が特に厳しかったため、下の娘のオリガの制服について、母の E.ヴォエイコヴァは、自分の日記に、次のような思い出を残している:

（負債を列挙する）そして、今日は、グリャ（オリガという下の娘の愛称）のスカートのクリーニング代を支払わないといけない。そうしないと、学校に入ることを許されない。皆の学生はもう、夏の制服を着ているが、彼女一人だけ、彼らの中で、「青色スポット」のようである。[195]

娘のオリガも、自分の日記において、以上に挙げられた制服に関する問題について回想し、適当な制服を持っていなかったことによる、羞恥心に悩んでいた[196]と述べている。しかし、貧乏な「白系」ロシア人も、自分の子供が社会的生活に積極的に参加できるように努力し、卒業式、学校の演劇会などのような行事の際には、自分の子供の服装が、他の学生に劣らないように努力していた。

制服に関するもう一つの問題としては、同一性を象徴する征服の様々なディテールに関しては、両親が競争したこともあった、ということが挙げられている。N.シャロヒンは、自

194 Мокринская Н., 同上、108 頁。
195 Войейкова-Ильина Е.（2010）Нам не уйти от родины навеки. М: Русский путь. С. 99.
196 Ильина-Лаиль О. (2007) Восток и запад в моей судьбе. ВИКМО-М. С. 52.

分の学校について、学生は両親の経済状況に関わらず、同様の黒いブラウズ、ズボンとキャップを着ることが義務付けられたと述べている。しかし、両親は適当なキャップを選ぶことに深い注意を払ったため、キャップを購入することにかなりの経費がかかったこともあると述べている。[197]

回想記から分かるように、子供と青年世代においては、社会的活動に参加すること、ある社会グループに属性を感じることが特に重要であった。この状況においては、ドレス・コードに従う必要性も強く感じられていた。

例えば、青年世代だった N.イルイナは、自分の家族が困窮と戦っていることを把握しながらも、自分の年齢特有の、綺麗な外見を持つ欲望も抑えられなかった。一つのエピソードにおいて、著者は、長い間、買いたかったブラウズを、我慢できなく買ってしまったことについて回想している。その行為に後悔していた、N.イルイナは自己を「犯罪者」、「浪費家」、「狂人」と名づけた。家に帰った時、母の怒りの対象となってしまい、初めて母の涙をも目撃した。このことから、母が貧乏な生活からどれほど疲れていたかが明らかになった。[198] N.モクリンスカヤの母は、イミグレーションの状況において心理的にダメージを受け、心が折れてしまい、自分の子の面倒や家事などを止め、浪費を繰り返していた。家族における問題は、当時、学校で学んでいた N.モクリンスカヤの社会的生活にも影響を与えた。著者は、学校の演劇会では、トンボの役を取ったエピソードを取り上げている。N.モクリンスカヤは、辛うじて母にコスチュームを作成することを説得したが、演劇会の直前の日に、母が約束を忘れてしまう。当時、N.モクリンスカヤにとっては、この演劇会に参加することが重要なことであったため、「涙をこぼしながら」知り合いの女性の支援を頼んだ。著者は、演劇会のコスチュームに関する事件を、移民生活の困難の抑圧の元で崩壊された家族の悲劇を象徴するシンボルとして取り上げている。[199]

しかし、「貴族」に属していた「白系」ロシア人の中に、綺麗な外見であることを、自尊心が残っていることとして受け止めていた人も存在しており、金銭的問題を抱えながらも、自分の綺麗なスタイルを支えていた。帝政ロシアに居住していた頃に、多くの女性は縫製を学んだことがあり、この特技が、満洲に亡命した多くの家族の助けになる。例えば、N.イルイナは自分の母について、「自分で仕立て直されたドレスを着ても立派に見えた」ということを書いている。そして、貧困に陥っても、N.イルイナの母は、下の娘のオリガが学校の卒業式に参加できるように、ドレスを注文した。仕立屋に支払うため、母は最後に残ったダイアモンドの指輪を担保にし、質屋に入れた。そのようにして、「ウエストに花とレースの

---

[197] Шарохин Н.（2007）Мой Харбин. РА, 22. Сс. 50-56.
[198] Ильина Н., 同上、12 頁。
[199] Мокринская Н., 同上、114-116 頁。

ブーケが付けられた、シルバーのレースで飾られた長くて白いドレスが縫い上げられた」ため、卒業式という「挑戦」を乗り越えることができた。[200]

このように、貧乏な家族における服装に関わる最大の問題としては、子供が完全な社会的生活を送ることが出来なかった、ということが挙げられる。そして、多くの場合、服装に関する、貧乏な「白系」ロシア人の悩みは、社会において形成されたルールとスタンダードによって促された問題であることが明らかになった。

まとめとして

このように、在満洲ロシア系ディアスポラにおけるファッションのテンデンシーは、地域において活動していた企業、実業家の努力、「白系」と「赤系」コミュニティにおいて定められた価値観、満洲に形成された富裕層の存在、という「外」のファクターと、個人的アイデンティティ（例えば、満洲に移住してから、貧困に落ちた場合においても、貴族としての自己定義)、特別の年齢特有の精神的要求、という「裏」のファクターにより定められたものであることが明らかになった。外見に関する「白系」ロシア人の価値観は、優先的な立場を取り、ソ連人のファッションのセンスにも影響を与えたことがあった。それと同時に、ロシア系ディアスポラにおいて定められたドレス・コードは、貧乏な家族にとって大きな負担となり、若い世代が完全な社会的生活が送ることができなかったという状態までに至ったことがある。

本項においては、1920－1940年代の満洲における「着衣」という、ロシア人の生活面を描写してきた。次項においては、ロシア人の食生活について、検討する。

2.4. 食事

1920－1940年代の満州におけるロシア人の食生活に影響を与えた主なファクターとしては、その地域において、ロシア料理の作成のために必要な材料が手に入れやすかったこと、それと同時に、多民族の共生の地であった満洲においては、様々な国の食文化にアクセスがあったことが挙げられる。そして、「食事」の供給の状況は、関東軍の支配下にあった満州国においては、次第に悪化し、第二次世界大戦の時期と、終戦の時期において、多くのロシア人が飢餓に直面する状態にまで至った。

ロシア人の回想記を通じて、満州における様々な社会層に属するロシア人の食生活について、次のようなファクターが明らかになった。

---

[200] Ильина - Лаиль О., 同上、35 頁。

2.4.1. 1920－1940年代： 様々な社会層に適する食料品の多種多様性

満洲におけるロシア人は、収入に相当した食品を買った。（I.カプラン）1920年代にハルビンに移住した作家の V.ヤンコフスキーは、ハルビンの食料品店を訪問した時、選択の広さに感激した:「店では、「鳥のミルク」だけは販売されていなかった。多様なチーズ、キャビア、ハム、燻製、（略）様々な種類の魚、珍味、菓子類等」。

そして、様々な販売店は、都市に限らず、郊外にも位置した。G.メリホフの父は、中東鉄道の様々な駅で、以下のような食品を見た:

> デゥイシンシャンの駅で、意外とおいしかったピロシキが販売されていた。アニダ駅で素晴らしいミルク製品があった。ツィツィカルにおいては夏と秋の時期は、スイカで有名であり、チャンラニツニは素敵なボルシチ。南の線はフルーツを供給し、そして、ヤヲミニ駅は無数の鶏肉、ガチョウ、アヒル、そして、鳥もつの無数の千ものあるバッグを販売した。東の線はベリーのプランテーション、ワイン造りと素敵なビールで有名だった。[201]

G.メリホフが中所得層に相当する自分の立場から、満洲における食料品の選択を評価し、豊かな野菜、フルーツ、肉等の食品が販売されたことは、ハルビンでは一般人にとってかなり良い条件が形成されたことを示していた。[202]

1920年代の中所得のロシア人は多様な食料品を買うことができた。I.カプランの調査によれば、ハルビンの多くのカフェーとレンタル・ハウスにおいて、安いランチが提供された。ロシア人は、レンタル・ハウスで出されたランチを「家庭ランチ」と「家庭夕食」と名付けた。「家庭ランチ」が特に、学生、バスの運転手と貧しいロシア人の中で流行っていた[203]。

B.コズロフスキーは、「家庭ランチ」と「家庭夕食」について以下のような回想を残した:

> そのような昼食と夕食は、商人が住んでいたアパートメントで提供された。（略）その定食は本当に「家庭で作られた料理」のようだった。（略）10セントから15セントを払って、サワークリームと肉が入った濃いボルシチを買うことができた。そして、無料の白パンとボルシチが食べられた。二つ目の料理は入らなかった。しかし、食欲が爆発したら、二つ目の料理も注文できた。その場合、付け合わせと二つのカツレツを持って

---

[201] Мелихов Г., 同上、46 頁。
[202] 同上、46 頁。
[203] Капран И., 同上、123 頁。

きた。大きなカツレツを食べたので、一日中空腹を感じなかった。たった40セントの値段でこの「幸せ」を。そして、その場所で、グラス一杯から瓶の半分までのウォッカも注文することができた。[204]

B. コズロフスキー の回想記から分かるように、ハルビンにおけるロシア人は、安い値段で、かなり広い選択肢から、栄養価のある食品を買うことができた。しかし、N.イルイナの家族は、お金が足りない時期に、レンタル・ハウスで買った一つの「定食」を家族三人で分け合って食べたこともあった。[205]

もちろん、上流社会は最も有利な立場であった。中東鉄道の経営者等は全世界から輸入された豪華な料理を食べていた。A.グリンセは、国境警備隊長のチチガロフ陸軍将官の昼食会を訪問したことがある：

トラウト、キャビア、チョウザメ、鮭、カニ、魚のゼリー料理、アスピック、ゆで豚、ニシン、スプラット、パテ、人参詰めグリーン・ペッパ、スモークタンなどがあった。温かい料理は、まず小さなピロシキと一緒に出されたアスパラガスのクリームスープが最初に出された。次にポーランドの卵ソースとスチームされたトラウトと、焼いた子牛のハムは、クロケットの形で出された。[206]

このように、1920－1940年代の満洲においては、満洲における全ての社会層のロシア人にとって、食料品の幅広い選択肢が提供され、食費を節約するため、様々な方法が存在していた。

2.4.2. ハルビンにおける「外食の習慣」、「レストランの文化」が形成された：カフェー、レストラン、食堂

満洲において活動していた多くの実業家は、公共食に関係するビジネスを成功的に発展させ、ロシア人の需要に応じて、国産食品に限らず、輸入食品からの広い選択肢を、公共職場において提供していた。そして、ハルビンにおいては、多数の民族が共生していたため、レストランやカフェーの存在は、ロシア人にとって、社会的生活の維持のために重要なものになり、外食する習慣が形成されていった。そして、誕生日などの祝祭を、大勢でレストラ

[204] Старосельская Н.（2006）Повседневная жизнь Харбина. Молодая гвардия. С. 38.
[205] Ильина Н, 同上、13 頁。
[206] Глинце М.（1986）Русская семья дома и в Маньчжурии. Сидней. С. 64.

ンやカフェーのような公的な場所で大規模的に祝う習慣は、ロシアの文化の特徴的な点であるため、このファクターも満州におけるレストランやカフェーといった外食の繁栄を支えていた。

I.カプランは1920年代のハルビンにおける公共食堂やカフェー、レストランについて、次のように書いている：

亡命ロシア人の流入後に、多数の公共食堂、レストラン、カフェーなどが開かれた。メニューには、主にロシア、フランスとジョージアの料理があった。夏と冬には「スンガリー川」の沿岸に様々なカフェー、レストランなどが営業されていた。（略）そのようなカフェーを様々な収入の人が訪れることができた。[207]

B.コズロフスキーも、ハルビンにおける公共食の場に、高い評価を挙げている：

カフェーが沢山あった。それらは、街のにぎやかな所に位置付けられていた。（略）メニューは、素晴らしくて安かった。[208]

そして、著者は、様々な娯楽を求める人に向けられた場所について、言及している。

（略）金銭的余裕を持っていた人は、高価なキャバレーを好んでいた。（略）それらの場所は、面白くて楽しい娯楽プログラムも、卓越した料理も提供していた。（略）そして、贅沢な生活を控えていた人は、前より低いレベルのキャバレーを選んでいた。そのキャバレーは、それを訪れるため、経済的余裕を持っていた学生の中で人気があったからこそ、栄えていた。最終的に、良い稼ぎが出る日がある時、質素なキャバレーにおいても、一流のキャバレー同様の山東省のワインを試すことができた。[209]

B.コズロフスキーは、カフェーの種類も取り上げ、その中で安い食堂、多種多様の乳製品を提供する「ミルクのカフェー」、バーベキュー専用のレストラン、ビールの愛好家に向けられたバー、大規模なレセプションに適当である、河岸に位置された「ヨット・クラブ」のような大きいレストランなどを挙例している。娯楽としては、プロの音楽家により演奏されたコンサート、ビリヤードなどが提供されていた。

---

[207] Капран И., 同上、127 頁。
[208] 同上、16 頁。
[209] 同上、132 頁。

G.シトゥヒナは、レストラン・メニューの選択の広さについて、ペルメニだけ例として挙げれば、多種多様な種類が存在し、その中身としては、カニ、キャベツと肉が様々な形で混合されたものが使用されていたと記している。[210]
しかし、回想記においては、ハルビンにあったレストランのマイナス面も取り上げられ、このような場所は主に文化的レベルが低い人に向けられている、ということが伺われる。

N.イルイナは、母と妹と一緒に、ハルビンのレストランを訪問するエピソードを取り上げ、そこで演奏された歌について、子供にとって不適当な詩があったため、母は、自分の子供を低俗文化から守るように、素早くレストランを出た、という回想が残っている。[211]
多くのレストランとカフェーは、戦争の時にも、営業を続けていた。E.タスキナは、当時を次のように回想している：

1943−1944年代の広告を読めば、『Ded-vinodel』（ワイン製造者のお爺さん）は、ペルメニとピロシキを試すために、誘っており、『Mars』（火星）は、ランチとディンナーを広告している、(略)、『ビクトリア』というカフェーは、スウィーツとその他のお菓子を提供している。[212]

この広告に関する自分の対応として、ロシア人は、カフェーとレストランを訪問することをやめたが、そのカフェーにおける値段さえ知らなかった、と述べている。
このように、ハルビンにおける安定した仕事を持っていたロシア人は、公共食の場の選択の広さに、ある意味で甘えていたと思われる。ハルビンは、小さな街でありながらも、レストラン種類の多さから見れば、大都市にも劣らなかったと思われる。

2.4.3. 「満洲国」、第二次世界大戦の時代における飲食料の状況:下中流社会層の生活レベルが次第に悪化

ロシア人の回想記において取り上げられている情報の分析を通じて、満洲国が樹立する時点から、ロシア人の日常的な食生活がどのように変化していったかについて、その変遷を辿ることができる。前章で述べたように、満洲国における最初の数年間、ロシア人の無職の問題は深刻化していたが、それ以外の激変したことが記録されておらず、生活は普通のペースで進んでいたかのように感じられた。しかし、日本が日中戦争、及び第二次世界大戦に突入する時点から、食糧に関する軍需が高まるにつれ、ロシア人の生活条件も次第に悪化する

[210] Шитухина Г.（2006）Доброе утро, Харбин! РА 18. Сс. 60-61.
[211] Ильина Н.，同上、157 頁。
[212] Таскина Е. (2004) Харбин. 1944. На сопках Маньчжурии, 110. С. 2.

ようになった。

もちろん、ロシア人の生活状況に関して、政治的ファクターのみ影響したわけではない。例としては、1932年に、満洲で起こった洪水事件が取り上げられる。被害者となった多くの農民は、移住を促された。移住者の一員のV.フリストフは、チチカルに引越した。著者の家族は、新しい地域で牛を飼ったり、農業に関する専門的知識（例えば、農業で使われる重機の操作方法）を活用したりして、生きていた。[213]

回想記において、ロシア人の食生活における転換期としては、1938年が取り上げられている。当時から小麦粉の供給量が減少し、それに伴い、パン屋、菓子屋の生産量も減少に転じる。バターの供給量も減少する。上流社会のロシア人だけは高い値段で肉を買うことができた。「満洲国」の時代に更に悪化する無職の問題も、多くのロシア人の購買力低下の理由となった。

しかし、状態が遥かに悪化した頃は、日本が戦争に没頭する1942年以降の時期である。V.フリストフは、当時について次のように書いている：

> 中国と米国に対して戦争を開始した日本は、満州国経済から、全ての資源を徴収していた。ロシア人に対する、監視も強化され、田舎への移住を求めたり、マッチと塩さえをも含む、必需品のカードを導入し、小麦粉を出すことを拒否したりした。[214]

I.ズエフが回想するように、「満洲国」の時代に、ロシア人が毎日食べていた料理は、主に、穀物からなっていた：ご飯、キビ、シベリア・アワ、コウリャン。飲み物としては牛乳が流行っていた。そして、ケーキの詰め物としては「フイチョザ」という中国のデンプン麺を使用した。肉は祭りの時だけであり、配給券のシステムを通じて、出された：豚、子羊、鶏肉。肉をポテトと一緒に焼いて、ハムをオーブンで作った。

食糧不足に関する問題は、特に子供が悩まされ、日常の料理が同一であるとについて苦情を述べていたことがある。例えば、I.アブロシモフは、継父が中道鉄道に解雇された後、家族の夕食として、主にオート・ミールを食べるようになった:

> 最近の夕食は前より悪くなった。母が毎晩作っているオート・ミールが嫌でしょうがなく、もう食事とも呼べなくなった。[215]

---

[213] Хлыстов В.（1999）Русские крестьяне в Маньчжурии. На сопках Маньчжурии, 68. Сс.1-3.

[214] 同上、1-3 頁。

[215] Капран И.（2005）По матриалам интервью с М. Зуевым

時間が経ってから、著者の継父の収入は依然よりも下がったため、母が作った料理も前より「惨め」になった：

それからは、経費を削減する必要となった。母は昼ごはんにポテトを焼いた。夕ごはんにポテトを煮た。ある時私をイライラさせたオート・ミールについて懐かしく思い出される。

食料品の価格上昇とそれに伴う闇市の発展は当時の特徴である。I.ディヤコフが当時を以下のように回想している：

祭りの際に、ロシア人は配給券でウォッカとパンしかもらわなかった。ある時、最もエネルギッシュなロシア人は、ソーセージ又は（略）魚を買うことができた。それ以外の食品（小麦粉、肉、脱穀した穀物など）の購入は抑制の脅威で禁止された。（略）最も重要な食料品は、大金を支払えた上流社会のロシア人だけが買った。結果として、闇取引の問題も悪化した。農家だけは、そのような状況下でも生き残ることはできた。[216]

回想記には、ロシア人を、飢餓から救った食料品が挙げられている。E.タスキナは、1944年代を回想記で記述し、中国の食料品が大きな助けとなったと述べている：

満洲にあった野菜の中で、何が記念像に値するかと言うと、それは、疑いなく大豆である。大豆は、関東軍の需要を補うため、満洲から大量に輸出されたにもかかわらず、ロシア人と中国人のメニューにおいては、豆腐、チャンビンなどのような形で登場していた。（例えば、特別のイベントの際、ロシア人のハウス・キーパは、コーン・ミール、ベスン粉からできた、チャンビンという、この「パン・ケーキ」から「ミカド」という、祝いのケーキさえも作っていた）。大豆のコーヒーも存在していた。私が覚えているように、その大豆のコーヒーを、大麦の飲料と混ぜれば、ある程度良い朝の飲み物として飲用できた。お茶について言うと、その代行品としては、人参のジュースが使用された。（しかし、その飲み物は、全員が好きになったわけではない）。[217]

[216] Капран И., 同上、135 頁。
[217] Таскина Е., 同上、1-3 頁。

飢餓の問題に対し、様々な対策を考えていたロシア人は、手作りワイン、知り合いの中国人の販売者から肉をも手に入れることができた。しかし、多くのロシア人は、鶏を飼っていたため、その他の肉を要求したわけではない。野菜不足の問題は存在したが、ビーツと大根を手に入れることができた。そして、当時の最も貴重な「珍味」としては、疑わしい肥料で栽培されたメロンが挙げられている。[218]

1945年代にインフレーションの問題が悪化して、食料品の値段は10倍から100倍に上昇した。安定した仕事を持っていなかった、O.シャピロは毎日の食事を以下のように記述している：

私は殆ど飢えていた。夕食は、殆どいつも、シベリア・アワあるいは、コウリャンの粥であった。昼食としては、ミルクが入った紅茶、パンと少量のビーツのサラダを食べた。（それ以外は、店では何も売っていなかった）。[219]

しかし、回想記が示しているように、あるロシア人の食生活は、戦争という、最も大変な時期においても、安定した状態にあった。一戸建てを持っていたロシア人は、ファーム活動を通じて、飢餓の問題と戦うことができた。住宅の裏庭において、植物の栽培も、ファームの動物の育成も可能であった。例えば、N.ラレティナは次のような回想を述べている：

終戦に近い時期においては、私の両親はもう既に小さなファームを作ってきた：2頭の牛、複数の豚、鶏。春のある日、母はガチョウの子を買った：羽毛の枕が欲しかったからである。[220]

著者の両親は、パスハの際、スモーク・チッキンなどのような「珍味」さえも作ることができた。その上、母は、鶏を、庭の飾りとしても使用し、綺麗で純種の鶏を殖やしていた。ここから分かるように、N.ラレティナの家族は、戦争の時代においても、ある意味でファームの動物を飼う余裕を持っていたと思われる。[221]

第二次世界大戦の時代、ロシア人の食生活の特徴としては、当時の状態の視点から贅沢をする行為としても見られる、パスハなどの信仰的祝祭を祝う習慣が残り、必要な料理のためにも、ロシア人は材料を見つけることができたということが挙げられる。E.タスキナは、

---

[218] Таскина Е., 同上、2 頁。
[219] Шапиро О., 同上、11 頁。
[220] Лалетина Н.（2009）Японцы, РА, 32. С. 30.
[221] Лалетина Н., 同上、31 頁。

1944年におけるパスハの日を、以下のように回想している：

パスハの際、卵を様々な色に塗ったり、チーズのパスハ（キリスト教の信者のパン）を作ったりした。そのため、ハルビンの郊外に残っていた乳製品生産所では、ミルクを手に入れることさえできた。適当な材料を見つけることができた人は、クリッチ（パスハの一種）を作っていた。伝統に従っていたのだ！そして、パスハの際、複数の住宅を巡回していた「お客」（パスハの際、様々な住宅を歩き回る人）の前にも、良い印象を与えなければならなかったのである。[222]

以上のことから、「満州国」の時代においては、多くのロシア人は、食料不足の問題に直面したが、ファーム活動に従事していたロシア人は、戦争の終わりまで生

き残ることができた。特に、牛を飼うことが、大きいサポートとなった。食料不足の危機が著しい時、ロシア人を飢餓から救った食料品としては、乳製品と、大豆、コウリャンという中国の食文化の要素が言及されている。それにより「満州国」時代と、第二次世界大戦の時代における、ロシア人は、伝統に従い、キリスト教の祝祭を祝うため、不足していた食料品を一生懸命探すことができた。

2.4.4. 日常の食事：中国食文化との共生

ロシア人は、自分の住宅においては、主にロシア料理を調理していた。しかし、外食としては、中国の食べ物が選ばれた。例えば、I.アブロシモフは、友人がご飯を食べている場面を取り上げ、この様子がロシア国内と同様であると気づいたことである：

彼（略）（友達について）は、早く白パンにバターを塗って、「シチ」をすすることを始めた。その後、二つのカツレツを食べた。次に砂糖とサワークリームが掛けられたカッテージ・チーズに移った。[223]

そして、もう一つの場面では、継父の朝食を記述している:

[222] Таскина Е., 同上、2 頁。
[223] Абросимов И., 同上、284 頁。

ヴァシリー・セルゲエヴィッチはサモワールからベーグルを取り外して、それを二等分にきれいにカットして、各部分にバターを塗った。その上に「お茶のソーセージ」の一片をのせた。[224]

I.アブロシモフの母と継父の収入が良かった時には、家族は毎日の食事として、栄養価の高いロシアの伝統的な料理を食べていた。しかし、外食をする場面を取り上げる時、中国の食べ物についての記述が多い。I.アブロシモフは、幼い頃を回想する際に、大好きな多種多様な中国のお菓子とスナックに言及している:

中国人の売り手は、肉入りの甘いピロシキを販売した。私にとって、そのピロシキより、もっと美味しいものは存在しなかった！しかし、それ以外に、ゴマが振りかけられた飴、（略）糖蜜に覆われた、細いスティックに通されたサンザシ・ベリー、（略）冷凍された梨もあった。[225]

G.シツヒナも、中国風の食事に日常的に直面していた。著者が回想するように、朝家を出た時、最初に注目を引いたものは、焼きたてチャンピンを販売している中国人のキオスクであった。そして、著者の住宅の近くには、「白くて熱い豆乳と、油の中で焼かれた巨大な大豆のケーキを販売している」レストランも営業していた。冬の時期、音楽学校から戻ってきた G.シプヒナは、焼いた栗と、炭火で焼かれたポテトを買う習慣があった。主な「珍味」としては、「タフラ」という、棒に掛けられた、シロップに覆われたさんざんが挙げられている。[226]

回想記では、中国人の売り手の重要性についても言及されている。例えば中国人の売り手のサービスを利用したロシア人は、買い物時間と金銭を節約することができた。売り手は、朝早く住宅の前に表れ、季節に相当する新鮮で良質の野菜とフルーツ、ロシアの食文化において不可欠なピクリングのシーズンが来る際に必要な材料である胡瓜を販売していた。[227] そして、売り手はロシア人のファームの動物の大きな助けとなっていた。それは N.ラレティナが回想しているように、自分の家族がサマンニイと言う小さな町に住んでいたため、ファームの動物は、牧草地、水のアクセスを持っていなかった。そのため中国人の売り手は、定期的に水を運び、併せて飼料の販売、というサービスを提供していたことで、ロシア人の

[224] Абросимов И., 同上、264 頁。
[225] Абросимов И., 同上、230 頁。
[226] Шитухина Г., 同上、60 頁。
[227] Пешкова Т.（2004）Харбинские "сказки". РА, 12. С. 52.

食糧問題は解決していた。[228]

中国人の売り手である小売店主とロシア人のカスタマーの間には、信頼関係が形成されていたため、経済的な問題を持っていたロシア人は、支払いの猶予が許されたこともあった。例えば、T.ペシコヴァの家族は、新年を祝うため、お金を持っていなかった時、中国人の小売店主は、必要な食料品を、後払いの条件で与えたことがある。著者が回想しているように、「小売店主は、借り手を登録された覚え書きを持っており、耳の後ろにペンシルも挟んでいた。このように、誰がいつ、どのような食料品を買ったかに関する情報をそこに載せていた」。[229]

しかし、返金が遅かったロシア人に対しては、態度が厳しくなり、N.モクリンスカヤは、取り立てに来ていた売り手から身を隠したことがあり、この恥を長い間覚えていたと述べている。[230]

中国の小さいレストランは、誕生日などのような祝祭を安い方法で祝うことを提案していた。T.ペシコヴァによれば、このようなレストランが多く存在し、人気が高かった。著者は、ロシア人の最も好きな料理としては、中国風のペルメニ、豆腐からできた料理、醤油と甘酸っぱいタレが掛けられた豚肉などを取り上げている。特に人気だったのは、中国風のパンと、ハルビンとチンタオで生産されたビールであった。[231]

V.エロフェエフが回想しているように、中国料理は、ハルビンの教育機関においても販売され、学生は二つの食堂を選択することができた：ロシアの食堂と中国の食堂。[232]

本章で既に述べたように、ハルビンの食料品店及び市場においては、全世界から輸入された選択肢が豊富な食品が販売されていた。しかし、安くて珍しい中国の食料品は、ロシア人の食生活においては、優先的な立場を取っていた。それは中国風の料理に対する関心、珍しい中国祝祭文化の魅力、節約する必要性と中国人商人の販売努力からも説明できるように思われる。

2.4.5. 満洲風の「味」についてのノスタルジアを表す方法としての食事の記述

多くのロシア人の満洲における人生において、幸せな時期があった。著者は、自分にとって貴重な生活の場面を「物質的な」形で表現するため、何を「感じた」かについて具体的に記述している。簡単にまとめれば、回想記では、特に子供の頃と、様々な祝祭についての思い出は、特に強調されている。

---

[228] Лалетина Н., 同上、31 頁。
[229] Пешкова Т., 同上、56 頁。
[230] Мокринская Н., 同上、134 頁。
[231] Пешкова Т., 同上、46 頁。
[232] Капран И., 同上、135 頁。

子供頃に関する記述においては、最も好きなお菓子に関する思い出が登場する。例えば、N.ラレティナは、満洲で選択肢が広くてロシア人の視点から珍しい味のお菓子が沢山あったことについて回想している：

ハルビンの「新町」には、ギリシャ人によって経営されていたキオスクがあった。そこでは、くるみからできたハルヴァが販売されていた。（略）その袋の中からは、甘くて、ジューシーな匂いが漂っていた。それ程美味しいハルヴァを、私はハルビンと、将来にトルコという所のみに試したことがある。[233]

そしてT.ペシコヴァは、ハルビンにおける自分の日常性を「飾った」お菓子として、『チューリン&Co.』で販売されたチョコレートに囲まれた三角形のワーフルのお菓子、そしてケーキ、クリーム味の飴、タフィーと、「枕」の形を持っていたスウィーツを取り上げている。ハルビンの頃に好きになったシリンダーの形を持っていたスウィーツを、1992年にロシアのある店で見つけた時、幸せな過去に戻ったかのような、興奮を抱いたと述べている。[234]

T.ペシコヴァはお菓子に限らず、ハルビンにおいて存在していた、ラトビアの会社によって運営されたパン屋についても言及し、そこでは白とグレー、二つのタイプのパンが製造されたという事実を取り上げている。このパンの味を評価する際、著者は、その後、そのパンに相当する味を見つけられなかったと告白している[235]。

本項で既に言及されたように、家族全員と、そして親しい人と一緒に祝った祝祭も、満洲に関する最も幸せな思い出として登場する。様々な祭りの準備の際、家族全員で一緒に料理を作った。この習慣は、ある意味で家族の団結性を示していた。T.ペシコヴァは、新年の前、家族全員でペルメ二を作ったことについて懐かしく回想している。

G.メリホフは、クリスマスの食卓を以下のように記述している：

祭りの食卓の準備は始まった。（略）クリスマス・ガチョウ、小麦と蜂蜜が入った「クティヤ」という全粒小麦の粥は必ず食卓に出された。[236]

祝祭の料理についても、記述が取り上げられている。最も重要な祝祭は、「パスハ」であ

---

[233] Лалетина Н.（2009）Японцы. РА, 35. С.43.
[234] Пешкова Т., 同上、52頁。
[235] Пешкова Т., 同上、56-57頁。
[236] Мелихов Г., 同上、81頁。

り、その祝いは、貧乏な社会層にとっても無視できない行事であった。[237] M.タウトは、復活際を、自分の子供の頃における最も明るくて幸せな思い出として取り上げている：

ロシア風のパスハは、人間の精神性に絡むものでありながらも、現実的に豪華で、楽しい祭りでもあった。ロシア正教とロシアの伝統は、私たちの民族の精神と文化の重要な一部であった。[238]

M.タウトが述べているように、復活祭は、家族の統合性、そして他者に対する愛情を表す重要性が連想されており、その時に調理された料理は、祭りの主な「飾り」であった。著者は、祝祭のテーブル、その料理についての記憶を残した：

最良のテーブル・クローズに掛けられたテーブルには、白いグレーズに覆われたクリッチが登場している。クリッチの側と周りに（略）鮮やかな色に塗られた、巧みに装飾されたパスハの卵が配置されている。[239]

部屋の空気には、日常では感じられない、クリッチの生地の素晴らしい匂いが漂っている。(略) 台所からは、オーブンで焼けた雉、ハム、ケーキの匂いが届いてくる。(略) 私は、その生地がいつ成熟するのか、そして、焼かれていたクリッチがどのような形になるのかを楽しみにしていた。(略) そして、卵を塗るプロセスが、家族全員にとって、どれ程の幸せと興奮をもたらしたかを、言葉で表現できない。(略) これは（ここで—パスハに準備すること)、伝統に従うこと、古い知恵を把握する試み、「技術」、そして、最終的に、ただ面白くて、素晴らしい仕事だった。(2) 祖母と母は、ゲストを待ちながら、テーブルを冷たい前菜によって飾った：アスピック、ニシン、ヴィ二グレット、(略) ケタ、「ホーム・メイド」の豚肉、苔桃によりピンク色に染められた雉の肉、ハム、ソーセージ、良いグレードのチーズ、と、もちろん、祖母特有の複数のパイ。[240]

復活際の準備に、家族全員が参加し、祭りを祝い始める時期に、知り合いの人が、住宅を訪問していた。得意料理の調理を通じて、家主は、客に良い印象を与え、ロシア文化特有のホスピタリティをも表すことができた。

---

[237] Шарохин Н.， 同上、56 頁。
[238] Таут М.（2005）Храня в душе воспоминания. На сопках Маньчжурии, 118. С.1.
[239] Таут М.，同上、1 頁。
[240] Таут М.，同上、3 頁。

以上のことから、イミグラントとしての人生に対して、ロシア人は特別の期待を抱いていなかったため、「つまらない」ものごとによって、自分の人生に「甘い味」を与えていた。日常を自力によってもっと楽しいものにする習慣が、ロシア文化の特徴であると思われる。

まとめとして

ここでは、ハルビンにおけるロシア人の日常生活の重要な面であった「食事」の状況を分析した。回想記を通じて、上流社会に属するロシア人（中東鉄道の経営部の従業員、実業家、領事）と中所得層に属するロシア人の労働者（中東鉄道の従業員、記者、教師など）の日常の食事と様々な行事の際に作られた料理の特徴を明らかにした。ハルビンには、全世界から輸入された食品が販売されていたにもかかわらず、上流社会のロシア人も、中所得層に属するロシア人も、ロシア料理を優先した。

ハルビンにおいては、様々な収入レベルに対応するカフェー、レストランなどが沢山あり、小規模な街のハルビンにおいては、外食する習慣が形成され、いわゆる「レストランの文化」も存在したと思われる。

しかし、それと同時に、中国の食文化の影響も避けることが出来なかったため、多くのロシア人は中国料理も評価することができた。回想記が示しているように、在満ロシア人の日常生活においては、中国の食文化は重要な存在であった。中国のレストラン、食料品を売る商店が多くあり、ロシア人の住宅に中国人のコックも務めていた。

ロシア人の子供たちは、中国のお菓子を好んだ。そして、中国の売り手は、安い果物を販売して、貧しいロシア人を支援した。N.シャピロが回想するように、ロシアとドイツの戦争の時代に、食料品の価格が1倍から100倍にも上昇した。その時も、中国のシベリア・アワとコウリャンの粥は、ロシア人を飢餓から救った。

章のまとめとして

本章では、「仕事」、「住宅」、「着衣」と「食事」といった生活面に着目して、満洲におけるロシア人の日常性を検討してきた。

「仕事」という生活面の検討にから明らかになったように、満洲に移住した「白系」ロシア人は、自分の人生を基礎から立て直す必要があり、多くの場合、「貴族」特有のプライド、新地域において自分の地位と専門知識の無益性に関するコンプレックスを乗り越えなければならなかった。

「白系」ロシア人の活動の特徴に注目すれば、プロパガンダ活動に従事した人は、社会構成を変える希望が強かったが、その人の中で現実的な状況が分かっていない、ナイーブな人が多かったと思われる。

創造的活動に従事した人は多く存在し、彼らの努力により、在満ロシア系ディアスポラにおける文化レベルが高まり、その芸術家は、ロシア系ディアスポラの「顔」となったと思われる。しかし、繁栄していた文化的活動の背景には、多数の不幸な詩人、文学者も存在していた。

教師も、ロシア系ディアスポラの一員の教育レベルの発展に、重要な貢献をした。主な原因としては、多くの教師が、ロシアで最高レベルの教育を受けたこと及び、教師は、自分の仕事に深い関心と責任感があったことが挙げられる。

ロシア人の女性は、イミグレーションの状況において生き残る能力を発揮した。帝政ロシア時代から受け継がれた、「ハウス・キーパ」としての社会的役割の枠を超えて、女性たちは、男性向けの専門を学び、また、自らの努力によって、家族を支えた。

貧乏な家族においては、子供もお金を稼ぐことがあった。戦争の時代に、自分の専門知識が適用できなかった両親は、子供の支援なしに生き残れなかったと思われる。

満州国の時代に、ロシア人の無職問題が深刻化したため、多くのロシア人は上海などへの移住を促された。

「終戦後」の満洲においては、特に夫、息子がソ連兵により連行されたため、孤独になった女性、そして、芸能以外の特技を有していなかった芸人、ミュージシャンなどにとっては、お金を稼ぐ方法を見つけることが大変であった。しかし、それと同時に、ハルビンに存在していた様々な劇団、芸術専門学校の活動には、目立った変化が見られなかった。

「住宅」の生活面に注目すれば、上流社会に属しているロシア人は、住宅の様子を通じて、贅沢さを見せる傾向があった。例としては、家の巨大なサイズ、孔雀を飼うことが挙げられる。

それと同時に、貧乏な白系ロシア人は、満洲では完全に無力な社会層であり、多くの人の生活状況は、時間と共に改善されなかったことが明らかになった。

満洲におけるロシア人の「典型的」住宅の様子の特徴としては、ロシア風の雰囲気を形成する希望、自分の家に対し、「臨時的居住地」としてではなく、「生涯居住する住宅」としての態度を持つこと（例えば、その態度が、インテリアを飾ることに向けられた努力において読み取られている）、ロシアのインテリアの中でロシアから持って来られたものが多いということが挙げられる。

そして、回想記においては、住宅の「快適さ」に関するロシア人特有の認識が反映されており、それは、インテリアの贅沢さなどを含む「物質的な」ことより、祝祭の豪華な祝い、ゲストの存在などというような「幸せな雰囲気」を創造する「不物質的な」ことであると思われる。

「服装」という生活面の検討から、満洲における「ドレス・コード」を通じて、白系ロシ

ア人と赤系ロシア人を区別することができる。このように、服装は、ある社会特有の価値観を反映するものとなり、帝政ロシア社会特有のイデオロギーとソ連社会特有のイデオロギーの対立が表面に表れた。注目すべきところとしては、「白系」ロシア人により定められたファッションのテンデンシーは、赤系ロシア人さえも適応せざるを得なかったほど、影響力が強かった。それと同時に、「ドレス・コード」は、貧乏な「白系」ロシア人にとって、精神的視点からも、経済的視点からも、大きい負担であった。

「食事」という生活面に注目すれば、ロシア人の日常的メニューにおいては、主にロシア料理があったが、外食をする際、中国の食べ物も人気が高かった。中国人の小商売店と売り手のサービスも、ロシア人にとって大きな助けであった。

満洲では、低価な食堂が営業しており、安い野菜、果物などもあったため、貧乏なロシア人も、最低限の食料品を得ることができたが、第二次世界大戦の状態が悪化するにつれ、肉などのようなプロダクトへのアクセスがなくなった。しかし、ファーム活動に従事したロシア人は、戦争の終わりまで飢餓を知らなかった。

本章においては、1940年代の満洲に居住していたロシア人の日常生活の特徴について考察し、特に「仕事」、「住宅」、「着衣」と「食事」といった生活面に注目を当てた。次章においては、1920－1940年代の満洲に居住していた日本人の日常生活について、同様の視点から追究する。

第 3 章　日本人の日常性

本章では 1920－1940 年代の満洲において居住していた日本人の日常生活を検討し、「仕事」、「住宅」、「着衣」、「食事」といった生活面に着目する。

「仕事」という生活面を検討する際、行政機関の職員、社員、そして、「社会的活動」: 教師、さらに「満洲国」の社会改善を目指していた行政機関の職員に焦点を当てる。ここで上げられた活動は、「都会人」の活動であるが、「農民」という仕事も、多くの特徴を持っており、それについても、検討する。

また、満洲における日本人の職場に関する雰囲気についても考察する。

行政機関の職員と社員の労働状況について検討する際、転勤生活という、重要な面に焦点を当て、その関係で日本人職員は、どのような不便性に直面したかについて、考察する。

そして、教師の労働状況を検討する際、特に「満州国」時代のプロパガンダが、教師の教育方針にどのような影響を与えていたかについても、追究する。

「満州国」時代の行政機関の職員の活動を検討する際、「満州国」という新国家を建設することに参加できる、というアイディアが、多くの日本人職員の動機付けとなっていたことを考慮にいれて、その活動の職員のアイデンティティへの影響について、研究する。

満洲における多くの日本人の労働条件と社会的立場が変更する時期としては、二つ挙げられる : 第一は、日本が日中戦争と第二次世界大戦に入る時期である。当時の特徴としては、学生の年代である多くの日本人が、労働力として動員されていたことである。第二は、終戦後の時期である。「敗北者」の立場であった全ての日本人は、元の高い地位を失い、重労働者として、糧を得るために努力しなければならなかった。本研究においては、この時期における日本人の労働条件においても詳しく検討する。

「住宅」という生活面を検討する際には、「都会人」と「農民」の生活条件を、それぞれにおいて、検討する。そして、日本人の「都会人」の住宅の特徴を検討する際、日本風の「社宅」とロシア風のマンション、一戸建て住宅における生活条件を比較する。「社宅」とロシア風の住宅に居住していた日本人の生活様式においても相違点が見られる :「社宅」に居住していた日本人は、多くの場合、日本風の生活様式に従事していたが、ロシア風の住宅を選ぶ日本人は、日系ディアスポラとは独立した生活を送り、ロシア人と交流する可能性も高い。そして、多くの日本人は、「白系」ロシア人の住宅において、アパート或いは、部屋をレンタルしていたため、ロシア文化の空間の中に存在していたといっても過言ではない。ロシア人の隣人と積極的に交流していた日本人の生活様式に特に注目して、検討する。

そして、日本人の住宅の「インテリア」の特徴も分析し、日本人の価値観、生活様式が、インテリアにどのように反映されていたかについて、考察する。

日本が、日中戦争を開戦し、その後には、第二次世界大戦に突入してから、在満日本人の日常生活は、政府のコントロール下に置かれていたが、自分の住宅においては、日本人は自由をいかに感じていたかについても、明らかにする。

「着衣」という生活面を検討する際には、ロシア人の場合と同じく、回想記において、そのテーマについて多く記述していた女性の着衣について、特に詳細に検討する。そして、1920－1940 年代の満洲においては、西洋文化と東洋文化が共生しており、満洲の気候も、日本国内と異なっていたため、このファクターが日本人の服装の様子にも反映されていた。満洲における日本人女性は、ロシア風のスタイルをも身に付けており、その経験について、詳しく検討する。それと同時に、「西洋風」のスタイルが、「満洲」出身の日本人と、日本国内の日本人とが区別されるものとなり、西洋服を着ていた日本人が、日本国内においては、どのように扱われていたかについても、考察する。

満洲においても、日本風のスタイルで忠誠心を見せていた日本人は、着物を着ていたが、着物が服装以上の価値を持つものであったため、そのシンボル性について、検討する。

そして、満洲における日本人の「都会人」と「農民」の生活様式、生活条件においては、相違点が多く存在し、その差異を、服装を通じて、明らかにする。

満洲における最も厳しい経験として、終戦後の「避難」時期に生き残ることが回想記に取上げられていた。当時、日本人の記憶において、それがどのように服装と連想されていたのかについても検討する。

「食事」という生活面について調べる際には、「家庭料理」と「外食」を、別のものとして扱う。多くの日本人は、「家庭料理」としては、和食を優先していたが、「外食」をする際には、特にロシア人の食文化に関心が高かった。ロシア人の食文化に触れる経験について詳しく調べる。

そして、満洲における日本人について、「都会人」と「農民」の食生活における共通点と相違点を明らかにする。

日本が、第二次世界大戦で敗北した時点から、日本人の食生活においても、多くの変化があった。「難民」となった在満日本人の当時の日常食の特徴と、生き残る方法についても、詳しく追究する。

3.1. 仕事

本項においては、「仕事」という日本人の生活面について、検討する。

満洲における日本人の勤労状況については、非常によく研究されている。

1920 年代の満洲においては、中国の軍閥は「中国化」政策を押し出していたが、ハルビンはまだ国際都市として生き続けていた。当時、満鉄に従事していた日本人は多かったが、農

業者は僅かだった。様々なサービス産業、商業を営んでいた日本人は、日本人の客に限定し、その他の民族に関心を示さなかった。進塚瀬は、1920 年代の満洲における日本人を、活動内容により区別し、領事館の館員、「満洲の権益に関わる」満鉄の社員、日本から派遣された支店長、そして雑貨商、飲食店、売春婦などを取り上げている。[241]

1931 年に「満洲国」が樹立され、「植民地化」された地域では、多くの収入を得られる機会が増え、多くの日本人は満洲への移住を決意する。

満洲事変から六年の間に満洲における日本人の人口は、十倍になった。関東軍のプランに積極的に協力して満洲国づくりに奔走した在留邦人たちがあった。その邦人たちの中で、行政機関の官吏、満鉄の職員、関東軍に属する人が挙げられている。

「満洲国」ができて以来、日本人は東支鉄道を、「北満鉄道」と呼ぶようになり、1935 年に、ロシア側から鉄道とそれに付属する一切の施設、財産が一憶七千万円で満洲国に譲られた。新設企業においては、日本人の採用が活発化した。

多くの日本の会社は満洲で支店を設立し、個人商業も盛んに発展していった。

1936 年に、広田内閣は、「満洲開拓移民推進計画」を決議し、満蒙開拓団と、満蒙開拓青少年義勇軍、合わせて二十七万人の満洲への移住を実現させた。

このように、1920 年代の満洲で活動していた日本人は、まともな生活を送るための十分な収入を得ており、1931 年に「満洲国」が樹立してから、以前より多く収入を得られるチャンスが与えられた。

回想記の作者は、満洲における日本人の収入に触れる際、日本との比較を例に挙げる場合がある。例えば、永井の父は、満洲国の官僚を勤めており、スイヒン時代とジャムス時代に、日本内地の小学校校長の給与の三倍の額を与えられたと述べている。

1920－1940 年代の満洲において居住していた日本人の回想記を通じて、当時の就職、勤労状況に関し、次のことを明確にした：

3.1.1. 職場における雰囲気：日本特有の「仕事哲学」の大陸への持ち込み

「満州国」の行政組織は、日本国内と同様のものであった。そして、満洲で支店を開いた、多くの日本の有名な企業、会社、銀行なども、業務制度、経営ヒエラルキーにおいては、日本国内の模造であった。

回想記において、仕事に対する職員の態度が、日本人の視点から、仕事を成功させる一つの条件として、多く記されている。柳田桃太郎によれば、ハルビンを指導していた関東軍は、ハルビン建設目標の一つとして、「ロシア時代に劣らない新生ハルビンを建設すること」を

[241] 塚瀬進（2004）満洲の日本人、吉川弘文館、128 頁。

掲げていた。このことから、関東軍がハルビンの元のロシア政府に対抗していたことが分かる。そして、「満州国」の政府は、在満日本企業の全ての活動が最高レベルに到達することを目指していたため、職員には大きな努力が要求されていた。

柳田は、1930 年代のハルビンの行政機関の様々な職員の活動を評価し、例えば、佐藤の業績につて、「佐藤処長は、満鉄付属地の都市計画を担当して、（略）文字通り、昼夜の別なく構想を練り、時間をかまわず部下を呼びつけて仕事を命じたものである」、又は、1932 年のハルビンにおける大水害後に発生する問題に対処していた佐藤について「日本人技術者の見せ所だと不眠不休、部下を督励して堤防の応急かさあげ工事を進め、（略）遂に防水に成功した」と記している。[242]

仕事に対する献身的な態度が、職員全員により共有される「哲学」であり、永井は父の仕事の内容について聞いた時、父は自分の活動を「みんなに重宝がられる行商」というものとして定義していた。[243]

勝山は、このような「精を出す」努力の結果として、南満洲鉄道株式会社の資材部が見せた「世界にも例のない調査活動」の例を取り上げている。[244]

満洲における日本人企業においては、血縁集団性も存在していた。例えば永井の父にとって、満鉄への入社に「道を開いてくれた」人として、義兄が取り上げられている。その時の満鉄における様子につて、勝山は「父は満鉄資材部に、菊郎叔父は調査部、浅吉伯父は鉄道総局と、みんな満鉄社員となった」と記しており、このように当時、職場を得ることにおけるコネクションの重要性について示唆している。[245]

そして、職員の団結性を保持することも重視され、永井が示しているように、行政機関の職員の住宅の建築を設計した人は、全ての住宅が、一つの場所にコンパクトに位置するように計画されていた。[246]

以上のことから、満州における日本職員からは、仕事に人生を捧げる意欲、完璧な業績を目指す、というような態度が期待されており、職員の団結性をも保持することに行政府は努力を惜しまなかった。そして、満洲における日本の職場の雰囲気の特徴としては、血縁集団性が存在していたことも挙げられる。

3.1.2. 転勤生活は家族の一員に多くの不便さをもたらしていた

満洲において勤務していた日本人の職員が、転勤生活をした理由としては、政治的ファク

---

[242] 柳田、同上、202 頁。
[243] 永井、同上、93 頁。
[244] 勝山妍子、同上、24 頁。
[245] 勝山、同上、24 頁。
[246] 永井、同上、38 頁。

ター（例えば、1935 年の北満接収に伴う満鉄職員の移動）、そして、勤務先のポリシーの特徴が取り上げられる。

例えば、永井瑞江の父は、奉天で、関東軍特務部道路建設事務所に勤めていたが、1933 年に新京の「新京特別市公署」に赴任することを決める。1939 年に父は、「牡丹江市公署」に転勤。1940 年に父は、ムーリン県公署の総務課長となり、1942 年－スイヒン県副県庁、1944 年－ジャムスの林政庁の営林署に赴任する。それと同時に、永井の父は、「家族とは一緒に暮らすものだ、ばらばらに暮らして何が家族だ」[247]という理論を持っていたため、次の転勤となると、家族全員で移住した。

当時子供だった永井は、毎回新しい環境へ適応する必要があった。「家族全員で移住」というルールに唯一従えなかった時として、父が牡丹江市に転勤したころが取り上げられている。牡丹江市においては、日本人の住宅の建築が間に合わなかったため、残りの家族は一時的に日本に戻り、著者は、小学校の二学期を信州小県郡本原村の小学校で過ごした。「満洲っ子」であった永井は現地の学生らとの友人関係がうまくいかなかったため、当時に関してはネガティブな回想のみが残っている。そして、満洲の転勤先のスイヒンには、水道、電気という設備がなかった上に、弟が急性虫垂炎にかかった時、病院まで運ぶための救急車さえなかった。また、ジャムスの学校では、永井と同年齢の生徒がいなかったため、孤独な生活を避けることが不可能であった。[248]

小関久道によれば、1935 年の北満接収後、満鉄の職員に限らず、「満州電電」、「満州電業」、「医療関係」、「軍関係者」などの転勤活動が活発化したため、転入生に溢れた学校は、新入生の収容が不可能となる状態までに至った。その問題に直面した花園校は、「当時として高学年に珍しい男女一組」の設立という、極端な対策をとっていた。[249]しかし、久道の家族が体験した転勤生活の最もネガティブな面としては、移住先において、居住地を見つけにくい、ということが回想されている。七人からなる久道家族のハルビンへの転勤時期は、「北満接収」直前であったため、日本人の転勤者が相次ぐ当時のハルビンにおいては、「住宅が払底、極度の住宅難」という状態であった。[250]このように、久道家族は、全員で移住できず、「一家は三か所に分散しての、生活を余儀なくされていた」、と回想している。[251]

以上から、転勤生活をしていた日本人の家族の全員が不都合を感じていた。ある転勤先においては、生活に必要な設備、機関、スタッフなどが大多数のニーズに応えられなかった。そして、「僻地」においては、便利な生活のための必要な条件が存在していなかった、という

[247] 永井、同上、123 頁。
[248] 永井、同上、171 頁。
[249] 小関久道（2002）ハルビン．回想．文芸社、49 頁。
[250]、同上、67 頁。
[251]、同上、67 頁。

状態であったことが分かる。

3.1.3.「満洲国」における「教員」というのは、生徒に対して国家のイデオロギーを伝えるべきものであった

「満洲国」時代には、日本人対象の各種学校と大学が多く存在し、日本国内の様々な地方から移住してきた日本人教員が登場していた。例えば、小谷野は小中学校の教員募集活動について、「日本の現職教員の「満洲」への勧誘政策が積極的にとられるようになった。とくに 1937 年以降，相次いで「満州国文教関係教職員募集「満洲」における教員養成「満州国学校教師募集ノ件」といった通牒が日本国内の各中等学校長，青年学校長，小学校長宛に出されることになる」と述べている。もちろん、満洲における仕事のベネフィットの一つとして、良い給料が提供されていた。[252]

「満州国」の政府は、満洲における教育政策に非常に注目し、「満州国」の成立以前の教育機関全ての監査を行い、多くの「不適当な」中国人の教師を「追放」し、そして、残った中国人教員と日本人教師の「再教育」をしなければならなかった。「教員講習所」、「中央指導訓練所」などにおいて、教師は専門的上級訓練を受けることに限らず、「建国精神」をも身に付けていた。[253]

このことから、「満州国」の教育機関に勤務する教員の思考を行政府によってコントロールされていた、ということが伺える。しかし、ここで検討されてきた回想記が示しているように、学校における実践的仕事に着手した日本人教員は、国家のイデオロギーに対する忠誠心を表す義務と、自分の生徒に対する精神の健全性の育成を優先することと、両者の間に立って、道徳的な選択をしなければならないこともあった。[254]
回想記の作者は、「先生」に関する記憶に重点をおいており、自分の教員についての回想記で詳細に記述をしている。

日本人の回想記では、満洲で活動していた多くの日本人の教員が、自分の仕事を、「生活の糧」としてではなく、「新しい世代の指導」、「価値観の伝達」として見ていることが主張されている。

満洲における教員の仕事は、容易なものとしては絶対見ていなかった。「僻地」に行きたかった教師が少なかったため、永井が回想しているように、レベルの低い教員が転勤させられていたことがあり、生徒に「優」と「秀」ばかりのマークを与え、生徒の育成に対しても

---

[252] 小谷野邦子（2011）『「満洲」における教員養成』//成茨城キリスト教大学紀要第４５号、社会科学、２４５-２５９頁。
[253] 同上、82 頁。
[254] http://www.chs.nihon-u.ac.jp/institute/human/kiyou/90/5.pdf、アクセス日：2017/02/12

やる気のない態度を見せた教員についての回想が残っている。[255]

業務内容から見ても、満洲における日本人教員の需要は，授業面のみならず，学校管理者の確保という点からも建国当初から高かったのである。[256]「僻地」での教員としての仕事は、校長、担任教員、学校事務員、又は、冬にストーブ焚きまでする小使いを重ねるものとして描かれている。[257]永井の回想記で登場する、スイヒン県の学校に勤めていた稲毛先生は、その全ての仕事を担当していた。その上、算数と国語の授業に関しても、稲毛先生の責任の下に置かれた。そしてさらに、稲毛先生は、「生活指導」も行い、生徒たちに毎日日記を書かせ、彼らが「どこで何をして遊び、何を発見し、何を感じ何に喜んだか」ということを記すよう指示した。[258]

しかし、第二次世界大戦の時期に、卓越した教員として記述されている稲毛先生の教え方にも、イデオロギー的なニュアンスが浸透し始める。リリヤン手芸の授業の準備の際、永井は、カンという満人の友人の作ったリリヤン文字の真似をして、「打倒美英」という、まだ意味も知らない作品を稲毛先生に提出する。友人は、「打倒米英」を意味したが、発音を間違えて、「打倒美英」という作品を作ってしまった。それにも関わらず、稲毛先生の反応は、「日本は美しい国と戦争をしているのか？よく考えなさい、うん？」と促し、満人の責任も指摘し、「クンさんとはあまり遊ばない方がいいな」という意見までも述べている。[259]　満人に対し反感を持っていた稲毛先生の批判を避けるため、永井は、自分の日記で、カンのことについて言及していない。回想記では、その行為について残念に思っていると述べている。

満人に対し稲毛先生の持つ偏見に驚いた作者は、両親に状況を伝えた際、「稲毛先生は真っ正直な生き方をしている九州男子、(略) 日本国が大事なあまり、他民族を認める寛容さがないかもしれない」。[260]

そして、永井は、「満洲国」における意見の表現の自由性に関する問題に触れている。「満洲国」の行政府にとって望ましくない意見を述べた日本人の教師の例も挙げており、三島先生は、戦争での日本の勝利を信じなかったため、前の職場から退職させられたと述べている。

回想記においては、自分の生徒に心理的サポートを意欲的に与えていた教師についても言及されている。勝山妍子は、第二次世界大戦の時期に、日本人の青年たちがイデオロギー

---

[255] 永井、同上、118-133 頁
[256] 杉森知也（2015)『「満洲国」における中等教員養成．日本人教員の再教育と養成の開始に着目して』//研究紀要第 90 号、82 頁。
[257] 同上、124 頁。
[258] 永井、同上、125 頁。
[259] 永井、同上、140 頁。
[260] 永井、同上、141 頁。

的な圧力の下に置かれた事実を記している。当時、学生だった著者は、「非国民」的な行為で批判されることを恐れ、些細な誤りも避けられるように努力していた。そのような状況においては、恐怖心を抱いている自分の生徒に、気を配った敷村先生の態度は、勝山によって高く評価された。例としては、書道の授業が取り上げられている。勝山の墨は、紙の中に染み込み、机を汚してしまう。当時は、学校の机も、天皇の「贈り物」であったため、そういう行為は、「非国民」的なものとして見られていた。勝山は、先生の反応を恐れていたが、敷村先生は、「はみ出してもよい」と述べて、著者の誤りを咎めなかった。[261]

以上から、「満洲国」においては、第二次世界戦の時期に、イデオロギーが学校まで浸透していたが、生徒たちにそれをどのように伝えるべきか、各教員の個人的な態度により決められるものであったと思われる。

そして、多民族的国家の満洲においては、外国語を教える教員の役割が特に重視されていた。教員は、民族の交流を促進させるべきだという考え方が一般的に存在するが、「満洲国」の時代に、多くの回想記の作者が示すように、北満学院でロシア語を教えていた清水先生は、この課題を完全に果たした。「在満日本人の中のロシア語の最高権威者」として認められた。[262]　清水先生の長所の中で、「あくまで「実際に役に立つ、生きて使える言葉」を教え込む」という授業を行い、ロシア人に対して誠実で好意的な態度、行政機関の圧制に抵抗する勢力が例に挙げられている。清水先生は、ロシア語の会話に注目をし、ロシア人の家で下宿などをする活動を通じて日ロ交流を促していた。時には、親ソ派の疑いのある学生に卒業証書を出さないという上からの指示があったが、「露人自身の幸福のための」教育方針を変えなかった」先生は、その学生たちの味方となって、彼らを一生懸命守っていた。[263]

ロシア人に対する好意的な態度が、1945 年終戦時には清水にとって利益的となり、反ソ反共人材を育成するという疑いの下に置かれていた北満学院の代表者であった清水は、ロシア人の斡旋があって、尋問を受けることも避けられ、無事に帰国できた。[264]

このように、満洲における教師としての仕事は、業務の内容からも、心理的な視点からも、容易なものではなかった。そのなかでも、自発的に帝国主義のイデオロギーを生徒にも伝えたかった教師がいたが、その反対に、「満洲国」のイデオロギーの影響から自分の生徒を「守る」ことを恐れなかった教師も存在していた。そして、様々な民族との間の「架け橋」としての役割を担った外国語の教師は、戦争の時期にも、民族的交流を促進させる力を見せることができた。

---

[261] 勝山妍子（2007）夕映えのスンガリー．光陽出版社、82-86 頁。
[262] 後藤春吉（編集者）、(1973) ハルビンの想い出、協和印刷株式会社、192 頁。
[263] 同上、142 頁。
[264] 同上、143 頁。

3.1.4. 「満洲国作り」、「民族協和の達成」という活動に従事した日本人は社会への自分自身の影響力を享受した

言及されてきたように、満洲に移住した日本人の大多数は、「満洲国」の夢を真実に受け止めた人であった。福山郁子が回想するように、父は、結婚して二年ほどで満洲国の建国を志して、「子供を託し、我慢できずに家を飛び出してしまいました。それからどこで何をしているのか、生死さえ定かでない時もありました」。[265]

「満洲国」行政機関の職員らは、様々な改革を実行しており、その改革が日本人に限らず、満洲国のその他の民族にも触れられていた。日本人は、改革活動を社会の改善として見ており、自分自身が貢献できることにも誇りに思っていた。例えば、後藤春義は、「白系」ロシア人のディアスポラの教育機関における、再編成に任命されたことがある。その活動の本質を、「人心一新の大異動」として定義し、教育視察団を組織して、「先進国日本の学校をはじめ、各方面の実情を見せて、新人スタッフたちにも自信と日本の力に対する理解と信頼を与えようと意図した」。[266] 後藤は、大変な課題に挑戦した。「白系露人諸学校の整理統一」、「教育内容の改善」、ばらばらに存在した私塾式学校の代わりに「男女画一の省立国民高等学校と十校の私立国民学校、国民優級学校」を設立し、また、「色々な私立の白系露人の大学や専門学校を全部廃止して」、「唯一の大学として工科、商科の北満学院」も創立する。[267] その上、一部の教科書も編成された。このような行為は、「白系」ロシア人の反発を招いたが、後藤は、ロシアの私塾式の学校を、「もうけ主義者」として名づけ、そして、「白系」ロシア人については、「旧習をなつかしがる」という意見を述べ、改革が「白系」ロシア人の生活レベルを改善させると強く信じ、自分の方針を貫いていた。[268]

最終的に、予定されていた全ての改革が実行され、仕事の結果は、後藤を完全に満足させた。しかし、悪意がなくても、ロシア人の不満を無視していた後藤の態度から分かるように、「社会改善」の活動に関する情熱に襲われた、日本人の「改革者」が、個人個人の不都合を考慮に入れる余裕がなかった。

後藤春義は、「白系」ロシア人の教育機関の改革活動に限らず、「白系」ロシア人の開拓民の村の創造という、野心的なプロジェクトをも指導していた。牡丹県では、「民族協和」という、「満洲国」のアイディアを表現するものとして「ニコラエフカ」村が現れる。当時について、後藤は、「まだ若かったし、文字通り「民族協和」と「楽土建設」を念頭にして頑

[265] 福山郁子(2006)私の満州。思い出すままに、有限会社海鳥社、114 頁。
[266] 後藤、同上、186 頁。
[267] 同上、188 頁。
[268] 同上、191 頁。

張ったつもりだった」ということを述べている。[269]そして、その計画を、理想的な夢のように描いている:

（略）私はこの県を「開拓のモデル県」に仕立てていたいと思った。日鮮満の格開拓民が、それぞれの民族性と特技を生かし、「村づくり」の成績を競い、隣同士で啓発し合い融和提供して、石の多い荒れた丘陵や、厄介物扱いされていた低湿地が、やがて高梁に繋がり、稲穂の波打つ田園化して行く状態を想像して、その実現に向けて、あらゆる努力を惜しまなかった。[270]

この後、計画者はロシア人も視野に入れ、「ニコワエフカ」村の建設作業が始まった。後藤は、自分でその村に住む家族を選択し、村の創造のプロセスを完全にコントロールしていた。村が出来た後、酒の悪用、仕事の回避、などのような不正行為について情報があったが、時間がたっていたからか、もう既に行政機関を辞任していた後藤が、ニコラエフカ村を再訪する際、農民から大歓迎を受けた。このように自分の仕事が実りのあったものだと理解した。

以上から、「満洲国」のイデオロギーは、日本人に大きなモチベーションを与え、日本人は、自分の仕事をやりがいのあるものとして見ていた。しかし、それよりも、自分自身が社会を改革させるという認識があったからこそ、満洲国の行政府の職員たちは、一生懸命努力していたのではないだろうか。

3.1.5. 第二次世界大戦の時に、生徒を労働力として使用：大人になった時に、自分のことに対する政府の扱いの不当性について把握すること

日本が第二次世界大戦に入った時点から、「満洲国」においては、日本国民としての意識の高揚に向けられたプロパガンダは以前より活発化し、学校にまでも浸透してきた。勝山が回想するように、「学校でも、薙刀と武道の時間が増えて、将来の五族の指導者としての誇りを示せ、と常に叱咤され、学校の授業時間はどんどん削られていった」。[271]女学校での授業にモールス電信が加わった。[272]勝山は、その他の生徒と一緒に、軍隊用のシーツや落下傘の縫製をするために、工場に通わなければならなくなった。職場での状態を次の言葉で記述する：

[269] 後藤、同上、198 頁。
[270] 同上、199 頁。
[271] 勝山、同上、74 頁。
[272] 同上、79 頁。

「天皇陛下のためならば、なんでこの身が惜しかろう」などと歌い、「滅私奉公」「たおれて後やむ」を合言葉に、一丸となって任務の遂行に努力していた。[273]

時間が経ってから、生徒たちは本格的な軍需工場で弾丸製造に動員されるようになった。工場は、「殺風景な場所」に位置され、生徒たちは、砲弾づくり班と手榴弾づくり班に分けられて仕事を行っていた。勝山は、仕事の内容を次のように記述している：

まず、火薬を詰める生徒が選ばれる。定められた火薬の分量を正確に量り、細い筒にこぼさないように入れていく。(略) 少しでも分量を間違えたり、手に転がったり、絹の袋の口の縫い綴じが荒っぽかったり、こぼしたりすると、自分だけでなく皆の命が危険にさらされる。[274]

著者は、毎日努力して、朝に「駅にたどり着くまで、おしゃべりどころか笑う気力も残っていなかった」ということを回想している。

軍需工場での最後の仕事としては、最も危険な雷管（起爆用の発火装置）の製造が任せられた。[275]

勝山によれば、軍から校長宛てに感謝状が与えられた。しかし、勝山の学校の校長は、勇気を出して、軍隊に、感謝状の代わりに、工場で働いている生徒に勉強の時間と休憩を与えることを申し入れた。勝山が回想するように、「たしかに、私たちは、お茶も出してもらい、少しばかりのオヤツも、休息時間ももらえて、他校の生徒からうらやましがられたと思う」。[276]

被支配者の立場にあった中国人の生徒の労働条件は、日本人よりも厳しかったが、日本人も、命が危険で、肉体的に、精神的に若者にとって大変すぎる仕事を強いられたこと、給食量と休憩時間が提供されなかったことに関する回想が残っている。

回想記から分かるように、日本人の若者は、当時の自分の立場と義務を当たり前のことのように受け止め、労働状況に関する苦情も述べたことがなかった。しかし、時間が経ってから、著者らは、自分の経験を大人の視点から再評価し、自分の権利が制限されていたことを把握するようになったため、回想記においては、悔しい気持ちを表している。

---

[273] 勝山、同上、74 頁。
[274] 同上、77 頁。
[275] 同上、78 頁。
[276] 同上、78 頁。

以上のことから、第二次世界大戦の時代に、日本人の若者は、大日本帝国の一員である、という認識を教え込まれ、工場においては国民としての義務を果たすように、疑問を抱かずに、努力していた。

3.1.6.「開拓団」における仕事の特徴：田舎の生活に慣れていない人は適応できない

小宮清は、幼い頃から、両親と一緒にチチハルに位置する開拓団に居住していた。回想記で述べているように、満洲における農民の生活様式は、多くの点で、日本内地と変わらなかった。冬の時期に仕事があまりなく、休む時間が沢山あり、また様々な祭りが開催されることも好きであった。しかし、農民としての生活に耐えられなかった人もおり、例としては、あるトラック技師が例に挙げられている。小宮が回想するように、「彼は毎日単調な仕事をトラクター相手に続けねばならず、とうとう強度のホームシックにかかってしまった」。[277] しかし、著者の両親に自分の悩みをこぼした時、父の反応は、「あいつは都会育ちなんだ。トラクターの運転ができるというだけで、「地の果て」にやって来たわけだから、開拓団の生活なんかまっぴらなんだよ」というものであった。[278]この意見が示すように、農民としての仕事は、幅広い分野での知識と技能を有することが求められていた。

満洲における日本人の農民の生活について、一人目の次長は、子供が適当な教育を受けることができないということを挙げている。小宮は、教育の状況を次にように記述している：

> 小学校は在満国民小学校といった。六年生までいき、そのあと二年間の高等小学校に入った。学力が優れていれば、受験して別の中学校へ行けることになっていたが、開拓団ではそんな人は少なかった。勉強よりも農作業の方が大切だった。[279]

満洲における日本人の農民の生活について、二人目の次長は、開拓団からその他の所への移動が難しい、ということを挙げている。小宮の回想記から、日本人の農民の自由は、かなり制限されているということが分かる。小宮の父は、息子の今後の教育について考え、転勤を決意する。チチハルの林産課長を説得するため、父は「涙ながらに開拓団の生活のわびしさと、子供の教育のためにこの開拓団を出たいとうちあけた」が、「戦争が厳しくなり、食料の増産命令がでていたし、父のかわりの農事指導員もすぐみつからない」ので、退職願いは、最初に拒否された。許可を得るため、かなりの時間と努力が必要となった。[280]

---

[277] 小宮清（1990）満洲メモリ・マップ、筑摩書房、66 頁。
[278] 小宮、同上、68 頁。
[279] 同上、88 頁。
[280] 小宮、同上、90 頁

三人目の次長は、開拓団の農民たちは、他の世界から閉鎖されたかのような生活を送り、日本に限らず、満洲の都会からの情報も、一番最後に受けていたことが多かった。小宮が回想するように、「戦争遂行に不都合なニュースはいっさい流されなかったから、内地の壊滅的状況（略）についての正確な情報は伝えられていなかった」と書いている。[281] 1945年にソ連兵が満洲を占領した時、日本人の農民は避難するのが間に合わず、大きな被害を受けた。

以上から、一方では、満洲における日本人の農民の活動内容は、日本と変わらなかったが、もう一方では、適当な教育も受けられず、開拓団からも自由に移動できなかった。また、外からの情報も受けていなかったという次長もいたことから、満洲における日本人の農民が完全な自由があったとは言えない。

3.1.7. 敗戦後の日本人の労働状況：機知、コネクション、そして勇気の重要性

もう既に言及されたように、終戦時点から引き上げまで、約1年間続く混乱の中で、日本人は生き残る方法を探す必要があった。例えば、ハルビンにおいては、日本人の経営する全ての店が閉まり、満洲の様々な地域からハルビンに引揚げた日本人家族、そして、ソ連兵により行われた「男狩り」で連行され、1945年の秋に収容された牡丹江からハルビンに帰ってきた男は、一生懸命仕事を探し始めた。[282]

日本人の都会人は、一般労働者以外の仕事を受けることが出来なかったため、社会的地位が下がることが、精神的負担ともなった。加藤淑子は、次のような様子を目撃していた：

> 今まで事務的な仕事をしていた者が、肉体的労働者として使われる身となっていた。最大、最強の職場だった満鉄のある社員は、駅構内で石炭の積み込み作業につきはじめる。[283]
>
> 仕事時間は、一日10時間であり、報酬としては、約15円という、ほんの僅かな金額が与えられた。[284]

しかし、その極端な状態にも関わらず、小宮が示しているように、多くの日本人は、才覚を発揮することができた。[285]

例えば、加藤淑子の知り合いは、石炭を積み込む作業に従事していた時に、危険性を把握

---

[281] 小宮、同上、120頁
[282] 石村博、同上、43頁
[283] 石村、同上、44頁
[284] 石村、同上、44頁
[285] 小宮、同上、154頁。

しながらも、石炭をポケットに詰めて、後で中国人に高い値段で販売していた。[286]
コネクションを持つ日本人は、仕事を見つけるチャンスがあった。加藤淑子は、夫の幸四郎のハルビン学院の後輩であった、「顔の広い」人間として知られていた竹崎の斡旋を通じて『チューリン&Co.』百貨店に、針子として就職できた。その後も、「ふたたび竹崎と相談する」ことの結果、裕福なユダヤ人主婦の経営する洋裁室での仕事を与えられた。[287]

加藤淑子と同じく、多くの日本人の女性は、刺繍の知識を活用し、着物などを解き、和風の魅力を伝える友禅などのような生地から人形といった様々なお土産を作っていた。日本人の視点からも不思議なことに、このような収入を得る方法を促す人として、ソ連兵が登場している。例えば、新京に泊まっていた永井の母は、ソ連兵のお客にとって、友禅の着物をワンピースや小物などに作り直し、着物の裏地の布も使用し、「ソ連兵には（略）評判がいい」ハンカチやマフラーなどを作っていた。[288]永井の回想においては、布を見ながら、「売れる」製品のモデルを考えている母の姿が描かれている。[289]

ハルビンに住まっていた勝山家族は、ソ連人に販売する人形を作成するため、家で見つけられるどのような材料でも使用していた：

（略）机の抽出を抜き、窓ガラスを壊してその上にはめ、中国人街の満人の卸屋から仕入れた煙草やまんじゅう、炒めたヒマワリの種などをこの手製の箱に入れ、自分の着物をほどいて作った小さな和服やドレスを着せた人形を並べて、ソ連軍宿舎の前や大連に出て、ソ連の兵隊に売って生活の足しにしたものだ。[290]

回想記から分かるように、特にドレスを作る裁縫師は、注文がある場合、収入が得られたが、ユダヤ系家族の下で洋裁者として働いていた加藤淑子は、主人の幸四郎が回想しているように、「辛うじて生計を維持していた」。[291]このことから、洋裁者としての仕事は、生活の最低レベルしか維持できなかったことが伺える。

そして、ソ連人の依頼人を探すことにおいても、収入を得る機会を見出した日本人が現れ、新京に住まっていた中島は、ロシア語の知識を活用し、日本人とソ連人の間の媒介人として活動していた。例えば、中島は、ソ連人向けのコンサート・ホールが開かれることを聞いた時、ソ連人の女性にワンピースを売るアイディアが生まれた。このように、永井家族は、綺

[286] 石原、同上、44 頁。
[287] 同上、52 頁。
[288] 永井、同上、294 頁。
[289] 同上、295 頁。
[290] 勝山、同上、179 頁。
[291] 加藤幸四郎（1981）風来漫歩、櫻書房、134 頁。

麗なドレスを要求するソ連人から多数の注文を受け始めた。[292]

そして、日本人は、中国人のカスタマーに向けても、販売活動を始め、この活動についても、「立場が完全に逆転した」というように、不思議なこととして捉えていた。
日本人の子供は自分の家族を支援するため、食事、雑用品などを提供する行商人として働いていた。遼陽市に住まっていた小宮は、当時の状況について、次のように記している：

長屋の子供たちは、申し合わせたように、自家製の団子やまんじゅうを首から吊り下げた箱に入れて、街を売り歩き、生活のためのお金を稼ぎ始めた。売り歩きの活動においては、加藤淑子を特に感動させたことは、工業ハンドアウトなどのような、当時における不要な商品さえも、売れたことがある。[293]

その仕事のマイナス面としては、支払い金額において騙される可能性、また、極端な場合、中国人、朝鮮人の買手から虐待を受ける危険性、若い売り歩き人との間に発生した競争関係など、その仕事において許せない、そして心細さを乗り越える必要性が取上げられている。[294]例えば、小宮は、自分の売上高が、他の男より少なかったことを、大失敗だと見ており、それ以外の自分の「弱いところ」についても取り上げている：
「マントウ、マントーッ」と最初の売り声をあげるまでには、大変な勇気が必要だった。はじめは人通りの少ない裏通りを、おずおずと売り歩いた。とても表通りのにぎやかな所で声を張り上げる勇気はなかった。[295]

そして、親戚、友人サークルにおいては、相互支援に関する暗黙なルールが存在していたため、この方法からも、「仕事」を受けることが可能であった。永井が回想しているように、商売で出かけることが多い叔母は、若い永井に、留守番と「品物に値札を付けたり外したり」といった程度の仕事を提供し、「報酬」としては、一緒に食事をすることが約束された。このようにして、永井は、自分の家族の負担を軽減した。[296]そして、この仕事の「ボーナス」としては、親戚宅に泊まっていた永井は、本を読むこと、ラジオを聴くことなどのような、当時の視点からでは「贅沢な」遊びも提供されたことが挙げられている。[297]

このように、終戦後の混乱の中で存在していた多くの日本人は、「敗戦者」としての自分の立場を受け止め、人生に対する不満を表さず、元の立場に相当しない仕事をしていた。そ

[292] 永井、同上、295 頁。
[293] 小宮、同上、44 頁。
[294] 同上、155 頁。
[295] 同上、155 頁。
[296] 永井、同上、299 頁。
[297] 同上、300 頁。

して、多くの日本人は、機知、創造能力、冒険、コネクションなど、効果をもたらせる全ての「手段」を活用して、生き残る方法を一所懸命さがしていた。この時代、多くの日本人の男性は、ソ連軍により逮捕され、殺害されたため、自分自身だけが信頼出来た日本人の女性と子供は、この時期に精神の強さを発揮できたと思われる。

まとめとして

1920－1940 年代に満州における日本人は、安定した仕事を持ち、農民の場合においても、貧乏な生活にも関わらず、せめての食料品を整えることができた。

転勤生活を送る日本人は、毎回新しい生活条件に適応しなければならなかった。満洲の多くの地域においては、生活レベルが低く、日本人の住民も少なかったため、様々な不便さに直面していた。

それと同時に、「満洲国建国」の活動に従事していた日本人は、自分の努力により唯一の社会モデルを創造することを、大変光栄に思っており、やる気のある態度を表していた。回想記においては、職場の雰囲気について、仕事に人生を捧げた職員の献身的な態度が、チーム活動の有効的な基盤となり、情熱的な雰囲気をも創造していた、ということが強調されている。

最も大変な仕事としては、教師と農民が取り上げられる。日本国内においてさえも、教員不足の問題があったため、満洲への移住に募集することが容易なものではなかった。満洲において活動していた教師は、スタッフが不足しているという理由により、業務が多かった。しかし、それよりも、「満洲国」の時代、満洲国政府の政策とイデオロギーを自分の生徒に対しても、伝えなければならないという業務は、精神的な負担であった。

生徒は、戦争時代に労働力として使用されたことについて、大人になった時に、再考察し、当時の社会における不公正に関して、辛い思いを抱いていた。

そして、農民という仕事は、幅広い知識、卓越した肉体的、精神的忍耐力が求められ、最も大変なこととしては、農民の行動の自由が制限されていることが、取り上げられている。開拓団の中で、かつて都会生活を送っていた一員が、農業生活の厳しさに耐えられなかったと主張している。

女性について、当時の日本社会の伝統に従い、「家庭主婦」としての役割を担っていた。学校の教員の中には、女性も活動していたが、男女数を比較すれば、男性のほうが多かった。経済的余裕を持つ家庭においては、満人、中国人の家政婦がいたこともあるが、その場合においても、家庭主婦の仕事は重労働だった。永井の母は、四番目の子供が生まれるという「特別事情」が発生し、満人の家政婦を雇うことになった。しかし、農家の妻たちは、家事に限らず、農業にも汗を流していたため、最も大変な生活条件にあったと思われる。

終戦後の多くの日本人の男性は、ソ連兵により連行され、殺害されたため、女性と子供は、お金を稼ぐため、全力を尽くしていた。この状況においては、多くの女性と子供は精神の強さを発揮できた。そして、ソ連兵により開放された男、又は、幸運により、連行を避けることが出来た男は、元の社会的地位があったにも関わらず、労働者として、大変な仕事をする他なかった。面白いことに、その極端な状況においても、ある日本人は、機知を発揮し、日ソ貿易における媒介人、再販業者としての稼ぎが出来た。そして、女性を救ったことは、刺繍に関する特技、創造能力、お金を稼ぐことに対する意欲の強さ、というようなパーソナリティの特徴である。

以上のことから、日本人は、満洲における自分の活動を再評価し、自分の権利が制限されていたこと、行動の自由がコントロールされていたこと、期待が裏切られたことについて、残念に思っている。それと同時に、満洲における仕事は、収入をもたらしたにも関わらず、生活条件に適応するため、多くの人は、自分の性格を見直さなければいけないし、忍耐力を鍛えることも必要だった、と述べている。

ここまでは、「仕事」という日本人の生活面について、検討してきた。次項においては、1920－1940 年代の満洲における日本人の「住宅」と特徴について追究する。

3.2. 住宅、アパート

前章で既に述べたように、ハルビンにおいては、ロシア人によって建築された建物が多く見られたため、日本人は、ロシア風のマンションと平屋住宅から選択することができた。満洲のそれ以外の街に住んでいた日本人は、中国、満洲のスタイルで建設された建築物においても住まっていた。回想記では、それぞれの住宅の特徴を取り上げる際、暖房の方法に注目をしている。ロシア風の平屋住宅についは、ロシアの文化のシンボルとして見られているペチカが挙げられている。そして、満洲風の建築物については、床の下に設けられたオンドルに言及している。

満州のそれ以外の町と比較すれば、ハルビンにおける生活条件は非常に便利なものであった。スイヒン県などのような「僻地」においては、電気と水道はなかったが、ハルビンの住宅においては、必要不可欠な設備が全て設けられていた。それと同時に、ハルビンにあった建築物においても、マイナスな面があり、福山が回想しているように、アパートメントにはお風呂がなかったため、銭湯に通わなければいけなかった。

柳田桃太郎はハルビンにおける住宅について次のように記述している：

ハルビンには、亡命ロシア人が建てた四階建の煉瓦造が多い。中心部から離れた場所にある平屋建てにおいても、ロシア風のバンガローは、現在も同様である、4 DK や

５DK あり、外見よりは広々とした造りであった。若者（ここで日本人）は、一戸建てを構える必要もないので、貸間を探し回った。コムナタとは部屋のこと、カントラというのは家屋のことだからと先輩から教えてもらう。[298]

節約するため、「白系」ロシア人のアパートで部屋を借りることは、日本人の若者に限らず、世帯にも流行っていた。加藤は、「白系」ロシア人がなぜ貸間を提供していたのかを次のように説明している：「ハルビンに住むロシア人は、亡命貴族の人たちが多く、持っている財産を売り払うか、こうして持ち家を人に貸すことでしか収入を得る方法がなかったのである」。[299]このように、日本人からの賃貸収入が「白系」亡命ロシア人の経済状況の悪化を防ぐ、つまり家計の一助になったと思われる。

前章で既に述べたように、満州における日本人の都会人と満州の様々な僻地に離散した開拓団の農民の生活条件は平等なものではなかった。この差異は、住宅の様子においても表れている。本章では、満州における日本人の都会人と開拓団の農民の住宅状況の分析を通じて、満州における彼らの生活様式について論じる。

3.2. 1. 日本人の官吏に当てられた市営住宅の様子：設計の同一性、和室の雰囲気の再現

満洲において建築されたロシア風と日本風の住宅は、相違点が多かった。加藤淑子は、満洲でロシア風の住宅に慣れていったため、臨戦態勢の頃、家族と一緒に奉天の朝日徴満鉄社宅に「落ち着く」ことを決めた時、このような社宅の雰囲気とロシア風の住宅様式とのコントラスト性を強く感じていた：

建物は日本式で間取りも日本式。畳の部屋が三部屋、板の間にガス台がある台所と、暖房のためのかまど、風呂場などがある。表の部屋の窓は大きいが鉄の格子があって薄暗い。暖房はスチーム式であるが、かまどで焚くようになっている。[300]

この住宅のインテリアにおいては、家らしい快適さが不足しているということが感じられていた。そして、この住宅の不便なところの一つとしては、部屋の温度を保つことの難しさを示している：

家族の皆が起きるまでに暖房のかまどを焚かなくてはならない。部屋の温度は四度

[298] 柳田、同上、219 頁。
[299] 加藤淑子、同上、76 頁。
[300] 石原、同上、155 頁。

くらいになっている時もあり、その寒さの中で前日の灰の始末をして、石炭を外から運び、焚きつけるまでは大仕事である。[301]

永井瑞江の父は、満洲国行政府の官吏を務めたため、新しい勤務先において、政府から市営住宅を与えられた。その建築物は、全てが煉瓦造だった。永井は、そのような家に慣れていたため、満人の粘土造り住宅が、別の世界として見られていた。
日本人の官吏に向けられた市営住宅の特徴としては、形の同一性、一つの場所における全ての建築物の位置づけが挙げられている。長井の記憶においては、次のような様子が残されている：

牡丹江市の市営住宅は、赤い煉瓦の四軒長屋、一軒の屋根から大小一本ずつ煉瓦の煙突が出ている。（略）大人でも間違えそうな同じ造りの四軒長屋が十棟か十五棟ぐらい並んでいる。[302]

それぞれの住宅に番号があり、「第一市営住宅」、「第二市営住宅」と名づけられていた。永井は、満洲における自分の子供の頃を、多くの点で退屈なものとして描いており、自分の住む所のこのようなうっとうしい風景も、ムードに悪影響を与えるものであった。[303]
そして、官舎の中のレイアウトを次のように描いている：

郵便受けがついた玄関の扉を開けると、南側に八畳と六畳の座敷があり、八畳の部屋には床の間と押入があり、六畳の部屋にも押入とタンスを置く板の間があり、北側に三畳の子供部屋と便所と風呂、突き当りに台所。家の真ん中に大きなペチカがあって一度に部屋全部を暖められる至極合理的にできている官舎である。[304]

前に住んでいた住宅においても、「それが決まりのように、大きな丸いペチカの回りに畳の和室がありました」と加えている。[305]
高い地位を持つ官吏の住宅は、一般の官吏と異なり、スペースがより広く、外見も卓越していた。[306]そして、スイヒン県の県長は、満州人だったため、彼の住宅は「満洲人向きに作

[301] 石原、同上、155 頁。
[302] 永井、同上、38 頁。
[303] 小宮、同上、38 頁。
[304] 永井、同上、84 頁。
[305] 同上、84 頁。
[306] 永井、同上、119 頁。

られていた」と示されている。その住宅には、畳の部屋はなく、暖房方法としてはオンドルが使用されていた。

スイヒン県においても、著者の家族が住んでいた官舎は、副県長の官舎とも屋根続きで、壁一つで隣り合わせていた。このように、日本の行政府に属している官吏は、職場に限らず、プライベートな生活においても、一組として共存する他なかった。全ての市営住宅を、一つの場に集めて建てる計画により、満洲国の行政府は職員の団結性を維持していたと思われる。加藤が回想するように、このような市営住宅に住んでいた日本人は、日系ディアスポラの枠の中で存在しており、日本的な生活様式を保っていた。そして、団結性の高いこの日本人の生活様式と、ハルビンの中で離散して、「白系」ロシア人のアパートに住み、ロシア人と積極的に交流していた日本人の生活様式との間に相違点があると思われる。

3.2.2. ロシア人によって建てられたマンションのアパートと平屋住宅：日本人のミドル・クラスに相当する快適さと珍しさが感じられた

もう既に述べたように、満洲における多くの日本人は、賃貸料を節約するため、「白系」ロシア人に提供された貸間に住まうことがある。しかし、満州国の時代に、多くのロシアの建築物は、日本の会社などにより管理されるようになった。例えば、福山家族は、ハルビンに住んでいた時、チチカールスカヤの家に住まった際、持ち主について次のような事実を聞いた：

> この家の家主は中央銀行でした。中央銀行は満州国の銀行ですから、できてまだ日が浅いのです。難しい手続きでロシア人のものが中銀のものになったのでしょう。[307]

このような日本人によって管理された住宅においても、ロシア人が住んでおり、福山の隣人としては、ユダヤ系ロシア人の家族について言及されている。

ロシア風の建築物を初めて見た日本人は、ロシア人の視点からすれば当たり前と感じる点に感動した。

撫順からハルビンに引っ越したばかりの福山は、ハルビンにおけるロシアの建築物の技術の高さについて次のように記述している：

> 私は、（略）新しい家に案内された時、この白壁の堂々とした見物を見上げてしまいました。　二階室ですが、日本人の建てた家から見ると三階くらいは充分ありました。

[307] 福山、同上、97 頁。

[308]

福山は、ロシアの建物においては、天井も高く、窓も大きく、さらに四方に二重窓があると特筆している。窓も、戸も、二重三重になっており、寒さを防ぐ効果がある。冬の時、隙間風が入らないように、窓はピッタリと目張りをする必要があったと強調している。この記述を通じて、満洲の冬が、どれ程厳しかったかを表すことができる。

加藤淑子は、ハルビンと京都での住宅の位置づけを比較し、ハルビンにおけるロシアの建物全ては、「垣根や門から家までずいぶん遠い」と述べている。「京都だったらこの間に何軒も家を建てるだろう」と加えている。[309]

加藤淑子は、ロシア人のアパートで間借りした。このように、ロシア的なインテリアを満喫することができた。加藤は、ロシア風のインテリアの珍しさと、そのインテリアを高く評価した：

> たいていの家は、電気のシェードが絹張りで、リリヤンの房のついたもの。ソファの上には刺繍の色とりどりのクッションが置かれ、花が咲いているように美しい。窓には観葉植物と見事な白いレースのカーテンがかかっており、壁には所狭しといろいろな写真が貼ってある。床には絨毯が敷きつめられ、それも一枚ではなく、いろいろな柄のものが敷いてある。壁紙も様々な模様の図柄で楽しい。美しい柄の絨毯が壁いっぱいに張り付けてあることも珍しくない。これはごく普通のロシア人のインテリアである。[310]

ロシア風のインテリアを評価する際、加藤は次のような意見を述べている：

> ロシアの家はどこの家も家具調度が立派で、インテリアが素晴らしい。ピアノの上にも見事なレースがかけてある家や、人形が飾っている家があって、見るだけでも楽しかった。[311]

日本人の管理下に置かれたロシアの住宅の部屋に、日本人の期待に応え、畳が敷かれたことがある。福山は、チチカールスカヤの家の雰囲気を次のように回想している：

---

[308] 福山、同上、96 頁。
[309] 加藤、同上、45 頁。
[310] 同上、74 頁。
[311] 同上、87 頁。

奥の部屋を六畳の畳敷きにして私と母がここで寝ました。畳敷きは床が高くなっていましたから、私はここの窓からテラスに出ました。[312]

チチカールスカヤの家の不便性の中で、「お便所とお風呂が一緒」、「廊下は暗い」ということが挙げられている。

都会人の日本人は、ロシアの田舎にありふれた一戸建ての住宅に住むこともあった。しかし、原則として、このような住宅は郊外に位置づけられていたため、臨時的な住み場所としてしか見られていなかった。例えば、加藤淑子は、ハルビンが洪水になった時、ウクライナ系ロシア人のトホールの住宅で仮住まいをした。トホールの一戸建て住宅の様子を記述する時、加藤淑子は、家の前庭にあった広い花壇、庭の片隅にある夏用の小さい炊事場、二ワトリ小屋について回想している。加藤淑子を魅了したものは、ロシア田舎風の住宅の「エリア」の中において造られた、日本人の視点からは珍しい雰囲気である。前庭においては、あんず、うめ、リンゴ、ライラックなどがあり、ヒヨコ、七面鳥、豚の存在も言及されている。

このようなロシアの田舎の雰囲気が加藤淑子は気に入り、トホールの家は、ある程度理想化された快適なところとして記述されている：

春には孵ったばかりのヒヨコが歩きまわり、そこに七面鳥や豚もいて大賑わいとなる。毎日毎日、卵をヒヨコに孵らせて、百羽ぐらいまで増やす。（略）豚小屋はツルツルに掃除しており、豚たちは放し飼いでピカピカであった。ピンク色の豚が自由に走り回る姿がたまらなく可愛い。[313]

加藤は、彼らの生活を「全部自給自足であった」と定義する。[314]そして、田舎における生活は、加藤淑子の気に入るものとなった：

建物の横、表と裏の庭をつなぐ場所にチェリョームハ（桜の一種）の大きな木があって、陰を作っている。私たちはこの木の下に食卓をおいて、夏にはここで食事をしていた。何もかも自分の手で作る彼らの暮しのおかげで、私たちの暮らしも季節に飾られた美しいものとなった。[315]

---

[312] 福山、同上、97 頁。
[313] 加藤、同上、106 頁。
[314] 同上、105 頁。
[315] 加藤、同上、107 頁。

加藤敏子の意見では、ハルビンにおけるロシアのマンション、アパートの快適さは、日本における住宅を凌いでいた。満州国の行政府の事務員、満鉄社員などはロシアの建物を選んだことから、ロシア風の建築物が高いレベルであるものとして評価されたということがわかる。その上、ロシア田舎風の住宅と、このような住宅特有の生活様式は、日本人の視点から、楽しくて、珍しいものであったことが分かる。

3.2.3. ロシア人のアパートを借りた日本人： ロシア人の中で生きる経験の重要性

ハルビンに居住していた多くの日本人にとって、ロシア人の隣人の存在は、ハルビンにおける現実性の一部であった。

加藤淑子が回想するように、ハルビンでは「白系」ロシア人によって提供された貸間を探すことは困難なものではなかった。街の様々なところにあった掲示板などでは、そのサービスに関する張り紙に当たることができた。[316]

柳田桃太郎は「白系」ロシア人の夫婦のアパートで部屋を借りていた。事前の交渉では、ご飯が必要かどうかについても話し合い、柳田はそのサービスを拒否した。しかし、多くのロシア人の家主は、貸家人を特別扱いし、時には、柳田がロシア風のご飯を「ご馳走になった」こともあり、それに加え、ギリシャ正教の祭典では、誕生日が来た時、柳田も是非と遊びに誘われていた。

ロシア人の家主によって提供されて料理について、次のような回想が残っている：

> ロシアスープのボリシチ、牛肉のシチュー、ロシア風の菓子は一流のレストランの味にも劣らないものであった。[317]

加藤淑子も、主人と一緒に複数の「白系」ロシア人から部屋を借りた。最初に住まったところは、マリア・ニコラーエブナの家である。加藤は毎日炊事場でマリア・ニコラーエブナと交流していた。このようにして加藤は、ロシアの料理とロシア語を学んでいた。ロシア人の家主との相互理解を深めるため、ロシア語の知識が必要となった。何日、何時にお風呂が使えるか、いつ洗濯ができるかなどについて、事前にマリア・ニコラーエブナと話し合うことが必要だった。

加藤家族がマリア・ニコラ―エブナの家から引っ越した時に、彼女が加藤家族と一緒に新しい家に入植することを希望していた。そういう行為から、友好関係がどれ程強かったかを

---

316 同上、110 頁。
317 柳田、同上、220 頁。

見ることができる。

加藤家族が次に引っ越したところは、サハロフの家である。新しい家においても、加藤夫婦は、家主と友人関係を結び、誰かの誕生日、或は、名前の日の際、加藤夫婦は自分たちが「一番の賓客扱いである」と回想している。[318]貸主の一家がロシアへの帰国を決めた時、加藤家族は彼らをハルビン駅のホームまで見送りに行った。[319]このように、加藤家族は、短い期間に借家人としての立場から親友にまで至ることができた。

加藤が引っ越したその次の家、ストラグスの家では、ロシア人の主人のベッドが、まるで炊事場の上の天井からつりさげられたかようだったと、加藤は調理をしていた時、「いびきがきこえてくることがあった」ということを回想している。[320]

その次の夏の 8 月に、ハルビンでは、大雨による洪水被害が広がり、家族の安全性を心配した加藤は、マジャゴウの田舎に避難するため、ウクライナ系ロシア人のトホール・ボロジヂッチの家に一時的に住まうことを決めた。家主は、加藤家族に子供がいることを事前に知らなかったため、最初に不満を述べたが、息子を抱いていた淑子を見て、暖かく歓迎した：

「ナーシ、ナーシ、ナーシ（私の身内だと）」と言って幹雄（ここで一淑子の息子）を抱き上げると、さっさと私の手をとって家の中へ連れて入ってくれた。[321]

今後も、家主たちは、加藤が買い物などの用事で忙しかった時、「宝物のように大事そうに」育てられている息子の面倒を見てくれた。加藤家族は、トホールの子供の結婚式で、中でも貴重な賓客となった。トホールの家で数ヶ月間という短い期間で、加藤家族は親友となった。

加藤家族の次に住まったところは、イワノフの家である。加藤は、ロシア人から言葉どおりロシア的な生活様式に慣れてきた：

冬の前には大量の石炭を買い込まなければならない。ジャガイモの収穫期には、道路に山のように積み上げて売ってあるジャガイモを買い込んで、炊事場の床下の貯蔵庫にいっぱい入れる。山ブドウを売り出したら、買ってきてすぐブドウ酒をつくる。

それにも関わらず、「ピロシキの作り方、ペリメ二の作り方、パンの作り方」をフロシャというロシア人手伝いから習ってきた。[322]

---

[318] 加藤、同上、66 頁。
[319] 同上、80 頁。
[320] 同上、85 頁。
[321] 同上、104 頁。
[322] 加藤、同上、127、128 頁。

このように、「貸間」における経験を通じて、日本人はロシア人と親しくなっていった。多くの日本人にとって、ハルビンとハルビン郊外におけるロシア人の住宅は、住むところに限らず、ロシア人との交流の場ともなっていた。

3.2.4. 転勤生活を送る日本人の住宅の様子：本物の「家らしさ」の不足

回想記が示している、満洲における日本人の移動の頻度がかなり高かった。例えば、永井家族は、一つの移住先に、1－2 年間以上留まらなかった。福山も、幼稚園から小学校 3 年まで撫順市で、さらにハルビン市で 6 ヵ月過ごし、その後、吉林市で日本人小学校を卒業し、新京市で高等女学校を卒業した。[323]そういう生活状況において、自分の住宅との「精神的繋がり」が形成されなかったと思われる。住宅に対し、「仮住まい」に過ぎない、という態度は、家の様子にも反映されていた。

永井瑞江の父は、行政機関の官吏として、家族全員で、奉天、新京、牡丹江、ムーリン、スイヒン、ジャムス、スイカ、長春に留まったことがある。

ムーリン州に移住した時、「合理的に」構築された日本人の官僚の住宅に住まった。しかし、その次に住まう所となった、スイヒンの官舎においては、部屋が多すぎるという問題があった。スイヒンの冬は零下 30 度まで下がる程寒かったため、部屋の数が多いと、暖房設置は大変である：

> どうやら焚き口があちこちにあって、母親はそれを見ただけで「これは大変だ、毎朝全部の部屋を暖めるのに一人で間に合うだろうか」と言いました。[324]

もちろん、「僻地」における住宅レベルが低かったこと自体も、快適な生活空間を造り出すことを妨げていた：

> スイヒンには（略）ランプの暮しです。各部屋に大中小色々なランプが下がっていて、減った部分だけ灯油を入れる―、黒くなった芯を切り揃える―、煤けたホヤのガラス拭きをする―、これだけでも大丈夫でした。小さいランプのホヤは小さい子供の手しか入らないので、妹や弟も手伝いましたよ。[325]

---

[323] 永井、同上、223 頁。
[324] 同上、119 頁。
[325] 永井、同上、120 頁。

電気の無いスイヒンですから、ラジオも聞かれないし、蓄音機も動きません。（略）スイヒンには水道がありません。毎日満人の水汲み小父さんが井戸から水桶をてんぴんびょうで運び、お勝手の大きな水カメをいっぱいにし、風呂にも汲みいれてくれます。[326]

スイヒンにおける生活のもう一つの欠点としては、住宅の近くに子供のためのブランコや鉄棒などのような遊具が設けられていなかったことが挙げられている。このような状態に置かれた子供たちが、自分で遊ぶ方法を考える必要があった。その子供の努力を眺めていた永井は感慨深かった。[327]

このように、永井の家族は、移住生活を送りながら、様々な不便さに我慢せざるを得なかった。移動を繰り返すという状況の中で、家を特別に飾ることは不合理的なことであったが、永井が回想するように、どの自宅でも、両親は必ず位牌を祀った：

私の父母はどこに転勤しても、居間の隅に天井から吊棚を吊って、右側には神社のお礼を立てかけ、左側には祖父の位牌を飾ったりしていました。[328]

本項で既に言及されたように、福山郁子も、永井に似たような運命を担い、転勤を繰り返した父に次いで、満洲の様々な街に住んでいた。このような生活条件の下に置かれた福山家族は、家庭用品などを、不可欠な量以上、蓄積していなかった。例えば、満洲事変の理由により、撫順を避難した時、福山は、自分が持って行くことができた所有物としては、服装、学校の道具、幼稚園のころから成績表を入れた紙挟み、「その頃子供仲間で着せ替えた」厚紙に描かれた人形、画用紙で作ったその人形の洋服、そして、石けりの宝と国取りの宝というものが取り上げられている[329]この記述から、満州における一般の日本人の子供は、所有物が少なく、とてもシンプルな玩具を持っていたことが分かる。

ハルビンにおいては、福山は「チチカールスカヤ家」という、ロシア風の自宅に住まった。父のその次の勤務先の吉林では、和式住宅に住むようになった。新しい住まいのインテリアはかなりシンプルなものだった：

我が家の生活は質素です。父の勉強机と本箱、回転椅子。私の座り机、茶タンス、置き床、後は蒲団とリンゴ箱と行季の荷物くらいでした。[330]

---

[326] 同上、120 頁。
[327] 同上、121 頁。
[328] 同上、176 頁。
[329] 福山、同上、66 頁。
[330] 福山、同上、136 頁。

次の家のインテリアも、生活に必要なものだけを含む：

父の提案で、母屋の西のオンドルに羊の荒い毛のフェルトを布で巻いて、その上に畳を敷きました。ここが私たちの寝屋兼居間兼座敷になり、置床を置いて、仏様を祀りました。（略）半間の間の西寄りに一間の押入れを作りました。ふすまはないのでカーテンを張りました。夕食はここに飯台を出して戴きました。板壁の向こうに居間用のストーブを置き、机や椅子（略）も並べ、窓の下には父の机と椅子、壁際には本箱、入口の横には三角棚、この棚には花瓶と置き時計が飾られました。窓にはカーテンを張り目隠しをし、机にセンターを敷き、煙草盆を載せると、すっかり部屋は落ち着きました。[331]

このように日本人は、インテリアのシンプル性を保つこと、家庭用品を多く持たない理由としては、移住することが多かったことが挙げられる。それと同時に、質素な室内装飾は、当時の日本文化の特徴の一つであったと思われる。そして、そのような「一時的な」住宅における、日本人が必要とすることは、暖房手段を設けることと、信仰的シンボルを祀ることであったと思われる。

3.2.5. 開拓団に属する日本人の農民の生活条件：本来の意味での「自給自足」の生活の実感

1938 年、満洲国政府は、日本人農民の大量移住を実現させる。困窮生活を送っていた日本人は無料で満洲の土地を手に入れる機会を意欲的に掴んだ。小宮清の父は、1940 年に満洲に移住するまで、北海道で国から借りた原生林を畑にして、豆と馬鈴薯を育てていた。肥料の不足、干ばつの問題に悩まされた小宮家族は、満洲開拓団の募集に応募した。[332]永井は、長野県の農民の大陸への移動の動機について論じる際、山国である当県の耕地の貧しさを一つの理由として示している。[333]　満洲国行政府は 14－15 歳の若い男性をも農民として募集したが、戦争の時に発せられた動員の命令は、行政府の本音を暴くものであった。

1945 年に、「根こそぎ動員」に関する命令が発せられ、満州における男性は戦地へ送られる。その時、満州の中学生・女学生も労働力として使用され、「援農」という役割としてそれぞれの開拓団に配属された。このように、日本人の農民に限らず、14－15 歳の生徒も、開拓団における生活を体験せざるを得なかった。

開拓団における日本人の住宅の様子に注目すれば、日本人農民に対する満州国の政府の

[331] 同上、140 頁。
[332] 小宮、同上、29 頁。
[333] 永井、同上、20 頁。

態度をもっと良く理解できると思われる。永井が述べるように、「満州の都市部に住む日本人と、開拓団に送り込まれた日本人の生活には、住居も食生活も移住生活も格段の差があった」という状況であった。

小宮が回想するように、入植したばかりの開拓団の一員の最初の課題は、自分で家を建てることであった。小宮家族に最初に提供された長屋も、手作りのものであり、小宮はこの長屋を人間のための家としても見ていなかった。最初の印象を、次のように表している：

> 石油ランプがひとつ天井から下がっているのみだった（略）道具が何もなく、あちらこちらへこんだ床には、アンペラが敷き詰められていた。[334]

壁も土によって作られた長屋の「穴倉のような」[335]部屋には窓が、一つのみであった。不便なところとして、外に建てられた共同トイレ、水一つだけの原始的であった井戸が言及されている。

特に、小宮は、このような手作りの住宅の危険性について述べている。ある日、小宮の家で、土煉瓦でできたオンドルの床が壊れ、床の隙間から煙が部屋に入り込んできた。母は一酸化炭素で中毒になるという事件にまで発展した。[336]

一年が経ってから、小宮の家族は、新しくできたレンガ造り家に引っ越した。冬の到来までに、自宅が完全に乾燥せず、至るところに霜柱ができ、また、煙突の中に氷ができたという問題があったにも関わらず、前の長屋と比べものにならないぐらいの部屋の広さ、部屋の中にある便所と風呂の設置など、そのような利点は、小宮家族の生活状況を改善させた。[337]

しかし、新しい家においても、お風呂を使うことが、努力が求められることであった：

> ふろは、（略）ヤンソーをもやして沸かした。火を炊くと、釜の底が熱いので木のスノコが浮いている。それにうまく乗って沈まないと足を踏み外し、足をやけどすることになる。[338]

小宮は、住宅のインテリアの記述には、「どの家にも一丁配備されていた」陸軍歩兵の銃を言及している。開拓団が位置されたところで匪賊による襲撃もあり、ソ連の国境の辺りにあった開拓団の中に、日本人への襲撃を目指すソ連兵も侵入することがあった。このよう

---

[334] 小宮、同上、8頁。
[335] 同上、50頁。
[336] 同上、13頁。
[337] 同上、51頁。
[338] 同上、52頁。

に、開拓団の一員に配布された銃は、農民がどのような危険性にさらされたかが示されているように思われる。[339]

1945 年に、勝山は王栄廟開拓団の扶桑高女の一部に援農として配属させられた。[340]勝山の部隊は、「泥作りの平屋」に住んでいた。（101 頁）居住条件を記述する際、「掘った穴に板二枚を渡しただけの便所」、「板囲いだけの武骨な形の風呂」、「かまどの据えられた狭い台所」に言及している。しかし、当時 14 歳だった勝山は、不満を感じず、「年齢のせいだろうか、順応性とは、ある意味恐ろしいものである」と述べている。[341]

満州における日本人農民の生活条件は、その他の日本人と比較できないほど困難なものであった。「住宅」という生活面に注目すれば、それは生活に適していない土作り住宅に住まなければならない状況から言える。

3.2.6. 日本人特有のホスピタリティ：ゲストを誘うことは、主に夫と子供の「特権」であった

満洲における日本人は、日系ディアスポラの一員との関係を維持するため、友人を自分の住宅にも誘うことが多かった。親戚との関係も強かったため、年に数回は、叔父などのところを訪問するため、満洲の様々な街に旅行したことがある。子供も、友人の住宅に誘われることが、有り触れた習慣であり、誕生日には、友人が集まり、祝っていた。

しかし、回想記の分析が示しているように、当時の日本人の住宅においては、主に夫によって集合された男性友人グループ、又は、子供の友人が誘われたが、妻の役割については、美味しい料理と飲み物を準備することに限られていた。そして、男性友人の集会の際には、父は自分の子供を、ゲストのためのパフォーマンスを準備するようにと頼むこともあった。子供のゲストについて言えば、高野悦子は、自分の家に学校の友人を頻繁に誘っていた：

> 第二応接間は首尾よく私の遊び場になった。ピアノを置き、友達を集めては毎日学芸会ごっこをする。母や姉は、餡蜜や汁粉などおやつ作りに忙しかった。[342]

永井は、自分の誕生日を祝う時、全ての友人を住宅に誘うことができた、と述べている。その際に、友人に対する母の態度については、「娘の友達を好き嫌いによって選ぶようなことはさせず、（略）まことに公平なものでした」ということを加えている。[343]母は、祝祭料

[339] 小宮、同上、180 頁。
[340] 勝山、同上、97 頁。
[341] 同上、102 頁。
[342] 高野悦子、同上、136 頁。
[343] 永井、同上、87 頁。

理を作り、子供の誕生日が、記念的な出来事となるように、努力を尽くしていた。

しかし、永井は、自分の友人との交流においては、微妙な問題も発生したことがあると述べ、当時の日本の社会における上下関係が子供の友人関係にも影響を与えていた、という意見を表している。永井家族がスイヒン県に留まっていた頃には、「副県長」の娘であった永井は、満人の「県長」の娘と交流していたことについて、回想している。この友人との関係の特徴としては、「私が県長官舎に遊びに行ったのは一回だけで、ほとんど私の家に来てもらいました」[344]と記しており、このように、満人と日本人のホスピタリティ文化における相違点に関する問題を取り上げている。

前述したように、日本人の主人は、住宅に男性友人を集めることが多かった。その集会の目的は様々であり、例えば、永井の父は、新しい転勤先になる際に、自分よりランクが高い県長と同僚との友好的関係を結ぶため、自分の住宅に誘っていた。[345]もう一つの目的としては、長野県出身の永井の父は、満州国で形成されてきた「長野県人会」の構成員との関係を維持することも希望していたため、集会の会場としては、自分の居宅を使用したことがある。[346]

しかし、主人のイニシアチブにより開催されていた日本人男性の集会の最も重要な目的としては、快適な雰囲気において、当時の日本人男性の関心の視野にあったテーマについての議論と様々な「四方山話」をしながら、時間を楽しく過ごすことが挙げられる。

例えば、福山は自分の父について、以下の思い出を残している：

> この頃、私の家ではよく人が集まり酒を飲み、わいわい話し合っていました。県の参事官や省の人たちで、若く建国の志に燃えた人々でした。（略）みんな新しい国、新しい仕事に燃え、男の夢、男の情熱に心躍らせていました。[347]

加藤淑子は、幸四郎という自分の夫について、男性友人と一緒に遊ぶ熱心さにおいては、「遊興の」ロシア人に劣っていなかった、と記している。

> 幸四郎は毎晩、友人たちを引き連れて帰宅した。（略）酒と議論で夜はふけていく。政府への批判も、タブー視されている天皇機関説のことも、ここではおおっぴらに話題できる。[348]

---

[344] 同上、134 頁。
[345] 同上、119 頁。
[346] 同上、55 頁。
[347] 福山、同上、146 頁。
[348] 石原、同上、114 頁。

以上のことから、満州における日本人は、ホスピタリティ精神を有する人であったことが明らかとなった。しかし、多くの場合、住宅における友人集会のイニシエータとしては、職場の同僚とその他の友人の男性との団結性を保持することを目指していた男性、同年齢の友人を誘うことが好きだった子供が登場していた。この場合、家庭主婦の立場にある妻の役割は、ご馳走を準備することに限られていたことが分かる。

3.2.7. 第二次世界大戦の時代に、満洲国のイデオロギーは、日本人の住宅にも染み込んでいた

日本は第二次世界大戦に加入した時点から、日本国内に限らず、満洲国においても、一般市民は天皇のために努力することが義務づけられた。「非国民」として定義されるのは、日本人にとって最も恐ろしいこととなった。永井瑞江は、この状況を次のように回想している：

「非国民」という言葉は低学年の子供も、ある種の恐怖とともに認識していました。

禁止された行為の中で、「貴重品」を持つことも挙げられている：

三月の節句に雛を飾ることさえも、又、ピアノや琴、三味線の音が外に漏れるようなこともこんな贅沢は「非国民」と言われるからと、はばかられた時代でした。[349]

雛祭りは、特に日本人の女の子に好まれた祭りであった。福山郁子は、「お雛様」を大事にしており、自分の趣味について次のように回想している：「私のお雛様、（略）私の宝でした。毎年お雛様を飾る時、汗を拭きながら買い揃えた日のことを思い出していました」。[350]

そこからは、ひな祭りの際、雛台を飾ることが禁止されたことが、日本人の子供、女の子にとってどれ程痛ましいものだったかを見ることができる。

戦争の時期に、日本人社会においては、悲観的ムードが漂っていたが、「自分自身の空間」である住宅においてさえも、祭りの雰囲気を作り出すこと、様々な遊びの禁止は、日本人の精神状態に悪影響を与えたと思われる。

まとめとして

満洲における日本人は、日本人に向けられた、一つの場所にコンパクトに建築された住宅

[349] 永井、同上、155 頁。
[350] 福山、同上、48 頁。

で日系ディアスポラの一員として生きること、又は、離散して、「白系」ロシア人のアパートメントの貸間に、ロシア風の住宅で、独立した生活を送ることなど、生活様式が様々であった。そして、ロシア人の隣人と共生していた日本人は、ロシア文化をも身につけ、ロシア人との交流を深めていた。

多くの日本人は、移動が何回もあり、一つの場所に留まる期間も短いため、自分の住むところには精神的繋がりがなく、その家を「仮住まい」としてのみ見ていた。そのような生活様式は、インテリアにも影響を与えていた。

そして、原則として、日本人は、贅沢をする傾向はなかった。永井は、ランクの高い日本人の官吏の住宅について言及する際、彼らの生活様式の特徴としては、家のサイズが大きく、部屋の数が多いということを挙げている。日本人はシンプルな生活様式を送り、それはインテリアにも反映されていた。

日本人の農民の生活条件が、最も厳しいものであり、基本的な快適さを整備することにも、多大なる努力が多数求められていた。

ここまでは、「住宅」という日本人の生活面について述べてきた。次項においては、1920－1940 年代の満洲における日本人の着衣の特徴を検討する。

3.3. 着衣

植民地化された満洲で暮らしていた都会人の日本人は、第二次世界大戦の終わりまで「困窮」と「必需品の不足」という問題を知らなかったため、彼らの回想記においては、「着衣」という生活面はそんなに多く言及されていない。

進塚瀬は、ミドル・クラスに属していた在満日本人の服装に対する態度について論じている。研究者が述べているように、在満日本人の満鉄社員や関東庁の官吏は、給料が高く、自分自身が日本人の代表者であるという誇りを持っていたことと、日本人の妻は仕事をしていなかったため、退屈であることに悩んでいたことから、多くの人は華美な暮らしにこだわっていた。[351]満洲で生まれ育った女性たちは、日本で暮らしていた女性と異なり、生活の不自由を知らず、わがままな性格を持っていた。彼女たちは、過去のことを回想する際に、「恥ずかしい程のオシャレもし、金もかなり乱暴に使っていた」という真相を明らかにした。[352]

ハルビンにおける日本人の衣食住の状態を探っていた藤原克美は、日本の文化と生活様式を保持する意志の強さについて述べている。ハルビンでは若い女性を除けば、着物姿の日本人の女性が多かった。著者によれば、「洋装は、学生など若者を中心に次第に浸透してい

[351] 塚瀬、同上、186 頁。
[352] 同上、189 頁。

った」。[353] 満洲における日本人の回想記では、「着衣」というテーマは、主として、主題としてではなく特別な出来事の背景、特別な場面を示すようなものの一部として登場している。

3.3.1. 「自由への憧れ」、「西洋文化に接触する意欲」の表現としての日本人女性のスタイル

満洲における日本人の回想記に載せられた写真に注目すれば、男性全員、西洋服であるが、多くの女性は着物の姿で現れている。しかし、多くの女性は次第に西洋の文化に接触しはじめ、西洋的なスタイルを試すという意欲を深めていった。

20 世紀初頭の日本における女性は、将来、妻と母になる準備としてスキルや作法を身につけるとともに、家族の経済的負担を軽減するという目的もあった。多くの女性は、幼いころから縫製を学び、[354]その理由により、満洲における日本人の女性も、自分で縫製する習慣はよくあった。加藤淑子も、福山郁子の祖母もミシンを持ち、家族の一員に新しい西洋的な服装をさせていた。しかし、加藤淑子の人生においては、服装は特別の意義を持っていた。加藤は、京都で呉服屋の長女として生まれ、幼いころから裁縫を学び、学校を卒業した後、大阪にある洋裁学校で勉強を続けていた。洋服に関する関心は、もうすでに幼いころから生まれ、淑子自身が回想しているように、「当時の子供としては珍しく幼稚園に通い、そこではこれも珍しい洋服を着て、すました顔で卒園式の写真に収まっていた」。[355]　淑子の父は、娘のため、神戸に行って、洋服を探した。そして、1935 年に行われた結婚式の際には、淑子に外国の雑誌を参考に、自分で作ったドレスを着せていた。このように、ハルビンに移住するまで、加藤淑子はもう既に西洋のスタイルが身についていた。

しかし、国際都市のハルビンで、ロシア人とロシアの文化に接触した加藤は、年齢、収入、社会的地位、忙しさにも関わらず綺麗な外見を保っていたロシア人女性の行動を見習い、自分自身のスタイルを以前よりも改善させる意志を強く持つようになった。

ハルビンに住みながら加藤は、縫製師として自分の能力を高めることを志していた。ミシンは最も必要な買い物であり、針子としての能力を高めることを目標として見ていた：

> ミシンを買うとミシン刺繍のレッスンが受けられるというので、キタイスカヤのシンガーミシンの店まで通うようになった。これはまったく新しい経験なのでとてもうれしかった。美しいレースが自分で作れることに感激していた。思いもよらない喜びで

[353] 藤原、同上、37 頁。
[354] http://www.japanese-childhood.manchester.ac.uk/ja/topics-2-jp/children-education-and-war-1931-1945-jp/、アクセス日 2017/02/13
[355] 石村、同上、92 頁。

あった。[356]

ハルビンの頃に撮られた加藤淑子の写真に注目すれば、ヨーロッパ風の短い髪型、凝ったデザインの帽子、単調ではなく、綺麗な装飾のあるコート、そしてヒールのある靴を履いている。加藤の子供たちも、1歳位の子供を含め、ファッショナブルで西洋風であるスタイルを見せている。回想記に載せられた写真の中で、加藤淑子が一時的に日本に戻った頃の写真もあり、そこでは着物姿でありながら、謙虚な表情をしている親戚に囲まれている加藤淑子は、自信を表す目つきで、プログレッシブな西洋人のように映されている。

加藤淑子は、幼いころから、社会的な帰順に反抗的で、自己発展を目指す人物として育った。自分のスタイルは、加藤淑子の個性を表すものとなり、西洋的な文化が繁栄していたハルビンにおける加藤淑子の視野は拡大し、針子としての能力も向上し続けた。

3.3.2. 西洋風なスタイルの裏面：自国における奇異のものとしての受け止め

満洲に暮らした日本人は、様々な理由により、一時的に日本に戻る必要があった。永井瑞江の父は、牡丹江に転勤した時、市営住宅の建設が間に合わなかったため、一人で赴任することを決意した。その際、母は子供を連れて一時的に日本の信州小県郡本原村に戻った。このように永井は小学校一年生の二学期を日本の学校で過ごした。

加藤淑子も、1945年の8月、子供を連れて、4年ぶりに京都を訪れた。淑子は洋裁店に就職し、息子の幹雄は、京都の学校に通い始めた。

永井瑞江は、日本の学校のことを回想する際、自分の服装に大注目されていることに気が付いた：

> ふだん着の洋服で登校しても、地元の信州っ子は気になるらしく、「なんだチャラチャラよそゆきなんか着がやって」とスカートを引っ張る男の子、「日本語しゃべれるだかや、おい、満語しゃべてみたい」（略）洋服を着た珍獣を見るように取り巻かれるわけです。[357]

加藤淑子の息子も、同じように、京都の学校で扱われていた：

> 幹雄は学校では、自分が他の子と違う目で見られていることを、いつも意識していた

[356] 加藤、同上、73頁。
[357] 永井、同上、34頁。

という。[358]

当時の京都を記述する際、加藤淑子は、作業服に似たモンペの上っ張りを着ていた女性が多かったことに気がついた。「京都の雅な感じからはほど遠い感じがする」という印象が残っていた。それと同時に、ハルビンは「いちばん洗練された服を売る街、おしゃれな装いのできる街」として見られていた。[359]戦時下の京都では、食糧も不足していたが、満洲における日本人は豪華な暮らしをしており、加藤がハルビンから持ち帰ってきた服は、純毛で質の良いものだったため、周りの人から「ええの着てはる。引き上げの人はよろしおすなあ」というような嫌味を言われたことがあった。[360]

このように、内地の日本人の視点からは「満洲っ子」は、贅沢な生活を送っているものとして見られていた。服装というものは、人の目を引く最初のものであったため、当時困窮した状況に直面していた日本人は、満洲から来た日本人を「よそ者」として扱っていたことが言えるのではないだろうか。

3.3.3. 満洲における着物の意義：自分の文化の保持方法に限らず、戦争後に生き残る手段

既に述べたように、藤原は満洲における日本人について、「日本の生活をできる限り持ち込もうとしていた」と記している。着物は日本人の女性にとって、日本における従来の生活のシンボルとして、重要な価値を持っていた。ハルビンの風景を表す写真と葉書に注目すれば、確かに着物姿の女性が多く見られる。

回想記においては、着物が、作者の人生における特別の地位を持つものとして描かれている。例えば、古い服を解きながら、それを見て、過去のことを回想していた福山郁子は、父の着物をどれ程大事にしていたかを述べていた：

> この着物は私の棺に入れて共に焼いてもらいたいと思って、引き上げの荷物と一緒に持ってきたものです。[361]

福山が 2 歳だった頃に、母親と別れ、父が福山の面倒を見るようになった。前に言及された父の着物については、それが裁縫の得意だった生母の手仕事である可能性が高かったため、著者はこの父の着物に対し、次のような気持ちをも抱いていた：

---

[358] 石村、同上、144 頁。
[359] 同上、143 頁。
[360] 石村、同上、145 頁。
[361] 福山、同上、15 頁。

母はまだ父を思い、父の旅立ちのために織ったものであったとしたら、その思いが針の跡として今私に伝わってくるのではないか（略）[362]

1945 年に、避難を急いでいた多くの日本人は、必需品のみを取り、住宅にある物全てを残す他なかった。避難準備をしていた永井家族は、引揚後の家に残ったものをどのように処理すれば良いかについて相談した。特に母の着物をどうするかについて、激しく議論された。著者の母は、信州の祖父の贈物であった、「金糸銀糸の刺繍をした絹の着物」を特に大事にしていたため、盗難されたら非常に残念だという不安感を表していた。　最終的に、永井の母は、親しい人の記念を表象する着物を放棄することができず、家族の友人となった永井の家に務めていた満人のボイにあげることを決意した。[363]

加藤淑子が回想しているように、敗戦状態下に置かれた日本人は、一生懸命、生活の糧を得る方法を探し始めた。立ち売りはその一つの手段となり、紋付きと袴を売っていた日本人が沢山いた。[364]

敗戦の時代に、ハルビンの病院で勤務していた山崎倫子は、様々な病気の流行、薬品の不足という問題について記していた。薬品が必要である状態に陥った母親たちは、「かろうじて（市場に―著者）持ち出せた」着物を販売し、「その金を薬品の購入にあてた」と回想している。[365]

勝山妍子は、ソ連軍によって占領されたハルビンの様子を回想する際、古着の市場が多くできたことについて言及している。当時は、勝山の家族もさらにお金を稼ぐことが必要になったため、自分の着物を解いて作った小さな和服やドレスを着せた人形を、ソ連軍官舎の前や大通りで、ソ連兵に売っていた。[366]

このように、満洲における日本人の回想記においては、着物というものは、ただ日常的に使用されたもの以上の価値を持ち、過去のこととつながるシンボルである。そしてそれだけではなく、困窮状態における生活を助けるものとしても登場すると思われる。終戦後に、日本人が避難のための準備に、家庭用品を放棄することを心得ていたが、親しい人との精神的繋がりを表す着物を持って行かないことを、大悲劇として受け止めていたことが分かる。

3.3.4.　満洲における厳しい気候への適応することの必要性：ロシア風なシュバという「苦肉の策」

[362] 福山、同上、18 頁。
[363] 永井、同上、207 頁。
[364] 石村、同上、44 頁。
[365] 山崎倫子（1993）回想のハルビン．ある医者の激動の記録．牧羊社、31 頁。
[366] 勝山、同上、179 頁。

満洲におけるロシア人は、回想記で日本人についての印象を記述する際、満洲の冬に全く適しておらず軽そうに見えた、着物を着る習慣に感激した。

藤原が示すように、日本人の女性のスタイルの変化に最も強い影響を与えたものは、満洲の厳しい気候というファクターである。満洲風である「モンペ」のような服に関心を持っておらず、着物にこだわっていた日本人の女性たちの健康を心配していた医師も存在しており、満洲医科大学の教授は、『満洲日日新聞』で、別の案として、冬の時に着ることができる暖かいズボン、上衣に外套というような組み合わせを提案していた。[367]

当時、小学校に通っていた永井は、スケートなどのような冬遊びが好きだったが、満洲の冬のマイナス面についても覚えていた。その中で、シュバという非常に不便なロシア風の毛皮のコートが挙げられている。満洲における日本人の女性は、自分の子供にシュバを着せる習慣が普及していた。回想記に載せられた勝山の写真に注目すれば、シュバ姿の子供の様子が見られる。永井の母も、「張りきって」兎の毛皮でできた質の良いシュバを買ったが、永井はそれを「子供に迷惑な贅沢品」として回想していた：

> 硬くて窮屈なシュバでした。袖を通して、手間をかけてボタンをかけると、防寒靴を履くために、腰をかがめたくても、シュバの裾を折りたたむようにしないと、立ったりしゃがんだりができないのです。[368]

このように、満洲における日本人は、満洲の厳しい気候について、寒さに限らず、不便な服装を余儀なくされることとも連想されていたことが言える。

3.3.5. 満洲における日本人の都会人と農民の生活基準に見られる「ギャップ」：服装の様子における相違点

既に述べたように、満洲における日本人の都会人と満洲の様々な「最果て」に位置された開拓団の農民の生活レベルは、共通点の少ないものだった。金銭の余裕があった日本人の都会人は、全世界から輸入された製品を提供していたハルビンの店で買い物ができたが、その一方では、「開拓団」の農民は、「自給自足」の生活を余儀なくされ、住宅、そして水のような最低限のものも自分自身の力で補う必要があった。

「着衣」に対する、日本人の都会人と農民との状況においても、相違点が見られる。日本人の回想記においては、自分の服装の素材に関する情報が挙げられている。日本人の都会人

[367] 生田美智子（編）（2015）女たちの満洲．他民族空間を生きて．大阪大学出版会、36 頁。
[368] 永井、同上、37 頁。

は、広い選択から質の高い布を選ぶことができた。福山の祖母は、手回しミシンを使用して、自分の手で小さい福山にヨーロッパ風のドレスを作っていた：

おばちゃんは白いポプリンの布切れと、小さい花柄の割合地味な色のモスリンを買ってきて、本を見ながら洋服を作っていました。[369]

夏の頃を回想する際、福山は麦わら帽子、祖母のパラソルを回想している。[370]祖母のことを記述する章においては、著者と祖母の写真が載せられ、そこに映されている祖母の着物に描かれている、オリジナルの市松模様が注目を引いている。

そして、継母のスタイルについて回想していた福山は、彼女の生活様式に、ヨーロッパ的なスタイルがどのように染み込んでいたかについて触れている。継母のワードローブには、つばの広い帽子、クジラの骨の入ったコルセットなどが表れてくるようになった。[371]

様々な回想記に載せられた写真に映されている男性、女性、子供は、卓越したスタイルである。その一方、満洲における「開拓団」の農民の服装は、ファッショナブルなヨーロッパ風の服より、農業に適した作業服が優先された。農民の着衣の特徴としては、パッチが許されており、手作りのものが多く、寒さの対策として使用されていた価格の安い綿の裏地が登場している。小宮が、自分の回想記において、満洲における日本人農民の冬服を、イラストにおいても表現している。男性の服装には、モンペ、ユニフォームに似ている白い割烹着、上着として使用された綿入れのハンテンが登場する。帽子としては、頭と顔を包むスカーフも適当なものだった。ミトンと手袋は、片方の喪失を防ぐため、紐で結びつけられた、手作りものであった。靴としては、ゲートル、又はロシア風のフェルトン物に似ている、膝までの高さを持つ靴が使用されていた。[372]

女性の服装に関する言及は少ないが、北海道の時代に映された小宮の母の姿を見、頭を巻くスカーフ、緩いブラウズ、そして鳥柄のスカートに注目している。[373]

しかし、小宮の両親は、いつも「農民」風の服を着ていたわけでもなく、回想記に載せられた日本へ引き揚げる前の家族の写真では、母と旅館の女中は着物を着ており、父はネクタイ、背広というヨーロッパ風スタイル、若者である息子も「すべて母の手造り」のヨーロッパ風スタイルで、当時を代表する典型的な日本人の家族のイメージとして登場する。[374]

---

[369] 福山、同上、49 頁。
[370] 同上、49 頁。
[371] 同上、104 頁。
[372] 小宮、同上、130 頁。
[373] 同上、29 頁。
[374] 小宮、同上、27 頁。

小宮の家族は、「開拓団」を出て、奉天において都会人としての生活に移る。1945 年の避難の様子を記述する際、小宮は引き揚げる母の様子を描いている。母は、ヨーロッパ風の膝までの長さのあるドレスを着るようになったが、カバンの代わりに風呂敷、靴は下駄という日本風のものも残っている。そして、このシンプルな著者のスケッチからも分かるように、小宮の母のスタイルは、贅沢さはなく、質素なものであった。[375]

このように、満洲における日本人の都会人と農民の服装においては、共通点が少なく、日本人の農民は労働に必要な服だけが財産であった。そして、都会人としての生活に移った日本人の農民は、贅沢な生活様式に慣れていなかったため、ヨーロッパ風の服を着ても、シンプルなスタイルにこだわっていたことが分かる。

3.3.6. 日本人の引き揚げ経験の辛さ：適当な靴を選択する必要性

満洲における日本人の回想記では、満洲国の崩壊に伴った日本人の引き揚げの経験が、特に記憶に刻まれたものとして取り上げられている。加藤淑子の家族は、1945 年にハルビンを去る。その旅路の困難さの中、第二松花江の鉄鋼が爆破されたため、線路に沿って約数キロもわたる長い距離を歩かなければならないことが、辛い経験となった。当時の状況について、加藤は次のように記している：

> 汽車を降りた淑子は幹雄と幸子にリュックを背負わせ、自分もリュックを背負い、登紀子を胸にくくりつけて歩き始めた。[376]
> 避難民の中で、小さい子供を持つ女性が多く、自分の背中に子供を担いで歩くことが、非常に大変な経験であった。[377]

永井の家族も、避難の準備を行った際、もし歩く必要となったらどのような対策を取れば良いかについて考えた。

永井は、適当な靴を選択する必要があった。家族がスイヒンにいた時、父の信頼を受けた靴職人によって作られた「本当に立派な、止め金も丈夫な」靴を最も便利なものとして見ていた。[378]　しかし、著者は、刃の外したフィギュアスケートの靴を履くことを決意する。そして、ある距離を歩いた後に、靴を脱ぐ際、紐を解く時間がかなりかかることに気が付いた著者は、もう空室になった元の市営住宅に戻り、スイヒンで製造された靴に履き替えた。著

[375] 同上、121、129 頁。
[376] 石村、同上、74 頁。
[377] 同上、75 頁。
[378] 永井、同上、210 頁。

者ははじめ、この靴が、避難行路に耐えられず、止め金がこわれて脱げてしまうということを心配したため履いていなかったが、「スイヒンの靴職人が、二、三年まで履けるように」と誠実に作ってくれた靴だったため、著者は心配する必要がなかった。永井はその靴のことを次にように回想している：

しゃれていながら本当に丈夫で、非難中には雨のぬかるみを歩くこともあったのに、その年の冬も次の年の引揚の時もこの靴を履きとおしました。
この靴を作ってくれた中国人の靴職人に今でも、感謝！[379]

このように、多くの日本人と同じく、永井の人生においても、引き揚げの経験は大切なエピソードであり、著者が選択した靴は、引き揚げというプロセスの大変さを象徴するものとして記憶に残された。

まとめとして

満洲における日本人の回想記では、「着衣」というものは、生活の面では、日常的必需品としてだけに限らず、著者の人生における大事な役割を果たすものとしても登場している。加藤淑子、永井瑞江、福山郁子の回想記において登場する服装は、シンボリズムを持つものとして取り上げられている。

以上のことから、満洲における日本人の服装は、「ドレス・コード」としての役割を担い、「満洲っ子」と日本国内の住民、都民と農民、そして日本風の伝統に従事する人とヨーロッパ風の生活様式に憧れるモダンな人という、それぞれの相違を表面に出すものであった。そして、着物の役割は、記憶のシンボルとして重要なものであり、多くの日本人は、着物を通じて、日本国内に留まった親しい人々との精神的繋がりを保っていた。

それと同時に、「服装」は、日本人にトラブルを与えるものでもあった。日本国内で、贅沢な生活に甘えた「満洲っ子」というレッテルを貼られた」日本人は、自分の西洋スタイルで日本国内には素早く区別され、苛め、羨望の対象となった。

そして、西洋風のスタイルに慣れていた日本人は、満洲の厳しい気候に適応せず、ロシア風のシュバを、非常に不便な服装として嫌っていた。
そして、終戦後の時期には、家族の最も重要な遺産であった着物を、放棄することができなかった。

引き揚げ体験においては、長距離を歩くことをも含まれていたため、そのような困難を乗

[379] 永井、同上、212 頁。

り越えるため、適当な靴を選択することが最も重要な課題であった。

満洲におけるロシア系ディアスポラにおいては、「白系」ロシア人のスタイルの影響力が強かったため、それは、様々な意味での同一性を訴えるソ連人に限らず、日本人にも、自分のスタイルを見直すことを促した。

前章で述べたように、満洲における日本人は、住宅のインテリアにおいては、贅沢さを避けていたが、多くの日本人の女性は、ロシア人の女性を見習い、おしゃれなスタイルを見せることを恐れていなかった。

ここまでは、日本人の「着衣」の特徴を述べてきた。次項においては、1920－1940 年代に満洲における日本人の食生活について、追究する。

3.4. 食事

満洲における日本人の食生活について、多くの研究がなされている。前項で既に述べたように、藤原克美は、「日本人は日本の生活様式を満洲に持ち込んだ」と記した。研究者が示すように、「日本人の輸入商が数多くあり、（略）日本の殆どの食料品が手に入った」。そして、野菜のような生鮮品については、「中国人が各家庭を回って販売していた」ということを加えている。[380]

その上、藤原によると、日本人は、洋風の家にも関わらず、日本のスタイルに変えていたという：「日本人は洋風の家でもドアを取り外し、床を上げて畳を敷き詰め、そこに蒲団を敷き、小さなちゃぶ台で食事をとったという」。[381]

塚瀬によれば、「日本人は日本的な生活の維持を日常生活のなかにおいても求めたため、少々高くても日本と同じ物を日本人商店で買い、日本人商店はそれを良いことに高価で完売していた様子を知ることができる」。[382]　多くの場合、中国の商店における食料品はさらに安かったが、研究者が示すように、日本人は「畳の上で、茶漬けや鯛の刺身」を食わないと気が済まない」というような態度があったため、日本の商店の方を選択した。[383]

日本の植民地であった満洲国では、日本人の都会人の給料が高かったため、戦争が終わるまで食事が不足するという問題を知らなかった。満洲における日本人の回想記では、「食事」という生活面は、著者自身の生活における特別な状態の特徴を印象的に記述するために使用されている場合が多い。

---

[380] 藤原、同上、37 頁。
[381] 同上、37 頁。
[382] 塚瀬、同上、127 頁。
[383] 同上、127 頁。

3.4.1. 満洲国にける日本人の都会人と「開拓団」の農民の食文化の対照：表面には同種性、裏面には数多い相違点

永井瑞江が示しているように、「満洲の都市部に住む日本人と、開拓団に送り込まれた日本人の生活には、住居も食生活も衣生活も格段の差があった」という状態が形成された。[384] それと同時に、前に言及していた藤原は、「日本人は日本の生活様式を持ち込んだ」と主張している。日本風の生活様式は、日本人の都会人も、農民も保持していた。

満洲における日本人の都会人と「開拓団の農民」の食生活における共通点としては、和食を優先すること、満洲国の崩壊時期まで、食料不足の問題を知らなかったことが挙げられる。「開拓団」に属していた日本人農民さえも、日本人の都会人のような高い収入はなかったが、小宮は、開拓団においては食料不足という問題は存在しなかったと述べている：

開拓団の購買部には、日本の食料品がなんでもあった。(略) 主食はもちろん白米で、母の手作りのわりあいに豊かな食生活を送っていた」[385]

そして、小宮が述べているように、「開拓団では米がとれなかったが、毎日ごはんを食べた」。[386] 日本から輸入されたご飯を除けば、料理の材料は、全部「母の手作り」であり、著者は「栄養バランスも良く、自然食である」という評価を加えている。

小宮の母が作った料理は、主に日本の伝統的な料理であった。著者は、母の手作りの料理帳からの断片を取り上げ、その中で手打ちうどん、まんじゅう、豆乳と豆腐、ジャガイモのでんぷん団子汁、水餃子が挙げられていた。まんじゅうを作成するための蒸し器、豆乳の製造に必要な石臼という道具があった。そして、納豆と水あめ、ミカンと小豆餡のゼリーのようなお菓子も、母の手作りのものであった。ミカンのゼリーを作るため、寒天を持っていた。そして、納豆の豆を発酵させるため、豆を入れたワラのストックを蒲団と暖かいオンドルの間に置いていたと記している。[387]

開拓団の周辺の沼には、フナが生息しており、フナのから揚げという料理も食べた。そして、お正月の際、田舎では黒豚を殺し、家族の間で肉を分け、家の土間につるして凍結させた。凍結させた肉を、包丁で薄く削って食べる、という習慣があった。[388]

満洲における日本人の都会人と開拓団の農民の食生活におけるもう一つの共通点としては、狩猟への関心が挙げられる。小宮は、獲物の中で、七面鳥、鴨、鹿の一種であるノロが

[384] 永井、同上、180 頁。
[385] 小宮、同上、52 頁。
[386] 同上、32 頁。
[387] 同上、34 頁。
[388] 小宮、同上、35 頁。

あったと回想している。

都会人の山崎倫子も、父と一緒に狩猟に行くことを好んだ。この狩猟の体験について、次のような回想が残っている：

ハルビンの街はずれまで中国人の馬車で行き、あとは果てしない荒野を歩く。冬の狩りの目当ては兎とキジである。[389]

都会人である山崎倫子の狩猟への参加は、趣味のようなものであり、狩猟の準備の中で、山崎は特に「弾を作る」ことに関心を持っていた。しかし、開拓団の農民にとって、狩猟というものは、趣味に限らず、日常の食生活を多様化する方法、又は、農業ができない秋の終わりと冬における、退屈との闘いから逃れる「手段」という役割も果たしていた。

そして、満洲における日本人の都会人と開拓団の農民の食生活における相違点については、日本人の都会人は、選択肢の幅が広く、上等な食糧を買うことができたが、一方「開拓団」の農民は、中国人の農民から食糧を買うことにも、嫌悪感を抱かず、購入していた。そして、開拓団には、日常的な食事は全部、農民の手作りものであったが、日本人の都会人の場合、油谷顕は、「サラリーマンでも手当が良いので各家庭では殆ど満人のコックを雇っていたので奥さんの働き場はなかった」という恵まれた状況であった。[390]

ハルビンにおける食料状況を記述する際、高野悦子は、「ハルビンでの楽しみのもう一つは、食べることである」と回想している。国際的な都市であったハルビンでは、幅広い選択肢があった。その中で、スンガリー川で取れた魚と山鳥を使った「珍しい中国料理」、「美味しいロシア料理」が挙げられている。高野の家に務めていた中国人のボイは、「料理の天才」であったため、豚、エビ、ナマコの餃子を作った。そして、川で獲れたチョウザメの卵であるキャビアも豊富にあった。高野は、「大きな缶詰めが常時食料庫に山積みされていたから、そんなに上等なものとは知らないで食べていた」と回想している。[391]

杉山公子は、ハルビンにおける食料品の状態を次のように記述している：

ハルビンは内陸部なのに海のものが豊富だった。新鮮なタイやイワシ、カニ、エビ、ナマコなどを入荷していた。[392]

---

[389] 山崎、同上、113 頁。
[390] 後藤、同上、45 頁。
[391] 同上、204 頁。
[392] 後藤、同上、150 頁。

高野が調べた通り、ハルビンで売られていた海産物は、香港、ロシアの沿海州、ウスーリ川などから輸入されたと聞いた。[393]

その一方、「開拓団」の農民は、このような選択肢に恵まれておらず、食事に対し気取らない態度を見せていた。もう既に述べたように、日本人の都会人と異なり、「開拓団」の農民は、中国人の農民によって売られていた魚、獲物を買っていた。小宮によれば、日本人の農民は「五族協和」というイデオロギーに忠誠的であった。中国人の農民との交流は、イデオロギーによって促されていたものに限らず、自発的選択でもあったと思われる。

そして、日本人の都会人と異なり、日本人の農民は、上等な魚を得る手段がないため、もう既に言及されたフナのような魚を中国人から購入していた。小宮は、フナについて「とてもドロくさいので、調理の知恵が必要だった」と述べている。

開拓団における食生活にはお菓子の選択肢は限られており、開拓団本部にある購買部には、日本から輸入された食料品は販売されていたが、お菓子について永井は「森永キャラメル」くらいなもので、それもいつだってあるわけではなかった」と記している。[394]

小宮は、開拓団における食生活に対し、不満を隠せず、当時子供だった小宮は、特別な料理とデザートを望んでいた。小宮の家族は年数回訪れたチチハルという街にあるレストランを訪問し、そこでのご飯は、小宮にとって珍しいものとして記述されている：

小さな日の丸が立つお子様ランチのオムライスの味は忘れられない。それとデザートのバナナ、どれもこれも、開拓団ではお目にかかれないものばかりだった。[395]

満洲における日本人の都会人と「開拓団」の農民の食生活における差異のもう一つとして、「開拓団」における飲酒量の異なりというファクターが挙げられる。小宮によれば、開拓団における「辛い生活を紛らわすために」、酒は不可欠なものであった。小宮の家族が暮らしていた地域においては、「リャンチュウ」という、酒が流行っており、小宮はこの酒について「コウリャンから造られ、火にかけると、爆発するかのように燃える、アルコール度数の高いもの」と記している。日本人の農民は、「リャンチュウ」を飲みながら、日ごろの悩みを言い尽くし、歌などを歌いながら緊張を克服したと述べている。[396]

このように、満洲における日本人の都会人も、「開拓団」の農民も、食料不足という問題を知らず、日本風の食生活を保持していたが、「開拓団」の農民は、シンプルな食生活を送

[393] 高野 悦子（2009）ハルビンへの旅行．岩波書店、150 頁。
[394] 永井、同上、15 頁。
[395] 小宮、同上、52 頁。
[396] 小宮、同上、78 頁。

っており、「気取らない」態度を見せていた。そして、農民は、中国人から食料品を頻繁に購買していたことから、このような貿易活動を通じて、民族交流を深めていたと思われる。

3.4.2. 「外食」における好み：ロシアの食文化の発見。乳製品、チョコレートなどという新しい味の体験

藤原によると、満洲における日本人は、日本風の生活様式を維持していたにも関わらず、「ロシアの文化に全く関心を示さなかった訳ではない」。（27 頁）つまり、多くの日本人の家庭においては、毎日の料理として、和食が出てくるが、「外食」をする際、ロシア料理は人気が高かった。藤原が示すように、「特にハルビン出身の日本人の記憶に残る懐かしの味は、ロシアの菓子やパン、カルバサ（サラミソーセージ）、さらに「マルス」や「ビクトリア」などのカフェーのメニュー、「モデルンホテル」「タトス」（実際にはコーカサス料理）などのレストランの料理であった。」[397]

回想記では、日本人がロシアの食文化に触れた時、様々な新しい「味」を発見し、普通の食料品の新しい調理方法を身に付けたり、食文化におけるロシア風の儀式に魅了していた、と記している。

ロシアの食文化は日本と異なるにも関わらず、日本人の気に入った食料品が多かった。小関久道は、カルパスというロシアのソーセージを、初めて食べた時から、「すっかりその味覚の虜となった」と記している。[398]

ロシアのお菓子の中で、得にジャム、チョコレートの味が気に入っている。加藤淑子はロシア風のジャムを次のように記述している：

> ジャムは果物の実の形をこわさないように煮て、汁は親指の爪の背に乗せた時、宝石のように透明で丸くなれば上出来です。[399]

そして、加藤淑子は、ハルビンにおいて、ロシアの市場でチョコレートを買った時、板チョコレート、銀紙で包まれたチョコレート、又は量り売りで販売されたチョコレート、日本にはまだ存在しなかった選択の幅の広さに感激している。[400]そして、このチョコレートの味について、「今でも忘れない」と記している。[401]

杉山公子も、ハルビンにおけるロシアのチョコレートは、日本のものと比べものにならな

---

[397] 藤原、同上、37 頁。
[398] 小関、同上、70 頁。
[399] 加藤、同上、59 頁。
[400] 加藤、同上、50 頁。
[401] 同上、52 頁。

い程非常に美味しいものとして記述している。[402]

ロシア人の好みも、多くの点で、日本人と異なったため、関心を引いていた。

油谷頴（ほさき）は、ロシア料理の大きなポイントとしては、「塩を大切にする」ということを挙げている。塩分が多いロシアのパンを最初に味わった時に、「こんなすっぱいものが食えるか」という印象が残った。[403]　様々な種類のロシアのスープを試した油谷は、スープの食べ方に関する認識が変わった。ロシアのスープの特徴としては、「飲むものではなく食べるものである」ということを取り上げ、ロシアのスープの栄養価も評価し、「日本人なら一杯で満腹するだろう」と記している。

お茶を、牛乳と混ぜて飲むという習慣も興味深いものとして描かれている。特に、ロシア人が一日で飲むお茶の量は、意外に多いと述べている。著者は、自分の感想をアイロニも込めて、次のように表現している：

ロシア人はお茶が好きで、老婆になると、サモワールで沸かして、一日にスタカンで二十四・五杯は飲むのだから、婆さんになるとあんなに太ると言って娘はあまりお茶を飲まない。[404]

油谷は、ロシアの食文化を高く評価し、「世界中でロシア程種類の多い料理はない」と述べ、調理する際、どのような材料が使用されているかについて詳しく記述している。[405]

満洲における日本人の回想記では、ロシアの食文化における、最も慣れにくい食料としては、乳製品が挙げられている。小関は、毎朝ロシア人の女性の売り手から買った「芳しく濃度の高い」ミルクの味を好んだが、その他の乳製品については、「当時バター、チーズの類いは、日本人の家庭では馴染みがなく、慣れない臭いにしばらく苦労させられたという思い出が残る」と述べている。[406]

清水三三は、40 年間、ロシア人と関係する仕事に携わり、この経験について「常に彼らに接触するとともに、生活の実態を目の当たりにした」と記している。清水によれば、ロシア人は、ミルクをただ好むというより、「牛乳を大切にして、一滴の無駄なく之を利用した」と記している。[407]著者を特に感激させたことは、ロシア人がミルクをスープ、サラダ、プディング、ケーキ、パン、コーヒーなどのような、幅広い料理と飲み物に入れているというこ

[402] 後藤、同上、185 頁。
[403] 同上、51 頁。
[404] 同上、49 頁。
[405] 後藤、同上、51 頁。
[406] 小関、同上、70 頁。
[407] 後藤、同上、161 頁。

とである。[408]そして、ロシア人によって特に好まれていたケフィアの調理方法を知った時、清水は、「これは腐った牛乳といってすぐ捨ててしまう」というような、日本人の視点を取り上げている。[409]「プロストクワーシャ」という乳製品も、日本人から見れば、「腐った牛乳」と同じように見えるが、著者自身が、先入観を乗り越え、プロストクワーシャを試し、「胡椒や砂糖を加味して食べると実においしい」という感想を述べている。[410]

また、ロシア人は、牛乳からクリームを取り除いたものを冷やして、夏季の清涼飲料として愛用するが、日本人の視点からみれば、これは、「豚の飲料に用いるにすぎない」という意見を述べている。[411]

このように、ロシア人の食文化に接触した日本人は、牛乳に関し、知識を深め、これを幅広い分野で使用できるものであり、牛乳から様々な味を持つ料理ができるということを発見したと思われる。

ロシアの食文化における、「昼食」の重要性も感動させた。加藤淑子は、その「一日のうちの一番大事な」食事である、昼食の際、ロシア人は「午後二時から四時ごろまでゆっくりと食卓を囲む」と回想している。

ロシア人によって使用されている食器にも注目し、「ロシアの文化の素晴らしいもの」[412]のサモワールに限らず、スープの調理のために使用される寸胴の鍋、スタカンというガラス製の大コップ、クルシカという手付のコップが挙げられている。[413]

このように、満洲における日本人は、ロシアの食文化に接触し、以前は知らなかった新しい味、香り、又は、ミルクのような一般的な食料品の新しい使用方法を発見しただけではなく、食文化に関する常識が覆された、といっても、過言ではない。

3.4.3. 満洲における「贅沢な食料品」についての回想

もう既に述べたように、植民地化された満洲においては、日本人は、食糧品不足という問題を知らず、そして、日本に限らず、全世界から輸入されたものを店で見つけることができた。勝山が述べているように、日本が戦争に加入する時期においても、「飢餓」という問題は存在しておらず、米のような必需品は、都会人の日本人においても、必要な量を買うことができた。

しかし、日本人の子供は、美味しいものをほしがり、満洲の市場で不足していた食品を親

[408] 同上、161 頁。
[409] 同上、161 頁。
[410] 同上、162 頁。
[411] 同上、162 頁。
[412] 同上、58 頁。
[413] 同上、49 頁。

にせがんだこともある。永井瑞江にとって、パイナップルという、特に好んだフルーツが、稀に満喫できる珍味なものとして記憶に強く刻まれた：

日中戦争が始まり、まだ食料事情はさほど悪くなっていない時であった。それでもパイナップル缶、桃缶などはぜいたく品で、やはり誰かの誕生日やお祝いの時だけ開けるものであったため、いつでも食べられるものではなかった。[414]

満洲における永井の人生においては、パイナップルに関する、記憶に残っているエピソードを回想記で記述している。一つめのエピソードは、信州出身の日本人兵は、同郷の子供を誰でも、幸せにしたいという考えがあり、部隊の酒保でパイナップルの缶詰を買う。その兵士は、最初に目に入った家に入り、永井、五歳の弟と四歳の妹にパイナップル缶を渡した。父が戻ってから、特別な許可を持っていない他人が住居に入った、その兵士のことと、その兵士を家に案内した「無邪気な」子供を非難したが、永井は「大きなパイナップルの輪っかを丸ごと食べられる、ー弟は幸せそうでした」ということを大切な回想として特筆している。[415]

もう一つのエピソードは、永井は海老原という友人の誕生日について回想している。当時、海老原の両親は、二人の娘を置いて、稼ぎ先を探すため、家を出ていた。行政府の事務員の娘であった永井と異なり、海老原は妹と一緒に満人街に位置する泥壁の家に二人で暮らしていた。海老原と永井の生活水準における差異を、誕生日の祝い方の記述を通じて見ることができる。最初に永井は自分の誕生日を記述し、食卓の様子を描写する際、母に作ってもらった散らし寿司、フルーツ・ポンチに言及している。海老原の誕生日が来た時、海老原と妹の喧嘩、という問題から記述を始め、「メニュー」としては、パイナップルの缶詰めしかないということも回想されている。海老原は、妹に対し「お姉ちゃんお願い、ほかには何もいらない、ね、パイナップル缶あるよね、あったよね、それだけでいい、どうかパイナップル缶をご馳走して下さい」と懇願しており、その表現は悲劇的な状況を伝えている。[416]その喧嘩に続き、誕生日の様子を永井は、以下のように記述している：

妹さんはパイナップル缶と缶切りと、フォークの代わりに箸を持って現れ、妹はにこにこしながら小皿を三枚持って来、ちゃぶ台の上に並べた。妹さんはパイナップル缶を器用に開けると、三つの皿にパイナップルを一切れずつ取り分けて言った。「誕生日お

[414] 永井、同上、57 頁。
[415] 同上、57 頁。
[416] 同上、88 頁。

めでとう」。[417]

永井の回想記では、パイナップルは、贅沢品として表されており、貧困生活を送っている日本人に限らず、安定した収入の家族においても、子供に大きい幸せを与える貴重なものとして登場している。そのことから、満州における日本人も食糧品不足という問題に直面していた、ということが言える。

3.4.4. 日本人難民の「生き残る」方法：知恵を生かすこと、中国人の支援

1945 年の敗戦までは、満洲における日本人は、日本より経済状況が安定しており、食糧事情にも恵まれていた。勝山によれば、「我が家ではほとんど毎日白いご飯が食べられた。店頭には、カルパサ（モスコーソーセージ）やサイカ（ロシアパン）が並んでいたし、レストランや喫茶店もさびれているというほどではなく、そこそこ賑わっていた」。[418]
ファーム活動は、大きい支援があった。沙曼屯に滞在した勝山好子の家は、随分前から与えられた平均約 100 坪程の畑で、茄子、胡瓜、ジャガイモ、玉ねぎ、各種の豆などを栽培していたため、中国人に売る程の収穫ができたと記している。[419]

日本の敗戦に伴った満洲国の崩壊、ソ連軍による満洲国の占領という状況になってから、満洲における日本人の状況は劇的に変化する。スイカのような、ある地方においては、最初に食糧事情はかなり安定していた。関東軍の倉庫では豊富な食糧品が保管されていたため、軍人たちは、「汽車の引き込み線を利用して」スイカの避難民まで食糧品を運んでいた。収容所にいた日本人はその食糧品を配布されていた。しかし、関東軍の軍人は特別にスイカにいた日本人のことを心配した理由は、避難民の中に自分の親戚がいたということである。[420]
そして、ハルビン等、それ以外の地方では、食糧の状況が厳しくなってきた。

永井が述べているように、当時に生まれた日本人は、「それ以後の世代に比べて血管の老化が早いそうです」。その原因を、大事な成長期に大切な栄養が摂れなかったことで説明している。[421]回想記においては、日本人は、食糧を得るため、どれ程努力していたかについて、記述されている。

もちろん、家庭主婦は、大変な時代の到来を予想したため、事前準備をした。永井瑞江の母は、引き揚げの二年前から「非常食」を備えはじめ、ご飯の残りを凍らせ、大きいザルに広げて天日干しし、乾燥したご飯を、蓋付きの空き缶に入れた。時間が経ってから、非難の

[417] 永井、同上、89 頁。
[418] 勝山、同上、97 頁。
[419] 同上、173 頁。
[420] 永井、同上、203 頁。
[421] 同上、15 頁。

時に、母は保存食の凍乾飯を湯で戻し、一個の梅干しをおかずに、子供に粥を食べさせた。[422]「非常食」は、大きい支援となったが、避難生活の長さについて、当時の生活条件をも推測できなかったため、適当な量と食料品のタイプについて、誤ったこともあった。例えば、永井の母は各子供のリュックに凍乾飯の缶を入れたが、この量は 2−3 日間で底を付いた。[423]そして、その「非常食」の中に、角砂糖もあったが、夏の暑さで解けてしまい、シロップの状態になった。[424]

そして、当時の日本人のメニューについては、全員が殆ど一緒だった。

永井は、コウリャン飯を食べたことについて回想している。

当時の加藤淑子の家族のメニューは、一日二回、コウリャンと米を混ぜたおじやに限られていた。加藤淑子は、「コウリャン飯は、炊き立てならば食べられるが、少しでも冷めると、ぼそぼそとして喉を通らない」と回想している。[425]

回想記においては、飢餓に直面する日本人が、どのような極端な対策をとったか、についても言及されている。

食料を補う問題は、特に子供を持つ母親を悩ませた。[426]母親は、自分の人生を危険に晒すことも、自尊心を損なうことも、恐れていなかった。加藤淑子は、星輝寮に泊まっていた時期に、子供たちに食事を与えるため、ソ連軍によって展開された大略奪の最中に、体を張って隠し通した地下の食糧倉庫から食料品を運び出したことがある。[427]ハルビンにおける混乱から避難した日本人の家が、ソ連兵の官舎となったため、ソ連兵は、日本人の女性を掃除屋、洗濯屋として雇い始めた。加藤淑子も、この仕事を引き受け、「給料」として、「どっしりとした腹もちのよい」黒パンを支給された。説得力のある加藤淑子は、支給されたパンの量を増やすことを要求していた。[428]

飢餓との戦いのもう一つの手段としては、調理する際、食料品としてさえ使用されていない材料を、代行品として使うことも挙げられている。山崎倫子は、ソ連軍警備司令官との折衝の結果として開設された国際病院のために、医薬品を関東軍の倉庫で探した。そこに残った僅かなものの中で、ヒマシ油もあった。時間がたってから、大変な時期に、ヒマシ油で天ぷらを作ることを試みた：

鍋一杯のコハク色のヒマシ油にあり合わせの野菜―バレイショ、人参、玉ねぎ―精進

---

422 永井、同上、230 頁。
423 同上、231 頁。
424 永井、同上、226 頁。
425 石村、同上、40 頁。
426 永井、同上、203 頁。
427 石村、同上、40 頁。
428 同上、42 頁。

揚げは見事に揚がった。臭いにくせもなく、サラリと軽く、さっぱりした口当たり、美味だった。[429]

そして、中国人の売り手からも、日本人は安い食料品で補うことができた。永井は、引揚貨車に乗っていた時、停車駅で中国人が販売していた、油揚げのネジリンボウ、マントウを購入するようになったが、この食料は、一日当たり一個ずつという僅かな量に過ぎなかった。そして、永井が注目しているように、満洲国に暮らしていた日本人は中国人の食料品を不潔なものとして見ていたため、買っていなかったが、引き揚げ時から始まった飢餓対策のため、買い始めた。[430]

しかし、引き揚げ生活においては、きれいな飲み水の不足の問題が、特に心配であった。引き揚げの途中、永井家族は、汽車が停車した各駅で、駅にある蛇口から水を取ったが、ソ連兵が多くいた駅では、安全を守るため、汽車の屋根から落ちる雨水で済ますことを決意した。著者はこのエピソードを次のように描いている：

（略）母が窓を開けて雨水を飯盒に受けた。（略）飯盒に入った水は空からのきれいな雨水ではなく、石炭の煤だらけの屋根を伝わってくる水（略）[431]

避難生活は、特に子供の記憶において刻まれ、当時好きな食料品を食べるチャンスがなかったことについて、残念な思いを表している。永井は、1945 年の夏について、「トマトもキューリもマクワ瓜もスイカも一つも食べられない夏なんて誰もみんなきっと生まれて初めて―。卵も豚肉も魚も牛乳も、育ち盛りに大切なたんぱく質を一切れも食べられない夏も初めてである」ということを記している。

そして引揚貨車に乗っていた彼ら以外の避難民については、永井は「食べているところを見たことはない」と述べている。[432]

このように、日本人は、大変な時期に備え、食糧品を準備していたことが明らかになった。そして、「飢餓」に直面した時にも、食事を得るため、独創的アイディアを出したり、子供に食事を与えるため、自分の人生を危険に晒したりして、生き残ることに奮闘していたことが分かる。しかし、「飢餓」の経験は、子供の体に影響を与え、将来的には、弱い身体になる原因ともなった。

---

[429] 山崎、同上、116 頁。
[430] 永井、同上、259 頁。
[431] 同上、248 頁。
[432] 同上、239 頁。

まとめとして

満洲における日本人の回想記では、日常的な食生活という面では、多く言及されていないが、その反面、主として、ロシアの食文化と接触する体験、満洲における贅沢品として見られていた食べ物についての回想が挙げられている。「引き揚げ」という、強く印象に残った時期の厳しさを印象的に表現することに「食事」を用い、「食事」という生活面の記述は特に深い意味を持ったと思われる。

満洲における日本人は、第二次世界大戦争がもたらす混乱状態までは、食糧不足の問題を抱えておらず、「満洲国」の時代には、恵まれた食生活を送っていた。家庭料理としては、主に和食を調理していたが、外食をする際、特にロシア料理に関心が高かった。ロシアの食文化に触れることは、新しい味、レシピと調理方法に関する知識ももたらし、日本人が憧れていた「西洋世界」をさらに良く分かることとしても、意味深い経験であった。その上、ロシア文化との接触の経験は、満洲における日本人の日常性を、より鮮やかなものにしていた。

日本人の都会人と農民の共通点としては、和食を優先すること、食糧不足の問題を知らないこと、狩猟のような食生活と同様の習慣を持つことが取り上げられる。しかし、農民の食生活においては、高級食材が存在しておらず、子供はお菓子の不足の問題を抱え、母親は、普通の料理を調理する際にも、努力しなければいけなかった。そして、都会人と異なり、農民は、中国人から食材を頻繁に購入し、このような「食料品貿易」の活動を通じて、中国人の農民とは積極的に協調していた。

第二次世界大戦の時代、「満洲国」の支配者であった日本人は、それ以外の民族とは異なり、必要不可欠な食材は供給されていたが、いつでも「珍味」を食べていたわけではない。回想記においては、子供が「缶詰のパイナップル」という好きなデザートについて、それを試す機会が非常に少なかったと回想している。

終戦後の時期には、多くの日本人は「飢餓」の問題に直面していたが、家庭主婦はその前から「非常食」を準備していたことが明らかになった。そして、「飢餓」に直面しても、日本人は、食事を得るため、知恵を生かし、リスクを冒すなど、全力を尽くしていた。その大変な時期において、安い食事を売る中国人の売り手のサービスと、可能な限り行うファーム活動も、大きな助けとなったと思われる。

章のまとめとして

本章では、「仕事」、「住宅」、「着衣」そして「食事」という生活面に着目して、満洲における日本人の日常生活を検討してきた。

全体的に言えば、満洲における日本人は、まともな生活レベルを維持するための、全ての必要な条件が存在し、貧乏な日本人の場合においても、終戦後の時期までは、飢餓の問題を抱えていなかった。その上、満州における日本人の収入は、日本国内の人よりも高く、日本国内の住民の視点からは、在満日本人は、贅沢な生活を満喫しているとみられていた。

満洲における日本人は、日系ディアスポラの枠で閉じ込められていたわけではなく、ロシア人、中国人など、様々な民族とも交流し、その文化の影響も避けることができなかった。特に、ハルビンに居住していた日本人は、「衣食住」という生活面においては、ロシア文化から大きな影響を受けていたと思われる。

「仕事」という生活面の検討で明らかにしているように、仕事に対する献身的な態度は、義務付けられた職務哲学であったため、官吏、会社員、教師、農民などの仕事の条件は容易なものではなかった。もちろん、満州国の時代に、新世代的国家の建築についてのアイディアは、特に官吏に意気込みを与えていたが、イデオロギー的抑圧のネガティブな面も、特に戦争時代に影響を与え、生徒の健全育成を担当する教師は、イデオロギー的教育の危険性に関しても、不安を感じたこともあった。

第二次世界大戦時代の子供は、労働力として起用されたことが、当時の状態の視点からは、当然のこととして受け止められていたが、大人になって、自分の過去のことを振り返り、日本人として自分の権利が制限されたことに対し、非常に痛ましい思いを抱いていた。

日本人の女性は、主に家庭主婦としての役割を担っていたが、終戦後の時期に、多くの男性がソ連兵により連行され、また殺害されたため、家族の生活を維持することに、一生懸命努力しなければならなかった。日本人の男性の場合、終戦後の時期に、元の地位に相当しない、労働者としての仕事をしていた。そして、日本人男性は、屈辱的な立場にいることについて、苦情も述べず、謙虚な態度と、忍耐力を見せていた。

「住宅」の生活面に注目すれば、日本人は、日本人街に、コンパクトなコミュニティとして、日本風の生活様式に従うこと、或いは、街の中に離散して、独立した生活様式を送ることなど、生活スタイルが様々であった。独立した生活様式を送っていた日本人は、ロシア人との交流の機会が多く、西洋風の世界の中で生きていた感があった。

ロシア風の一戸建て住宅とマンションに居住していた日本人は、その建築の独自性に感動していた。そして、ロシア田舎風の住宅における生活体験が、特に記憶に刻まれる、珍しい経験として取り上げられている。

日本人住宅のインテリアについて、日本風のインテリアが優先され、ミニマリズムへの傾向が強かった。その理由の一つとして、転勤生活に慣れてきた日本人は、自分の住むところに精神的繋がりが出来ず、「家らしい雰囲気」の創造の必要性も感じていなかった。

そして、日本人の都会人と農民の生活状況を比較すれば、多くの場合、自分の手によって

作られた農民の住宅は、人間が住めるところとしても定義することができないぐらいであった。そして、最低限の便利さを補うためにも、尽力する必要があった。
戦争時代に、娯楽、贅沢などは、禁止されていたため、日本人は、住宅においても、寛ぐことが出来ず、緊張した雰囲気が漂っていた。

「着衣」という生活面について述べると、多くの日本人の女性にとって着衣は、当時の日本社会の規則に逆らう自由のシンボルであった、ロシア風のスタイルに憧れていた。満洲においては、「新世代の日本人女性」というタイプが生まれたと思われる。それと同時に、西洋風のスタイルを持っていた日本人は、日本国内において、「満洲っ子」、「贅沢をする子」という、「奇異なもの」として、周囲からの苛め、嫌悪感を抱かれていたことがあった。
多くの日本人は、和服スタイルを保ち、この場合、特に着物が、家族の歴史、親近感のある人の記憶のシンボルとして、「衣服」以上の価値を持つものであった。
そして、満洲における日系ディアスポラの様々な社会層の衣服に注目すれば、都会人と農民の間の相違が明らかになっている。この場合、都会人の衣服の贅沢さとパッチだらけの農民の作業服の不細工な様子が、社会地位の不平等性を表すものとして、注目を当てている。
敗戦後の避難生活における、最も重要な衣服としては、丈夫な履物が取り上げられている。履物は、難民生活の大変さを表すシンボルとしても、登場する。

「食事」という生活面に注目すれば、家庭料理としては、主に、和風料理を優先していたが、「外食」についての記述を挙げる場合、西洋文化の珍しさを表すロシア料理に関心が高かったことが記されている。日本人の農民は、貧乏な生活を送りながらも、食糧不足の問題を知らなかった。しかし、お菓子や様々な珍味の選択肢は、非常に制限されていたことは明らかであった。そして、日本人の農民は、中国人の農民から食料品を頻繁に購入していた。このように、都会人の中では見られない、日中近隣交流が維持されていたと思われる。
第二次世界大戦時代の日本人には、最低限の食料品が供給されたが、終戦後の時期に、食料品を手に入れるため、人生をリスクに晒すこと、知恵を絞ることなど、多大なる努力をしなければならなかった。この場合、事前に「非常食」を準備すること、中国人の売り手から、安い食料品を買うことは、大きな助けとなったと思われる。

ここまでは、1920－1940 年代の満洲におけるロシア人と日本人の「仕事」、「住宅」、「着衣」、「食事」の特徴を明らかにしてきた。その次に、前述された点を基盤として、同時代の満洲におけるロシア人と日本人の日常生活について、比較研究を試みる。

第４章　1920－1940 年代の満洲におけるロシア人と日本人の日常性

ロシア人と日本人の経験を基にした対照分析

第 2 章と第 3 章においては、1920－1940 年代の満洲において居住していたロシア人と日本人の回想記の分析を通じて、「仕事」、「住宅」、「着衣」、「食事」という生活面を中心とした、彼らの日常生活に関する全体像の分析を試みた。

本章の目的は、1920－1940 年代の満洲に居住していた日本人とロシア人の経験の対照分析の試みである。第 1 章では既に述べたように、研究方法としては、比較アプローチを選択した。比較アプローチの利点としては、「有り触れた」ものごとを、新しい視点から見ることができ、その価値も再評価することができることである。このアイディアを根拠にして、満洲におけるロシア人と日本人の「日常性」を、再把握することができ、「仕事」、「住宅」、「着衣」、「食事」という生活面の記述の分析を通じて、ロシア人と日本人の価値観、人生における目標、人生におけるプライオリティについても、共通点と相違点を見出すことができる。

比較研究アプローチのもう一つの利点としては、「一般的概念」が、どれ程相対的なものであるかを明らかにしていることである。このように、満洲に住居していたロシア人と日本人の「贅沢さ」、「家庭の快適さ」、「珍味として見られる料理」、或は、抽象的な「悪」と「善」の見方、それぞれにおける相違点と共通点を見ることができると思われる。

満州におけるロシア人と日本人の日常生活の対照分析をする際、特に次の時期に注目する：1920 年代から、「満州国」の樹立以前の時期と、樹立してからの時期、その中で、第二次世界大戦の開幕から終戦までの時期、そして、終戦後の時期、という順番に、ロシア人の日常性の検討の際にも、日本人の日常性の検討の際にも、このような順番を守り、ここで挙げられた時期に特別な注目を注ぐ。

第 2 章と第 3 章において分析してきた、1920－1940 年代の満洲におけるロシア人と日本人の日常生活に関する全体像の対照検討を試みる。

4.1. 仕事

もう既に言及されたロシア心理学者の N. フルスタレーヴァが述べているように、「人間」は、自分の人生において、様々な役割を果たすべき、社会の一員であるとの、自己アイデンティティを見出している。研究者が述べているように、「個人にとっては、多層的な構造を有する社会的関係、社会制度、組織への積極的な加入は、「個人性」の成長と発

展を意味するものである」。様々な活動を通じて、個人は、自分のステータス、社会的役割、人生の意義を感じることができる。

イミグレーションの状況においても、個人は、このような価値観を保っている。しかし、そのような生活条件に置かれた人間の活動は、パーソナリティのもう一つの特技を表さなければならない。個人は、異郷の環境においても適応能力を見せる必要がある。
以上のことから、イミグレーションの状況の中に存在している個人の活動については、「アイデンティティ」と直接に関係しているものと見ることができる。

1920-1940 年代の満洲において居住していたロシア人と日本人の「仕事」という生活面における対照分析は、以下のような疑問点を明らかにすることを目指している。

4.1.1. 厳しい労働条件の下でのロシア人と日本人： 満洲の環境への適応過程の特徴

もう既に言及したように、ロシア系ディアスポラと日系ディアスポラにおいて、貧富の差、様々な不当性は、そのスケールにおける差異を無視しても、存在しており、彼らにとって、異郷の領土において、強固な経済的基盤を作ること、保持することは大変な課題であった。ロシア人の中では、特に貧乏な「白系」亡命ロシア人、そして、日本人の中では、資金を持たず、教育も受けていない、開拓団の農民は、生き残る能力を発揮しなければならなかった。ここでは、「白系」亡命ロシア人と日本人農民の例の対照分析を試みる。

「白系」亡命ロシア人の中には、故郷において財産を失う元貴族が多かった。専門知識を持っていなかった多くの人は、元の地位に相当していない仕事をしなければならなかった。そのような新しい生活条件を受けとめられたかどうかは、人によって異なっていた。N.モクリンスカヤの住宅においては、元貴族が、メイドとして勤めていた。そのメイドが、掃除などをしていた時に、このような仕事に対する嫌悪感を抑えられず、N.モクリンスカヤは、メイドの表情から彼女の気持ちを読み取ることが出来た。[433]

その反対の例としては、ハルビンに着いてから、クワスの製造作業を開始した元陸軍将官の N.ソボレフスキイが挙げられる。

このように、多くの「白系」ロシア人の中には、イミグレーションの状況においても、自分の実力を試すことができる新しい機会を探していた人が存在していた。
次に日本人の例を分析してみよう。

小宮の家族は、龍江省に位置していた班代[434]開拓団において、農作業に従事していた。一つのエピソードに、小宮は、新加入者のトラクター技師の労働条件につて、以下の通り回想

[433] Мокринская Н., 同上、106 頁。
[434] 班代の読み方は、「ばんだい」である。

している：

班代の部落は六つあって、それぞれが広い耕地を持っていたから、彼は毎日単調な仕事をトラクター相手に続けねばならず、とうとう極度のホームシックにかかってしまった。[435]

小宮の両親も、開拓団の周辺風景のうっとうしさ、労働条件の厳しさなど、様々な不便さに悩んでいたが、小宮は、農民家族の出身者である自分の父と、前述された、元の都会人であるトラクター運転手との差異について、父の言葉を引用し、説明している：

あいつは都会育ちなんだ。トラクタの運転ができるというだけで、「地の果て」にやって来たわけだから、開拓団の生活なんかまっぴらなんだよ。[436]

そして、回想記の分析が示しているよいに、小宮の両親は労働条件の厳しさについて、不満を述べることがなかった。
このように、「本当」の日本人農民は、労働条件が、どれ程厳しくても、忍耐力を保たなければならなかったことが明らかになる。

以上の事例が示しているように、日本人とロシア人の中には、満洲における厳しい労働条件に対し、忍耐力を持つ人も、持たない人も存在していた。個人のパーソナリティの特徴は、重要な役割を果たしていた。そして、適応能力を発揮できたロシア人と日本人の共通点としては、現実性を受け入れる能力と、自分の性格、癖などを変えさせる心構えという、性格の特徴が挙げられる。

4.1.2. ロシア人と日本人の活動家：仕事の内容を通じて、人生のプライオリティを分析する試み

イミグレーションの状況において、生活費を稼ぐことを優先する人が最も多い。しかし、ロシア人と日本人は、異郷の領土に存在しながら、それ以外の夢、目標、プライオリティも持っていた。
例えば、社会的活動に従事していたロシア人と日本人は多く存在していた。

---

[435] 小宮、同上、66 頁。
[436] 同上、68 頁。

「白系」ロシア人の中には、最も熱心な人としては、芸術活動に従事していた人が挙げられる。それらの中には、音楽家、詩人、俳優、画家など、様々な活動分野に属する人が挙げられる。音楽専門学校の教師の A.バツリナを、例として挙げられる：

教師の仕事において A.バツリナの熱意は珍しいものだった。彼女は、放課後も授業を実施し、深夜まで、自分の仕事に熱中し、学生たちも熱中させた。[437]

「精力的」で、「組織力」のある A.バツリナは自分の仕事に「思い切り取り組むことができた」、自分の努力により、生徒には「音楽に対する真の愛情」を生み出せることができた。[438]

ロシア系ディアスポラにおいて、特に芸能人の中には、熱心で、活発的で、創造力に恵まれていた人が多かったと思われる。そして、自分の人生において、創造的活動を優先していたことの証としては、多くの芸能人が、困窮状態に陥る場合にでも、自分の活動をやめなかったことが挙げられる。

満洲における日系ディアスポラについて言えば、「創造的活動」に熱心な人も多かったが、ここでは、「創造的活動」の対象としては、芸術ではなく、「王道楽土」、「五族協和」についての夢を実現させる「満州国」の建設活動が挙げられる。
この活動に従事した日本人にとっては、社会的改革は「理想的な社会モデル」を創造することを意味した。同じく、新しい田舎を樹立することは、農民が真似るべき「模範」を体現しなければならなかった。

例えば、ニコラエブカ村の建設を担当していた、後藤春義は、全ての「段階」についてじっくり考えてきた。その中では、適当な地域、農民の厳しい選択、農民の活動内容、活動目標についても、細かいところまで考え抜いてきた。[439]

上記の例が示しているように、「満州国建設」という夢を追求していた日本人にとっては、「田舎」の建設ということも、熱心さを必要とした「創造的活動」のようなものであった。

以上に挙げられた A.バツリナと後藤春義の例が示しているように、活動の内容が全く異なっていたにも関わらず、ロシア人と日本人の中には、自分の活動を通じて自分が理想とするアイディアを実現することを目指した人が存在していた。

---

[437] Таскина Е., 同上、146 頁。
[438] 同上、147 頁。
[439] 後藤、同上、199 頁。

4.1.3. ロシア人と日本人の女性：「家庭主婦」、「働き者」、「英雄母」などの社会的役割における対照分析

帝政ロシアと 20 世紀初頭の日本において、女性の主な社会的役割は「家庭主婦」であった。そのため、日本人と「白系」ロシア人の女性は、独立した生活を送るための特技を鍛えてきていたかどうかは、はっきりとは言えない。

日本人とロシア人の女性の中には、教師、医者などが多かった。しかし、日本人の家族においては、経済的基盤を確立すべきだったのは、男性であった。

多くの「白系」ロシア人女性は、自分の家族を維持するため、働かなければならなかった。元陸軍大将の P.ボブリクは、ハルビンで就職できなかったため、外国語の知識を持った妻が家族を支えるイニシエータとなった。[440]

離婚後に、妻一人で二人の娘を育てていた E.ヴォエイコヴァは、大学の教師、家庭教師、翻訳家といった三つの仕事を兼ねて、お金を稼いだ。[441]

日本人の女性の主な「仕事」は、家庭内の仕事であった。しかも、その仕事は義務的であり、女性の「全ての人生」でもあった。永井の家族は、長い間、メイドを雇わず、母は、全ての家事を一人で間に合わせなければならなかった。しかし、4人目の子供が生まれた時、メイドを探すことは、必然的な手段となった。そして加藤淑子は、一日中、炊事場で過ごす日本人女性について、不運な人間であるかのように、「残念に」思っていた。そして、J.クルゼンシテルン・ペテレツは、日本人女性とのプライベートな話について回想し、その中で、朝から晩まで住宅に「閉じこめられていた」日本人女性は、ロシア人女性の自由な生活に憧れていたと述べている。[442]

満洲において居住していた多くの「白系」亡命ロシア人女性が仕事をしていたのは、生きるための必然的な選択であった。「赤系」女性は、男女平等であるアイディアに従い、「男性のような」力強さを見せながら、働いていた。日本人の女性の主な「仕事」は家庭内仕事であったが、社会活動をするための余裕はなかったため、「楽」なものとは絶対にいえない。このように、日本人について言えば、仕事、社会活動などに積極的に従事していた男性のほうが、異郷の環境においては、適応能力を発揮でき、多くの女性の場合は「家庭」の枠内に限られていた。日本人の女性が、生き残る能力を鍛えるべき状況になったのは、終戦後の頃である。

---

[440] Серебренников И., 同上、86 頁。
[441] Ильина Н., 同上、13 頁。
[442] Петерец Ю. (1998) Воспоминания. Россияне в Азии, 5. С. 31.

4.1.4. 「満州国」時代：「支配者」日本人と「被支配者」ロシア人の労働条件

「満州国」が樹立された時点から、日本国内から大陸への大量移住が始まり、植民地化されたその地においては、日本人移住者に、収入が得られる広い分野での選択肢が提供されていた。一方、ロシア人の人生においては、大した変化はなかった。ロシア歴史家 O.ゴンチャレンコは、当時のロシア人の生活について、「最善とは言えないが、ソ連国内程厳しくなかった」と述べている。[443] そして、日本人支配者の態度については、以下の通り述べている：

長い年月を通じて日本人支配者は、ロシア系ディアスポラを、主に、善良な納税者と戦術的軍事タスクも必要な人事の提供者として見ていた。[444]

ロシア人の生活状況を激変させる時期において、1935 年の中東鉄道の経営権を日本側に引き渡すこと、それに伴うロシア人の人事における大幅な変更、第二次世界大戦の開幕とその後の、インフレーション、日本人特務機関の観察強化、無職などのような問題が挙げられる。しかし、戦争の状態は、日本人労働者の生活にも影響していった。

ここでは、日本人とロシア人の人生からのエピソードを見てみよう。

N.イルイナの母は、1933 年、「外国語の図書館」の監査役を、日本人に「譲渡」させられたが、補償として、日本側から学校における職場が提供された。その後も、家族の経済的状況は改善しなかったため、母は思い切って、娘を自分の英語レベルに相当しない学術雑誌に翻訳家として、年を取った「奇男子」のハリウッド向けシナリオの翻訳などという、「不適当」で「無意味」な仕事にコネクションを通じて、就職させる。当時について回想する際、自分の活動につて、そこには自分の人生が反映しているかのようで、両方とも意味がないと述べている。[445]

N.イルイナの母は、外国語の知識、教師の特技、忍耐力、コネクションなど、生活の糧を得るために十分そうに見える可能性を持っていたにもかかわらず、母と娘の努力は空しかった。N.イルイナは、「満州国」時代について、インフレーションと無職の問題が深刻であったことについて述べているにも関わらず、家族の困窮状態の主な原因として、家族を支持しなかった父の無責任さと、貴族特有の癖をやめなかった母の浪費や、無意味な贅沢をするという傾向があったことを挙げている。

回想記の分析が示すように、日本人の「存在」を強く感じたのは、日本人と直接的に協力していたロシア人である。例えば、N.ラレティナの母は、日本人の倉庫で働いており、日本人

[443] Гончаренко О., 同上、188 頁。
[444] Гончаренко О., 同上、188 頁。
[445] Ильина Н., 同上、35 頁。

との関係が友好的だったが、中国人労働者に対しては厳しい扱いをも目撃したことがある。しかし、当時は、誰が支配者であるかということがはっきり分かっていたため、「不当性」に関する反対意見を述べることを控えていた。[446]

日本人について言えば、日本が第二次世界大戦に突入する時期までは、都会人は高い収入を得る仕事を持ち、安定した生活を楽しんでいた。しかし、戦争の時期に、軍需を補うことが、第一のプライオリティとなり、満洲における日本人の一般市民も様々な意味で「動員」されていた。

当時においては、自由思想を表すことは、様々な罰を伴うことがあった。三島先生は、授業中、戦争での日本の勝利に関する疑いを述べたため、解雇という「罰」を受けた。
「開拓団」の農民は、日系ディアスポラ向けの食料品の供給者であり、街への移住などのような「自由な」行為は、禁止されていた。

多くの日本人の男性は、軍隊に動員させられ、軍需工場の労働力としては、学生である子供が徴用されていた。勝山が回想しているように、労働条件の厳しさにも関わらず、両親に苦情を述べることは、まれな事であった。

植民地においては、ロシア人より、日本人の労働条件の方が好ましいものであったが、戦争時代、日本人の自由と権利が侵害されていたことも多かった。「満州国」におけるロシア人と日本人の労働者の共通点としては、「自由な意見」を述べることは、危険性をもたらすこととして見られていた。

4.1.5. 終戦後の満洲：ロシア人と日本人の極端な状況への適応能力における対照比較

ロシア人と日本人の終戦後の状態の評価においては、相違点が見られる。日本人は「敗戦者」としての立場となったため、一般の人が、様々な決意をするための時間的余裕を持っていなかった。その一方、ロシア人は、ずいぶん前から始まった、ソ連における幸せな生活についてのプロパガンダの影響の下で存在していたため[447]、ソ連兵が「罠」を仕掛けていることを予測しておらず、「バック・アップ計画」も考えていなかった。

その理由により、多くの「白系」ロシア人が逮捕される現場として、自分自身の職場が登場している。

例えば、記者の N.シャピロは、いつものように、新聞出版社の社長室に呼び出されたが、そこで待っていたソ連兵により逮捕され、10 年間の懲役を受けるという始末であった。[448]

経済的余裕を持っていたロシア人は、レエミグレーションの準備を始めたが、貧乏な「白

[446] Лалетина Н., 同上、PA, 11、27 頁。
[447] Гончаренко О., 同上、193 頁。
[448] Шапиро М., 同上、27 頁。

系」ロシア人は、以前のような生活を続けること以外の選択肢がなかった。

オペラ歌手の M.アレクサンドロヴナは、ボーカル教室を開くことができた。多くの芸能人は、他の特技を持っていなかったため、このような、最低限の生活費を補うための芸術活動を続けていた[449]。

ロシア人とは異なり、日本人は、ソ連が満洲に侵攻した時点から、生き残るため、素早くお金を稼ぐ方法を考えなければならなかった。大部分の日本人男性が、ソ連兵により逮捕されたため、家族を支える役としては、女性と子供が登場した。

勝山は、家で見つけられる様々な素材を使用して、ソ連兵向けの人形を作っていた。[450]刺繍の特技が、多くの女性の助けとなり、着物生地から作られた様々なものは、人気が高かった。そして、日本人にとってソ連人の中でカスタマーを探していた人も存在し、彼らについて永井は「いつの世にも目先の利く商売上手な人がいるものです」[451]という意見を述べている。

終戦後の時期には、「敗戦者」であった多くの日本人の立場は、ロシア人より不利益であったが、お金を稼ぐことに向けられた日本人の行動は、危険を予測していなかったロシア人より、迅速的だったと思われる。

まとめとして

以上、満洲における様々な活動を通じてロシア人と日本人は、自分の性格、アビリティー、弱い所などがもっと深く分かるようになったと思われる。ロシア人と日本人は、異郷の領土に存在しながらも、職場において自分の国特有の雰囲気を再現していた。ロシア人と日本人は、就職活動において、コネクションを活発に使用していたことがある。そして、生活状況が厳しくなった時に、ロシア人と日本人の子供は、大人と同じく、一生懸命働かなければならなかった。しかし、ロシア人と日本人の主な共通点としては、自分の活動を通じても、適応能力を見せることができたと思われる。

4.2. 住宅、アパート

日常性を扱う哲学者は、「住宅」ということについては、個人の人生において、特に意義深いものとして考えている。ロシア哲学者の V.リャザノフは、「住宅」を「生活の根を下ろしてきた場所」、「プライベートな場所」、又は、「人の心が落ち着く場所」として見ており、

[449] Рачинская Е., 同上、70 頁。
[450] 勝山、同上、179 頁。
[451] 永井、同上、294 頁。

住宅においては、「人間の個性が保護されている」と加えている。[452] V.リャザノフは、住宅内の空間を「個人的テリトリー」として扱っているが、「外の空間」について、「なじみのないテリトリー」という、ネガティブな意味も与えている。

このように、個人は自分の住宅を、「疎遠な世界」に存在する様々な危険性から守っている「要塞」として大切にしており、そこにおいては、「本来の自分」となって、完全な自由が満喫できる。

「守る」という機能は、「物理的」意味に限らず、法律的な意味においても、理解されている。個人にとっては、「定住」すること、「定着」することは、安定性を示している。
そして、住宅内の空間も重要な意味を持ち、その空間の「セグメンテーション」方法も、個人の価値観を反映している。この理由により、住宅においては、「基本的な需要」を補うゾーン：「キッチン」、「ベッド・ルーム」など、そして、「精神的要求」を補うゾーン：「図書室」、「自習質」が分別化されることが多い。

異郷の空間は、故郷よりも「馴染みのない」ものとして受けとめられていること、そして、イミグレーションの状況においては、「定着」することは難しいプロセスであるため、イミグレーションの状況においては、「住宅」に対する態度も変わることがあり、「家」というものに特別の意義を持つようにもなると思われる。

満洲におけるロシア人と日本人の居住状況においては、共通点が見られている。ロシア人と日本人の社会においては、貧富の差があり、それは住宅の様子にも反映されていた。ロシア人の「中東鉄道」の職員、日本人の社員、行政機関の職員などは、職場におけるランクにも関わらず、「社宅」が提供されていたため、安定した生活を送っていたと思われる。それと同時に、文化、価値観、生活様式、人生におけるプライオリティ、住宅に関する見方などのようなことにおいては、相違点もあったため、以下においては、このファクターは、ロシア人と日本人の住宅様子、居住条件にどのような影響を与えていたかについて考察する。
本項においては、次のような問題点を明らかにする。

4.2.1. 安定性のインディケータとしての住宅事情：「住宅」を通じてロシア人と日本人の生活様式の分析の試み

全世界に離散した「白系」ロシア人亡命者の哲学的思想を研究していた E.ボロノヴァが示しているように、故郷を失った移民者は、極度の恐怖に襲われていたかのように、落ち着くことが出来なかった。この理由により、異郷における新しい住宅においても、安定性を感じていなかった。一方、在満日本人の居住状況を研究していた進は、コンパクトなコミュニ

[452] http://www.libma.ru/kulturologija/teorija_kultury/p11.php アクセス日： 2017/03/13

ティとして団結していた日本人の生活状況を、完全に安定したものとして定義していた。ここでは、ロシア人と日本人の「安定性」についての考察における、対照分析を試みる。

I.アブロシモフの母と継父は、中東鉄道に勤めていたため、ミドル・クラスに相当する庭付き一戸建ての住宅において、長い年月をかけて住んでおり、当時子供であったI.アブロシモフは、シンプルでありながらも、幸せな生活を送っていた。[453]

しかし、「白系」亡命ロシア人の中には、移住を繰り返していた人が多かった。多くの移住の主な理由としては、もっと安いオプションを探す必要性が挙げられる。このような生活状況の中で生きていたN.イルイナは、当時における自分の精神状態について、足元に土台がないかのように生きていたと述べている。[454]

一方、日本人は、安定した仕事を持ち、将来のことを楽観的に見ており、居住地を失うことも恐れていなかった。しかし、転勤生活は、絶え間ない移住を促していた。大人は、そのような行為を必然的なこととして適応できたが、子供にとって、移り変わる空間に慣れなければならないことは、好ましくない経験であった。永井は、それぞれの新しい移住地が、新しい問題をもたらしたことについて回想している。永井は、新しい学校においてその生徒に無視されていたことや、本などへのアクセスがなかったことなど、多くの問題があったと述べている。

このように、多くのロシア人と日本人は、移住を繰り返す必要があったが、一つの場所に落ち着くことができないという問題に特に悩んでいたのは、子供と青年世代であったと思われる。

4.2.2. 住宅様子において反映される「貧者」のアイデンティティ

貧乏な「白系」ロシア人と日本人農民の住宅の様子における共通点としては、極端な困窮者特有の住宅に居住していたことが挙げられる。

住宅レベルは、個人のステータスを反映するものであるため、家主のアイデンティティ、自己評価にも影響を与えているものである。そして、「個人的な空間」である住宅においては、安全性と快適さをも必要とされる。その理由により、レベルの低い住宅は、その要求に応えられない場合が多いため、精神的な視点からも不便さをもたらすものであると思われる。

貧乏な「白系」ロシア人の中には、農民も都会人も多かった。N.モクリンスカヤの母は、都会生活者の例である。長期間家賃を滞留したことが頻繁に起こったため、家主により追求

[453] Абросимов И., 同上、78頁。
[454] Ильина Н., 同上、58頁。

され、侮辱的な扱いの対象ともなった。当時、子供であった、N.モクリンスカヤは恥を強く感じていた。そして、N.モクリンスカヤの最初の住宅は、ハルビンの郊外に位置しており、大きなゴミ捨て場に隣接していた。そして、そのゴミ捨て場で見つけられた多くのものは、その住宅の家財ともなった。そのような生活状況の中で生きていた N.モクリンスカヤの母のうつ病状態は、深刻化していった。

K.ズダンスキーは、自分が住まったことのある安い住宅の不便さについては、夏季は、部屋が非常に暑くなるが、太陽の光が部屋の中に入らなかったことを記している。[455]

A.スラブツカヤは、貧乏な「白系」ロシア人農民の居住地の「ナハーロブカ」村を頻繁に訪問していた。著者を感動させたことは、その農民の住宅内の完璧な清潔さと、ゲストに対する家主の心の優しさであった。ロシア人農民の信仰深さは、精神的支えであったため、生活困窮者は穏やかな気持ちで暮らすことができた。[456]

このように、安い住宅のレベルの低さは、精神的状態をも悪化させるものであったと思われる。

日本人の農民も、多くの不便さに我慢しなければならなかった。小宮の家族は、開拓団の一員であった。住宅の様子は、村のその他の一員とは、あまり変わらなかったため、自分の困窮な状態に関しては、特別な心配はなかった。しかし、小宮家族に最初に提供された長屋は、手作りのものであり、小宮はこの長屋を人間のための家として見ていなかった。小宮家族が、生活の大変さに耐えられる理由としては、「開拓団」における生活に関し、特別の期待を抱いていなかったことが挙げられる。[457]

このように、「開拓団」に属する日本人農民、「白系」ロシア人農民と都会人の住宅のレベルが低かったにも関わらず、差別的な扱いを日常的に我慢していた「白系」ロシア人都会人と異なり、生活条件が平等的だったコミュニティの中で存在していた、「白系」ロシア人農民、日本人農民は、精神的負担がそれ程厳しくはなかったと思われる。

4.2.3. 住宅様子において反映される上流社会のアイデンティティ：ロシア人と日本人の「贅沢さ」の見方における対照分析

もう既に述べたように、住宅は、個人の社会的地位、影響力など、つまり、個人のアイデンティティを表す方法でもある。経済的余裕を持っていたロシア人と日本人は、他者を凌ぐ住宅を持つことができた。

在満ソ連総領事の娘の A.スラブツカヤは、中東鉄道営業者など、ランクの高いロシア人

---

[455] Зданский К., 同上、26-29 頁。
[456] Славуцкая А., 同上、32 頁。
[457] 小宮、同上、51–52 頁。

の住宅を頻繁に訪問し、住宅の豪華さについては、細かいところにおいても感じられたと回想している。住宅は、ロシア田舎風の屋敷のように、綺麗なオーナメントに飾られていたものであり、ポンド、珍しい動物のある公園はその豪華さを補足していた。住宅内の部屋においても、鮮やかでオリジナルなインテリア品が沢山あった。[458]

しかし、永井は、満州国の県の行政府のトップを代表する人の住宅について、他者より大きくて綺麗だったが、豊かさを強調する特別のディテルについての言及を挙げていない。ロシア人は、豪華な住宅が、ビジネス活動における成功、高い地位などを証明するものとしても見ており、このような考え方は、ロシア人のメンタリティの特徴でもあった。一方、日本人は、贅沢さを見せる習慣がなく、この点においては、控えめな性格を発揮していたと思われる。

4.2.4. 満洲特有の国際社会における、「異文化の人」と接する経験：ロシア人と日本人の「プライベートな空間」と「馴染みのない異文化園」での区別の仕方の対照分析

ここでは、分析の対象として、「住宅」というカテゴリに限らず、「街の区」と「通り」、「街」という、よりスケールの大きい居住エリアを扱う。

文化論における「住宅」については、「パーソナルな空間」：住宅と、「パーソナルな空間」から「馴染みのない空間」への移動をシンボル化している「通り」、「ディアスポラ」、「町」というようなコレクティブな居住地が、別のものとして扱われている。そして、前述したように、「住宅」は、「プライベートな空間」であるため、個人によって大切にされ、他者の侵入が発生しないように守られている。しかし、満洲においては、ロシア人と日本人の「存在空間」が混在していたことがあった。 一方で、ロシア人は文化、伝統をそのままの形で保持することを志していたため、自分の住宅において、ロシア風の生活様式に従い、ロシア人の中で生きていた。「名馴染みのない」空間としては、中国人の町が挙げられている。例えば、A.スラブツカヤは、「ロシア人の世界」の中で存在していたが、母と買い物に出かける際、ハルビンにあった中国人の街を訪問したことがある。その時著者は、「別の世界」の中に入っていたかのような感じがあったと記している。しかし、日本人は、コンパクトにまとまった住宅で「日本人の空間」の中に存在する、或いは、ハルビンの様々な所に離散していたマンションまた一戸建ての住宅に居住し、西洋文化の空間に接触するという経験を有する選択肢は広かった。[459]ハルビンの中で離散して居住していた日本人は、「ロシア人の世界」の中に溶け込むことができた。福山は、ユダヤ系ロシア人女性と友人関係を結び、友人のア

[458] Славуцкая А., 同上、25–26 頁。
[459] Славуцкая А., 同上、32 頁。

パートに頻繁に誘われたことがある。柳田は、「白系」ロシア人の家族のアパートで部屋を借りていたため、言葉通り、「ロシア文化の空間」の中で存在していた。長い期間続いていた共生の結果、ロシア人家主との親しい関係を結ぶことができた。加藤は、「ロシア人の田舎」において住居する経験を、珍しい世界に触れていたかのように、回想している。このように、ロシア人と日本人は、「自分の空間」の中で存在する場合にも、積極的に触れ合っていたことが明らかになった。

4.2.5. 満洲経験の影響について：住宅の様子についてのステレオタイプ的な見方の崩壊

ロシア人と日本人にとって、満洲における経験は、異文化環境の中においても存在できる可能性を見せていた。ロシア人と日本人は、自分の国の伝統に従い続けながらも、異文化の世界をも調べており、否応なく、比較することも試みていた。

ロシア人と日本人は、自分自身の「発見」について回想している。

N.スラブツカヤは和風インテリアの珍しさ、その微細なデザインに感動していた。[460]そして、中国人の「街」を訪問した時、貧乏な中国人のあばら家の様子が、記憶の中に深く刻まれていた。しかし、N.スラブツカヤは、日常生活をロシア風の住宅で過ごしており、異文化の世界を代表する建築物を「外からのオブザーバ」の立場から調べていた。[461]

一方、日本人は、ロシア風マンション、一戸建ての住宅、満洲風の住宅に居住したことがある。ハルビンに到着したばかりの福山を感動させた最初のものは、ロシア風のマンションの「高さ」である。京都特有の住宅のコンパクトな位置づけに慣れていた加藤は、ハルビンにおけるロシア・街を訪問した時、隣近所との間がとても離れていることに驚いた。永井は、土の壁を持つ満洲風の住宅についても、特別に回想している。[462]

満洲に居住していたロシア人は、自分の「世界」を保持することを志していた。「ロシア・街」とも呼ばれるハルビンにおいては、ロシア風の住宅に住みながらも、住宅に関する見方は大きくは変わらなかった。

一方、日本人は、ロシア風、満洲風の住宅にも居住し、「馴染みのない」設計、雰囲気にも適応しなければならなかった。

4.2.6. 「住宅の空間」の欲求に対する対照分析

もう既に言及したように、住宅内の空間を分別することは、個人の価値観をも表すもので

---

[460] Славуцкая А., 同上、47 頁。
[461] Славуцкая А., 同上、32 頁。
[462] 永井、同上、84 頁。

ある。金融的余裕を持つロシア人と日本人は、個人の書斎、図書館、などのような設備も作れる可能性が沢山あった。同時に、中流社会層の人についても、具体的な例を挙げて、考察してみよう。

しかし、他方では、ロシア人と日本人は、特に広いスペースを要求していたとは思えない。「白系」ロシア人は、広いアパートを借りる場合、追加的な収入の可能性の見込みがない場合、空き部屋をレンタルさせており、このような収入方法を、K.ズダンスキーの家族が利用していた。[463]日本人の場合においても、「白系」ロシア人の住宅で、特に若い日本人に部屋を貸す人は多かった。例えば、柳田桃太郎は、一つの部屋だけであっても、満足感を抱いていた。

しかし、N.イルイナの母は、個人的なスペースを欲求していたため、自分のアパートの上の階に位置していた部屋を、夜一人で休むために、使用していた。[464]

一方、永井の母は、新しい移住先の住宅において、部屋の数が多くて、不満を述べることがあった。満洲特有の厳しい冬の時、住宅において暖を取ることは大きい問題であったからである。

このように、多くの場合、ロシア人と日本人にとって、広い空間を持つことは、第一のプライオリティではなかったということが明らかになった。

4.2.7. ロシア人と日本人のインテリアにおける対照分析：伝統と個人のライフ・スタイルを焦点に

ロシア人と大部分の日本人は、住宅においては、自分の国特有のインテリアを施すことを目指していた。信仰的シンボルを祭る習慣においても、共通点が見られる。ロシア人の部屋の隅にアイコンが沢山ある棚が設けられていた。日本人は、仏壇などをインテリアの重要な一部として設けていた。

もう既に述べたように、個人の価値観、生活様式などは、インテリアにも反映されている。

N.ラレティナは、「白系」ロシア人の知り合いの住宅については、エミグラント向けの「一時的住居地」のイメージから遠く離れて、言葉通りここで生活の根を下ろしてきた人向けの「家」として見られていたと述べている。この住宅においては、ロシア風のインテリアにおいて「不可欠な」家財が多く、手作りの編み物である綺麗なテーブル・クローズ

[463] Зданский К., 同上、26-29 頁。
[464] Ильина Н., 同上、24 頁。

などのような装飾も豊富で、倉庫には、冬用の多種多様な詰め物などが保管されていた。[465]

一方、転勤生活を送る日本人は、余計な家財を保管する習慣がなかった。福山は、自分の住宅については、テーブル、椅子、本棚という、必要不可欠なものだけあったと回想している。[466]日本人の主な心配事としては、冬の期間中、部屋における暖を取ることである。寒い住宅においては、日本人は快適さを感じていなかったからである。
このように、転勤生活を送っていた日本人は、頻繁に変更する住宅とは、精神的つながりがなく、インテリア品、家財としては、実用品だけを保管していた。一方、ロシア人は、本来の意味での「家らしい」雰囲気を創造することを目指していた。

4.2.8. ロシア人と日本人のホスピタリティ文化における対照分析

イミグレーションの状況においては、自分のディアスポラの一員との団結性を維持することへの要求が高まる。全世界に離散した「白系」ロシア人亡命者の哲学的思想を検討していた E.ボロノヴァは、異郷の環境における、ロシア人の精神的要求にも着目し、孤独の恐怖が更に強まったことに注目している。孤独の恐怖が、個人の行為にも影響を与えている。例えば、普通の場合、エリート層から予測もできない行為であるが、異郷に居住していた上流社会のロシア人が、自分の住宅で催されていた文化的イベントに、ゲストとして下流社会層を代表するロシア人も誘うようになった。研究者によれば、このような催しを通じて、ロシア人エミグラントの住宅は、ロシア文化を保持すること、ロシア人との団結を強めることにおいて重要な役割を果たしていた。

ここでは、ロシア人と日本人の日常生活からのエピソードを取り上げ、満洲において居住していたロシア人と日本人のホスピタリティ文化の対照分析を試みる。

N.ヴォエイコヴァは、頻繁に、家にハルビンの文化的エリートに属している人を招待し、哲学、文学、ポエトリーなどについてのディスカーションを行っていた。このように、イミグレーションの状況にいても、借金などについての心配事について忘れ、貴族、インテリとしての自己アイデンティティを復元することができた。[467]

そして、N.ラレティナの知り合いは、一般の人との集会も楽しむことができた。綺麗なティー・セットを最も重要な家庭用品として、複数保管していた。[468]

日本人についていえば、永井の父は、自分の故郷である信州の出身者を、自分の住宅にお

[465] Лалетина Н., 同、6-7 頁。
[466] 福山、同上、97 頁。
[467] Ильина Н., 同上、34 頁。
[468] Лалетина Н., 同上、6-7 頁。

いても集めていたことがあった。福山の父は、会社の同僚と一緒に住宅に集会し、満洲国における見通しなどについて、話し合うことを楽しんでいた。この場合には、妻の役割はゲストにご馳走を準備することに限られていた。[469]

このように、日本人の家族は、伝統を維持しており、お金の稼ぎ主である夫は社会生活を積極的に送っていたため、頻繁にゲストを家にも誘ったことがある。日本人の女性は、良妻賢母という社会的役割を果たし、ゲストに最高のホスピタリティを提供しなければならなかった。

以上、ホスピタリティ文化における、ロシア人と日本人の共通点としては、自分のディアスポラの一員とのコミュニケーションを維持することを目指していたことが挙げられる。しかし、日本人の家族は、異郷の空間に存在しながらも、日本特有のホスピタリティ文化を、その本来の形で保持することを目指していた。一方、「白系」ロシア人は、自分の住宅で「文化的イベント」を開催することも楽しんでいた。

このように、ロシア人と日本人にとって、満洲における自分の住宅に対する態度が、家主の収入レベル、生活様式などによって異なることがあった。しかし、異郷においても、住宅の内外の特徴は、個人の精神的状態、アイデンティティ、自己評価にも影響を与えていた。

子供の頃と青年時代を満洲で過ごしたロシア人と日本人は、時間が経つにつれ、満洲にあった「住宅」に対するノスタルジック的な気持ちが生まれてきた。ロシア人の F.ザイカは、満洲からオーストラリアに再びイミグレーションをする。老年者になった時、ハルビンへ戻り、子供の頃に過ごした住宅を購入する。同じく、多くの日本人も、数十年が経ってから、満洲に居住していた場所を再訪問する希望が生まれる。[470]このことから、ロシア人と日本人の満洲における住む所との精神的つながりが、時間とともに強まっていたことが窺える。

4.3. 着衣

文化論、哲学において、「着衣」に関しては、シンボリック的な視点からも大きな意義を持っているものである。G. エフェンディアヴァはそのシンボリズムを次のように説明している：「着衣、振る舞いは、多くの場合、マーキング、ディファレンシエーション、という機能を果たしており、様々な社会層特有の理想を表す方法としても登場する」。[471]

服装は、「ファッション」という社会的現象と繋がっている。

哲学者の I. カントによれば、ファッションが、まず第一に、個人の生活様式における変化

---

[469] 永井、同上、134 頁。
[470] http://www.orthodox.cn/contemporary/harbin/nikolaizaika_en.htm　アクセス日：2017/03/29
[471] Эфендиева Г., 同上、97 頁。

を反映しているという。哲学者は、「どのようなファッションについて云っても、それは、人間の人生における変化である」と記している。そして、変化のプロセスは、絶え間なく続いているものであるため、ファッションの一つの特徴としては、その「寿命」の短さがある。哲学者の J.リポベツキも、ファッションのことを、社会的変化と繋げ、その場合、ファッションの対象である個人は、影響力を有していないものとして登場する。

このことから、多くの文化論者は、「支配者の文化」の問題について考察する際、ファッションについても、個人の個人的選択としてではなく、社会によって強いられている価値観として、批判している。つまり、多くの思想家は、個人が、ファッションを通じて自己アイデンティティを表していることについて考えるのであれば、誤解しているという。作者の V.ウルフは、このアイディアを次のようにまとめてきた：「我々が、服装を着ている、というアイディアは我々の妄想ある。実際は、服装が、我々を「着ている」」。
ここからは、「ファッション」における社会的影響と個人の選択の間の関係が、複雑なものであるということがはっきりとなる。

「ファッション」、「スタイル」とは、社会的現象であるため、1920－1940 年代の満洲特有の社会的モデル、そこにおいて起きていた全ての社会的プロセスは、一般人の服装にも影響を与えていた。当時も満洲においては、国際的社会が形成されていた。満洲で活動していたビジネスマンは、「ビューティ・インダストリ」を進め、消費者社会を形成させていた。「満州国」の時代には、日本人は、「白系」ロシア人のイメージを、日本人に向けられたプロパガンダ活動においても、使用し、生田は、「モダンの象徴」: 都市空間のモダン・ガール；「民族協和の象徴」: 民族衣装のロシア女性；「満蒙開拓団の象徴」: 普段着のロシア女性；「国家総動員の象徴」: タスキがけのロシア女性；「外人征服の欲望の象徴」: 裸体の亡命ロシア女性という、イデオロギー的手段として使用されていたイメージについて記述している。

貧富の差、政治的、民族的、宗教的などの多種多様性、「制服」を求める様々なインスティテューションの存在という、1920－1940 年代の満洲の社会の特徴は、ロシア人と日本人のファッションのテンデンシーにも影響を与えていた。ここでは、1920－1940 年代の満洲におけるロシア人と日本人の服装についての回想における対照分析を通じて、次のような問題点について考察する。

4.3.1. 満洲における社会生活と服装：「ドレス・コード」の問題

満洲における気候の特徴としては、夏の期間中の暑さと、冬の寒さ、秋の到来に伴う埃の混ざった強い風という、「激変」が挙げられる。そのため、服装の気候に対する適応性が重視されていた。そして、満洲における社会生活に参加することは、適当な装いが必要

であった。教育機関、職場における制服、教会、お寺などのような社会的インスティテューションにおける「ドレス・コード」、また、演劇、オペラ、社交ダンスなどのような社会的イベントが求めている「イブニング・ドレス」などは暗黙のルールがあった。
本稿では、「食事」という章において、ハルビンにおける「カフェー」、「レストラン」の生活について既に言及した。日本人にとって、ハルビンは「小さなヨーロッパ」のようで、憧れの対象であったため、「西洋風」のライフ・スタイルは、特に女性の関心を引いていた。

福山の母、そして、加藤淑子は、「白系」ロシア人女性の中で流行っていた「カフェー・生活」、「ショッピング」などのライフ・スタイルには熱心的に従い、その際に「不可欠」 であったロシア風のドレス・コードを意欲的に維持していた。加藤は、オペラコンサートのロシア人ゲストのスタイルを調べ、ロシア人女性の豪華なスタイルを真似ていた。[472]

「白系」ロシア人は、そのようなライフ・スタイルを、帝政ロシア時代から受け継いでおり、当たり前のことのようにしていた。 多くの「白系」ロシア人の経済的な可能性により制限されていたが、 社会に「出る」際には、卓越したスタイルを見せること、そして、自分の子供をレベルの高い教育機関に通わせる欲望が潜在していたため、「ドレス・コード」を守ることは、余計な経費がかかり、絶え間ない心配事の理由でもあった。E. ヴォエイコヴァは、古いコートやドレスを作り直していたため、自分のワードローブに関しては、「どうやら」節約できたが、娘の制服は、毎学期に再購入し、定期的なクリーニングなどを必要としていたため、教育機関とのコンフリクト、負債の積み立て、という問題があった。

このように、満洲における社会生活に参加していたロシア人と日本人は、「ドレス・コード」に関する多くのルールに従わなければならなかった。貧乏な「白系」ロシア人の家計においては、それは大きな負担であった。そして、西洋風のスタイルを身につけてきた日本人は、日本国内において、「奇異物」として扱われ、周囲の人からの妬みを買ったことが多かったので、日本人も「ドレス・コード」の「犠牲者」であったと思われる。

4.3.2. 満洲におけるファッションのイデオロギー性：ロシア人と日本人に及ぼす影響について

もう既に言及したように、ファッションはシンボリック的な影響も高く、個人の服装は、その個人が属している社会層特有のイデオロギー、価値観なども表している。そして、1920

[472] 加藤、同上、148 頁。

－1940 年代の満洲における多民族性、政治的多種多様性が、社会の特徴であったため、大衆の中で様々なスタイルを持つ人を見つけられた。

ハルビンにおける、「ビューティ・インダストリ」の影響力の強さ、というファクターが、主な原因であった可能性も高いが、とにかく「白系」ロシア人のファッションは、支配的な立場を取っていて、ブルジョアジーの価値観を排除していた「赤系」ロシア人さえも、ハルビンにおいて、その影響は避けられなかった。A.スラブツカヤは、ソ連から来たロシア人女性について、ハルビンの社会に出る前には、まず何よりも先に「適当な」服装を買うことを強いられていたことについて回想している。[473]

日本人も、「白系」ロシア人のファッションの影響力を避けることができなかったが、日本人の女性にとって、「白系」ロシア人女性のファッションは、ロシア人自身も意識されなかったほど、「自由」のシンボルであった。

「良妻賢母」として育成されてきた日本人女性は、「白系」ロシア人女性のライフ・スタイルに憧れていた。そして、ロシア人女性の自由性が服装の様子においても表れていた。ロシア人心理学者の A.クミノフは、西洋風と和風のスタイルにおける相違点について論述し、「軽くて、ゆったりとして、便利な服に対して、和服は重くて、硬くて、行動を制限させている不便な服装のアンチポッドである」と述べている。「重そうな」服は、ある意味で、個人の内心自己規制をも表している。このような服装は、社会における女性の自由の抑圧をも強調できる。例えば、A.クミノフは、着物を例として取り上げ、着物の下半身が足を締めていることに注目している。このような服が、個人の行動を物質的意味に限らず、比喩的な意味においても、制限しているかような印象が残っている。[474]

この理由により、加藤淑子はハイ・ヒールや、自信を表す姿勢、スタイルの自由性、多種多様性を見せることを、自分のライフ・スタイルにおける大切なアトリビュートとして導入してきた。

満洲における「白系」ロシア人のファッションに対する、「赤系」ロシア人と日本人の見方における相違点に注目すれば、一つのものが、異文化に属している個人によって、全く異なるシンボル性を与えることができることが明らかになった。

4.3.3. 貧富の差のインディケータとしての着衣事情、個人のアイデンティティに及ぼす影響について

服装は、何よりも個人の特別な社会層への属性を示すものであり、他の人との違いも明らかしている。そして、服装は、個人のアイデンティティにも影響を与えている。

---

[473] Славуцкая А., 同上、32 頁。
[474] Куминов А. (2005) Психоанализ символизма обыденной жизни. 100Аж. Сс. 35.

前章で既に言及したように、満洲におけるロシア系ディアスポラと日系ディアスポラにおいては、貧富の差が存在し、回想記の作者は、自分の服装の様子の記述を通じて、当時の社会における自分の位置づけについても考察していた。

貧乏な「白系」ロシア人家族の出身者である N.モクリンスカヤは、ハルビンで過ごした幼い頃について、痛ましい回想を残している。ハルビンに到着した最初の時期には、服をゴミの入ったコンテナの中で探したこともある。しかし、N.モクリンスカヤが、下流社会への属性を強く感じた時期は、学生時代である。靴の状態が非常に悪かったため、他の生徒に侮辱されたことがあった。[475]

日本人についていうと、小宮は、開拓団の一員として生活をしていた頃には、自分の服装の状態と、自分の社会的立場についても、あまり考えてはいなかった。しかし、家族が都会生活を開始してから、小宮の外見が、日本人の都会人と異なっており、都会人が小宮を見下していることを強く感じるようになった。

このように、貧乏な「白系」ロシア人も、日本人の農民も、差別的な扱いを体験したことがある。そして、ロシア人と日本人の共通点としては、生活困窮者としての自己アイデンティティが形成され始めた頃というのは、異なる社会的地位のグループの一員になった時期である。

上流社会について言うと、ロシア人は、エリートへの属性を、自分の服装を通じても、見せていた。例えば、大実業家の娘の L.ロパトは、自分の母が巨大なワードローブを持っていたことについて回想している。[476]A.スラブツカヤの母は、ドレスの作成をハルビンの最高級の縫製工房に注文していた。そして、ハルビンで従事した社会生活は、ロシア人の女性に対して、自分の豪華なスタイルを見せる機会を多く与えていた。

日本人の女性も、ヨーロッパ風の服装を沢山購入する習慣があった。しかし、回想記の分析が示しているように、日本人女性にとって、最も貴重なものとして、着物が登場していた。そして、多くの場合、着物の価値は、その生地の質の高さということに関係せず、その着物は、家督であり、母、祖母などについての記念のシンボルとして大切にされていた。
福山は、父の着物をどれ程大事にしていたかを言い表していた：

この着物は私の棺に入れて共に焼いてもらいたいと思って、引き上げの荷物と一緒に持ってきたものです。[477]

---

[475] Мокринская Н., 同上、159 頁。
[476] Лопато Л., 同上、23 頁。
[477] 福山、同上、15 頁。

このように、貧乏なロシア人と日本人は、「社会に出る」時点から、他者より劣っている、困窮生活者であることを強く感じていた。そして、ロシア人と日本人のエリート層については、贅沢を見せることは、特にロシア人特有の習慣であった。一方、多くの日本人にとって最も貴重なものとしては、着物が登場しているが、その着物の意義は、周辺社会への印象を与えることより、親しい人についての記憶が保持されていたことにおいて見られた。

まとめとして

以上、多くのロシア人と日本人は、満洲においても、自分の国特有のスタイルに従っていた。この場合、日本人について言うと、着物が、満洲特有の冬の期間には不適応にも関わらず、多くの女性が、和服に忠誠心を見せたいがため、着物を着続けていた。その場合には、着物が、日本の伝統を保持する欲望の強さを示していた。

それと同時に、満洲においては、服装が、イデオロギー的信念、社会的地位、価値観を表すものとして、シンボッリクな視点からも、大きな意義を持っていた。ロシア人女性のライフ・スタイルに関心を持っていた日本人女性は、まず第一に、ロシア人女性の外見を調べていた。日本人の女性とって、ロシア人女性の自分自身に許していたスタイルの自由性が、女性の精神的自由をも表していた。例えば、加藤淑子は、アナスタシヤと言う、教育さえも受けていなかった貧乏な女性メイドについて、自分の社会的ステータスを全く考えていないかのような、自尊心を見せたり、卓越しスタイルを保持していたことに驚いていた。アナスタシヤのような、ステレオタイプ的思想から完全に自由なロシア人の女性は、日本人女性の憧れの対象であった。

4.4. 食事

ロシア文化学者の N.マルシカナは、「食事」という日常生活の面について、各民族特有の文化の重要な一部であるものとして取り上げている。研究者によれば、「文明の発展とともに、「食事」というものは、個人の基本的欲求から、個人と社会の統合性を表している、多くの意味を持っている有機的一体性へ変形してきた」という。このように、日常的な食事をとることにおいては、文化的儀式をも見ることができる。この日常的な「儀式」を通じて個人は、ある文化への自分の属性と、異文化への非属性を、同時に認識している。[478]

20 世紀前半のロシアと日本においては、自分の国特有の食文化が優先的立場を取っていた。そして、当時のロシアと日本の食文化においては、全く異なる儀式があり、「相手」にとっ

[478] Марушкина М. (2013) Пища людей: культурологический аспект// Мир науки, культуры и образования, 40. Сс. 327-328.

ては珍しそうに見えていた食材も使用されていた。

1920－1940 年代のハルビンにおいては、多民族的社会が形成され、全世界からの食材を輸入していたケータリング・インダストリも、強い立場を取っていた。このように、ロシア人と日本人は、日常生活において、自分の食文化に限らず、様々な国の食文化も試すことができた。

しかし、第二次世界大戦の時期と、終戦後の時期には、ロシア人と日本人にとって、食事を補給することは、第一の問題であった。回想記の分析は、ロシア人と日本人が試みていた生き残る方法においても、対照分析のために必要な情報を与えている。

本項においては、満洲におけるロシア人と日本人の回想記の対照比較を通じて、次のような問題点を明らかにする。

4.4.1. ロシア人と日本人の「家庭料理」と「外食」における好み

もう既に言及したように、個人にとって、日常的な食生活の中で、自分の国特有の伝統に従うことは、自己のアイデンティティを保持する方法としても大切にされていた。この理由により、異郷に存在しながらも、ロシア人と日本人は、「家庭料理」としては、自分の国特有の料理を選択していた。しかし、もう既に言及したように、満洲において形成されてきた多文化空間の利点としては、様々な国の食文化をも味わう機会が多かったということが挙げられる。

その理由により、ロシア人と日本人は、「外食」をする際、自分の国ティピカルの食文化とは異なる料理をも試すことを目指していた。

ロシア人は、「中国の食文化」に囲まれていたかのような空間の中に存在していた。中国の食品への容易なアクセス、中国料理の珍しさと美味しい味、値段の安さ、中国人の売り手のイニシアチブ性、というファクターの影響により、中国料理が多くのロシア人の食生活の重要な一部となっていった。I.アブロシモフは、幼い頃を回想する際に、大好きな多種多様な中国のお菓子とスナックに言及している:

> 中国人の売り手は、肉入りの甘いピロシキを販売した。私にとって、そのピロシキより、もっと美味しいものは存在しなかった！[479]

そして、日本人は、「外食」としては、多くの場合ロシア料理を選択したことについて回想している。清水は、ロシア料理の最も珍しい面として、日本食文化においては「気質な」

[479] Абросимов И., 同上、264 頁。

材料が使用されていたことを挙げている。例えば、乳製品の選択肢の広さが、清水を感動させていた。

「儀式」というロシア人の食生活の面も、興味深いものであり、加藤淑子は、その「一日のうちの一番大事な」食事である昼食の際、ロシア人は「午後二時から四時ごろまでゆっくりと食卓を囲む」[480]と回想している。

多くのロシア料理は、当時の日本人にとって、珍しく感じられていたが、気に入った料理についての言及が多い。そして、ロシアの食文化は、日本の食文化に似ていないということが、日本人の深い関心を引き付けていたと思われる。

以上、食文化は、個人の日常生活の重要な一部である。そのため、他の民族の料理を味わうことを通じて、異文化の他者の好み、精神についてもより深く知ることができると思われる。1920－1940 年代の満洲において居住していたロシア人の大部分は、中国語が分かっておらず、日本人の中にも、ロシア語を話す人は多くなかったため、当時の満洲においての様々な民族の間のコミュニケーションの「手段」としては、言語だけではなく、食文化も使用されていたと思われる。

4.4.2. 貧富の差のインディケータとしての食事事情

1920－1930 年代の満洲における食糧状況の特徴としては、食料品不足の問題がなかったこと、安い食堂の存在と低価格の食料品を供給する中国人の商人の活発な活動が挙げられる。その理由により、多くの生活困窮者さえも、最低限の食料品を補給することができた。しかし、エリート層に属しているロシア人と貧乏な「白系」ロシア人の日常的メニューにおいては、著しい相違点が見られた。

A.グリンセは、国境警備隊長の昼食会の際に出されていた料理の中に、トラウト、キャビア、チョウザメ、ポーランドの卵ソース、鮭、カニ、魚のゼリー料理、アスピック、焼いた子牛のハムなどを言及している。[481]

様々な祝典の際、祝祭料理に関する経費を惜しまないことは、「遊ぶこと」を大切にしているロシア文化の特徴であるため、ロシア人のエリート層により開催されていた豪華な晩餐会、ディーナなどは、日本人の関心も引き付けていた。

しかし一方で、N.ヴォエイコヴァは、二人の娘と一つのご飯を分け合って、お金を節約していた。[482]N.ヴォエイコヴァの家族において、食事状況は、家族の稼ぎ主であった母の当時の収入レベルによって依存されていたため、安定な時期と不安定な時期が、移り変わって

---

[480] 加藤、同上、58 頁。
[481] Глинце М.（1986）Русская семья дома и в Маньчжурии. Сидней. С. 64.
[482] Ильина Н., 同上、32 頁。

いたかような生活を送っていた。

日本人について言えば、日本人の「都会生活者」と「農民」の食事状況における相違点が見られた。

高野の家に務めていた中国人のボーイは、豚、エビ、ナマコの餃子を作った。そして、川で取れたチョウザメの卵であるキャビアについても、高野は、「大きな缶詰めが常時食料庫に山積みされていた」と回想している。[483]

一方、小宮は「開拓団」における食生活については、飢餓の問題が存在していなかったが、お菓子があまりなく、魚についてもフナしか食べておらず、小宮が回想しているように「とてもドロくさいので、調理の知恵が必要だった」。[484]そして、小宮の日常的メニューは、主に、日本料理からなっていた。

このように、「食事」という生活面においても、ロシア人と日本人のディアスポラにおける貧富の差がどれ程大きかったかが明らかになった。しかし、貧乏な「白系」ロシア人と日本人農民の食料状態の相違点として、日本人農民の食生活については、安定性が見られたということが挙げられる。そして、金銭的余裕を持っていたロシア人と日本人について言えば、自分の国特有の料理に限らず、全世界から輸入された食料品も「満喫」していたことが言える。

4.4.3. ロシア人と日本人の社会的生活における「レストラン」文化の重要性

既に言及したように、ハルビンにおいては、カフェー、レストランなどを含む「外食」のインダストリーが振興していた。多くの中国レストランは安かったため、誕生日などのような祝祭を大げさに祝う傾向があるロシア人カスタマーの中で人気が高かった。

しかし、イミグレーションの状況においては、「外食」の習慣が、社会生活を維持すること、ディアスポラの一員との団結性を保持することにおいても、重要な役割を果たしていた。ロシア文化学者の E.ボロノヴァは、故郷を失う「白系」亡命ロシア人を、比喩的な「家」を失う人間としても取り上げており、異郷の空間の中には、「白系」亡命ロシア人は、自分の「住宅」に限らず、ラストラン、カフェー、キャバレーなどをも自分の「住宅」として大切にしていたことを主張している。この場合、ロシア人の「家族」としては、自分が属しているディアスポラの一員が登場していた。[485]日本人について、同様の研究が実施されなか

---

[483] 後藤、同上、204 頁。
[484] 小宮、同上、15 頁。
[485] Воронова Е. (2007) Мифология повседневности в культуре русской эмиграции 1917-1939 гг. Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата. Сс. 1-20.

ったが、回想記の著者は、特に日本人の男性の生活における、同僚、友人と一緒に「外食」に出かけることについて多く言及している。そして、もう既に述べたように「カフェー」などに通うことは、西洋文化の一部として見られていたため、日本人は、このように西洋風の伝統をも身につけていたことが窺える。

B.コズロフスキーは、ハルビンにおける公共食の場について、高く評価している：

カフェーが沢山あった。それらは、街のにぎやかな所に位置付けられていた。(略)メニューは、素晴らしくて安かった。[486]

そして、日本人について言うと、加藤は、「白系」ロシア人女性を真似て、ケーキとコーヒーを「満喫」しながら、時間をゆっくり過ごす習慣を身に付けた。

以上、満洲におけるロシア人と日本人は、「外食」をすることが好きだったが、その活動に、異なる意味を与えていた。日本人の女性は、カフェーを「西洋世界」の文化として見ており、このような、自由な時間の新しい過ごし方を意欲的に自分の人生にも導入していた。日本人男性は、「外食」活動を通じて、職場の同僚などとの団結性を結んでいた。そして、日本人は、ロシア人が遊んでいることにも注目し、この場合には、ロシア人のことについて、時間を楽しく過ごすことができる民族であるという印象を表していた。

4.4.4. 第二次世界大戦、終戦後の時期：食事事情における対照分析

第二次世界大戦の時局が厳しくなった時期と、終戦後の混乱状態においては、食事を確保することが第一の心配事であった。関東軍の軍需を補うことは、一般市民の要求より重視されていたため、「満洲国」の「支配者」の立場であった多くの日本人さえも、食料品の選択肢において、自己を制限していた。

ロシア人は、安い中国の食料品を購入することとファーム活動を通じて、「生き残る」ことができた。N.ラレティナの両親は、豚、鶏などを、終戦の時期まで飼っていた。[487]E.タスキナは、中国の食料品が大きな助けとなったことを述べている：

満洲にあった野菜の中で、何が記念像に値するかと言うと、それは、疑いなく大豆である。[488]

---

[486] Капран И., 同上、16 頁。
[487] Лалетина Н., 同上、31 頁。
[488] Таскина Е., 同上、1-3 頁。

そして、食糧不足の時期においても、ロシア人は祝祭を祝い続け、祝祭料理のために必要な材料を見つけることができた。この行為は、ロシア人の信仰深さをも示していると思われる。

日本人について言えば、ロシア人より安定した食生活を送っており、「米」などのような最低限の食料品によって維持されていた。しかし、子供にとっては、美味しいものが不足していた問題により、悩んでいた。永井は、「缶詰のパイナップル」について、稀に味わえる「珍味」であったため、それを食べられる機会を、「大イベント」としても見ていた。

そして、日本人の人生における「挑戦的な」時期としては、終戦後の「避難生活」が挙げられる。加藤は、子供に食事を供給するため、自分の人生をリスクにさらしたことがあった。永井の母は、随分前から準備された「非常食」で三日間ぐらいの時期を乗り越えられたが、その後には、中国人の売り手から購入した、量の僅かな食料品を家族の間で分け、辛うじて飢餓と戦っていた。

食糧不足の問題が厳しかった時期におけるロシア人と日本人の食生活の特徴としては、ファーム活動、中国人の売り手から購入していた安い食料が大きな助けとなったことが挙げられる。そして、当時におけるロシア人と日本人の「メインの料理」としては、コウリャン粥が登場している。

まとめとして

以上、「食事」という生活面は、個人にとっては特に意識されていない程深く、日常性の中に根を下ろしてきた儀式である。しかし、このような「意識されていない」行為を通じても、個人は、自分の文化への属性を感じていると思われる。そのことが原因で、多くのロシア人と日本人は、異郷の空間の中に存在しながらも、「家庭料理」としては、自分の国特有の食文化を保持することを目指していた。

各々の民族特有の文化の重要な面である食生活は、その民族における好み、「美味しい」と「美味しくない」という理解のし方、そして、価値観などについても「語る」ことができる。そのため、20世紀前半の満洲において形成されてきた多民族空間においては、異文化の他者の食生活を調べることを通じて、ロシア人と日本人は、自分の「隣人」のことも相当深く理解できたと思われる。例えば、N.ラレティナは、日本人の隣人との交流の重要な一部としては、その日本人の「奥さん」によって作られた料理をご馳走することを挙げている。[489] そして、加藤淑子も、「白系」ロシア人の家主と一緒に、ロシアのボリシチ、ペルメニを作ることを通じて、その家主と親しくなってきたことに限らず、ロシア文化にも接近していっ

[489] Лалетина Н., 同上、3 頁。

た。[490]このように、「食事」とは、ロシア人と日本人のコミュニケーションを促進させていた「言語」としての役割を担ってきた。

第二次世界大戦の時期と、終戦後の混乱状態においては、「食事」を確保することが第一のプライオリティとなっている。その時、一般人のロシア人と日本人は、実行能力を発揮しなければならなかった時代であった。生活の糧を得るために戦っていた、ロシア人と日本人は、自分自身の実力だけに任せることに関する教訓も生かしてきた。

章のまとめとして

本章においては、一般人の人生を通じて、1920－1940年代の満洲におけるロシア人と日本人の日常生活に関する全体像を比較対照し、満洲におけるロシア系と日系ディアスポラにおける社会的問題、価値観、人間関係の特徴などについての考察を試みた。

「仕事」という生活面の分析を通じては、異郷の環境における個人の適応能力、自己表現（self-realization）の可能性、自己アイデンティティにおける変化などを辿ることができる。

ロシア人と日本人の労働状況における対照分析が示しているように、適応を成し遂げることにおいては、個人のニーズに応える労働条件だけではなく、個人のパーソナリティの特徴も、重要な役割を果たしている。その理由により、労働条件がさらに好ましかった日本人労働者の中には、自分の生活に対し、不満を感じていた人が存在していたが、満洲に「亡命した」白系ロシア人の中には、自分の努力により生活の経済的基盤を作ることの出来た人も少なくなかった。

満洲の経験は、極端な状況下に置かれたロシア人と日本人の適応能力も、発揮させることを促していた。終戦後には、「敗戦国民」となった日本人は、お金を稼ぐ活動の熱心さを通じて、生き残る意志の強さをも表している。

「住宅」という生活面を分析する際、「住宅」のことは、哲学的な定義としても扱い、住宅が、個人の経済的成功度、社会における地位などについても「語ることができる」ということを考慮に入れた。住宅の様子においては、個人の価値観、生活様式も反映されていること、住宅が「プライベートな空間」であり、それは、「馴染みのない」周囲空間に対峙していることも、分析の「基盤」として扱った。そして、当時の満洲の社会においては、国際的空間が形成されていたことから、ロシア人と日本人にとっては、「馴染みのない」生活空間は、「異文化の他者」が存在している空間であったということも、注目すべきポイントとして見た。

「住宅」の分析を通じて、ロシア系ディアスポラと日系ディアスポラにおける、貧富の差

[490] 加藤、同上、146 頁。

の問題、定住先の選択における傾向、そして（コンパクトな「集落」として、或は、自分のディアスポラと孤立した個住宅として)、インテリアの分析を通じては、ロシア人と日本人の「贅沢」などの見方における相違点を検討し、生活様式についても完全なイメージの形成を試みた。

ロシア人と日本人の「プライベートな空間」と「馴染みのない異文化の他者空間」の区別の仕方における対照比較は、ロシア人と日本人の異文化の他者とのコミュニケーションの特徴、共生経験の有無についても明らかにした。

安定した生活を送っていたロシア人は、異郷に存在するにも関わらず、自分の住宅との精神的な繋がりが強かったことが明らかになった。その理由としては、当地においては、中東鉄道の営業の開始時点から、長年生活を送っていた「原住民」のロシア人が多かったこと、そして、ロシアから亡命した多くのロシア人は、ロシアから持って来た家財が、失われた故郷についての記憶として、重視していたことなどが挙げられる。このように、「白系」ロシア人にとっては、自分の住宅が、「小さな故郷」のようなものでもあったと思われる。

一方、日本人は、満洲における自分の住宅に対しては、もっと実利的な態度があった。多くの日本人が送っていた転勤生活は、頻繁な住宅の変更を意味していたということが、その原因の一つであった。

そして、ロシア人と日本人の「プライベートな空間」と「異文化の他者の空間」の区別の仕方においては、ロシア人が、ロシア街とも呼ばれるハルビンにおいては、ロシア文化の中で存在していたが、多くの日本人は、日系ディアスポラの「外側」へも視線を向け、ロシア人の中で住む経験もあった。

「着衣」を分析する際、社会における着衣のシンボリック的な意義の高さをも考慮に入れ、貧富の差、社会における地位、イデオロギー、生活様式、価値観、経済的成功度が、個人の服装においてどのように反映されているかについても分析してきた。
様々な意味での「ドレス・コード」についても、考察してきた。

そして、文化論において、優先的な立場を占めている、個人のスタイルへの社会テンデンシーの影響力についてのアイディアも対照分析の重要な基盤となった。
ハルビンにおいては、「白系」ロシア人のスタイルが優先的立場を有し、その意味においては、「白系」ロシア人にとって、帝政ロシア時代特有の伝統を保持すること、西洋世界のファッション・テンデンシーに従うこととしての意義を持っていたが、日本人の視点からは、「白系」ロシア人のスタイルは、日本の保守的な伝統に対峙している「自由な生活」のシンボルとして見られていた。

「ドレス・コード」の役割については、個人のいる社会グループに対する「属性」と、それと同時に、他の社会グループに対しての「他者性」を表すシンボルでもあった。このよう

に、洋服姿の日本人は、日本国内においては、「異質者」として識別されていた。
「食事」を分析する際、食事のことは、その国の文化の重要な要素であり、日常的な食事を取ることは、自分の文化への属性を意味する重要な儀式であるとのことについても考慮に入れた。
そして、「外食」の文化は、社会的生活を送る方法、異文化間交流の方法としても、登場している。
ロシア人と日本人の「家庭料理」と「外食」の習慣における相違点が明らかになった。「家庭料理」としては、原則として自分の国特有の料理が登場する。一方、「外食」における好みは、ロシア人は中国料理、日本人はロシア料理、というような傾向が見られた。
そして、食糧不足の問題が厳しかった、第二次世界大戦時期と、終戦後の時期にも着目し、人生における基本的な欲求である食事を確保することにおいての、ロシア人と日本人の経験を比較してきた。
「満洲国」の時代、「支配者」の立場であった日本人は、食糧状況が、ロシア人より良好であったものが、終戦後の満洲においては、日本人も飢餓の問題に直面していた。中国の食料品の存在は、ロシア人と日本人にとっては、大きな助けともなった。

以上、第１部では、1920－1940 年代の満洲において居住していたロシア人と日本人の日常性を検討し、「仕事」、「住宅」、「着衣」、「食事」という、「物質的な」面に着目した。第２部では、ロシア人と日本人の「精神性」に焦点を当て、イミグレーションの状況に適応しなければならかったロシア人と日本人の精神的状態及び、心理的防衛方法についても検討する。

第 2 部　精神的状態、心理的防衛方法

第 2 部は、エミグラントの精神的状態、心理的防衛方法という問題を中心とする。（第 5－7 章を含む）。

第 2 部においては、ロシア人と日本人にとって、イミグレーション状況への適応のプロセスが、心理的な視点から、どのような問題をもたらしていたのか、そしてロシア人と日本人は、その問題をどのような方法で処理していたのか、について考察する。

第 5 章では、満洲における日常性を、心理的な視点から分析し、ロシア人の精神状態の特徴と、精神的防衛方法を分析する。第 6 章では、同様の方法で、日本人の経験を検討する。そして、第 7 章では、ロシア人と日本人の精神状態、心理的防衛方法における対照分析を試みる。

第 5 章　ロシア人の精神的状態、心理的防衛方法

本章では、「イミグレーションの状況」への適応の研究に引き続き着目し、「心理的」な面から適応問題を検討する。

ロシア心理学者の N.フルスタリョヴァによれば、移民者の生活における心理的側面の研究が、歴史的、政治的アスペクトの研究と同様、重要であると指摘する。その理由としては、個人が別の国に移住する際、個人の「構成」の要素である、「個人性」、「パーソナリティ」、「活動の主体」が、必然的に変遷し、極端な場合、その変遷が、人間の個性の歪みを生み出すという望ましくない結果に至ることもある、ということを取り上げている。

移民者の心理を研究する際、「人間」の定義を明確化しなければならない。ロシア人の哲学者の B.アナ二エフは、人間というものを、その全てのサブシステムが相互作用している全体的システムとして見ている。具体的に言うと、人間は、A.生物世界の標本（a unit of the genus）、B. 社会集団の一員、パーソナリティ（social individual）、C.活動、コミュニケーション、コグニション活動を通じて自己を表現する、いわゆる活動の主体（subject of activity）という、三つの要素から構成されるものである。[491]人間の心理を研究する際、このアプローチを適用すれば、イミグレーション状態に置かれた人間の社会的存在、精神的存在の全ての面を、上記に取り上げた有機的団結性を保ちながら、検討することができる。（その中で、動機付け、運命、意識、言語の問題、労働活動に限らず、固体発生（ontogenies）と運命の関係、個人と個性の特徴の関係、プロフェッショナルなオリエンテーションと再配向（reorientation）の関係等を含む）。

---

[491] Ананьев Б.（1967）Психологическая структура человека, как субъекта. Человек и общество. С. 16.

N.フルスタリョヴァは、もう既に言及された論文において、1920 年代に世界各地に離散したロシア人移民者の精神状態の研究の重要性に焦点を当てている。研究者が示すように、1920 年代から 1930 年代にかけて外国で形成されたロシア系ディアスポラは歴史的・　制治的・文化論的な視点から検討されているが、精神的な面はまだ、研究者の視野外にある。N.フルスタリョヴァは、1920 年代から 1930 年代にかけて外国領土に住み着いたロシア人の精神状態への関心を次のように説明している：「そのロシア人は、亡命生活を送りながらも、外国の領土にロシア文化を保持した。その理由で、精神的偉業を成し遂げることができたと見るべきである」。著者は亡命ロシア人を「高い創造的生産力を発揮した」と定義し、研究に値するものとして位置づけている。

そして、同年代の満洲において居住していた日本人についても、心理的問題が、検討の視野外に置かれていることことが明らかとなった。

N.フルスタリョヴァが述べているように、「慣れてきた環境の喪失」と「新しい環境への適応」というのは、人間の心理にも変化を促す。

本章においては、異郷に住み着いたロシア人の心理状況を検討する際に、特に「自己意識」、「活動」、「環境理解の特徴」、「移り変わる環境、状態の中で生きる移民者のエモーションの特徴」などのような人間の社会的・精神的存在面に焦点を当てる。

N.フルスタリョヴァは、種々ある研究方法の中に、個人の人生の過程の研究も取り上げた。そして、移民者によって書かれた日記、自伝、回想記などを重要な情報減として定義した。[492]　本章で提起された問題点を分析する際においても、「個人の経験」を、研究の焦点とする。

ここでは、満洲に居住したロシア人と日本人の回想記を分析して、著者自身の精神状態と、回想記の著者が目撃するその他の人の精神状態、異文化状況における振る舞いの特徴を検討する。そして、ロシア人と日本人の経験においては、対照比較を試みる。

満洲におけるロシア人の精神状態を検討する際、主に「白系」亡命ロシア人に注目を当てる。そして「赤系」ロシア人の中では、中東鉄道の職員の家族の一員の回想記を検討する。20 世紀初頭から満洲に居住していたロシア人の回想記では、精神的問題にそれ程深く触れていないため、本研究の対象外とする。

本章では、二つの時期を扱う。一つは、1920－1945 年の期間を、二つは、1945 年以降の時期を取り上げる。一つ目の時期は、ロシア内戦から満洲に亡命した「白系」ロシア人による新しい国で生活空間の再構築の時期である。二つ目の時期では、ソ連兵による満洲への侵

---

[492] Хрусталева Н. (1996) Психология эмиграции (Соц.-психол. и личност. проблемы) : Дис. д-ра психол. наук: 19.00.05 : СПб. С. 12.

攻、「白系」亡命ロシア人の訴追、ロシア系ディアスポラの解散プロセスの深刻化を含む出来事を分析する。1945 年以降に、多くの「白系」ロシア人はソ連に連行されたが、それ以外のロシア人は、中国のその他の地域と全世界に離散し、そして満州に残った「白系」ロシア人の人数は僅かだった。

満洲におけるロシア人の精神状態を検討する際、特に、回想記で記述されている心理的問題と、心理的防衛方法に着目する。

5.1. 「異文化環境」として見た 1920－1940 年代の満洲：ロシア人の視点

回想記を書いたロシア人の移民者・亡命人の精神的状態の検討に着手する前に、ロシア人が適応しなければならなかった「異なる空間」として見たハルビンの特別な雰囲気とロシア人社会の問題を取り上げる。

1. 民族的構成:　多民族的空間

20 世紀前半に、ハルビンには、民族の流出・流入のプロセスは絶え間なく行われていたため、人口に関する確実なデータを取り挙げることは困難であった。第 1 章で既に述べたように、情報源によってデータが異なる可能性がある。生田によれば、1913 年代に、ハルビンには、総数 6 万 8549 人が居住しており、そのうち、ロシア人が 3 万 4313 人で、中国人 2 万 3537 人、ユダヤ人 5032 人、ポーランド人 2556 人、日本人 696 人、ドイツ人 564 人、タタール人 234 人、ラトビア人 218 人であった。そして、1917 年の革命後に、ハルビンに多数の亡命者が押し寄せ、1929 年にハルビンでは 5 万 7121 人の亡命ロシア人がいた。[493]

ここで挙げられた人口のデータが示すように、20 世紀前半のハルビンは多民族的な「コスモポリタン」都市であったが、ロシア人の人数は優位的な立場にあった。

2. 中国文化との関係の特徴：周りの環境から「閉じ込める」こと

ハルビンにおけるロシア人は、数字的に多かったが、とにかく、中国の領土に居住していたことが言える。T. レビャキナが書いたように、ハルビンに限らず、中国におけるその他の都市と州においても（北京、上海、天津、新疆）、ロシア人の大部分は、中国の民族から孤立して、コンパクトなコミュニティの中に住んでいた。[494]つまり、ロシア人はある意味で、「ディアスポラ」の「枠」に制限されるようになった。

3. ロシア革命から逃げた「白系」亡命人の問題：「帰り道」がないという感覚

革命を受け入れることができず、ロシアから逃亡した「白系」ロシア人は、故郷で「犯罪

---

[493] 生田美智子（2009）「異文化空間における亡命ロシア人の民族・文化的アイデンティティーハルビンの場合ー」// 『セーヴェル』詩 № 25、2009 年、 40－55 頁。

[494] Ревякина T., 同上、44-46 頁。

者」と「裏切り者」として定義されていたため、帰国するということは、懲役或いは死刑で終わる可能性がある。その理由で、多数の亡命ロシア人は、「故郷」を失ったという思いを背負いながらハルビンに居住した。

4. ロシアから逃げた多くの「白系」ロシア人の「貴族」と「軍人」の問題: 財産と地位の喪失

前章で既に述べたように、ロシアから逃亡した「白系」貴族、軍人の中には、全ての財産を失った人がいた。1923 年に K. ネチヤ―エフ中将によって率いられた 3000 人からなる「白系」軍隊が、チシャン・ドフ・チャンの軍隊に受け入れられた[495]（その時、陸軍将官と将校は称号を保持できた。また元陸軍将官と元将校も同様である。）が、ハルビンに移住した多くの貴族、軍人は、自分の称号を適用することができなかった。そのロシア人は、他の社会層と同様の条件で、様々な意味で新しい生活を形成することが必要となった。

5. ディアスポラにおける社会地位コントラストの問題

1920 年代まで、ハルビンに居住したロシア人の大部分は、中東鉄道、サービス事業、ビジネスに従事しながら、裕福に暮らしていたが、1917 年の革命後にハルビンに押し寄せた「白系」ロシア人の中には、農民（44. 8%）、そして労働者（6, 4 %）、貴族（3.6%）という、様々な社会層を代表する人が多かった。零落したロシア人が沢山いたため、ハルビンにおけるロシアのディアスポラには貧困層が拡大してきた。

6. 中国における国内と外交政治の変動

第 1 章で既に述べたように、1920 年代から 1940 年代にかけて、ハルビンはソ連、中国、日本が関わった国際紛争の中心地となったため、ロシア人は、政策と法律の変動に適応しなければならなかった。

7. ロシアのディアスポラにおける人間関係の特徴：イデオロギー的分裂の問題

前章で述べたように、1917 年の革命後に、ハルビンに逃げた「白系」軍人の中には、反ソ・反共の戦争を諦めないロシア人が多くいた。政治団体の設立、プロパガンダ的新聞・雑誌の出版が活発化される。1931 年に満洲を占領する日本政府は、反ソ連的ムードを利用して、様々な手法を使って、反ソの戦争の準備に、多くのロシア人を巻き込んだ。1930 年代に『ロシアのファシスト団体』が活動を拡大する。

それと同時に、ソ連から来た「顧問」の努力により、中東鉄道沿線の地域の専門・政治・社会団体の総合会議が開催されたり、「赤系」労働組合もソ連を維持する運動を開始したりするようになった。[496]

---

[495] Гончаренко О., 同上、123 頁。
[496] Гончаренко О., 同上、156 頁。

1924 年に、中東鉄道が中ソ共同経営になり、ソ連人はかなり大きいコロニーを形成する。ハルビンの学校では、ソ連の教育が樹立し、ソ連の組織、団体、出版物が相次いで現れる。中東鉄道の従業員は、職場を安定させるため、「中国」、「ソ連」の国籍或いは、イミグラントとしての地位を選択しなければならなかった。

このように、ハルビンに居住していた一般のロシア人（中・高学生も含み）も、様々な政治団体の影響を避けることができず、「イデオロギー闘争」の流れの中で生活を送った。

8. 地理的なファクター： 満洲の厳しい気候

満洲に居住していたロシア人が回想するように、満洲の気候は、厳しい気候に慣れてきたロシア人さえにとっても、耐えがたいものだった。N. イルイナを引用すれば、満洲には「春に埃を散らす風、夏に暑さ、冬に雪のない厳しい寒さ。秋だけは良かった」。[497]

9. 社会安全の問題：中国犯罪団体の活動

ハルビンに居住していたロシア人が回想するように、19 世紀から満洲において「フンフーズ」という中国人の犯罪団体が活動していた。20 世紀前半に、ロシアが治外法権を使用して、自分の警察を持つことができたため、状況はかなり安全だったが、1920 年代からロシア人の拉致事件の数が増えている。ハルビンに居住していたロシア人の回想記と文学作品には、その中国犯罪団体がよく記述されている。

ハルビンにおけるロシア人の居住条件を、ヨーロッパに移民したロシア人と比較すれば、ロシア的な生活様式を保持したハルビンには、適応することはかなり易しかった。しかし、ここに挙げられたファクターが示すように、ハルビンにおけるロシア人の生活は、完全に安定したものだったとは絶対に言えない。

ここでは、ハルビンに居住していた様々な社会層に属するロシア人の回想記と日記を分析し、ハルビンの例を通じて、イミグレーションにおけるロシア人の精神状態と振る舞いの特徴を検討する。

5.2. 1920－1940 年代―「白系」亡命ロシア人：新しい生活空間の構築

前章で述べたように、1920 年代に、ロシア革命とロシア内戦から逃げた 6 万人くらいの「白系」ロシア人は満洲へ押し寄せた。亡命者の条件は平等的ではなく、社会的地位、専門分野における相違があった。満洲までお金と貴重品を運ぶことが出来た人もいたが、全ての財産をロシアに置いてきた人も多かった。そして、亡命者の中で、内戦に参加した兵士もおり、国境を越えるため、列車ではなく、人生を危険に晒しながら、歩いてきた人も多かった。

[497] Ильина Н., 同上、53 頁。

そこから分かるように、満洲に辿り着いた多くの「白系」ロシア人の中で、精神的なダメージを受けた人は少なくはなかった。「白系」ロシア人は、回想記を通じて、満洲における人生の成り行きの記述を取り上げ、自分の精神的状態にも触れている。

「赤系」ロシア人の満洲への移住の過程は、「白系」ロシア人と異なり、通常の方法で行われたが、「赤系」ロシア人の生活においても、満州国の政治的、文化的状況の特徴の影響により、様々な問題が発生したため、「赤系」ロシア人の精神状態の分析をも検討に入れる。

満洲における「白系」亡命ロシア人の回想記を検討する際、著者によって記述された、次のような精神的な問題を取り上げる。

5.2.1. 不安感

ロシアから異国に逃げた「白系」ロシア人にとっては、国境を越える時期、そして異国に辿り着いた最初の時期は、回想記において特に強調されており、第一に先の見えない将来に対する恐怖感が連想されている。

多くの亡命ロシア人は、ロシアから中国への移住の場面を詳細に記述している。ロシアの西方面から出発したロシア人は、数日間続いた大変な旅を体験した。

I.セレブレ二コフ（1882 - 1953 年）は、妻と一緒に 1920 年にハルビンに移住する。ロシアから中国に列車で移動した時、次のようなことについて考えていた:

> 去りゆく故郷に対する悲しい思い。ここに残った親戚と親しい人を心配する気持ち。未来は完全に不明。そして、それよりも、「ロシアはどうなるか」という思いが、付きまとい、私を苦しめた。[498]

「不安感」を表現する言葉がもう一つの場面で見られた。I.セレブレ二コフの家族が乗っていた列車が満洲の国境を越えた時点、中東鉄道におけるストライキに関する噂が広まり、鉄道の管理は中国側に移行される恐れがあるという心配があった。そのような状態になれば、満洲におけるロシア人の立場も弱まると思った I.セレブレ二コフは、改めて恐怖感に襲われている：

> 状態の曖昧さは、改めて私に、ある程度の心配する気持ちを持たせた。[499]

---

[498] Серебренников И., 同上、83 頁。
[499] Серебренников И., 同上、125 頁。

N.イルイナが回想するように、1920 年から 1927 年の間は、家族は安定した生活を送っていた。しかし、ハルビンに辿り着いた最初の時期に、仕事を見つけるため、両親は多大な努力をし、朝から晩まで街を奔走していた。もちろん、職を得た両親の心配はこの時点で終わらず、1927 年に両親が離婚したため、家族の負担は、母一人で担うようになる。お金の問題と、それに伴う無数の引っ越し、及び家賃、洗濯代、ご飯代の負債は毎年増加するばかりである。家族 3 人とも（エカテリーナという母、オリガとナタリヤという二人の娘）回想記に記していた。そして、家族が貧窮に陥った時代を回想する際、3 人とも、失望に近い精神状態を記述している。

5.2.2. 「心理学的双対性」の問題： 自欺傾向のある「白系」ロシア人

本項で言及したように、ロシア革命の後に、全世界に離散した「白系」亡命ロシア人の心理的状態を、「心理的双対性」[500]として定義でき、「白系」ロシア人は、現実的世界から空想の世界に逃避したかのような状態だった。「自欺」という考え方の特徴は、「心理的双対性」の一種であると思われる。「白系」ロシア人は、ソ連の制度の立場は弱く、時間が経ってから、崩壊すると、強く信じていた。

I.セレブレ二コフが回想するように、内戦でロシア「白軍」を支援したチェコの軍隊は、著者の家族に、ヨーロッパへの逃亡の支援を提供したが、著者は「まだ、シベリアに近い中国に留まっておく」ことを選択する。著者が記したように、「ソ連政府の時期はそんなに長くならないかも知れない（略）ので、長い間、異国の地をさ迷うことが避けられる」。[501]それ以外の多くのロシア人亡命者と同じように、著者はいつか故郷へ戻ることを期待していた。

このように、「白系」亡命ロシア人の主な「心理的な姿勢」は、「私たちが故郷に戻る時（略）」というアイディアであり、亡命者の中で、時間が経ってから、全員が故郷に帰国でき、その時から幸せな生活が始まると思っていた人が多かった。[502]

N.フルスタリョヴァが示すように、「白系」ロシア人は、異文化環境の中に居ながらも、原住民の侮辱的な態度、経済的問題、異文化への適応の問題などを、それ程痛ましく受け止めず、当時の「偽装」の現実を、将来、ロシアで始まる「本当」の現実に劣っているものとして受け止めていた。[503]

---

[500]「心理学的双対性」というのは、個人が滞在している国の社会ストラクチャにおける個人の現実的立場と、その立場について、個人と個人の周辺社会の理想の間にあるギャップというものである。（N.フルスタリョヴァ、同上、72 頁）
[501] Серебренников И., 同上、124 頁。
[502] Хрусталева Н., 同上、73 頁。
[503] Хрусталева Н., 同上、74 頁。

5.2.3. パーソナリティ障害：　胸においては「穴」があるような感覚

N.フルスタリョヴァによれば、異文化環境の中で生きている個人は、同時に起こる経済的状況の悪化と社会的立場の不安定性、家族における問題に耐えられなければ、個人のアイデンティティにもダメージを受け、足元の土台が無くなったかような感覚が発生しうる。このような状態における個人は、頻繁に「一体、私は何であるのか」という質問を繰り返し、時間と運命を操ることができないと考える。[504]

N.イルイナは、大学入学後に、英語の家庭教師としての仕事をしながら、経済的問題がある家族をサポートした。回想記の一つのエピソードで、英語のプライベートレッスンをする場所へ向かった時に、何を感じたかを記述している：

> 私は多くの都市に住んだことがあるが、（略）ハルビンと同じく、それほど強い失望、行き詰まったかのような気持ちと哀愁を感じさせた町は一つもなかった。
>
> 私は 18 才。（略）私はレッスンをする「プリスタ二」街へ向かっている。（略）トラムを出て、いくつかのブロックを歩いて通らないといけない。（略）突然、私は止まって、スンガリー川へ走って行って、溺れようかと思うほどの哀愁に襲われた。因みに、私は（略）陽気な人間だった。恐らく、人生には基盤がなかったり、何が欲しいか、どの目標に向かうか、何を信じるか、何を好むかわからなかったため、そのような哀愁の発作が起こった。[505]

回想記が示しているように、このような「足元の土台」を失うかのような状態は、特に女性特有の問題であった。

5.2.4.　人生が停滞したかのような感覚

イミグレーションの状態においては、経済的な安定の必要性は特にあり、この役割は、「衣食住」の分野に限らず、移民者の人生を充実させる手段である本、雑誌、自分の趣味に関係する物の購入にも不可欠である。[506]例えば、経済的貧窮の問題により、孤独生活を送る女性は自分の人生が停滞したかのような感情を抱くことがある。

N.イルイナの母の E.ヴォエイコヴァーイルイナが、ロシアに戻った母（ナタリアの祖母）に宛てた手紙の中に、自分の状況を以下のように記述している:

---

[504] Хрусталева Н., 同上、196-203 頁。
[505] Ильина Н., 同上、53 頁。
[506] Забияко А.Эфендиева Г., 同上、46 - 72 頁。

滞納の理由で、(取り寄せた) 新聞の発送は中断させられた。痛い程、涙が出る程、くやしい！かんかん照る太陽、埃を散らす風、頭痛。(略) 各イベントを訪問する趣味も変わった。(略) 従来より長い時間を家で過ごすようになった。

17 時頃に、私と同じく、金詰りと疲労により絶望的な状態にいる B. (略語された友達の名前) を訪問したい。(略) 朝から疲れて、心臓も痛くて、足も痛くて、改めて『惨めなもの』エカテリーナを見捨てた恋人の侮辱的な呼び方) との別れの時代と同じくへとへとに疲れるようになった。[507]

E.ヴォエイコヴァーイルイナは、忙しくて大変な亡命生活からの休む方法としては、特別の部屋を借りて、そこで深夜を過ごすことを始めた。しかし、この家賃は、家族にとって大きい負担であったため、経済的問題が発生した時期に、部屋をレンタルすることも不可能である。このように、E.ヴォエイコヴァーイルイナ、自分の精神を癒すものを喪失する。

とても気分が悪い。両方の部屋の家賃をまだ支払っていない。もうすぐ部屋[508]の運命ははっきりとなるが、職場にとどまるため、特に気をとめず何もしなかった。疲れた。状態の曖昧さが私を苦しめる。最近本をたくさん読んでいる。そして、勇気を失う。好ましくない状態。[509]

上記の例が示しているように、自分の人生が停滞したかのようなことを感じていたロシア人は、社会生活への関心と、活発な生活を送るための精力を失い、回り世界から孤立して生きていた。

5. 2.5. 満洲における孤独感

5.2.5.1. 女性の孤独

ハルビンで活動したロシア人の詩人の作品を研究した、G. エフェンディエヴァが書いたように、「遠い中国では、立派な家や家族を持つことができる者はごくわずかだった。表現できない程大変な (略) 満洲への旅行を決めた多くのロシア人女性の一つだけの夢といえば、快適な家と幸せな家族を持つことが示される。(略) 男性が直面した問題に比較すれば、

[507] Воейкова - Ильина Е., 同上、21 頁。
[508] 著者の職場。ここで、自分の解雇の予測について書いている。
[509] Воейкова - Ильина Е., 同上、75 頁。

女性にとって、適応のプロセスはもっと苦しかった。母としての社会的役割を果たすことができなかった女性たちは、今後の人生には、もう意味を見出せなかった」。[510]

I.セレブレ二コフは、ロシアのオムスクに住んでいた時に知り合った陸軍将官の妻と、偶然ハルビンで会った時に、イミグレーションの苦労により、どれほど女性の外見が変わっていってしまったかについて回想記に記した:

> 従来、自信があり、綺麗だった女性は、今、神経質者特有の暗い表情と肩が落ちた姿勢の、女性に変わってしまった。[511]

G.エフェンディアヴァは、「孤独が、老年の貧窮と病気よりも恐怖に脅えさせるものである」と書いた。[512]歴史家の I.カプランによれば、ハルビンに居住し、高等教育を受けた若いロシア人女性の中での自殺の件数はとても多かった。E.ヴォエイコヴァも、主人との離婚後に、老年の孤独を恐れていた。離婚の手続きを進めていた時に E.ヴォエイコヴァは以下のような手紙を書いた：

> 正直に言えば、娘たちにとって、私の存在がどれほど重要であるかということを意識しなかったら、イオシフ（主人の名前）とキストルッスカヤ（主人の二人目の妻）が関わっていた出来事が爆発で終わったかも知れない。[513]自殺に近かい程の失望感があった。（略）孤独というのは、どのようなことかと分かるようになった。家族は破壊された。誰もいない。(略) とても大変！完全な貧困、完全に不安定な未来。[514]

そして、E.ヴォエイコヴァの二人の娘たちが大人になった時、職場を探すため、ハルビンから中国以外の町への引っ越しの計画を立て始めた。E.ヴォエイコヴァの日記から分かるように、孤独な生活が待っているのは、エカテリーナにとって恐ろしいことであった：

> 娘たちはいつか私の元を去る。気力を失せさせる孤独感は、将来もっと強くなるだろう。きれいな生活、芸術、知性を持つ人、面白い談話、全ては消えてしまっ

---

[510] Забияко А., Эфендиева Г., 同上、193 頁。
[511] Серебренников И., 同上、32 頁。
[512] Забияко А., Эфендиева Г., 同上、46－73 頁。
[513] ここでは、G. エフェンディアヴァは、主人がキストルッスカヤという女性のため、自分の妻と家族を去る事件について記している。
[514] Воейкова-Ильина Е., 同上、54 頁。

た。将来、糧を得るための闘い、老年、孤独さ。つまり、私が体験したすべてのさ迷い、日常の「嵐」の後に、45 才になり、素晴らしい失敗にたどり着いた：孤独、孤独、孤独！[515]

このことから、ハルビンにおけるロシア人の人数の多さ、そして劇場やカフェーなどのような人が交流できるところには、人工的に再現されたロシア風の社会組織モデルがあったにもかかわらず、女性の孤独のような問題は残っていた。

ロシア人男性の回想記には、独身生活に関する不安感についての言及はない。つまり、ロシア人女性が、孤独な将来を恐れていた理由としては、イミグレーションの状態の中で存在していたことだけではなく、家族なしで、自分の人生も意味を失うという考え方は、女性特有のものであった、ということも挙げられる。

5.2.5.2. 子供の孤独

E.ヴォエイコヴァの下娘のオリガ[516]も、中学校で勉強した時、孤独を体験した。お金稼ぎのため一日中街を駆け回っていた母と、友達の所に一日を過ごした姉は、夜まで不在だったため、オリガは以下のような回想を残した:

子供の頃から体験した孤独は、私を悩ませた。家族の暖かい雰囲気が感じられた友達の家を訪れた時、その気持ちはさらに強まった。私は母を咎めていない。彼女はいつも非常に忙しかった。日常的な困難は、優しさを持つための所を埋める。私は、それがなくても済ませられるようになった。[517]

N.モクリンスカヤは、幼い頃に、母と妹と一緒にハルビンに「亡命」してきた。最初の時期には、家族は極端な困窮生活を送っていたが、時間が経ってから母は、仕事に就職でき、恋人も見つかり、生活は安定化してきたような感じだった。しかし、時間が経ってから、母の振る舞いが、変化しつづけ、最終的に母は、家庭内の仕事と二人の娘の面倒を見ることを完全に辞めてしまう。N. モクリンスカヤは当時について、母に放棄されていたかのような気持ちを抱いていた、と回想している。N.モクリンスカヤの不安感をさらに強めた出来事としては、夜に泣いている母の姿を頻繁に眺めることが挙げられている。[518]

---

[515] Ильина Н., 同上、41 頁。
[516] オリガ・イルイナ・ライリー北京、上海、インドシナ、イギリスと、最後にフランスに居住した。インドシナに住んでいたとき、フランス人の海軍将校と結婚して、フランスへ移住する。
[517] Ильина - Лаиль О., 同上、52 頁。
[518] Мокринская Н., 同上、100-122 頁。

前に挙げられたオリガの例と異なり、N.モクリンスカヤは、自分の妹と一緒に体験した孤独感については、「物質的」な意味に限らず、自分の母に愛されていない、という、「精神的な」孤独感もあったかのように、記述している。そして、著者の母については、イミグレーション生活の困難性に耐えられなかった人間のタイプでとしても見ることができる、と思われる。

ここでは、中学生であったオリガ・イルイナと、若い女性のラリッサ・アンデルセンの回想記及び、大人になった二人の女性の母のエカテリーナ・イルイナの手紙と日記を検討してきた。様々な年齢の女性たち 3 人とも、同じような恐怖を告白する：孤独或いは孤独な生活が待ち構えている。

5.2.6. 貧困の問題：恥、自尊心の侮辱

前章で述べたように、満洲におけるロシア系ディアスポラにおいては、地位的ヒエラルキー、貧富の差という問題が存在し、経済的困窮状態に陥ったロシア人は、自分の立場の低さを強く感じていた。

前章で述べたように、E.ヴォエイコヴァが、主人と離婚した後、一人で家族全員を養わなければならなかった。貴族特有の自尊心を失うことを恐れたので、お金を借りた時、違和感を抱いていた。その気持ちを、母に宛てられた手紙に表現している:

> 私は会計係にお金をねだった。しかし、彼が持っていないなら、要求できない。たぶん、とても弱く要求するだろうし、支援には欠かせないような外見もあるかも知れない。恐らく、貧乏なふりをしないといけない。姫のようにふるまうことをしない方がいい。しかし、メイドまで堕落しないだろうか心配する。[519]

エカテリーナの娘のナタリヤが回想するように、服と食事のお金を節約した母は、とにかく、娘たちがハルビンの最良の学校で学べるように努力していた。下娘のオリガは青年キリスト組合によって開かれた市立学校で学んでいた。その他の学校と同じく、オリガの学校においても、制服を着ることが義務づけられていた。「借金をこしらえた」エカテリーナにとっては、学校の制服を買うことが大きな問題であった。その関係で、オリガ・イルイナは次のエピソードを回想している:

---

[519] Ильина Н., 同上、53 頁。

当時[520]（略）の学校の制服:冬の時、青い毛織物のドレスを、平日は黒く、祭りと教会の訪問の際は白いエプロンと一緒に着なければならなかった。春の時、女性たちは、青い襞の付いたスカート、白いブラウズに青いネクタイをつけていた。それは、私にとって、悪夢のようだった:母はそのような経費を負担できなかった。ただでさえ授業料を払うのに精一杯だった。そして、私の背が伸びていたため、毎年新しい制服を買わなければならなかった。春のある日、女性たちみんな、既に青いスカートと白いブラウズを着ていたが、私一人だけ冬の服を着続けていた。クラス担任の先生は、私に近づいて、「オリガ、もし明日、春の制服を着て来なければ、もう学校に来なくていい」と言った。私の一つだけのスカートは、洗濯屋にあって、母はお金を持ってなかったため、それを取りに行くことができなかった。（略）私は侮辱の対象となったため、その日を長い間忘れることができなかった。[521]

貧困の理由で、社会の標準に対応できないことは、オリガ・イルイナの家族にとって大きな問題となった。

そして、オリガの母の、貴族特有の「高慢な性格」は、ハルビンに来てからも変わらなかった。ナタリヤが書いたように「母は他人を引き立てることが好きだった。反対せず、彼女の優越性を受け入れた人を好んだ」。[522]その理由で、エカテリーナは会計係にお金をねだった時、違和感を抱いていた。そして、彼女を毎日「侮辱した」家主、債権者のことを忘れるため、余計なお金がなかったにも関わらず、個別の部屋を借りて、ここで毎晩こもっていた。

「白系」ロシア人がイミグレーション状態ので「恥」を覚えていた理由としては、二つを挙げられる。一つは、自分自身が属する社会グループに相当しないことである。この問題は、満洲における「白系」ロシア人社会においては、貧富の差が著しかった、という社会的問題に由来するものである。二つ目は、「白系」ロシア人は、生き残るために必然的な行為とも言われる、貴族としてのプライドを抑えることができなかったという、個人的な問題を挙げられる。

5.2.7. 親子の対立

本章で既に述べたように、満洲における「第二世代」のロシア人の中には、満洲で生まれた人と、幼い頃にロシアを去った人が多かった。「ハルビンの子」ともいわれたそのロシア人たちは、ハルビンでロシアの教育、ロシアの文学等を通じてロシアの歴史と文化を学ぶこ

[520] 1931 年。
[521] Ильина - Лаиль О., 同上、53 頁。
[522] Ильина Н., 同上、57 頁。

とが出来たが、「本当のロシア」についての知識は薄かった。1920 年代から 1940 年代にかけてのハルビンには、多くの民族、宗教、政治的イデオロギーが混在していたため、ロシア人の若者たちが「迷ってしまわないか」という恐れが、老年世代の中に広がっていた。ハルビンで活動した詩人、文学者などはその問題を取り上げた。例えば、記者、詩人の A. ネスメロフの詩には「私たちが死んだ後、フランスと、アメリカ、中国は青年を山分ける」。[523] というフレーズがある。

1920 年代に、E.ヴォエイコヴァの母も、ハルビンで家族と一緒に居住していたが、ソ連に帰国してから、エカテリーナに無数の手紙を書いて、その手紙で若い世代の将来に関する自分の心配を表していた：

> 私はいつもあなたと女性たち（孫娘）について考えている。故郷を持つことが出来ないということは現代の若者にとって、本当の喪失である。それは、悲惨的に終わらないとしても、必然的に人生に対する、気合が入らず、シニカルな態度が育成させる。若い人は、故郷に関する認識を形成しなかったら、全世界と運命を繋ぐことが大変にはならないだろうか？（略）「故郷」という具体的なことと健康的な関係がないと、人生は意味を失う。[524]

母が死亡した後、V.スロボッチコフは母の日記を整理して、「ロシアの貴族である－私の息子たちへ」という題名のメッセージを見つけた。母が残したメッセージの中に、息子たちが「母国を裏切らない」ことと「祖先を偲ぶ」[525]ようにという願いが記されていた。

亡命ロシア人の老年世代は、子供と孫が「帝国ロシア」に対する愛国心を受け継ぐことを希望した。しかし、ナタリヤの例が証明するように、貴族出身者の中でも、ソビエト・ロシアを信じるようになったロシア人もいた。

N.イルイナは、1935 年、中東鉄道の経営権が日本側に引き渡された後、中東鉄道から解雇されたロシア人が大量的ソ連への移住した事を回想し、当時は、その移住者に加入する強い希望が生まれ、満洲に残ることを決めた母を強く批判したことについて回想している。[526] 満州で生まれ育ったロシア人の中には、満洲における生活について、意義も見通しもないものと考えており、ソ連が、せめてもの故郷であるため、ソ連へ移住した方がましだ、と考え

---

[523] Несмелов А. (2006) Собрание сочинений в двух томах. - Владивосток, Альманах Рубеж. С. 47.
[524] Ильина Н., 同上、56 頁。
[525] Слободчиков В., 同上.、21 頁。
[526] Ильина Н., 同上、18 頁。

ていた人が存在した。1930 年代のソ連国内における国民の大量的レプレーションに関する真実を知ったのは、時間がだいぶ過ぎてからの頃である。

生田が示したように、「ソ連人との共存生活とは、世代を追うごとに（略）反共・反ソ感情を薄めていった」。[527] そしてドイツとロシアとの戦争によって、ソ連に対して極度の嫌悪感を抱かされた多くのロシア人にも影響を与え、ロシアに対する彼らの態度を変えさせた。

5.2.8. 人生における意味、意義を探すこと

第 2 章で既に示したように、1930 年代にハルビンにおいて、無職、インフレーションの問題が深刻化する。多くのロシア人は、生き残るため、どのような仕事も否応なく受け入れた。

1930 年代に、N. イルイナは大学に入学して、貧困に陥った家族を支援するため、「妙な癖を持っていた」初老のユダヤ人が書いたハリウッド向けのシナリオを翻訳するようになった。ナタリヤが以下のように回想している:

> （ハリウッドからの）返事は一つもなかった！しかし、仕事の明らかな無意味さにがっかりしたわけではなかった。(略)なぜなら、当時、私の人生自体にも意味がないと思われたからである。[528]

I.アブロシモフは、1929 年に関する記述をする時、中ソ軍隊の衝突について回想している。その事件の影響により、大豆を販売する会社が継父の給料を減少させた。その理由で、著者の母と継父の間に喧嘩が増え、不安感により継父の外見も変わってしまう。アブロシモフがその様子を記述している:

> 継父はめっきり老け、禿げた。禿げていることが目につかないように、じっくりと、頭を剃るようになった。(略) 昼食後睡眠が足りていたので、ヴァシリイ・セルゲエヴィッチ[529]は、部屋着を着て、肘掛け椅子に座って、「さあ、もう一度探そう。ひょっとしたら、見つかるかもしれない？」と言いながらソロヴィヨフ或いはベルジャーエフ[530]の本を読み始めた。ある時、「何を探してるのか」と彼に聞いた。「(略) 人生の意味を探すん

---

[527] 生田美智子「多文化空間における亡命ロシア人の民族・文化的アイデンティティーハルビンの場合」、52 頁
[528] Ильина Н., 同上、81 頁。
[529] 継父の名前である。
[530] ウラジーミル・ソロヴィヨフ（1853 - 1900）、ニコライ・ベルジャーエフ（1874 - 1948）、ロシアの思想家、哲学者である。

だよ」と答えた。[531]

G.エフェンディアヴァが書いたように、ロシア人に迫る精神的危機が拡大するようになった時代、様々な形を取る神秘主義が流行っていた。降神術や占いを行い、また神智学を取り入れるロシア人が多かった。V. スロボチコフの母は神智学に興味を抱いていた。[532]『チュラエフカ』詩朗読サロンにおいても神智学を巡る議論が行われた。研究者によれば、そのような方法を使って、ロシア人は人生の意味を探していたという。[533]

5.2.9. 失望感

I. セレブレ二コフは『私の回想』において、ロシアでシベリア地方研究家として有名だったN. コジミンという知り合いについて言及している。著者は「白系」運動に対するコジミンの嫌悪感に注目している。ロシアに住んでいた時、コジミンは『社会革命運動』を支持したが、ハルビンに移住してからボリシェビキの新聞に記者として、また秘書[534]として就職した。そのようなコジミンの行為は、著者を驚かせた。I. セレブレ二コフが記している:

> 一体、どの理由で教育と文化の最高のレベルのコジミンが、ボリシェビキのために働くようにまでなるほど自尊心を失ったのだろうか？[535]

コジミンの個人生活を目撃した著者は次のような結論に辿り着いた：

> 最後の数年間で彼が体験した様々な苦労の影響により、彼が「白系運動」に対する嫌悪感を抱くようになり、反対派の「軍営」の善意を信じるようになった。[536]

コジミンの精神状態をI.セレブレ二コフは以下のように評価している：

> 当時[537]のハルビンに居住していたコジミンは極端に意気消沈しており、精神的に本当に悩んでいた。[538]

---

[531] Абросимов И., 同上、287 頁。
[532] Слободчиков В., 同上、177 頁。
[533] Забияко А., Эфендиева Г. 同上、175 - 194 頁。
[534] 新聞におけるコジミンの具体的なポストについては、著者は覚えていない。
[535] Серебренников И., 同上、47 頁。
[536] Серебренников И., 同上、47 頁。
[537] ここでは、1920 年代のハルビンを意味する。
[538] Серебренников И., 同上、49 頁。

回想記に挙げられたコジミンの事例が示すように、「歴史的なトラウマ」を受けたロシア人の中には、自分で理想化されたことについて、それが信じられなくなり、「競争相手」側を取った人がいた。

5.2.10. 時間の特別な感覚:「過去に生き続ける」こと

N.フルスタリョヴァによれば、「過去」に生きることは、移民者の認識の特徴であり、多くの「白系」ロシア人は、異国で自分の元の立場を失ったにも関わらず、自分のアイデンティティをその前の立場と同じとみなした。N.フルスタリョヴァは、このような状態を、「移民者の二重人格状態」として定義し、従来、貴族、位の高い軍人だった「白系」ロシア人は、イミグレーションの状況で、レベルの低い仕事をしながらも、社会のエリートである属性について忘れていなかった。[539]例えば、元の貴族のアナスタシヤは、住宅のメイドの立場において、仕事を任されるごとに、その仕事に対する嫌悪感を隠せなかった。[540]

N. イルイナは、中学性時代に、『ブリンナー＆Ｃｏ』という満洲における最大の運搬業の社長の妻である、E.コルナコーヴァ（1895 - 1956）と知り合った。エカテリーナはモスクワの芸術座において女優として成功し、キャリアを得たが、B. ブリンナと結婚してから、ハルビンへ移住する。ハルビンには、エカテリーナが「退屈」しないように、主人が学校における演劇スタジオを開くことを支援した。エカテリーナは、ロシア人の学生に演技を教えたり、彼らが参加した演劇を上演したりした。N. イルイナもスタジオのメンバーとなって、エカテリーナとも親しい関係であった。

N. イルイナの回想記には、エカテリーナが、イミグレーションの状況に適応できなかった「不幸な」人物として描かれている。実業家の妻として、上流社会の生活様式をすることについてエカテリーナは関心を寄せていなかった。ナタリヤが教えていた英語のクラスも成果がなかった。「彼女の人生は他の人生にすり替えられた。その新しい人生に彼女は全く適応できなかった。（略）女優。それ以外の特技を持っていなかった。そして、それを取得することも望まなかった」。[541]

コルナコヴァは、モスクワにおける劇場生活のニュースをロシアから取り寄せた雑誌で調べた。そのニュースへのコルナコヴァの反応を、ナタリヤは以下のように記述している：

彼女は演劇の批判記事を読んだ時、そこに載せられていた写真の中にモスクワ時

[539] Хрусталева Н., 同上、54 - 84 頁。
[540] Абросимов И., 同上、79、110 頁。
[541] Ильина Н., 同上、31 頁。

代の友達を見つけた。モスクワにおける演劇生活が、彼女が参加していなくても、続いていることを理解した。彼女はそのアパートメントが退屈で悩んでいるが、そこで新しいせりふがリハーサルされたり、フット・ライトが輝いたり、彼女を一つのヒントで理解した（略）友達が集合するが、ここで「彼女の言語」で話す人は一人もいない。（略）何のため彼女はここにいるのか？何をここでしているのだろうか？[542]

日記で過去のことについて考察したV. スロボッチコフの母は、「歴史的出来事の影響によりショックを受けた」ロシア人の事例である。幸せな「帝国ロシア」についてのノスタルジアとロシアの運命に対する不安な気持ちは、ハルビンに居住していたロシア人の中に浸透していた。

小さいハルビンにおいては「自己能力を発揮する」ための機会が少なかったため、モスクワの芸術座の女優、E. コルナコヴァは、「退屈」で悩んでいた。エカテリーナは、外国語と演技以外の活動に関心を持っておらず、イミグレーションの状況に適応するための必要な能力を持っていない人として定義される事例である。

1917年の革命は、「白系」ロシア人にとって精神的なトラウマとなり、満州に逃亡した多くのロシア人は、ロシア革命と内戦が開始した理由、そしてその歴史的な意義、それを防ぐために彼らに何ができたのかについて、考えることを辞めなかった。この場合、過去を分析することは、状況の変化を受け止めるための助けとなった。

V. スロボッチコフの母のA.アレクサンドロヴナは、ハルビンに移住した後も、日記を書き続けた。スロボッチコフが回想するように、日記で母はロシアにおける過去の出来事について、自分の考察をメモしていた。日記においては、革命に対する態度、共産主義の理念の批判、民主主義の本質、国家における自民の役割または、神智学、故郷に対するロシア人の義務などについて書かれていた。その全ての考察は過去のことに関係する。V. スロボッチコフは、母[543]の日記から以下の断片を取り上げた:

私の世代は、悲劇に溢れた人生を送っていた。戦争と革命が、自宅遠くに発生する時、人は構いませんが、その革命は、私たちの家を襲った。私は家を手放して、自分の人生と子供（略）を守るため、逃げなければならなかった。

（略）

---

[542] Ильина Н., 同上、32頁。

[543] スロボッチコヴァ・アンナ・アレクサンドロヴナ（1880 - ？）、ヴェデニャピ二という古い貴族の出身者である。サラトフ市で、フィ二ッシング・スクールを卒業する。

私の愛国無罪の人民の虐殺である射殺、流れている血に慣れることが出来ない、慣れたくない。[544]

このように、長い年月をかけて形成されたロシア風の雰囲気、ロシア文化の優先的な立場という、ロシア人の移民者にとって重要なハルビン市の利点が存在したにも関わらず、多くのロシア人は、快適さを感じておらず、様々な理由により、極端な場合、失望に近い不安感、孤独感、不満などのようなネガティブなエモーションをずっと感じていた。

5.3. 1945 年以降：ソ連軍により満洲占領期、ロシア系ディアスポラの解散プロセスの活発化

前章で述べたよう、1945 年に満洲に侵攻するソ連兵の到来は、満洲における多くの「白系」ロシア人の人生を激変させた。「白系」ロシア人は、ロシアがドイツとの戦争に勝ったことについて、非常に幸せに思い、ソ連制度に対して持っていた嫌悪感を忘れ、ロシアの属性を強く感じていた。多くの「白系」ロシア人はソ連軍の到来を大歓迎し、ソ連兵を「兄弟」のように見ていた。ソ連兵が、「白系」亡命ロシア人に対し、大量に逮捕、家宅捜索、訴訟提起などを始めたため、「白系」亡命ロシア人の期待を裏切ったかのような感覚だった。

1945 年とそれ以降の時期を回想する「白系」亡命ロシア人は、当時の自分の精神状態における変更のプロセスを次のように記述している：

5.3.1. 素朴な考え方、歴史的教訓を無視することに関する後悔

本項で言及したように、満洲に侵攻するソ連兵は「白系」亡命ロシア人の期待を裏切り、「白系」ロシア人に対し、訴追活動を開始しただけに限らず、財産の没収、暴行行為などのような「罰」も行っていた。当時の状態を分析した E.ラチンスカヤは、「白系」ロシア人に対し、警戒を怠ったことを批判し、ソ連兵が信頼に値しないものである理由として、1929 年に起こった中華民国とソビエト連邦の間の紛争を取り上げている。当時、ソ連の軍隊が中ソ国境に近寄り、国境を無法に渡ったソ連兵のある小さなグループは、複数のコサック村を崩壊し、この住民の住宅を略奪し、殺人行為をもした。そして、1929 年に、中華民国軍とソ連軍の間に本格的な紛争が起こり、全焼された村と死者、負傷者、そして財産を失うロシア人の数が、数百人にまで至った。[545]E.ラチンスカヤは、この歴史的事実を取り上げ、「一体、どうしてこれを忘れて、自分の空想によってソ連人のイメージを創造したのか」という

[544] Слободчиков В., 同上、166 頁。
[545] Рачинская Е., 同上、47 頁。

疑問を提起している。著者の意見によれば、もし「白系」ロシア人は事前に出来事の発展を考えることが可能であれば、南の方へ避難し、中国人の群衆の中で自己を隠すことが出来たと思っていた。[546]

ソ連兵に関する、自分の素朴な思いの犠牲者の例としては、ソ連の懲役 10 年という罰を受けた記者の N.シャピロが挙げられる。N.シャピロは、第二次世界大戦の時期に、反ソ連の記事を執筆しなかったことを、有罪の重さを和らげるファクターとして見ていた。

5.3.2. 喪失感の痛み

ソ連兵により「白系」ロシア人の無数の逮捕は、家族の分裂の悲劇を伴った。E.ラチンスカヤは、ソ連兵により連行された親戚を失った知り合いを持ち、彼らの悲劇を目撃したことがある。例として、友人のリーダを取り上げている。リーダの主人が、ソ連軍によって逮捕された時、外見が変わってしまう程、主人の今後の運命を心配していた：

> いつもメイクを怠らず、きちんと身なりを整えていたリーダは、エレガントで魅力的な女性であった。しかし、弦が張り詰めるような緊張が我慢の限界に達し、その精神状態は、彼女の外見がまるで十年の歳月を経たような変化をもたらし、本人と見分けがつかないほどだった。[547]

リーダの精神状態を、それより一層悪化させたのは、ソ連の官僚の無関心な態度、露骨な嫌悪感というファクターである。それにも関わらず、逮捕された親戚を支援したかった「白系」ロシア人は、小包の渡し方、会うこと、ソ連への連行の日に見送る方法を考えていた。[548]

この状態に陥った「白系」ロシア人の精神的状態を悪化させたのは、自分の無権利状態、努力の無意味さの把握であった。

5.3.3. 人間関係における問題

満洲に侵攻したソ連兵が逮捕、略奪を始めた時期に、「白系」ロシア人は親しい人を守るため、自分の住宅を人と財産の隠れ場所として提供し、警察官から情報を隠し、様々な方法で相互支援を支持したが、E.ラチンスカヤが回想するように、「同僚」を裏切った「白系」ロシア人も存在した。例えば、ソ連兵により実施された盗難活動においては、ある「白系」

---

[546] 同上、47 頁。
[547] 同上、51 頁。
[548] 同上、52 頁。

ロシア人は、支持者としての役割を果たした。E.ラチンスカヤは、当時の状況を次ぎのように回想している：

> その事実を認めるのは、非常に恥ずかしいが、当時の私たちの街を覆った暗くて恐ろしい波の中で、何かの理由で、自分が安全な立場にいると思ったハルビンの原住民は、（ソ連兵の盗難活動で―著者）自分の利益を取り、情報提供としての役割を担って、新しく出来たソ連人の友人と一緒に酒宴に参加しながら、盗難物の中から自分のトロフィーを受けた。[549]

回想記の他のエピソードにおいては、E.ラチンスカヤは、ソ連兵により著者の隣人であった日本人の住宅の家宅捜査と盗難のシーンを取り上げ、その日本人の家族についての情報を与えたロシア人の学生を咎めている。このロシア人学生の目的としては、家宅捜査の機会を使用し、日本人の住宅から何かを盗むことであった。[550]

以上の例が示しているように、「白系」ロシア人の信頼を裏切ったものとしては、ソ連人ばかりでなく、「白系」ロシア人をも取上げられる。

5.3.4. 反ソ連的なイデオロギーを普及した記者の逮捕、尋問。精神的抑圧、処罰の不当性に関する後悔

ソ連兵は、ハルビンにおける「白系」ロシア人のマスコミの活動に対し、特別の関心を持ち、記者と編集者を逮捕し、新聞社と出版社の財産を没収し、崩壊させた。このように満州における「白系」ロシア人の文化遺産の撲滅を目指していた。満洲において逮捕された「白系」ロシア人の人数は、10 万人ぐらいだった。[551]

満洲において滞在していた多くの「白系」ロシア人の記者は、自分の記事で、ソ連の制度を批判することを恐れていなかった。1945 年に、記者に対して始まった訴追活動は、ソ連制度を中傷した人への復讐として見られていた。[552] 記者が、尋問を受けた際、記事で表現された自分の意見を拒否すること、自分を中傷者、ある場合、狂人であると受け止めることを求められたが、自分の活動の誠実性を信じており、警察に対抗した人もいた。N.シャピロは、反ソ的な内容を持つ記事を執筆した原因で逮捕された記者の一人である。

---

[549] Рачинская Е., 同上、55 頁。
[550] 同上、84 頁。
[551] 同上、45 頁。
[552] 同上、57 頁。

N.シャピロは、逮捕の時点から、15 時間まで続く無数の尋問を受け、反ソ的な活動をしたことについて、強く批判され、記事で表現された内容を拒否することを押し付けられた。N.シャピロは、自分が受けた尋問の様子を、次のように回想している：

> 私が受けた各尋問は、最終的に、私の信条、道徳的信念を守ること、私が記事で取り上げた事実の正当性を証明すること、中傷に関する非難に対抗することの形を取った。[553]

N.シャピロが特に守っていたアイディアは、「取調べ調書においては、私がソ連制度を中傷したということが強調されている。しかし、そんなことは一回も起こらなかった。中傷というのは、意図的な嘘であるが、私はいつも本当のことだけ書いていた」ということであった。[554]

N.シャピロは、警察により作成された取調べ調書においては、自分の反論、自分によって守られた事実が一つも言及されず、内容も非常に簡略化されたことに対し、失望感を抱き、自分への罰を、非常に不正なものとして見ていた。

回想記の多くの著者は、反ソ的な活動を行ったため、懲役刑を受けた「白系」ロシア人の記者、詩人、文学者の不幸な運命を悼んでいた。

5.3.5. 「白系」ロシア人の文化的遺産の崩壊：過去についての記憶の喪失

ソ連兵が目指したのは、「白系」ロシア人の刑罰に限らず、「白系」ロシア人の記者、文学者、詩人、学者などによって創造された知的、文学的、文化的財産の崩壊でもあった。ソ連人は、一方では、ソ連から、ロシアとドイツとの戦争を記述する本を大量的に満洲に輸入したが、それと同時に、ハルビンにある図書館を破壊し始めた。E.ラチンスカヤは、ある図書館の訪問を、次のように回想している：

> ある日、商業会館の図書館に入って、その豊富な図書の中のカタログを開いた際、自分の目を疑うような感じだった：全ては赤いインクに覆われていた。あるページは、殆どが引き抜けられ、(略)　著者名前を挙げる必要もない、そして、最後の数 10 年間活動したロシア人の公人、行政機関の職員の回想記について言うまでもない。それは全て、ゴミとして捨てられた。この後、この「有害な」本の山は、商業会館

[553] Шапиро О., 同上、27 頁。
[554] 同上、31 頁。

の前の庭で、（略）全焼された。[555]

このように、「白系」亡命ロシア人は親しい人を失うことに加え、「白系」ロシアイミグレーションの文化的遺産、自ら守ったロシア帝国の財産をも奪われた。

5.3.6. 樹立されたソ連社会における異分子としての立場

1946 年、ソ連兵は満洲を撤退し、行政の立場は、中国共産党が占めた。満洲に残った「白系」ロシア人は、ソ連の臨時的居住許可を発給されたが、ソ連側から特別の許可が出なければ、ソ連への帰国ができなかった。E.ラチンスカヤが回想するように、「白系」ロシア人は、権利も持たず、ソ連の領事館の方からの支援をも受けなかった。

N.ラチンスカヤによれば、ソ連人は、様々な方法で「白系」ロシア人の自尊心を損なわせることを目指した。ソ連人は「白系」ロシア人との付き合いを回避し、「白系」ロシア人と話すことに関心を示す「赤系」ロシア人は、一人もいなかった。N.ラチンスカヤは、当時を、次のように回想している：

> 劇場では、ソ連人は、その他の観客から「壁」によって隔離され、その壁は、「形而上」の壁ではなく、木材と鉄によって作られた、本当の壁だった。その後、彼らは、「白系」ロシア人によって通われた公的な場所を訪問することを完全にやめ、一般人の入場が禁止された総領事館のクラブで遊ぶようになった。（略）ソ連人の子供は、（略）特別のソ連の学校に通っていた。(略)ソ連人の「レディー」は（略）私たちに気づかなかったかのような、無視した態度を取った。私たちは、彼らにとって存在しなかった。[556]

時間が経ってから、「白系」ロシア人に対し、ソ連の総領事館の本館への入場も禁止され、必要な手続きを鉄道会館で開かれたオフィスにおいてするようになった。[557]

E.ラチンスカヤは、1946 年の満洲において、「白系」ロシア人に対し、「軽蔑体制」が成立されたと述べ、このような扱いを、「口汚くて、不快な」ものとして定義している。[558]

まとめとして

[555] Рачинская Е., 同上、59 頁。
[556] 同上、89 頁。
[557] 同上、89 頁。
[558] 同上、90 頁。

このように、ソ連兵の到来を予測しなかった「白系」ロシア人は、予防方法を考えなかっただけでなく、ソ連兵を歓迎していた。このことから、満洲における正当な情報が届かなかったという結論が出される。反ソ的な活動に従事した「白系」ロシア人の多数の逮捕は、大きい悲劇となったが、自分の行為の正当性を強く信じたロシア人が、予測可能であった悪い結果について考えなかったのは、うかつな考えを持つロシア民族の特徴であると思われる。

5.4. 心理的防衛の方法

次に、「白系」ロシア人が適用した心理的防衛方法を分析する。

心理的防衛とは、個人の精神を傷つける状況の客観的な見方を変えさせる、主として、無意識的なパーソナルな機能の一つである。N.フルスタリョヴァは、心理的防衛の主な機能としては、パーソナリティを障害するネガティブな心配から意識を守ることを挙げている。心理的な防衛はネガティブな面もあり、心配の本当の理由となった問題自体が解決されないまま残る。[559]

5.4.1. 団結性の維持

社会性の要求は、ロシア民族の性格の特徴であり、多種多様な愛好クラブにおいては、ロシア人は、意見交換、議論、遊び、創造活動などを通じて、自分の能力を発揮し、コミュニケーションの枠を拡大し、自己を隔離する際、更に悪化する精神的悩みを癒すこともできた。ハルビン市に居住していたロシア人は、同好の同士との団結性を保つため、全力を尽くした。このように、詩朗読サークル、文学愛好クラブなどが沢山現れた。E.ヴォエイコヴァは、自分の家に、詩人、作家、記者などを紹介し、文学の晩を開催した。そして、信仰際、コンサート、様々な社会的催しも、定期的に行われ、ロシア人民族の総合性を保ち、ロシア人の精神的サポートとして、大きな意義を持っていた。N.イルイナが回想するように、家族が困窮状態となった時、母を失望させる理由となったのは、食料品不足ということではなく、自宅において「古い幸せな時代特有の」詩、文学愛好家の集合会の開催の停止である。[560]

5.4.2. 地域的特徴の利益的扱い

前章で言及したように、ロシアの革命と内戦後には、満洲に辿り着いた「白系」ロシア人の中で、インテリ層が多く、I.セレブレニコフはその一人であった。満洲に到着してから、

---

[559] Хрусталева Н., 同上、175-180 頁。
[560] Ильина Н., 同上、14 頁。

最初に職場を探すことを目指したI.セレブレニコフは、満洲と中国に対し、学術的な関心を持つようになった。中国の地域を研究することが新しい目標となり、このように満洲における生活にも意義を与えた。I. セレブレニコフは、自分の選択について、次のような説明を取り上げている：

> この研究活動は、アジアに関する私の知識を深め、将来いつか、利息を与える予備の資本のようなものとなる、と思った。いつかロシアに戻れると信じて、そこで中国地域の専門的な知識が役に立つかもしれない。[561]

前述したように、ハルビンに到着したばかりのI.セレブレニコフは、最初に、将来に関する不安感にも襲われたことがあったが、時間が経ってから、自己発展の機会を探し始め、研究活動さえも試みた。趣味として見られていた地域の研究は結果をもたらし、パンフレットを出版することができた。このように、自分の活動において意義を見るようになったI.セレブレニコフは、中国の領域のさらに深い研究をするため、首都の北京に移住する。

5.4.3. 創造的活動

既に言及したように、満洲においては、多種多様な芸術的活動をするために必要な条件が形成されていた。教育機関においては、レベルの高い教員が勤務し、生徒も、特技を伸ばすための動機を持っていた。

1930－1940年代のハルビンにおいては、多くの女性の詩人が活躍し、その作品は、イミグレーションの状況において実現されなかった女性特有の夢についての考察、個人的悩みの表現方法であり、「白系」ロシア人のディアスポラの文化的遺産としても認められた。[562]

多くの移民者にとって、創造的活動は、専門と趣味以上の価値を持ち、人生において大変な時期を乗り越えるための、精神的なサポートとしての役割も果たしていた。

女性において、心理的緊張感を和らげる方法としては、自分の住宅にて文芸サロンを開催することであった。文芸サロンは、19世紀のロシア帝国時代の伝統に次ぐものであり、詩、文学などに対する卓越したセンスを持つ人々によって好まれた場所であった。

本章では既に述べたように、N.イルイナは、高校性だった頃に、女優の E.コルナコヴァによって指導された芸能学校に通い、コルナコヴァの友人となった。N.イルイナの家族においては、経済的問題がいつもあり、稼ぐ方法を探すことに家族全員悩まされ、緊張した雰

---

[561] Слободчиков В., 同上、48頁。
[562] Забияко А., Эфендиева Г., 同上、54頁。

囲気がいつも漂っていた。N.イルイナは、精神状態を和らげるため、将来のキャリアにおいて全く不要であった芸能学校で一生懸命練習し、E.コルナコヴァの住宅においてもプライベートなクラスを受けていた。[563]

多くのロシア人は、生き残ることと戦いながらも、自分の忙しい人生において、芸術の「つまらない」ことのために時間を沢山捧げていた。

5.4.4. 信仰告白、日記の執筆

ロシア人の女性にとって、大変な時期に、自分の悩みを言い尽くすことが必要だった。日記の執筆は、「白系」亡命ロシア人にとって、最もよく使用された心理的な防衛方法であった。E.ヴォエイコヴァ、A.スロボッチコヴァは、日記の執筆を通じて、自分の問題を、哲学的な視点から分析した。A.スロボッチコヴァの息子が回想するように、母の死後に、数十枚の厚いノートを見つけた。

教会の存在も支援的であり、神父は、相談に来る人を支援していた。

詩人で、ダンサーでもあったL. アンデルセンは、満洲における自分の孤独の問題に言及している。著者は、神父についての夢を見たが、ダンサーとしての自分の活動が神父に悪い印象を与えないかという心配を持っており、回想記においては「神父を訪問するとしたら、彼に何を言う？キャバレーのダンサーの心の悩み？」という思いを述べている。我慢できないほど気持ちが辛かった時、シャイな性格であったアンデルセンは、勇気を出して、「街で一番厳しい」神父を訪れることを決めた。そのエピソードをアンデルセンは、以下のように回想している：

> 神父さまの家に来て、自分の問題について話した。神父様は「若い女性にとって孤独はどれ程大変か理解できる」と言いながら、泣いていた私を慰めた。[564]

満州において存在した教会の牧師としての公使と一般の粋人との間に、信頼関係が築かれ、牧師は市民から個人的な心理相談を受けた。

5.4.5. 周り環境から自己を隔離すること、自己離脱

N.フルスタリョヴァによれば、個人は、周りの空間に様々な方法で対応でき、自己を変えることで周りの空間に入ること、もしくは、その反対にその周りの空間から隔離して、自己

---

[563] Ильина Н., 同上、30-35 頁。
[564] Андерсен Л., 同上、121 頁。

の殻を籠ることから選ばれるという。[565]

N. イルイナが回想するように、家族が余計なお金を持っていなかった時代に、母は、夜に「世間と離れる」ため、2階に別の部屋を借りていた[566]。娘たちは、それを「無鉄砲な行為」として見ていたが、大人になったナタリヤは、母の日記を読んだ時、母の行為を成人の目で見ることができた:

> それで、43 号の部屋で、母は過去を回想したり、読んだり、考察したり、(略) 文学派について自分の意見を書いたりした。(略) ここで彼女は本来の自分に戻ることができた。その部屋は、一日中、彼女を侮辱した家主、新聞社の会計係、質屋の職員、他人の生活に好奇心を隠さない隣人より、知性で一段、二段凌ぐことで思い出すことができた。(略) [567]

一方では、満州における「白系」ロシア人の女性は、孤独を恐れていたが、それと同時に、「本当の自分」に戻ること、一人で人生についての考察、創造的活動、勉強などのような活動のため、「個人的スペース」を求めていた。

5.4.6. 「自己の運命を甘受するしかない」という決意

正教の道徳を身に付けた「白系」ロシア人は、人生の困難に対する謙虚な態度を保ち、このような認識の特徴は、異文化環境の中で生き残るための技術を見出した。多くの回想記の著者は、「自分の精神的痛み」を受け止めることを目指した。

I.セレブレニコフは、1920 年代にハルビンに居住していた様々なロシア人と付き合うことで、多くの亡命ロシア人のムードが理解できた。それについて回想記には、以下のように書かれていた:

> 異郷で新しい生活を始めることが、どんなに大変なことであったかにも関わらず、運命を甘受することと、自分の宿命に対する心優しくて皮肉めいた態度が、まだ亡命ロシア人の中に生きていた。(略) 亡命者たちは、ハルビンまで辿り着いた後に、何とかしておとなしくなって、過去を回想したり、将来に対する何かの期待を抱いたりしながら、生活をし続けた。[568]

---

[565] Хрусталева Н., 同上、223 頁。
[566] ハルビンには、2 階建ての住宅に、ロシア人の家族が一つの部屋を借りることができた。その借家には、キッチンがなく、家主が、借家人が自分でご飯と夕食を作ってあげた。
[567] Ильина Н., 同上、53 頁。
[568] Серебренников　И., 同上、55 頁。

このような、困難に対する冷静な態度は、ロシア人の民族的特徴であったと思われる。

5.4.7. 「現実」からへ逃げる方法：信仰心

「白系」ロシア人は、信仰心の深い民族であり、正教に従うべきという伝統のある人が多かったが、祈ること、信仰告白をすることを、精神的癒しとした人も存在した。しかし、精神的なトラウマに悩むあるロシア人は、信仰を自分の人生における中心的なものとしたが、他者の目から見れば、狂信者としての印象を与えていた。具体的な例としては、詩人の L. エーシンが挙げられる。

ハルビンで活動したロシア人作家は、自分の作品において、現実に近い「ハルビンの亡命者」としての総合イメージを創造してみた。『成功的な表題』と『不思議なプレゼント』という作品において、A. ネスメロフは、ハルビンにおけるロシア人詩人の悲惨な運命を表現するため、有名な詩人の L.エーシンをプロトタイプとして使用した。

L.エーシンは『チュラエフカ』という詩朗読サロンの一員であって[569]、ハルビンにおいて、タレントとして恵まれた詩人として有名となった。エーシンの文学活動を検討した G. エフェンディアヴァはエーシンのスタイルの特徴を次のように記述している：「エーシンの詩が、それ以外のロシア人の「世俗の詩」と異なっている」[570] 。

ロシア内戦に参加したエーシンは英雄的に最も大変な戦争の事態を乗り越えた。エーシンは「白軍」の東への「悲惨な」撤退とグレート・シベリア・アイスマーチ[571]に参加した。しかし、そのような「試練」を乗り越えたＬ．エーシンは、33 歳で、病気と極端な貧窮で人生を終わらせることになった。

G.エフェンディアヴァは、「エーシンが、詩で自分のことを「孤独な」、「ホームレス」、「悲しい」、「ふさぎ込んだ」、「しいたげられた」として定義する」と述べている。ハルビンに到着してから、エーシンの信仰心は極端なレベルまで高まった。A. ネスメロフが回想するように、「エーシンは、信心深い人物だった。彼は祈ることができた。神を感じることもできた。」[572]N. ペテレッツは、「エーシンの信心の熱狂性」について書いており、救世主の肖像

---

[569] レオニッド・エーシン（1897 - 1930）詩人である。ロシア内戦で准尉として参加した。ウラジオストクで記者として働き、現役も続けた。（Хисамутдинов А., 同上、121 頁。）

[570] Забияко А., Эфендиева Г., 同上、200 頁。

[571] グレート・シベリア・アイスマーチ（1920 年 1 月－1920 年 2 月）、シベリアの冬特有のひどい寒さの条件で、「赤系」軍隊に追求された「白系」軍人の、全家族で、2000 キロの距離を渡った、徒歩の撤兵である。（Вырыпаев В., Гагкуев Р.（2007）Каппель и каппелевцы. — М.: «Посев». ）

[572] Несмелов А., 同上、93 - 94 頁。

画の前でうつ伏せになっているエーシンを数回目撃したとある。[573]

L.エーシンは、「イミグレーションの苦しみを体験したロシア詩人」のシンボルとしてハルビンの歴史に残る。ロシアの内戦の苦労を乗り越えたエーシンは、「精神的トラウマ」の後は回復せず、ハルビンに移住してから、「宗教」を通じて現実から逃げたかのような生活を送るようになった。才能に恵まれた詩人でありながら、エーシンは自己を「自発的な社会のアウトロー」として定義した。日常生活においては、それが、安定した仕事と住宅の不足、さらに長い間治らなかったうつ病として表れた

このように、「白系」ロシア人は、イミグレーション生活に伴う困難から自己の精神を守るため、自分の知性を適用することに限らず、ロシア民族特有の創造活動への憧れ、精神性というような「手段」も使用した。

章のまとめとして

ここでは、回想記で記述されている「白系」ロシア人と「赤系」ロシア人の精神的状態の特徴と精神的防衛方法を検討した。

「白系」ロシア人は、亡命先として選択された満州における生活に対して、ポジティブな期待を持っていなかったため、ある程度、失望感を避けることができた。しかし、帝政ロシアの崩壊、故郷の喪失という歴史的なトラウマは、追加的な精神的負担となり、「白系」ロシア人は、過去のことについての反省を止めることができなかった。回想記が示しているように、経済的問題を除ければ、「白系」ロシア人の精神状態に悪影響を与える主なファクターとしては、異文化環境ではなく、「白系」ロシア人の自分自身の内心のコンフリクトが挙げられる。つまり、自分の元の社会的地位、自尊心の喪失などのようなトラウマを乗り越えられなかった「白系」ロシア人は、戸惑ったかのような状態に陥り、現実を無視して、過去に生き続けながら、今後の進路についても合理的に考察することができなかった。

1945 年に起きた悲惨な出来事が証明するように、多くの「白系」ロシア人は、ソ連側により「白系」ロシア人に対し、様々な形で表明された凶悪性について忘れ、反ソ的な活動を続け、ソ連軍による満州侵攻の時、自己の保護のため、対策が取れなかった。そのことが、結果として、多くの人は悲惨な運命に遭った。

「白系」ロシア人の軽率な考え方を批判する著者は存在するが、その反対に、自分の誤りを認めなかったロシア人もいる。

精神的防衛方法を検討したが、「白系」ロシア人による、精神性、芸術活動の重要性という、ロシア文化特有の価値観を保つこと、そしてどのような状態においても個人のアイデン

[573] Забияко А., Эфендиева Г., 同上、200 頁。

ティティを保持することを通じて、異文化環境における自分にとって精神的基盤を維持することができた、ということが分かった。

ここまでは、1920－1940 年代の満洲において居住していたロシア人の精神的状態の特徴と精神的防衛方法を検討してきた。次章においては、日本人を対象にして、同様の問題点を引き続き、分析する。

第 6 章　日本人の精神的状態、心理的防衛方法

本項では、1920－1940 年代の満洲に居住していた日本人の精神的状態における変更を辿り、イミグレーション状況の中で生き残るための必要な心理的防衛方法も、表面に出す。

前章とは同じく、本章においても、異郷に住み着いた日本人の心理状況を検討する際に、特に「自己意識」、「活動」、「環境理解の特徴」、「移り変わる環境、状態の中で生きる移民者のエモーションの特徴」などのような人間の社会的・精神的存在面に焦点を当てる。

6.1. 「異文化環境」として見た 1920－1940 年代の満洲：日本人の視点

満洲における日本人の生活条件は、多くの点で日本国内と異なり、ここでは、最も明らかな相違点を取り上げる：

2. 大陸における生活の経験

島国である日本と異なり、面積の大きい満洲は、領土が広大で、人口、森林の少ない地域が沢山存在するため、周りの環境が制限のない砂漠のような、ネガティブなエモーションを喚起するイメージを与えた。このように、満洲において団結性を目指した日本人の動機付けとしては、経済的理由に限らず、恐怖感を与える地域の広さについても挙げられる。

3. 満洲の気候

多くの日本人にとって、満洲の冬は、非常に寒く感じられた。日本と異なる特徴の気候に適応することが必要となり、敗戦時代に燃料、服装、食料不足に悩んでいた日本人は、「生と死の境界」に存在したかのような状態であった。

4. 個人の「夢」、特別の期待と連想される満洲

日本国内に居住していた日本人は、通常の生活を送っていたが、満洲に移住した多くの日本人は、「満洲の魅力」に引き付けられ、自分自身の夢、目標を達成することができると、満洲における生活には特別の期待感を持っていた。

5. 多民族的空間への適応の必要性

満洲においては、一種の単一民族文化の国である日本と異なり、アジアとヨーロッパからの様々な民族が共生していたため、日本人は異文化である他者との交流能力を身に付ける必要があった。

6. 日本と世界における出来事に関する正確な情報不足

満洲においては、日本人向けのマスコミ活動は活発に働いていたが、戦争時代には検閲の抑圧があったため、日本人は情報のバキュームの中にいたかのような状況であった。

7. 都市と僻地の生活条件における相違の深さ

一方では、ハルビンのような、大きい街においては、人の様々な要求を満たしてくれる生

活条件はあったが、スイヒン県などにおいては、日本人の人口も少なく、まともな生活のために必要な利便性もなかった。

8. 経済的な安定性により警戒心の喪失

満洲における多くの日本人は、困窮を体験することなく、安定した生活に慣れていため、政治的原因により、状況が変わり得ること、日本においては在満日本人に対する嫌悪感が発生することなど、激変に対する精神的な面が準備されていなかった。

以上のことから、満洲における日本人は、一方では、日本と同様の生活様式を送りながら、その他の日本人との団結性を保っていたが、それと同時に、異文化環境に適応せざるを得なかった。この項においては、1920－1940 年代の満洲における日本人の精神状態を分析し、回想記で言及された心理的防衛方法についても触れる。満洲における日本人の精神状態の変化を辿るため、満洲における日本人の滞在期間を三つの時期に区分する：

１．1920 年代－1930 年代　－日中戦争、第二次世界大戦までの時期：「青春の満洲」の時代

2．1930 年代－1945 年－第二次世界大戦の時期

3．1945 年以降－日本の敗戦、満洲国の崩壊、ソ連軍による満洲占領、日本人の日本への引き上げ

この項で提起した問題点を分析した結果、以下のことが明らかになった。

6.2. 1920 年代－1930 年代　－日中戦争、第二次世界大戦までの時期：「青春の満洲」の時代

1920 年代、満洲においては、商業、主に日本人客に向けた様々なサービス業に従事する日本人は多かった。

関東軍によって樹立された満洲国という傀儡国家においては、日本人の人口が急速に増え、多くの日本の都会人は給料の高い職場を見つけ、農民は、中国人から安く購入した領土が与えられた。学校、食店などのような、日本風な生活を保つために不可欠な設備も設けられたため、殆どの日本人は、安定した生活を送っており、当時を懐かしく思い出している。しかし、新しい環境に適応することは様々な困難をもたらし、得に子供の記憶においては、ネガティブなエピソードが残った。

6.3. 満洲の環境に早く適応できた日本人：満洲における生活を「満喫」すること

日本が、日中戦争及び第二次世界大戦を開始するまで、満洲における日本人は、安定した生活を送っており、異文化に接する体験のような、珍しい出来事を懐かしく回想している。

1935 年に、ハルビンに移住したばかりの新婚の加藤幸四郎と淑子は、ロシア人の住宅に

入居し、幸四郎は中東鉄道に就職する。ロシア語が分かる幸四郎は日本人に限らず、ロシア人とも友人関係を結び、日本風の生活を保ちながら、ロシアの文化とも触れ合うこともできた。妻の加藤淑子の性格においては、好奇心、自由な生活への憧れ、コミュニケーション能力の高さという利点があったため、異文化環境に居住していた若い淑子は様々な分野で知識を深め、充実した生活を送っていた。ハルビンにおける日常生活を記述する際、家族の経済的安定性、趣味、日本人とロシア人の友人との交流、週末のコンサートやカフェーといったような社会的生活があり、人生を満たすための必要な条件があったと述べている。加藤淑子は、満洲における生活を、日本と比べ、より幸せなものであったとして記述している：

> 私たちは（ここでー交響楽団の）会員になったので、第一回の公演から、大喜びで出掛けた。（略）チケットは『パチョントナヤ・ヴィ』（ロシア語の直訳：主賓のためのチケット）といって必ず二枚が一組で送られてくる。日本ではない習慣だったので、とてもうれしかった。[574]

加藤淑子と幸四郎を、満洲の状況に適応できた日本人の例として定義できる。そして、加藤夫婦は、当時の満洲において形成されてきた国際社会の中で生きる経験からは、できるだけ多くの利益を得ることを目指していた。

6.4. 子供の孤独、遊ぶ方法の不足、同年齢の友人がない

満洲の僻地に居住していた日本人は、都会人にとって理解しがたい不便性に直面した。このような、面白味のない生活は、特に、同年齢の仲間との交流と遊びを求める子供にとって、大変であった。

転勤生活を送っていた行政機関の職員の娘である永井瑞江は、満洲の八つの州に住まったことがある。格別新しい所においては、その地特有の不便性があり、その中で、友人が一人もできないほど、学校において非常に少ない学生数(例えば、スイヒンの学校の 6 年のクラスにおいては、永井は一人だけの生徒であった)、住宅において退屈そうに見えた「黙読する自習」の必要性、子供の遊びに必要な場所、遊具などの不足という、マイナス点を取り上げている。永井は、ムーリンに住まった時期を次のように回想している：

> ムーリン街には本屋さんなどありませんでした。学校にも図書室などという部屋はなかったし、私たちのまわりには教科書以外に子供の読物などありませんでした。

[574] 加藤、同上、54 頁。

（略）父が僻地に転住するたびに子供たちの教育環境は悪くなり、父も母も悩まされていた。[575][576]

長い時間一人で過ごし、独立した生活様式で習ってきた永井は、数年が経ってから、新しい学校にあったグループ活動には適応できなかった。[577]

長い時間一人で過ごし、独立した生活様式で習ってきた永井は、数年が経ってから、新しい学校にあったグループ活動には適応できなかった。[578]

小宮清は、「開拓団」において、田舎に相当する、静かでのんびりとした生活を送っており、退屈に悩んだこともあった。農業、家事などで忙しかった両親は、子供に遊んであげることができなかったため、多くの日本人の男の子は、カエルをいじめるような行動などをして、時間を潰していた。

このように、ハルビンなどの街に住んでいた日本人の子供は、充実した生活を送っていたが、僻地においては、孤独、退屈に悩んでいた。

6.5. 「開拓団」の農民：回り環境の「わびしさ」、単調な仕事の大変さ

満洲に移住した日本人の農民は、貧困層に属し、満洲においても、無料で提供された土地以外の「資金」が配給されず、「衣食住」に関する欲求を満たすため、努力しなければならなかった。そして、前章で述べたように、日本国内においては、日本人の農民は、完全な田舎に居住していたが、満洲においては、その「田舎」を自分で作らなければならなかった。

1940 年、小宮の家族は、満洲の黒竜江省へ移住し、斑代開拓団に身を寄せる。小宮の家族は、満洲への移住の直前、「暖かく緑に溢れる」静岡にいたため、砂漠のような景色を持つ開拓地は、ネガティブな印象を与えていた：

周囲を見回しても、一直線の地平線しか見えなかった。それから三日間、母は(略)あまりのわびしさに泣きつづけていたのだ。[579]

地理的な意味での「わびしさ」に限らず、住宅の質素なインテリア、農民の暗いムード、農業ができなくなる、「永遠的に」感じられる冬も農民の精神状態に悪影響を与えた。日常

[575] 永井、同上、111 頁。
[576] 同上、111 頁。
[577] 同上、172 頁。
[578] 同上、172 頁。
[579] 小宮、同上、8 頁。

的に繰り返す単調な仕事と郷愁に耐えられなかった農民は、飲酒に依存した。[580]

満洲に存在した全ての開拓団は、僻地に居住させられ、小宮の家族が住まった斑代開拓団に最も近い街のチチカルまで行き着く時間は、一日ぐらいかかった。小宮の家族は、遊びの目的でチチカルを訪問した頻度は、年に数回ぐらいに過ぎなかった。

このように、「開拓団」に住まった日本人は、周りの世界から隔離されたかのような、小さい部落のコミュニティとしての生活を送っていた。

6.6. 「心理学的双対性」[581]の問題。「王道楽土」、「五族協和」のイデオロギーの影響：イメージされた「理想的な」世界で生きること

新聞、ポスターなどのような視覚メディアを通じて創造された満洲国のイメージは、理想的な国に対する期待感に応えていた。日本人を引き付けたのは、優れた国家の管理体制、全ての民族の平等性と団結性というようなものであった。「五族協和」と「王道楽土」というスローガンを信じていた多くの日本人は、満洲における自分の活動を通じて、その「完璧さ」を追求していた。例えば、行政機関の職員は、「理想的な」田舎の建設、様々な社会的分野における改革の実行、自分の夢ともなった、満洲国の夢を果たすことに努力していた。柳田桃太郎は、ハルビンの行政機関の職員としての自分と同僚の業績を記述し、高い評価を上げている。つまり、満洲国の政府は、日本人に強い動機を与えた。満洲国の「国づくり」に参加した日本人は、回想記で自分の活動を記述する際、「理想的な」、「卓越した」などのような言葉を使用している。

しかし、一般人の日本人は、日常の生活において、満洲国のイデオロギーとはすれ違う事実に直面していた。勝山妍子は、スキー場、学校などで、日本人、満人とロシア人の子供に付き合うことに注目し、「五族協和」について、自分の態度を述べている：

> 中国人や朝鮮人、ロシア人の子供たちとも仲良く遊んだ。(略)しかし対等な関係だったかというとそうとも言い切れない。[582]

当時子供だった勝山は、日本人が中国人の物売りをどれ程侮辱的に扱ったかについて記述している：

> 男の子たちは（ここでー日本人）マクワ瓜や中国菓子、蒸しパンなどのもの売り

---

[580] 小宮、同上、79 頁。
[581] 「心理学的双対生」の定義は、前章において挙げられている。(第 5.2.2.項をご参照下さい)
[582] 勝山、同上、40 頁。

が来ると、ひょいと隠したりしてよく困らせたり、誰かが一つごまかしたり、盗って逃げるふりをしたり、無理な値切りをする。もの売りは困惑して舌打ちするものの、「メイファーヅ」（仕方ない）とつぶやくだけで抵抗しない。[583]

当時子供だった勝山は、日本人のこのような行為を、「悪ふざけ」として見ていたが、時間が経って、この事件の裏にあった真実を理解した。[584]

このように、満洲国の国作りを信じて行動した日本人は、「理想的な国家」に関する夢を信じたものの、若い、子供世代の日本人は、社会に存在した不正のことは目撃したが、それを認識できたのは、成人になってからである。

ここでは、1920 年代から、日本が第二世界大戦に突入する時点までの満洲に居住していた日本人の精神的状態の特徴を分析してきた。次項では、1941－1945 年代を扱い、同問題点を分析する。

6.7. 1930 年代－1945 年－第二次世界大戦の時期

第二次世界大戦の時期に、日本内地と異なり、植民地の満洲において、飢餓、無職などのような問題は、それ程厳しくはなかった。しかし、関東軍は、満洲における全ての日本人をコントロールし、イデオロギーに関して抑圧を与え、様々な方法で自由を制限していた。そして、満洲における日本人の子供に対し、関東軍は特別の政策を企て、「大東亜共栄圏の将来の指導者になる小国民」[585]としての育成の仕方を教育機関に要求していた。つまり、満洲で育つ若い日本人の世代の思考を操るという、侵略的な課題を与えていた。

6.7.1. 一般市民の警察の観察下での暮らし、行動の自由がないという状態

「満洲国」の政府は、国家の敵として見られていたソ連人、満人などのような、他民族の代表者から目を離さなかった。しかし、日本の特務機関、憲兵などは、日本人の生活にも染み込み、一般人の友人サークル、活動内容などにも注意していた。永井瑞江の回想記で登場する中学生の友人の海老原は、「日本のために忠誠を尽くす姿を示さなければ日本の憲兵に疑われる」という意見を述べた。[586]日本人の他民族の代表者との友人関係は、非国民的な行為として見られたた。海老原の両親は、満人とロシア人の友人との商売をしたことがあったため、憲兵隊に誘導され、長い時間、尋問を受けてから、今後は貿易の相手から聞いた情報

[583] 勝山、同上、40 頁。
[584] 同上、40 頁。
[585] 同上、70 頁。
[586] 永井、同上、106 頁。

の全てを憲兵に報告することを指示された。[587]

日本人は、独立した意見を述べることも恐れていた。第二次世界大戦において、日本が敗戦に迫られた時期に、教師であった三島は、日本がやっている戦争がおかしいものとし、日本の敗戦を予測した。その結果として、三島は、職場でハラスメントの対象となり、僻地にある学校に転校させられた。その後も、三島の全ての行為が憲兵によって見張られていた。[588]

「国家の敵」という定義は、個人の趣味まで拡大し、大日本帝国の敵によって使用されている英語の学習も禁止されていた。永井瑞江の両親は、子供がせめて英語の基礎を学ぶため、家で「敵として見られていなかった」英語の歌という「教材」を使用していた。[589]

ある教師は、生徒のプライベートな生活にまで侵入し、満洲国のイデオロギーに相当する道徳を教えていた。教師の稲毛は、自分の生徒である永井の日記から、満人女性の友人の存在について知った後、これについて疑わしく思うようになる。稲毛は授業中、生徒の前で、永井に対し、「クンさん（友人の名前－著者）とはあまり遊ばない方がいい」という意見を述べている。[590]

このように、満洲における様々な年齢の日本人は、何も分からない子供にも、特務機関に限らず、周囲の人によって観察の対象となった。

6.7.2. 学校の教育プログラムの変更、生徒において規律、厳格な性格を培うこと

勝山妍子によれば、国民の戦意を高揚することが、第一の課題であったため、映画館のプログラムまでも変わってしまった。将来の大東亜の支配者となる日本人の生徒に対する大きい期待を抱いていた満洲国の政府は、学校においてまで入り、教育のプログラムを変更し、子供からは、更正を求め始めた。学校では、体操の時間が増え、教師が「違う人のように変わっていく」という状態となり、[591]生徒の扱い方は、軍隊のように、厳しくなった。

勝山妍子は、学校の運動場での朝の体操を回想する際、女性でも、手が弛むのような、性格の弱さを示す行動をすれば、教師に非常に怒られた、と回想している。[592]

戦況が厳しくなるにつれ、学校のプログラムにも変更が増え、モールス電信のような、軍事に必要な科目が導入された。

このように、戦争時代における在満日本人生徒は、軍人であるかのように、厳しい制度で

---

[587] 永井、同上、105 頁。
[588] 同上、154 頁。
[589] 同上、127 頁。
[590] 同上、140 頁。
[591] 勝山、同上、68 頁。
[592] 同上、68 頁。

指導されていた。

6.7.3. 価値観の歪み、献身的な態度の育成

日本人は、「個人の幸せ」ということが存在しないと教え込まれた。「天皇」、「国家」のために団結して努力することが必要であり、「天皇」のために自己を犠牲にすることも光栄として見られていた。この理由により、開拓団の学校で学んだ生徒は、日本人に食料を供給する者としての国家にとって重要な存在であったが、進学する野心、自分の夢は捨てなければならなかった。[593]

満洲国の行政機関に勤務していた桃太郎、後藤春義も、満洲国の建国に関わった自分自身と同僚の業績を、大きな意義のあるものとして見ており、社会に貢献することこそ、本当の幸せとして見ていた。

天皇と国家のために、自己を犠牲にする意志は、大人に限らず、子供からも期待されていた。戦局が深刻化した時、軍需を補うため、工場、開拓団などへ送り込まれた生徒は、労働状況がどれ程大変だったかにも関わらず、両親に文句を述べることを控えていた。勝山は、開拓団における、衛生状態が悪かった元の馬小屋の所に入居させられた生徒労働団体の一員の女性が伝染病により死去したことについて回想している。生徒も大人も、「天皇」のために「尊い犠牲」をした女性の死亡に関し、「理不尽と思わなかった」と告白している。[594]

このように、日本人は自分のことを国家の一部としてしか見ておらず、「個人主義」という意味を失った状況であった。

6.7.4. 生徒に「責任」、「罪悪感」を教え込むこと

満洲国において、特務機関により社会の管理、一般人の行動の観察が厳格化するにつれ、若い世代の日本人に対する要求も増えていた。教育機関の職員は、学生に対し、「非国民的な」行為とは、どういう意味かについて、その行為の結果、どのような悲劇が起こり得るかについて繰り返し説明していた。このようにして、生徒が細かい誤りにおいても、大きな罪悪感を抱くようになった。学生は、人を囲む全てのものが「天皇」からの贈り物であると教えられ、書道のクラスを受けた勝山は、デスクをインクで汚した時、「天皇」、「国家」に侮辱的な行為をしたと思い、教師により罰せられるのではないかという恐怖に襲われた。[595]

同じく、軍需を補うため、工場で労働する時、倒れるほど疲れた学生は、自分の弱さを、国家を裏切ることであると思い、恥として感じることがあった。

---

[593] 小宮、同上、90 頁。
[594] 勝山、同上、115 頁。
[595] 同上、83 頁。

助膜炎に悩んでいた勝山妍子は、女学校に入学することができなくなり、「天皇陛下の役にも、お国の役にも立てないのだから、体力が劣っているということは、非国民であって、恥ずかしいことなのだ」と感じていた。[596]

このように、教育機関の教育制度の影響により、日本人の生徒は、間違いをすること、苦情を述べること、抗議を表明すること、弱さを見せること、そして悪い印象を与えることを恐れるようになり、周りの環境の影響により移民者のパーソナリティが歪んでいくという状況であった。

6.7.5. 子供の精神的トラウマ：日本人の警察により、満人のいじめ、殺人、拷問の目撃

1937 年、日本は日中戦争を開戦、1941 年、第二次世界大戦への参入の結果、満洲国における政治状況が厳しくなり、大日本帝国の敵として見られていた庶民は、民族的属性に関わらず、逮捕され、罰せられていた。そして、関東軍が満洲の領土に侵入して以来、中国人は小さな抵抗組織を団結させ、ゲリラ戦争をしていた。満洲国の政府は、そのような中国人の犯罪グループを、匪賊として見なし、地域の安全性を保つため、犯罪者を厳しく罰することにとどまらず、予防措置として恐怖感を広めていた。それを目的に、死刑された遺体を広場などのような公の場所で一般市民に晒していた。それと同時に、一般人の日本人の暮らしぶりは、表面から見れば、通常通り続けられており、子供たちも「子供らしい」生活様式をしていた。しかし、大日本帝国の敵と戦うことは、子供の目から隠すことが不可能であった。

当時の満洲国における、死刑、拷問などのような暴力的シーンは、通常より多かったため、精神の弱い若い年齢の日本人、子供においても頻繁に目撃された。

永井は、広場で提示された中国人の匪賊の一員の頭を見に行ったことがある。そして、ある日、友達と警察署を通り過ぎた時、逮捕されていた人がいじめられていることが直ぐ分った。

永井瑞江：

> 警察署の裏道を歩いた時、(略)人が呻く声が聞こえました。（略）夢の中にも出てきそうな不気味なうなり声です。[597]

以上の場面を、永井は「衝撃的な経験」として定義している。

そして、満洲国では、地元農民に対し、供出命令が出され、満人の農民は、定期的に自分

[596] 勝山、同上、56 頁。
[597] 永井、同上、137 頁。

の収穫であった大豆を満洲国行政機関に渡すことが義務付けられた。

自分の収穫の供出を拒否し、それを隠匿した農民が発見されたら、日本の県公署の職員により罰せられることがあった。永井の父の部下が、嘆いていた、年を取った貧乏な女性から最後に残った大豆の袋を取る場面を目撃した時、「私はその光景を忘れられません」と、ショックを受けた。

このように、一般人の日本人は、満人などの大日本帝国の敵に対する、満洲国の特務機関、警察の暴行行為を批判し、責任の負担を自分も担うようになり、人生の終わりまで罪悪感を覚えた。

6.7.6. 女性への抑圧：国家にとって多くの子供を出産する義務

大日本帝国の政策の一つとしては、日本人の人口を増やすことであり、子供を沢山出産するのは、社会的義務として見られていた。特に、開拓団においては領土が広かったため、人口の増加が期待されていた。小宮清が述べるように、「大地が無限に広がる満洲では、(略)（自分の母について）子供が一人しかいないというのは、何か肩身の狭いことのように感じた」。[598]小宮の母は、二人目の子供を死産し、その次の 8 年間、子供を出産することができなかった。しかし、精神的な抑圧を感じた母が、手術をすることを決める。小宮が回想しているように、母は、「付き添いの人もいない」病室で、死の苦しみを味わった。退院してからも、「死ぬほど」の強い痛みに悩んでいた。

このように、日本人の女性の社会的価値は、出産された子供の人数により判断され、満洲における日本人の女性は「国家」のために、自分の健康を危険性にさらすという状態であった。

6.7.7. 社会における「個人」が価値を失うという感覚

帝国主義の時代、一方では、日本の政府が、国家とその国民を偉大なものとして讃えていたが、その一方では、一般人の日本人は、国家のために努力できないと価値がないというような扱いを受けていた。その上、行政機関は、日本人の人生を、危険に晒したことがあった。第二次世界大戦の時代、工場で弾薬を作った生徒は、誤りをすれば、爆発の犠牲者になる可能性があった。[599]

永井、福山は、日本人は病気になることを恐れていたと回想している。生徒の場合、健康状態が悪ければ、大学の規則により、進学することができなかった。

---

[598] 小宮、同上、89 頁。
[599] 勝山、同上、74 頁。

開拓団における、患者に対する治療機関の怠慢な態度に注目しても、農民の健康に価値を持っていなかったことが分かる。

小宮は、開拓団における病院について回想する際、看護師がいないこと、そして患者に対する傲慢な態度、医者による患者への荒っぽい扱い方というようなネガティブな面を取り上げている。例えば、友人とのいたずら行為の結果、銃の発射により、足を傷つけられた小宮は、病院の訪問について次のような回想を取り上げている：

> 傷口は、直径二センチくらいの浅いものだった。ぼくの目にもほんのかすり傷とわかるもので、どう考えても至近距離から発射された弾が、手にとどまっているはずがなかった。それにもかかわらず患者に必要以上の苦痛を与えている、この医師に対して、ぼくは大きな失望と不信を抱いたのである。[600]

小宮によれば、僻地で勤務することを希望した医者がいなかったため、人間と動物の診察の仕事を重ねる、技能の低い人さえも雇われた。小宮は、「開拓団にとって馬は大切な労働力だったから、馬を始め、豚、にわとりの手当も重要な任務となる」と述べ、獣医の役割の方が重要であり、人より動物の健康が重視されたということを告白している。[601]しかし、満洲における気候の厳しさにより、風邪、肺炎、凍傷のような病気が頻繁に発生したため、多くの農民は適当な治療が受けられなかった。農民の健康を問題にしなかった行政府の態度は、農民の記憶で痛ましい思い出として残っている。

このように、一方では、満洲において、日本人は、大日本帝国の偉大性を讃えたが、それと同時に、自分の存在意義のなさを把握し、「心理的双対性」という心理的状態を持っていた。

6.7 8.　親子の対立の問題。将来の見方、価値観における相違

前章で言及したように、20 世紀前半の日本は、まだ女性の自由を制限する社会秩序であり、多くの場合、娘の運命は、両親によって決められた。しかし、ヨーロッパ人で溢れた満洲においては、多くの日本人の女性は、独立した生活を目指すようになった。

日本の伝統に従った両親と、満洲社会における新しいテンデンシーを吸い込んだ子供の間での衝突が頻繁に発生した。

溝口は、学校を卒業する時期が来た時、両親に対し、国文学の勉強への関心を示したが、

---

600 小宮、同上、83 頁。
601 同上、83 頁。

両親の意見により、娘が家庭主婦としての特技を身に付けるべきとの意見が示された。大学への願書を提出する日が迫る時、両親は、良妻賢母を育成する「家政学部」に変更することを提案したため、溝口の夢を実現させるためには、両親との議論に勝たなければならなかった。

第二次世界大戦の時期、国家主義者を育てることを目指した満洲国のイデオロギー的抑圧にも関わらず、若い世代の多くの日本人は独立した考え方を保ち、他民族の代表者と友人関係を結んでいた。

満洲国の警察官の息子、龍青年は、日中戦争の時代、学校で上演された、中国人に日本軍の優越性を見せる芝居の内容において、民族差別を読み取り、俳優としての参加を拒否した。この行為で「非国民」的な態度を見なした父との喧嘩が発生し、龍は抗議を示すため、家を出て行方不明になった。[602]

このようなエピソードが示すように、満洲における若い世代の日本人は、独立した考えの傾向があり、親子の対立の問題は、通常の喧嘩にとどまらず、親子関係における亀裂の発生にまで至ったこともある。

6.7.9. 「国家」に頼りすぎること、警戒心の喪失

第二次世界大戦の時代、満洲国のラジオと視覚メディアは、特務機関の検閲の観察下で働いていたため、不確な情報を出すこと、満洲と世界で起こる重要な出来事に関しては黙ることが頻繁に起こり、日本人は、世界における出来事に関与していないような、周りの世界から隔離された社会の中で存在していた。その上、農民はラジオも新聞もなく、情報へのアクセスが遮られていた。戦争での日本の立場が弱まっていることに関し、一般人の日本人は議論をしたことがあったが、大日本帝国が戦争に負けることの可能性があることを信じる意欲がなかった。小宮は、日本が戦争に負けるという意見を述べた中国人の男性と喧嘩したが、時間が経ってから、中国人が日本人より状況が分かっていたことについて悔しいと思っていた。[603]

回想記の著者は、当時の様子を読み取ることが出来なかったことについて、自己を咎めている。日本人の信頼を裏切った関東軍に対する怒り、そして当時の自分の軽率な態度に対する自己批判、強い後悔を示すことが、多くの日本人の回想記の中心的なアイディアである。

満洲における日本人の精神状態については、第二次世界大戦の前と後の時期を比較すると、明らかな相違点が見られる。戦前の満洲における生活は、多くの日本人にとって「幸せ

[602] 永井、同上、77 頁。
[603] 小宮、同上、98 頁。

な時代」であったが、戦争中の満洲においては、多くの日本人は違和感を覚えていた。

第二次世界大戦の時代、戦局が厳しくなるにつれ、日本人は、自分の生活がコントロールされ、自由がなくなってしまうということを強く感じるようになる。戦争の時代に、子供は、最も弱い立場にあり、将来の大東亜の支配者として育成され、性格、パーソナリティの強制的な変更に抵抗すべきだった。当時、多くの日本人は、「王道楽土」と「五族協和」というイデオロギーに対しては、熱意がますます衰えていたが、大日本帝国の強さを最後まで信じており、自分の安全性についても、関東軍の心配事として軽率的に思っていた。

ここまでは、満洲における日本人の精神状態については、1941－1945 年代の枠で検討してきた。　次項では、終戦後の満洲における日本人の精神的状態と心理的問題を分析する。

6.8. 1945 年以降－日本の敗戦、満洲国の崩壊、ソ連軍による満洲占領、日本人の日本への引き上げ

1945 年 8 月 15 日、ラジオで、昭和天皇の、終戦の詔書を朗読する玉音放送が行われ、その当日から日本が終戦状態となり、満洲国時代も終焉を迎えた。敗戦状態が迫ってくることを事前に知っていた関東軍は、素早く満洲から撤退し、8 月 9 日満洲に侵攻したソ連兵は、関東軍によって放棄された数多くの日本人の庶民に対し、様々な暴力行為を行った。

満洲国において、情報の不足という問題が存在していたため、多くの日本人にとって、日本の敗戦と満洲国の崩壊に関するニュースは、予想外の出来事となった。関東軍の保護を失った日本人が、緊急事態の抑圧により、全ての適応能力を発揮しないと生き残らない、いう時期が来た。

6.8.1. 今後の進路に迷ったかのような感覚

満洲に住まった日本人は、ずっと満洲に残る意志があったかどうかについては、回想記においては言及されていない。しかし、満洲国が崩壊した後、多くの日本人は戸惑ってしまい、今後の行く先が分からないような感じを抱いていた。満洲に生まれ育った日本人は、満洲を自分の故郷として見ていた。成人だった時に、満洲への移住した日本人も、満洲で長時間過ごしたため、他の国で新しい生活を始めることを恐れていた。加藤淑子も、1945 年に、大変な選択に直面していた。1945 年、淑子はユダヤ人の洋裁サロンに就職したため、日本への帰国に関し、決意することが難しくなった：

ユダヤ人相手の洋裁はやり甲斐がある。お客もついて繁盛している。十年も離れ

た日本でゼロからはじめることを思えば、今の方が(略)。[604]

しかし、中共軍と国民党軍の内戦が、長い間続くと分かった加藤は、日本への帰国の方が家族にとって安全だと思っていた。

つまり、敗戦後、将来のことについて、日本人が迷った原因としては、自分の人生における混乱状況と、満洲国に対する精神的な繋がりを把握することも挙げられる。

6.8.2. 日本人の自尊心の傷つき

戦後の満洲における日本人が、侮辱された気持ちを抱いた理由は二つあった。一つ目は、元の社会的地位、財産を失った状況で、食事、お金を探すため、恥ずべき行為をする必要性があるというファクターである。この場合、恥の気持ちは、「他者」により押し付けられたものではなく、パーソナリティの特徴としての「恥」を感じる傾向の現れ、という理由で表面に出る。例えば、藤原ていは、市場で食料品の残り物を探したことがある：

> 広い市場の中をわたしはねずみのようにかけまわった。およそ食べられるものはひろうのである。ねぎの葉、大根のくず、いもの捨てたの、これらをなわで作った手さげ籠にぶち込んで、急いで帰ってくるのである。[605]

日本人が侮辱されたもう一つの理由としては、敗戦者の立場にあった日本人に復讐したかった他民族の一員の侮辱的な扱いが挙げられる。この場合、「恥」の気持ちは、「他者」の影響により促されたものである。

日本人にとって、中国人、朝鮮人、ソ連人の方からの侮辱的な行為も、精神的な負担となった。

ソ連軍は、日本人に対し、武装解除の命令を出した。勝山は、その行為が日本人にとってどれほど痛ましいものだったかを記述している：

> この時期には、軍人でなくとも満洲まで来た日本人なら誰でも日本刀の一本くらいは所持していたものだ。また日本刀が日本人の魂であり、誇りでもあったのだ。[606]

---

[604] 加藤、同上、65 頁。
[605] 藤原てい、同上、118 頁。
[606] 勝山、同上、183 頁。

接収された刀の今後の処理方法も、心配の理由となった。日本人は、その刀が、博物館の展示品として保管されることを希望したが、農業の道具としての扱いをされるという予測は、恐ろしいものだった。[607]

ソ連兵は、日本人を労働力として使用し、勝山が回想しているように、労働状況について苦情が述べられた際、ソ連兵は「昔から敗戦国民は奴隷として扱うのがロシアの政策である」ということを思い出させた。[608]

ソ連兵の暴行の犠牲者の中で、特に日本人の女性が多かった。ある場合、日本人の兵は、女性の大量強姦を防ぐため、一人の女性に対し、自己を犠牲にすることを提案した。

そして、対抗しない方が安全だというような「相談」を挙げたこともある。

小宮は、ソ連兵と一緒に遊ぶ日本人の女性を目撃したことがあり、若い年齢にも関わらず、日本人の自尊心がどれ程侮辱されたかを知ることができた。

6.8.3. パーソナリティの歪みという問題。自殺の繰り返し

移民者の心理の問題を研究していたN.フルスタリョヴァによれば、自殺の原因としては、精神疾患に限らず、生活における厳しい状態において発展させられた心理的なトラウマも挙げられるという。普通の場合、移民者の自殺は、キャリア、日常生活、社会的生活などにおける問題の影響により、長時間続いていたストレスという基盤から逃避するものである。[609]

満洲における日本人が自殺をした理由を分析した結果、次のようなことを明確にした。

6.8.3.1. 自分の将来に関するコンセプトの歪み

研究者のN.フルスタリョヴァによれば、元の社会的地位、周囲の人に印象を与えるべき印象を失い、自分の社会的、心理的、専門的状態を変えることができない人は、自己崩壊的、アグレッシブ的行動を通じて、自分のステータスを「高める」ことに注力している。[610]

満洲に移住してきた多くの日本人は、特に男性の場合、「満洲国」という夢に引き付けられ、理想的な国家の建設に全力を投じてきた。その日本人にとっては、満洲の崩壊とともに、人生における目標がなくなったような状態となった。その上、敗戦の状態は、自尊心を損なうこととして見られていた。個人主義者の中国人と異なり、日本人は、「天皇」、「国家」のため生きており、その国家がなくなると自分の存在も意味を失うと考えていた。

---

607 勝山、同上、183頁。
608 勝山、同上、186頁。
609 Хрусталева Н., 同上、221－225頁。
610 Хрусталева Н., 同上、222頁。

溝口節は、父の自殺の理由について考察し、次のような、「勝手な」意見を述べている：

> 今にして思えば父は『五族協和』に向かってひたすら前進し、裏にひそむ日本の野望があるとも知らず、理想の国づくりのために生き続けたのだと思う。(略) それが完全に裏切られたと分かった時、自分自身の愚かさをはっきりと思い知らされ、その己に対する懲罰の死であったのであろうか。とも思う。[611]

このように、多くの日本人にとって満洲国の「死去」は、自分の「死去」に相当するものであった。

6.8.3.2. 集団の団結性を維持する行為としての自殺

溝口筋の父の自殺の理由をさらに深く分析すれば、上記に述べた原因に加え、もう一つの理由が取り上げられる。本章ですでに言及したように、満洲における日本人の心理の特徴としては、個人の幸せより、国家、天皇の繁栄の方が重視されていた。個人の利益より、集団の利益が優先されていた。集団の一員の行為をサポートすることは、光栄に等しかったため、自殺することも、相手をサポートする行為のように考えられていた。

溝口節は、大学で勤務していた父が、家族に自殺の希望についてステートメントをする場面を取り上げている：

> (略)ある日、父が改まって
> 「二人に話しがある」というので驚いていると、
> 「渋谷院長は自決されることになった。白井教授なども同調される。御家族も一緒だ」という。「責任を御取りになるのだ」[612]

家族は、父が考え直すように説得をしたにもかかわらず、時間が経ってから父が自決をしたという結果になった。

6.8.3.3. 自殺行為への説得

満洲国から撤兵した関東軍の多数の兵からの保護を失った日本人は、満洲を侵攻するソ連兵という、新しい危険性に直面した。一般人の日本人の見通しが、非常に悲観的だったた

---

[611] 溝口筋（1995）さよなら楡の街はるびん．本館書庫、234 頁。
[612] 溝口、同上、171 頁。

め、多くの家族にシアン化カリウムが配布され、男性に限らず、女性、子供の分までも準備されていた。

溝口筋は、日本人の住宅が多かったマージャンゴウ街における状態を描いている：

> ソ連の進攻に迎えて、(略)私たち教師全員にも手榴弾二個が手渡された。「一つは敵に向かって投げよ、一つは自爆用だ」[613]

このように一般人の日本人は、最悪の「シナリオ」を準備するように教え込まれ、困窮状態に陥った多くの日本人は、それにより強制的に自決させられた。

6.8.3.4. 「行き詰まり」の状態、我慢の限界の達成

N.フルスタリョヴァが述べるように、精神的に、肉体的に疲れきった人は、あらゆる精神的トラウマに弱くなり、もう戦う意志がないと認識した場合、自決する可能性が高い。[614]

満洲国が崩壊された後、日本人は数多くの困難を乗り越えなければならなかった。その中で、日本人に対しソ連兵の暴行、中国人、朝鮮人の復讐行為、食不足、家、親戚の喪失、伝染病、非常に寒い冬に燃料、暖かい服の不足、不便な状況における期間の長い引き揚げ経験などが挙げられる。大多数の日本人の忍耐力は限界に達したため、発生する問題は、もう処理できないものとして見られていた。

永井瑞江は、自分の家族が引き揚げた時を記述する際、列車で母がソ連兵により現金全てを盗られてしまう、という事件にも言及している。著者は、当時の母の状態を次のように描写している：

> (略)母は(略)睡眠不足が続いて、さすがの母も緊張の糸がゆるみ判断力が鈍っていたのかもしれない。(略)母は虚脱状態でいました。(略)この時思いがけないことを言い出しました。「もう、死んだほうがいいのかもね」。[615]

日本が敗戦してから一生懸命、一年間、生き残りのために戦っていた日本人は、これ以上我慢できないとう状態になった。勝山研子は、当時を次のように回想している：

> (略)居留民はもう売るものもなく、食うに食えなくなり、かといって耕作する土も

---

[613] 溝口、同上、169 頁。
[614] Хрусталева Н., 同上、221－225 頁。
[615] 永井、同上、274 頁。

なく、(略)親子、兄弟バラバラになって、支邦人やロシア人の奴隷になって、売られていくよりしかたがなくなる。[616]

藤原ていも、長い引き揚げの旅の途中で、完全に諦めたということを感じたことがある：

わたしは咲子(ここで一藤原の子供の名前)を背負うときに、よく顔を見てやった。顔はやせて小さくて、うつろな目で開けていた。わたしはリュックの中から、赤い紐を出して腰にしっかり結んだ。わたしは、最後の時がきたら、この紐で子供たちを殺し、自分も死のうと考えていた。[617]

このように、多くの日本人は、家族がある場合においても、生き残りに戦い続ける意志を失ってしまった。

6.8.4. 子供の悩み：生活の通常のリズムが混乱している状態

1945 年、満洲に存在した多くの教育機関は、避難民の収容所となり、子供の教育どころではなかったため、学校年齢の子供は 1 年ぐらいの期間中、学校に通うことができなかった。例えば、永井瑞江は、1 年三ヶ月学校に通わなかった。永井は、当時について、次のような思い出を取り上げている：

その間に私が勉強したことといえば、乱読による雑学でした。[618]

満洲学校の教師として勤務していた溝口筋は、日本人の子供にとって、知識を得る意欲がどれほどあったかを、次の場面を通じて、明らかにしている：

ある日、（略）外にでた私に声をかけて走り寄る二人の学生がいた。いきなり、
「先生、何か教えてください」
「え？」
「何でもいいんです、勉強させて下さい」
「…」
「私、国語しか…」

[616] 勝山、同上、207 頁。
[617] 藤原、同上、150 頁。
[618] 永井、同上、293 頁。

「毎日国語でいいんです。」[619]

溝口は、自分の家を教室として使用し、百科事典を、唯一の教科書にした。
このように、1945 年から 1946 年までの期間は、多くの若い日本人にとって無益に過ぎた時期となった。

6.8.5. 喪失感の痛み

満洲を引き揚げた日本人は、持っていた全ての財産を失ってしまった。しかし、それよりも、多くの日本人にとって、精神的な繋がりを持つ満洲という「故郷」を永遠的に去ること、親しい人を失うことの方が特に痛ましいものであった。

引き揚げ中ずっと、混乱した状況が残っており、その理由により親戚、友人を失った日本人は多かった。避難途中で、死去に近い状態となった時、母親は自分の子供を放棄すること、中国人に売ることが多かった。

藤原ていの主人は、ソ連兵によって連行されると分かった時、藤原と子供に永久的に分かれることについて示している。将来、主人ともう一度会えるかどうかということは不明であった。

満洲を引き揚げた日本人は日本に持っていくものが限られており、禁止されたものの中に写真もあった。しかし、満洲で家族を失った日本人にとって、写真が親しい人についての一つだけの思い出として非常に貴重なものであったため、その写真を隠して持っていく方法を考えた人が多かった。

このように、満洲に居住していた殆どの日本人は、様々な意味の喪失の辛い体験を持っていた。時間が経ってから、満洲引き揚げ日本人団体の再結成と定期的な集会、記念雑誌の出版、個人的な資料収集の活動、回想記の執筆などのような活動は活発化され、そのような行為を、ある意味その「喪失感」を補うものとして見ることができる。

6.8.6. 女性の問題：自分の子供の悩みを目撃すること

子供を持った日本人は、敗戦後の時期、日本への引き揚げの経験を回想する際、最も痛ましい思い出としては、自分の悩みではなく、自分の子供の苦労を取り上げている。回想記の著者は、自分の子供を助ける場面を、特に著しく記述する。母を悩ませた問題の中で：

食料、お金の不足、病院などへのアクセスの制限、薬、血清の不足、というようなことを挙げている。食料が不足する状態があった時、藤原ていは、毎回食料の大部分を子供に上げ

[619] 溝口、同上、189 頁。

た。回想記では母が飢えていると分かった息子が、自分のポテトを母に食べさせてみる場面がある。[620]

他の場面で、藤原ていは、ジフテリアにかかった子供を助けるため、非常に高価な血清を買うために、町を駆け回り、既に価値を失った時計を高い値段で売るため、「無理な」努力をする：

> もう、何も売るものはない、借金するとしてもそれだけ（ここで一必要な金額）もっている人はまずあるまい。千円、千円、千円をどうして作る。（略）　夜明けとともに私のすることは、まず五味老人に借金を頼みにいく、団の人から集められるだけのお金を借りる、時計を売りにいく、それで千円できるかしら。できそうもないそのときは（略）私は、鼻血を出して苦しんでいる正広の顔を見た。共同墓地がちらっと頭をかすめた。[621]

他の場面で、藤原ていは、引き揚げの途中、足の裏の中まで入った小石の摘出手術の場面を取り上げ、「焼けひばしでさされるように痛かった」という経験を記述している。しかし、それよりも、子供もその手術を受けるべきであることが痛ましく感じられていた。[622]

多くの日本人の著者は、子供の悩みの記述を通じて、敗戦後の満洲における状況がどれ程大変だったかについて、明らかに苦しいイメージを呼び起こしている。

6.8.7. パーソナリティの歪み[623]：女性は「男性らしい」性格を身に付ける

敗戦後の満洲を侵攻するソ連軍は、日本人の「男狩り」を始め、多くの日本人の男性は逮捕され、ソ連へ連行された。女性は、食料を探すこと、お金を稼ぐこと、子供の安全性を守ること、引き揚げ途中様々な問題を決めることにおいて、自分に任せられる以外の選択肢を持っていなかった。

藤原ていは、日本に引き揚げた時、子供と一緒に、山、橋のない川などのような障害を含む地域を数日ぐらい渡っていた。最も小さい子供を肩で担いで歩いていたため、体力を最大限に発揮したといえる。藤原は、自分の性格を変えなければならないことを次のように描いている：

---

620 藤原、同上、96 頁。
621 同上、101 頁。
622 同上、199 頁。
623「パーソナリティの歪み」の定義は、本章においては、もうすでに挙げられている（6.8.3.をご参照ください）。

とてもこの雨の中で生き通せるとは考えられなかった。でもわりあいに強く、私の口から大豆とつばを飲み込もうとするこの幼い子の姿が、私の男性化してきた心に変な刺激を与えて、私は泣くべからざるときに泣いてしまった。[624]

同じく、加藤淑子は、ソ連によって占領された満洲において、子供に食料を供給するため、自分の人生を危険にさらしながら、倉庫などに内密に入ったことがあった。[625]

このように、敗戦時に、日本人の女性は精神力の強さを発揮せざるを得なかった。

6.8.8. 避難生活の特徴：集団的行為における問題

満洲国の崩壊後、女性と子供は、学校などのような建物の中で準備された収容所に留まっていた。そして、日本への引き揚げのプロセスが始まった時、日本人は、集団ごとに配属され、日本への到着まで、集団で行動しなければならなかった。集団的活動の利点としては、相互支援、相互護衛ということが挙げられるが、伝染病の普及の速さ、集団的責任（溝口によれば、引き揚げ団の一員が禁止された貴重品を日本に持って帰りたいと発見されたら、引き揚げ団全体の引き揚げは中止になるという規則が存在した[626]、相互不信、議論の際、集団の分裂にまで至った、意見の衝突も起こった。藤原ていは、自分が配属された集団における不便さについて回想する際、盗難件数の多さとそれに伴った相互不信、団体の一員による他の一員の行動の監視（藤原ていによれば、お金を隠したと見た時、他者の監視から避けることは難しかった）、個人の問題により集団の利便性を優先しなければならないことを挙げている。例えば、引き揚げの際、大変な病気にかかった藤原の子供から漂う臭気に対して、列車に乗っていた集団の一員は全員で、苦情を繰り返し、藤原をいじめていたが、当時の状況の中で藤原が対策を取ることができなかったこと、子供が大変な病気に悩んでいることに同情した人は、一人もいなかった。そして、著者を感動させたことは、1年ぐらい苦楽を共にしていた集団の一員は、ある問題について相互理解ができず、分裂するという結果になった。[627]

満洲における日本人は、一方では、職場や、教育機関などにおいて、集団としての活動に成功していたが、引き揚げの経験が示しているように、緊急状態においては、集団の一員の間の摩擦は避け難いものとなった。引き揚げ団における人間関係の問題の原因としては、敗戦後の混乱の影響により、精神的なトラウマから回復しなかった人が多かったこと（藤原て

[624] 藤原、同上、149頁。
[625] 石村、同上、40頁。
[626] 溝口、同上、203頁。
[627] 藤原、同上、77－139頁。

いが回想するように、集団の一員の中で、振舞いがおかしい人が存在した）[628]、生き残るため、個人の利益を先に考える必要性が挙げられる。

6.8.9. 日本への帰国後：予測を超えた状況の厳しさ

満洲から日本へ引き揚げた日本人は、敗戦国における生活状況が好ましくないと予測していたが、当時の日本においては「衣食住」に関する問題に限らず、敗戦国の国民の社会的地位が変わったこと、満洲からの引き揚げ者に対する敵意的な態度を持つ日本人が多いことは、引き揚げてきた多くの日本人にとって衝撃的な発見となった。ソ連軍により占領された日本から避難した日本人は、日本がアメリカ兵によって占領されていることを目撃した。勝山が、日本に辿り着いてからの、最初の印象を次のように描いている：

> アメリカに占領されてしまった母国でこれから暮らしていくのかと思えば、口惜しく、気が滅入るばかりだった。[629]

著者によれば、アメリカ兵は、支配者としての立場を取り、空港で通路を二分に分けて、日本人にとって最も狭い方を与え、飢えている日本人の子供にお菓子を投げて笑っていたことを目撃した。

しかし、それよりも、ある日本人がアメリカ兵を仰ぐことが特に痛ましい事実として記憶に残っていた。

小宮は、日本人女性とアメリカの兵の「友人関係」の場面を次のように記述している：

> (略)口紅を大きくぬった丸顔の娘は、自ら彼（ここで、アメリカの兵士ー著者）の腰にからみついてしまったのだ。ぼくは頭の中がシーンとなるほどのショックを受けた。[630]

日本に辿り着いた日本人は、地元の日本人により嫌がらせを受けていることにも激怒した。困窮状態に陥った日本国内の日本人にとって、人口の増加が、飢餓の問題をそれより一層悪化させることを意味した。そして、飢餓、病気、精神的疲労により落ち着くことのできなかった子供も迷惑をかけるものとして見られていた。藤原ていの服装が、引き揚げの長い旅の結果、生地は穴がいっぱいで、汚れた状態であった理由により、男性により皮肉的なジ

---

[628] 同上、125 頁。
[629] 勝山、同上、236 頁。
[630] 小宮、同上、198 頁。

ョークの対象となった。[631]

そして、前章で既に言及したように、日本内地の日本人の意見では、満洲における日本人が裕福な生活を送っていたため、西洋風の服装を着ていた子供、大人も奇異なものとして見られ、学校のような公的な場所で恨みを買ったことが多かった。

終戦後の満洲においての混乱状態の中で存在していた多くの日本人は、故郷に戻るという、一つだけの希望を抱いていた。しかし、辛うじて日本に辿りついた時、日本国内における状態が、満洲とはさほど異なっていない、ということを発見した時に、失望感に陥ることが多かった。

まとめとして

以上、満洲における日本人の「楽な生活」の時期は、日本が第二次世界大戦に突入した時点から終わることが言える。その後、年齢と性別にも関わらず、日本人の自由が次第にさらに制限されるようになっていった。

「満洲国」の政府によって訴えられていたイデオロギーは、満洲において滞在していた日本人の人生に、意義を与えていたが、日本人が、当時の現実性を完全に理解できたのは、随分時間が経ってからのことである。

6.9. 心理的防衛の方法[632]

心理的防衛方法を検討する際、主に第二次世界大戦の時期と日本敗戦後の時期に注目を当てる。

心理的防衛方法は、文化、個人のパーソナリティなどによって、異なることがある。

満洲において居住していた日本人は、特に第二次世界大戦の時期、日本の敗戦後に伴う満洲国の崩壊の時期に起きた苦難を乗り越えることが必要であり、心理的防衛を適用することは、生き残るための不可欠な条件となった。日本人の回想記を通じて、満洲における日本人がどのような心理的防衛方法を適用したかを明らかにした。

6.9.1. 開拓団における「退屈さ」との戦い方法：日本風の伝統的な祭り

満洲における日本人の農民は、農業に従事した時期は、5 月から 10 月にかけての短い期間であったが、農業が停止する頃は、長くて、退屈そうに感じられていた。僻地に位置された開拓団は、街からもかなり離れていたこと、日本人の農民が貧乏な生活を送っていたこと

631 藤原、同上、232 頁。
632 「心理的防衛の方法」の定義は、前章において、既に挙げられている。（5.4.をご参照下さい。）

は、人々の遊ぶ方法の選択肢を制限した。そういう状況で、伝統的な祭り、農業に関わる儀式などは大きい意義を持っていた。小宮は収穫祭、とそれに次ぐとんど焼きの日を次のように描いている：

> 男たちは選りすぐった大地からの恵みを抱えて集まり、祭壇に飾りつけた。女たちは取れたばかりの材料を自慢の腕で料理し、全員車座になって分かち合い、酒を酌み交わして丸一日を思いっきり騒ぎとおした。[633]

> (略)大人も子供もともにすっかり遊び疲れて、夕焼けの中を引き上げるときは、「あー今年も終わってしまったなぁー」という感慨が体全体をおおった。[634]

このように、満洲における日本人農民は、稀にある祭りの過ごし方を華々しいものにするため、全力を尽くしていた。

6.9.2. 創造的活動

N.フルスタリョヴァによれば、ネガティブな出来事の繰り返し、精神にとって不快的な雰囲気は、人間の心理に悪影響を与え、抵抗感を促すが、アグレッシブな振る舞いも刺激することができた。精神力の弱い子供は、特にこの悪影響を受けやすいものである。しかし、人間の心の中に集まったネガティブなエネルギーを正しく適用すれば、精神状態が安定することだけに限らず、個人に特別の特技を身に付けることもできる。[635]

国語の教師であった溝口は、生徒に詩と日記を書くことを宿題として任せた。溝口が生徒に教えたように、詩を書くため、才能より、自己を表現する意志が重視されていた。溝口が回想しているように、「暗い感じさえする」生徒も、詩と日記の執筆を通じて、自分の表現力を遥かに発展させた。溝口は、創造的活動の意義について、「これは意外な功罪をもたらした。が、ともかく生徒とのいくばくかの心の交流が計られた」[636]という意見を取り上げている。

6.9.3. ネガティブなシチュエーションに対する態度の変化、ユーモア感の使用

本章で既に述べたように、満洲における多くの日本人は、満洲国の政府によって唱えられ

---

[633] 小宮、同上、68 頁。
[634] 同上、69 頁
[635] Хрусталева Н., 同上、225-232 頁。
[636] 溝口、同上、158 頁。

ていた「五族協和」、「王道楽土」というイデオロギーが、実際の状況と異なることがますます分かるようになってきた。ある日本人は、国家によって導入された儀式の偽装性を感じていたが、批判すること、抵抗することが禁止されていたため、この不条理な面を風刺する方法を適用した。例えば、満洲国にある全ての学校では、毎朝、教員と生徒は、天皇が居住している方向に向かって礼をすることが義務づけられていた。天皇が東京に居住していたため、頭を「東」の方へ向けていわゆる「東方遥拝」をした。教師の稲毛は、許可を得ずに、独立した詳細な計らいをし、頭を向けるべき正確な「方向」を確認した。稲毛は、自分の生徒に対し、正確な「東方遥拝式」を教えたが、ある日、その他の教育機関からの客と生徒の両親も参加した合同授業を開催した時、稲毛の生徒と授業の客が、異なる方向へ頭を向けたため、儀式は「神聖な意義」を失った：

> 稲毛先生の言われた方角が正しいものだから、先生と同じように南東を向かなければ、と思うのに、父親をはじめ来賓はみんな、いつものように東方へ向いている―、どうしよう！正直迷ったが、私はとうとう、正しくない方角、来賓たちと同じ東方を向いてしまった。[637]

このように、永井は、満洲国の政府が人に国家にとって神聖な儀式を強いたが、行政機関の人さえも、「東方遥拝」の際、頭をどの方向へ向かうべきかについて知らなかったことを示している。つまり、当時学生年齢だった永井さえも、満洲における日本人の日常的儀式については、それに従う人々がその本当の意味と内容についてあまり深く考えておらず、自発的な行為を繰り返しているばかりである、ということが分かった。

6.9.4. 価値観の歪み：人の死亡、悩みに関する無関心

本項で既に述べたように、第二次世界大戦の時代、満洲の学校において教育のプログラムが訂正されたこと限らず、生徒の育成のし方も変更させられ、多くの生徒は耐え難い体操の練習を受けていた。

生徒が、労働力として、開拓団に送られたこともあり、後に生徒が両親を懐かしがりはじめ、指導員に家に戻る許可を依頼したものの、この場合も、指導員は「子供らしい」心の弱さを表すことを禁止しており、我慢する能力を培わせた。

このように、若い世代の日本人は、自分の苦労に限らず、他者の悩みに対しても冷静な態度を保つことが身につけられた。しかし、他者の苦労に対する同情を抑える能力は、特に敗

[637] 永井、同上、132 頁。

戦の状態で固められ、死者、負傷者の数が多く出てきた時に日本人をさらに来る精神的なトラウマから守っていた。例えば、勝山妍子は、軍人の軍病院に勤務した時に、患者の唸り声に気が付かなくなったと回想している。[638]

藤原ていは、避難民の収容所に留まった時、引き揚げの時、頻繁に子供の死去、大人の自決を目撃したため、時折、もうすぐ自分の順番も来ると、冷静に思っていた。藤原ていは、精神的に衝撃的な場面に直面したことがある。その一つとしては、引き揚げ途中で、ある女性が、自分の子供の死亡を受け止めることが出来なかったため、坂を飛び降りることを決める。当時、藤原にとって、自分の家族の安全性を守ることが優先されたため、他者の死去を悼むため余裕と時間がなかった。[639]

他者の悩みに対する冷静な態度を培ってきた日本人は、精神的なトラウマから自己を守り、大変な状態においても判断能力をも保つことができた。

6.9.5. 通常な生活様式を模倣すること

本項で既に述べたように、1945 年は、満洲における日本人にとって、庶民を守るべき行政府、財産と親しい人の喪失などのような不幸な出来事をもたらしたが、日本への引き揚げが始まる時まで、一年以上の時期を乗り越えることが必要となったため、自分の人生をポジティブな瞬間で埋めることが必要であった。多くの日本人は、自ら関心を「つまらない」ことに向け、不安感を抑えていた。

永井瑞江は、日本人の女性たちの話し合いを聞いた場面について回想し、テーマとしては、肌をきれいに保つことの必要性などのような、当時において不適切な心配事を含む会話の一部を取り上げている：

> いつ日本に帰ることができるか、明日の命も分からない私たちだけれど、美しくありたいという気持ちを忘れてはなりませんね、この気持ちがあればきっと生き抜いていかれる、今生き抜けば、私たちは未来があるのです、がんばりましょうよ。[640]

藤原ていも、避難生活について回想する際、一年間一緒に過ごした避難民集団の全員で、忘年会などのような祭りを祝ったことについて回想している。[641]

---

638 勝山、同上、125 頁。
639 藤原、同上、153 頁。
640 永井、同上、252 頁。
641 藤原、同上、69 頁。

成人にとっては、押し迫った問題からそれ以外のことに目をそらすことは、容易ではなかったが、子供にとって、遊ぶことに集中することは、自然なこととして見えていた。小宮は、満洲での生活における最も不安定な時期においても、自分で「玩具」を作って、ゲームをしていた。当時の日本人の子供の中で、「メンコ」というゲームが流行っており、小宮は当時を次のように回想している：

（略）ストーブの周囲にはおびただしいタバコの空き箱が落ちていた。ぼくはそれを、宝物を発見したかのように、高鳴る胸を押さえつつ、あらゆるポケットに押し込み、さらに両手にかかえて家に帰った。（略）長屋の子供の世界では、タバコの空箱で作ったメンコが大流行で、秘術を尽くして取り合いに熱中していた。[642]

1945－1946 年の時期に、多くの日本人は、あらゆる仕事を掴んで、そこに没頭し、様々な活動に全注目を当てて、この行為を通じて、恐怖感から自分の精神を守ることを目指した。

6.9.6. 「あきらめる」能力を身に付けること

回想記の著者は、ソ連兵、中国人、朝鮮人により財産を盗まれた経験について記述する際、その喪失に関する失望感を表す例は多くない。多くの日本人は、自分が直面している苦難が、関東軍の不正な行為の結果であることと、理解していたからである。

小宮は、重大な喪失を受ける際、「あきらめる」ことの重要性について、自分の家族の経験を通じて、考察している。多くの日本人の住宅に、ソ連兵、中国人が押し寄せ、貴重なものを提出することを強請り、家のオーナの目の前で、好きなものを持って帰ったりして、殆どの場合、日本人は自分の財産を保護することができなかった。小宮が回想するように、冬の時、自分の家に短剣とピストルを持った三人の中国人が押しかけ、家族の目の前で、ストーブの煙突を外し、ストーブの台と一緒に持ち運んで行ってしまう。小宮の家族は、この事件がなかったかのように、自然な振る舞いを保つことができたが、著者は、盗難に対する家族の冷静な態度を、次のように説明している：

> かつて日本軍が必要なものを中国人から有無をいわず奪った。だから、その償いがぼくたちにめぐってきただけだと、あきらめざるを得なかった。[643]

642 小宮、同上、149 頁。
643 小宮、同上、149 頁。

他の場面では、小宮の父が警察により逮捕され、体罰を伴った尋問を受けているが、家族は、父がせめて殺されず、家に戻ることができたことに喜び、この出来事を祝っている。

このように、日本人は、自分に起きた不幸な出来事を、分析する勇気を持っていたため、精神的な負担を減らすことができた。

6.9.7. 学生の精神的な支援としての教師の重要性

戦争とその後の時期に、成人より精神が脆い青年世代は、立場が特に弱いため、彼らに精神的サポートを与えることが重要であると思った日本人は、政権を代表する人との議論することを恐れていなかった。

本項で既に述べたように、戦争の時期に、工場、開拓団で働いていた生徒に対し、軍隊のように厳しい規律が適用されたため、学生は、両親に苦情を述べることを恐れるようになったという状態まで、従順な態度が培われた。年齢の理由により、精神の脆い生徒は、成人と同等のレベルで厳しく扱われたため、大変な労働条件に耐えられなかった人もいた。しかし、生徒の権利を守ることを恐れていなかった学校の職員もいて、勝山が回想するように、工場に生徒を送った各学校の校長は、軍の側から感謝状を受けたが、勝山が属していた学校の校長は、感謝状を拒否し、その代わりに、自分の学生にお茶、「少しばかりの」おやつ、そして休憩時間が与えられるように、軍隊の代表者を説得した。[644]しかし、著者が追加するように、全ての学校の校長が自分の生徒を守ったわけではなかった。

小宮が回想するように、敗戦後の時期に、学校に通うことの出来なかった子供のことを心配した人が現れ、自ら「教室」を設けた。

戦争時代、政府の指示により押し付けられた学校の生徒の扱いの厳しさ、当時の社会に漂った不安感を考慮に入れば、青年世代の日本人に精神的なサポートを与えた教育機関の職員の役割が非常に高かったと思われる。

6.9.8. 日本人の母親：子供に見つけた生きる動機

本項で既に述べたように、1945 年に、多くの日本人の女性は、男性の保護を失い、自分の家族の運命に対して、完全な責任を取るようになった。加藤淑子、藤原てい、永井の母などは、小さい子供を持っていたため、その他の女性よりも早く精神的に、肉体的に疲れたことがあった。永井瑞江は、引き揚げの時期を回想する際、母がいつも寝不足、食事も不足の状態ままで、子供を必需品で補うため、一生懸命努力していた。多くの女性は、もう生きる

644 勝山、同上、78 頁。

希望がないと感じた時期があったにも関わらず、多くの場合、生き残りに戦い続けていた。女性は、精神的動機付けとして、自分の子供を示している。藤原ていは、自分自身を次のような方法で励ましていた：

> 私がもし病気にでもなったら、そのときを考えると、すぐ目の前に三人の子供がやせほそって、私の寝ているまえでじっとして座っている姿が思い浮かばれて、ぞっとした。私の病気は、子ども三人の死を意味するものであった。[645]

藤原ていは、引き揚げ途中で、自殺について考えることが数回あったほど、忍耐力が限界となった。2 人の子供の存在は、一方では余計な負担であったが、（もう既に述べたように、多くの日本人女性は、自分の子供を引揚げ途中で放棄した人が多かった）それと同時に、藤原が全ての困難を乗り越えられた主な理由としては、自分の事より子供の事の方を大切にしていた気持ちの表れであると考えられる。

まとめとして

以上のことから、1920－1940 年代の満洲において居住していた多くの日本人は、精神的強さを保つことの大切さを理解していたため、極端な状態においても、生き残ることができた。

本章のまとめとして

満洲における日本人の経験を、精神面から見れば、幸せと不幸の両方を含むものであることが明確である。古い伝統に従い続けていた、島国である日本から到着した日本人は、大陸において形成された国際社会特有の自由な精神を吹き込み、自分の生活も見直すことができた。第二次世界大戦が始まるまで、満洲における生活は、困難も存在したにもかかわらず、幸せな「青春期」、「子供の頃」として記憶に残っている。

第二次世界大戦に参入した大日本帝国は、日本国内に限らず、満洲国に居住する日本人にも、天皇と国家に対する献身的な態度を要求したため、日本人は、自由を失いつつあると感じていた。満洲国の政権は、日本人の子供を、将来の大東亜の支配者として育成することを目指し、その目的で変更させられた教育制度は、子供に精神的抑圧を与え、子供のパーソナリティも、政府にとって利益のある方法で強制的に変えさせることを目指していた。

日本人は、回想記で自分が認めている事実は、最後まで満洲国家を信頼し、自分の運命、自分の安全性を、国家の責任下に置いていたため、日本が敗戦状態となった時、困惑してし

---

[645] 藤原、同上、75 頁。

まうという結果になった。

満洲国が崩壊してから、一般人の日本人は、自分自身と家族を守ることができるか、という能力を発揮しなければならなかった。回想記の分析が示しているように、特に日本人の女性は、極端な状態においても、精神的強さを残すことができた。

回想記が示しているように、満洲における日本人は、精神的防衛方法としては、信仰などのような、「他者からの」支援ではなく、自分の忍耐力を鍛えることを選んだ。

ここまでは、1920－1940 年代の満洲において居住していた日本人の精神的状態とイミグレーションの状況において、生き残るために必要な心理的防衛方法を検討してきた。次章では、回想記で、自分の精神状態、心理的問題と心理的防衛方法を記述してきた、ロシア人と日本人の経験について対照比較を試みる。

第 7 章　1920－1940 年代の満洲におけるロシア人と日本人の精神的状態、心理的防衛方法

ロシア人と日本人の経験を基にした対照分析

第 1 章で既に述べたように、回想録を執筆する目標の一つとして、当時における著者の精神状態、つまり、自分が関わっている「グローバル」と「ローカル」に関する出来事に対する態度を示すことである。N.フルスタリョヴァは、一般の人によって書かれた日記、回想記などを学術的な視点から貴重な情報源として取り上げ、エミグラントの心理的状態についての検討においても、多くの問題点を表面に現すことを助ける資料として挙げている。

本章においては、1920－1940 年代の満洲に居住していたロシア人と日本人の精神的状態、そして、適応過程における問題、自己アイデンティティについての考察、心理的防衛方法における対照分析を試みる。

「移民者」の心理的問題、親しみのない環境への適応過程、そして、適応が成立するために必要な条件という最も重要な問題については、多くの研究者の関心を引いている。

ロシア心理学者 B.アナニエフは、異郷の環境における成功的なアダプテーションの条件として、以下のファクターを取り上げている：

1. コミュニケーションの分野：社会性における能力を発揮すること、社会的知性と社会的スキルを持つこと

2. 活動の分野：専門的、労働的能力を発揮する意志、必要なレベルの専門的特技、労働者の所得能力を持つこと

3. コグニションの分野：移住地として選ばれた国の言語、文化を学ぶこと、再教育、再訓練を受けること、新しい情報を取得する方法を探すこと[646]

しかし、ロシア心理学者の N.フルスタリョヴァは、個人の成功的なインテグレーションの条件としては、文化的、経済的、物質的、宗教的、社会的、道徳的、心理的、政治的という全てのファクターにおける、安定的な状態が不可欠であると述べている。

その上、研究者が示しているように、異郷の環境の中に存在している個人の安定した生活を妨げることとしては、「カルチャー・ショック」だけではなく、言語的、社会的、地理的、心理的、気候的ショックなども登場する。

本章においては、イミグレセーションの状況への適応問題を、1920−1940 年代の満洲において、居住していたロシア人と日本人の経験を基にして分析する。

ロシア人と日本人は、文化、言語、信仰、価値観、教育など、様々な生活面においては、

---

[646] Хрусталева Н., 同上、16 頁。

共通点が少ない。その上、満洲における生活条件、法的地位、教育、就職などにおける可能性においても、相違点が見られた。しかし、ロシア人も、日本人も、適応性の問題に直面し、多くの歴史的出来事の影響も、同等に受けていたと思われる。

ここでは、ロシア人と日本人が体験した精神的問題、アイデンティティに関する問題を整理することを目標としているため、歴史的出来事の順番を守らないこともある。

7.1. 精神的状態、適応の問題、自己アイデンティティについての考察における、対象分析

ロシア人と日本人は、1920－1940 年代の満洲において、異なる生活条件があったが、心理的問題においては、共通点が見られている。ここでは、同上の問題の理由としては、どのようなファクターが登場してきたかについて考察する。

7.1.1. 満州の気候と地理的特徴が精神的状態へ及ぼす影響について

満洲の気候の特徴としては、四季の気温の差が大きいことが挙げられる。ロシア人は、ロシア国内の気候と同質性があったため、特に不便さを感じることはなかった。それにも関わらず、異郷における領土の広さ、森林の少なさ、荒れた草原の多さのため、ハルビン、新京などのような都市以外の地域の風景と雰囲気のうっとうしさが、人の気持ちにも悲観的な影響を与えていた。

都会生活を送っていたロシア人と日本人は、様々な冬遊びをしながら、寒い時期の特徴をも利益的に使用することができた。

しかしその一方で、開拓団において住んでいた小宮は、冬の期間は、農業活動が停止するため、非常に長く、退屈さをもたらすものと回想し、農民にとっては暴飲がそれを誤魔化す方法の一つであった。

全体的に言えば、満洲の気候は、日本人に「物質的」な意味での多くの不便さをもたらしたが（例えば、冬の時、重そうな上着を着る必要性）、精神状態への影響は、「開拓団」の住民だけに関わる問題であった。

ロシア人について言えば、N.イルイナは、満洲の気候に対し、嫌悪感を抱いていたが、自分のムードに直接に影響するものとしてではなく、落ち込んでいる状態にある時、そのネガティブな気持ちが更に深刻化たことがあったと述べている。

以上、ロシア人と日本人の都会生活者は、満洲の地理的、気候的欠点を、農民程強く感じていたとは思えない。しかし、秋と冬のうっとうしい風景は、うつ病的状態を更に悪化させることもあった。

7.1.2. 「歴史的トラウマ」：自分の「世界」が崩壊したという感覚

N. フルスタリョヴァが述べているように、個人において慣れていた社会制度の崩壊、つまりそれは、文化的、知的、物質的遺産を失うこと、そして自分の居住地から必然的な移住というような「物質的」な意味での喪失は個人の精神に打撃を与え得るが、個人の理想、信念の崩壊という「精神的」な喪失に関しても、深刻なトラウマになる。そのような体験を受けた個人は、「自分の世界が崩壊する」と感じている。

ロシア人と日本人の回想記の著者は、様々な歴史的激変を、特に痛ましい経験として取り上げている。

多くの「白系」ロシア人の人生に混乱をもたらす時期としては、二つ取り上げられる。一つは、1917年のロシア革命とそれに伴うロシア内戦である。その際、多くのロシア人は、地位、財産、信仰の自由などを失うだけではなく、故郷に戻ることも出来なくなるのである。そして、 満洲への移住も、突発的で混沌としたプロセスであったため、迅速に荷物を纏めたロシア人は、不便な列車の中で長い移動の旅をしなければならなかった。

その上、「白系」亡命ロシア人の満洲への大量流入は、そこに既に居住していたロシア人に迷惑をかけるような、望ましくない出来事であった。

「白系」亡命ロシア人は、自分の努力により、満洲において完全な生活空間を再形成することができたが、1945年の満洲に侵攻するソ連兵の暴行行為により、再び多数の喪失被害を受けた。「白系」ロシア人の家財が没収され、図書館、及び新聞と雑誌の出版社の破壊行為は、満洲におけるロシア人の存在の「跡」を撲滅することを目指していた。

E. ラチンスカヤ：

当然、我々によって数十年間位、健在していた、すばらしい図書館も、ソ連からの野蛮人の関心の下に置かれた。[647]

日本人の場合には、1945 年の「満州国」の崩壊によって、全ての人生が覆された。多くの日本人男性は、満州国の建設に精を出していたからである。「満州国」が存在しなくなったことは、溝口の父にとって、人生における意味が失われたことと同等であった。女性も、その後の進路に迷ったかのような状態にあった。

以上、ロシア人と日本人にとって、自分の「世界」が崩壊したということは、最も痛ましい経験であった。その被害においては、物質的な面（財産の喪失など）より、個人の信念、理想が崩壊したことが、個人の精神への影響が大きかった。その理由により、1917 年の革

[647] Рачинская Е., 同上、69 頁。

命後に、故郷を失った「白系」ロシア人と「満州国」を失った日本人の自殺者が多かったと思われる。

7.1.3. 「心理学的双対性」の問題の多種多様性

もう既に言及されN. フルスタリョヴァは、「心理学的双対性」を、異郷に生きている多くの人の世界観の特徴として定義している。希望的観測は、そのような考え方の一形態である。自分の妄想をやめることを希望しない個人は、遅かれ早かれ、失望感や後悔などを抱くようになる。

「白系」ロシア人は、ロシアにおいて樹立された「ソ連制度」を、一時的な状態として見ており、その崩壊を待つことは長い時間はかからないと信じていた。例えば、A. セレブレニコフは、ハルビンに辿り着いたばかりの時に中国地域の研究を今後の活動として選んだが、その実績を、ソ連制度が全廃された、ロシアへ戻った時に適用することを計画していた。A. セレブレニコフのような素朴な考え方をしていた、ロシア人が多かったが、その理由としては、ロシアにおける実体に関する情報が不足していたことと、革命と内戦の発生後からは、時間がそれ程経っていなかったため、歴史的変化のスケールを把握することが難しかったことが挙げられる。

しかし、時間が経ってから、満洲に居住していたロシア人は、新しい妄想に従うようになる。多くのロシア人は、社会のマジョリティの行為を模範としていた。N. イルイナは、1935年、中東鉄道の経営権が日本側に引き渡された後、ソ連へのロシア人の大量移住を眺めた時、恨みを抑えることができなかった。当時のN. イルイナは、中国に残ることを選ぶ自分の母の決意を、人生を改善させる貴重な機会を失うこととしても見ていた。ロシアへ戻ったロシア人の大量の逮捕について知ったのは、時間が随分経ってからのことである。

ソ連国側も、ロシア国内における幸せな生活についてのニュースを、1940年代の在満ロシア人に向けて、多く流すことを始める。O. ゴンチャレンコによれば、そのニュースは、ソ連行政機関により緻密に考え抜かれた戦略であったため、信じ込んだ人も多かった。1945年のハルビンへのソ連兵の入京を大歓迎したことについても、そのプロパガンダの影響を読み取れる。

日本人は、「満洲国」時代の「王道楽土」、「五族協和」というイデオロギーに従い、「理想的」な国家を作ることを目指していた 。福山の父の同僚との話し合い全ては、新しい国家づくりをめぐるものであった。

「満州国」の行政機関に勤めていた柳田の同僚は、任された仕事を完遂するため、事務室で徹夜をしていた。行政機関の職員にとっては、「満洲国」をつくることが人生の全てのようであった。

しかし、それと同時に、子供であった勝山は、日常生活における中国人と日本人の子供の関係に注目し、「五族協和」に相当するであろうと思われる友好関係を目撃したことがなかったと述べている。

このように、「白系」ロシア人の場合、「心理的双対性」という意識の特徴は、いつかロシアに必ず明るい将来が来ると夢見ながら、現在を無視しているかのような感覚で表れていた。

そして、N. イルイナと同じく、多くのロシア人は、満洲における「みすぼらしい」生活と「ソ連」における安定そうな生活を比較しながら、自分の生活状況を「悼んでいた」こともあった。

そして、日本人の場合は、「心理的双対性」という意識の特徴はイデオロギー的抑圧の下に形成されたものであった。「満州国」のイデオロギーを形成しようとしていた行政機関は、在満日本人の世界観と価値観の「モデル」を立案した。

7.1.4. 異郷における生活状況への適応が完遂できなかった人：ロシア人と日本人の経験

ロシア心理学者、N.フルスタリョヴァによれば、不成功の適応要因とその結果としては、「個性の歪み」という状態が発生し得る。「個性の歪み」は、次のような形を取ることができる：神経症、自殺行為、暴飲、孤独感、家族におけるコンフリクト、郷愁、犯罪行為 、自己評価の低下、子供の逸脱行為などである。[648]

ロシア人と日本人の回想記の分析も示しているように、イミグレーションの状況への適応の成功的なプロセスは、生活状況という（外的要因）のことに限らず、個人のパーソナリティの特徴、意志の強さというような（裏内面的要因）のファクターにも、依存している。ロシア人と日本人の回想記において取り上げられた具体的な例が、適応能力を欠いている人のポートレートも提示している。

「白系」亡命ロシア人の中では、満洲への必然的移住と新しい生活を形成することに伴う困難を乗り越えられなかった人も多かった。

N.モクリンスカヤの家族は、ロシア国内で全ての財産を失い、父も行方不明となる。ハルビンにおける新しい生活は、極端な貧困生活から始まった。時間が経ってから、 状態の明らかな改善が達成できたが、母の精神は改善せず、子育てを怠ること、全ての収入を浪費すること、ヒステリックを起こすことの繰り返しなどというような問題があった。食料不足に悩んでいた娘たちが、自分の母について、まるで人が変わったかのような気持ちを抱いていた。

---

[648] Хрусталева Н., 同上、12 頁。

モスクワ劇座の元女優の E. コルナコヴァは、ハルビンに、大実業家の妻として移住したため、贅沢な生活を送っていた。それにも関わらず、プリマー・女優としてのキャリアが続けられないこと、子供が生まれないことなどが、E. コルナコヴァの精神状態に悪影響を与えていた。専門を変える希望がなかったため、失望感を募らせ、暴飲という状態までになった。

以上、E. コルナコヴァの生活条件は、N. モクリンスカヤの母より好ましいものであったにも関わらず、この場合にも、イミグレーション条件への適応が果たせなかったと思われる。

日本人について言うと、永井は、「大陸浪人」の娘である、海老原姉妹との友人関係を結ぶ。新しい言葉の意味については、自分の父に聞いて、次のような説明を受けている：

> 浪人というのは、どこの会社にも所属しない、何にも縛られない 自由人、中には理想を見失って単なる馬賊になってしまった人もいるが、満洲国建設に役に立った人も少なくない。[649]

回想記では、永井が、海老原姉妹の生活条件について記述している。両親は無期限の旅へ出かけ、家事を学生年齢の娘たちに任せる。海老原姉妹の住宅を訪れた永井は、生活困窮者特有の居住条件、食料品の不足、面倒を見る大人がいない、ということに注目している。[650]

永井は、海老原姉妹の生活条件が、満洲における一般の日本人よりも劣っているとして取り上げている。そして、永井の回想記においては、稲毛先生についても、不安定な性格を持つ人として挙げている。稲毛先生によって指導されていたクラスの生徒の中には、自分の息子もおり、他の生徒に対して怒りを抑えられなかった彼は、自分の息子に対しても、クラスメートの目の前で倒れるほど強い体罰を与えたことがある。[651]永井の父は、稲毛先生のアグレッシブな振る舞いの理由については、九州の僻地からの出身者特有の性格であり、大日本帝国の極端な愛国者としての振る舞いを見せていたと述べている。当時、第二次世界大戦の戦局が厳しくなったため、稲毛先生がこのような行為を通じて、自分の激怒している気持ちを表していた。そして、前章で既に述べたように、満洲の僻地における教師の仕事の条件は、厳しかったため、稲毛先生が新しい環境に適応できなかったことも頷ける。

ロシア人と日本人の例が示しているように、イミグレーションの状況においては、経済的基盤を確保することだけでは、必ずしも適応を成し遂げるわけではない。贅沢な生活を送っ

---

649 永井、同上、95 頁。
650 永井、同上、84－91 頁。
651 永井、同上、128 頁。

ていた女優の E.コルナコヴァは、自分の理想に相当する活動に従事することが出来ず、社会における自分の役割も完全に理解できなかった。時間が経ってから、暴飲するようになった E.コルナコヴァは、自分の養子の面度を見ることも止めてしまう。

稲毛先生の例について言えば、自分によって理想化された、社会秩序が乱れていることを受けとめることが出来なかったため、精神も落ち着くことができなかったと思われる。イミグレーションの状況への適応が出来なかったロシア人と日本人の共通点としては、全ての場合には、自分の子供にも様々な意味での被害を与えたことが挙げられる。

7.1.5. 落ち込んでいる状態の理由についての考察

もう既に述べたように、回想記の執筆の目的は、特別の時期における出来事を記述することに限らず、その出来事が著者と周りの人の精神状態へどのような影響を与えていたかについて、語ることでもある。

様々な年齢のロシア人と日本人は、「行き詰って」いる状態に直面する経験があった。

N.イルイナは、気に入った服装を買うことに自己を制限し、楽しみが少ない青年時代であった時、当時については、「人生には基盤がなかったり、何が欲しいか、どの目標に向かうか、何を信じるか、何を好むかわからなかった」と記している。[652]

N.イルイナの母である E.ヴォエイコヴァが、ロシアに戻った母に宛てられた手紙の中においては、「滞納の理由で、(取り寄せた) 新聞の発送は中断させられた。痛い程、涙が出る程、くやしい！」、「とても気分が悪い」というエモーションを表現している。[653]

当時、E.ヴォエイコヴァは夫との離婚という「ショック」を受け、長い期間、落ち込んでいる状態にあった。

そして、社会的抑圧も、ロシア人と日本人に影響を与えていた。

1930 年代のハルビンにおいては、イデオロギー的対立が強まり、『ファシスト党』などは一般の人への影響を与えるためのリソースが多かった。例えば、『チュラエフカ』という、詩術クラブの一員であった A. スロボッチコフは、当時の状況を以下のように記述している：

> ファシスト党の下にあった『ロシアのクラブ』は、我々を誘惑するため、全力を尽くしていた。彼らは次のようなプランに従っていた：我々は、朝の新聞では次のような報告を見つける：「今日、『ロシアのクラブ』では、…時に、…氏が発表する

652 Ильина Н., 同上、53 頁。

653 Воейкова - Ильина Е., 同上、75 頁。

予定。その後、…氏、…氏などという、詩人も自分の詩を朗読する。（ここでは、『チュラエフカ』の一員の名前が挙げられている）。しかし、我々は誘われたことがなく、参加する希望があるかどうかについても、誰も聞いていなかった。しかし、当時のハルビンの政治状況が厳しかったため、参加を拒否することが危なかった」。[654]

日本人は、日本が第二次世界大戦に参戦する時期から、学校などのような「社会組織」において、精神的抑圧を受けていた。永井、福山は、「非国民的」行為をしないように、教師などの監視の下で活動していた。その理由により、福山は、細かい誤りをすることも、恐れていた。満人との友人関係に関し、自分の教師により批判された永井は、自分の自由が制限されているかのように感じていた。

ロシア人と日本人は、社会的抑圧について書いているが、ロシア人は、個人的問題に集中することが多い。E.ヴォエイコヴァにとっては、自分の家族が崩壊するというパーソナルな悲劇が、当時の満洲の社会における政治的問題より重要であった。

その一方で、福山は、生徒に対する、学校における厳しい扱いについて、自分の両親に話したことさえもなかった。このように、福山は、一方では、自分の家庭で落ち着いた生活を送っていたが、「社会的な生活」を送っていた場所である学校においては、恐怖、緊張感、自由の制限というようなネガティブなエモーションを抱いていた。

7.1.6. 孤独の問題

ロシア心理学者の N.フルスタリョヴァによれば、個人が完全な社会的生活を送ることができるように、様々な社会的組織の存在だけでは済まず、個人の努力も必要な条件であるという。

もちろん、満洲において僻地に位置していた田舎、「開拓団」とは異なり、都会における社会生活の方は、さらに充実していた。しかし、都会生活者の中でも、孤独な生活を送る人が多かった。

ロシア人と日本人の子供の共通点としては、孤独感に直面した経験を共有することが挙げられる。

O.イルイナ・ライリは、お金を稼ぐことで忙しかった母と姉の日ごろの不在を、痛ましい経験として回想している。それと同時に、姉の N.イルイナは、O.イルイナ・ライリの性格の特徴に注目し、彼女は、様々な問題を気にすること、自分の「世界」の中に閉じこもる傾

[654] Таскина Е., 同上、82 頁。

向があったため、社会的な生活を送ることが難しかったという意見を述べている。[655]

永井の家族は、転勤生活を送っている父に従い、各新居地は、臨時的な居住地であった。その理由により、永井は、同年齢の人と付き合う機会がない所においても住んだことがあり、学校でクラスメートに無視されるという経験があった。このように、永井は、本来の意味での社会的な生活を満喫できなかったと思われる。独立した生活に慣れてきた永井は、新しい学校において義務化されていた団体としてのコオペレーションに適応できなかった。

「開拓団」において居住していた小宮は、農業活動で忙しかった両親がずっと不在していたため、遊ぶ方法を考えることは、自分自身の心配事であった。

以上、生活の糧を得ることで忙しかった貧乏な「白系」ロシア人と日本人農民、そして、家事と他の子供の育成で忙しかった家庭主婦は、自分の子供に完全な社会的生活を確保することができなかった。そして、満洲において、都会生活者だけは、様々な遊びへのアクセスがあったため、孤独の原因としては、地理的ファクターをも挙げることができる。

7.1.7. 親子の対立の問題

満洲においては、親子の対立の問題は、「旧世代」と「新世代」の価値観と世界観における相違の理由により、発生したことがあった。

一方では、ロシア人と日本人の子供は、日常生活において、母国語が使用でき、教育機関などにおいても、自分の国と同様の教育を受けていた。そのため、異文化の環境においても、両親と同様の文化の持ち主であった。しかし、それと同時に、当時の満洲において形成されてきた国際社会においては、様々なイデオロギー、人生哲学は、ロシア人と日本人の若い世代にも影響を与えていた。

多くの「白系」ロシア人は、自分の子供と孫が、ロシアとの精神的繋がりを失うことを恐れていた。

例えば、E.ヴォエイコヴァは、ロシアに滞在していた母から、次の内容の手紙を受けていた：

> 故郷を持つことが出来ないということは現代の若者にとって、本当の喪失である。[656]

当時のハルビンに位置されていた YMCA（キリスト教青年会）学校などのような国際教育機関においては、ロシア人の生徒が、アメリカのシステムに基づく教育を受け、このよう

[655] Ильина Н., 同上、48 頁。
[656] Ильина Н., 同上、56 頁。

に、両親とは異なる、新しい理想を持つようになった。多くのロシア人は、自分の将来を、ロシアではなく、アメリカ、ヨーロッパへと繋げていった。その理由により、「旧世代」の代表者の心配事は、根拠のないものとは言えない。

それと同時に、多くの「白系」ロシア人の家族において、それとは反対に、ロシアに戻ることを希望した子供が存在していた。

例えば、1945 年以降、満洲に滞在していた「白系」ロシア人の両親と子供の対立である。当時、更に強まる「プロソビエト」プロパガンダの影響下において育成されていた子供は、映画館で上映されていたソ連製の映画、学校ではソ連の教科書を通じて、ソ連についてのポジティブなイメージが形成されていった。満洲で生まれ育った子供は、実際に見たこともないロシアへの移住を夢見ていたが、両親は反対の態度を保っていた。

そして、日本人の家族においては、西洋人と同様の自由な生活に憧れていた若い女性と親の間のコンフリクトが発生したことがある。例えば、国文学を目指した溝口は、「家政学部」への入学を主張していた両親と、相互理解が達成できなかった。

ロシア人と日本人の家族における親子の対立のもう一つの理由としては、もう既に言及された、異郷の状況への適応が不成功であった両親の逸脱行為が挙げられる。

例えば、N.イルイナは、自分の父の心の弱さを批判していた。父の I.イルインは、長い期間、安定した仕事が見つけられなかったため、不満に思っていた妻との対立により、離婚にまで至った。その後から、父は、家族に対し、経済的サポートを止め、支援に依頼した自分の娘をも無視するようになった。この理由により、N.イルイナは、自分の父について、性格が弱く、責任感をも欠いている人間として取り上げている。

同じく、溝口の父も、職場において問題が発生すると、自分の妻と娘を怒鳴ることが多かった。父の厳しさは、溝口の記憶に強く刻まれた。

以上、ロシア人と日本人の家族の共通点として、親子の対立の理由としては、世界観における相違点があったことが挙げられる。そして、イミグレーションの状況に適応できなかった両親の、自分の子供に対する冷静な、或いは、厳しい扱い方は、コンフリクトの理由ともなった。

そして、ロシア人と日本人の家族の相違点としては、ロシアへの帰国を希望していた若いロシア人が多かったが、日本人の家族においては、そのような問題が発生していなかった、ということが挙げられる。

7.1.8. 自分のアイデンティティについての考察

「アイデンティティ」に関するテーマは、民族誌学、社会学、心理学までもまたがる、多くの意味を持つ定義である。

日本人とロシア人のアイデンティティにおける共通点としては、自分の国の文化への属性を強く感じていたこと、又は、それ以外の民族について「異文化の他者」として見ていたことが挙げられる。例えば、ロシア作家、詩人の A.ネスメロフは、『小船に乗って』という詩において、中国人と満人を、一種の民族として描いている。このように詩人は、中国人と満人の、ロシア人に対する「他者性」を表している。[657]　同じく、勝山は、様々な民族を代表する子供と遊んでいた時、「日本人」という立場から、中国人、満人とロシア人の子供の遊ぶことを観察していた。[658]

それと同時に、満洲に発生していた様々な社会的、政治的変化が、ロシア人と日本人の意識にも影響を与え、社会における自分の立場についても考察させていた。

「白系」亡命ロシア人社会の特徴としては、元アイデンティティを、せめて臨時的に、復元することを目指していたということが挙げられる。

満洲の社会においては、「貴族」というランクの意味はなかったが、多くのロシア人の元貴族は、自分の住宅において、「詩の日」、「文学の日」などを開催することを通じて、「本来の自分」へ戻ることを希望していた。

そして、ロシア人の社会においては、自分の政治的属性を決めることが、心配事の一つであった。「白系」、「赤系」、「ファシスト党」などは、数多くの人のイデオロギー性を表し、その対立は、出版物の記事に限らず、街の中での衝突にまでも至ったことがある。

ロシアの詩人、作者の A.ネスメロフの反共主義的な見方は、自分の作品、記事においても反映されており、そのイデオロギーは最終的に作者の（ロシア・ファシスト党）への加入へ導いている。ハルビンにおける A.ネスメロフの全ての活動が、自分のイデオロギー性により定められ、歴史においても、A.ネスメロフの名前は、文学、ジャーナリズムにおける業績に限らず、「反共主義者」としてのアイデンティティの持ち主としても残っている。

1924 年、中東鉄道は、中ソ共同経営となり、そこへの就職は、ソ連の国籍、或いは、中国の市民権の取得者に限られていた。同時に、多くの「白系」ロシア人は、新しいパスポートを受けるため、自分の属性を決めることを強いられた。「白系」ロシア人としてのアイデンティティを保持することを希望していた人は、「無国籍者」として登録されていた。「無国籍者」にとっては、ある職場と教育機関へのアクセスが閉鎖されていた。このように、「白系」ロシア人は、自分の信念、イデオロギーをも拒否することが、強制されていたことがあった。それにも関わらず、大部分の「白系」ロシア人は、自分のアイデンティティへの忠誠心を見せ、「無国籍」としてのステータスの方を選んだ。

---

[657] Забияко А., Эфендиева Г., 同上、151 頁。
[658] 福山、同上、38－39 頁。

そして、「満洲国」で生まれ育った日本人は、日本文化の環境下で生活し、自分のことを、「満州っ子」と呼んでいる。それと同時に、その定義は、それらの日本人によって導入されたものではなく、日本国内の日本人により、在満日本人の「異質性」を強調するため、強いられている呼び方である。このように、「満洲っ子」というアイデンティティは、他者により示される、個人の異質性を表している。また、そのようなアイデンティティの重要性を見せている例としては、『おばあちゃんの満州っ子日記』という、永井瑞江著の回想記のタイトルが挙げられる。

そして、「満洲国」の時代に、日本人は、支配者としてのアイデンティティを身につけている。日常生活において、一般の日本人の優位性が、様々な方法により強調されていた。永井は、学校において上演されていた演劇の内容について、中国の軍隊を破っている日本の軍隊の偉業を訴えるものであったと回想している。そして、永井は、父の同僚が、満人を侮辱していることをも目撃したことがある。このように、人生に起きた様々な出来事を通じて、日本人は、自分の優位性を感じさせられていた。

しかし、それと同時に、家族における育成方法が、必ずしも「満洲国」のイデオロギーに従っていた訳ではない。例えば、永井の両親は、自分の子供に対し、全ての民族が平等であるというアイディアを教えていた。

第二次世界大戦の時代においては、一般の日本人の「国民」としとの意識を高めることが、行政府にとって重要な課題となる。日本人は国家の利益のため、自己犠牲を義務付けられていたため、個人的な悩みは二次的なものとして捉えていた。福山は、自分の全ての行為と思想においては「非国民的」要素がないように、常に自己をコントロールしていた。

そして、ロシア人と日本人の日常性を扱う第 4 章で既に述べたように、ロシア人と日本人の社会における貧富の差も、個人のアイデンティティに影響を与えていた。

N. フルスタリョヴァは、若い世代の心理について、自分が属している社会グループの一員とは異ならないことを主張していると述べている。その理由により、社会における自分のステータスの低さを感じることは、特に若い世代によって、痛ましく受け止められている。

例えば、E. ボエイコァは、娘のオリガの制服についての主な心配事として、経済的なファクターを挙げている:クリーニング代が払えないことなどである。その一方で、オリガは、同じ制服については、学校における自分のレピュテーションへのダメージを与えているという事について心配していた。

日本人について言えば、既に述べたように、農民は下流社会層に相当していた。小宮の生活条件は、開拓団のその他の一員とは平等であったため、自分の村の庶民より劣っていることを感じていなかった。しかし、医療機関における、日本人農民に対する医者の荒っぽい扱

い方、都会への移住の禁止といった無権利状態などは、日本人農民に自分の地位の低さを思い出させていた。

そして、既に述べたように、都会生活を開始する元の農民の小宮は、日本人の都会生活者の軽蔑的態度を受ける際、自分の社会的地位の低さを把握した。

このように、ロシア人と日本人に対し、困窮生活者である気持ちを募らせた理由は、社会地位がさらに高い人による侮辱的な扱い方が原因の一つと思われる。

以上、ロシア人と日本人の共通点としては、自分の国の文化への属性を強く感じること、「異文化の他者」との自分の異質性を把握すること、社会における自分の地位を受け止めることが挙げられる。そして、ロシア人と日本人は、政府、社会によって示されていたアイデンティティを、受け止めることもあった。

相違点としては、満洲に移住してから、新しい地域において無意味となった自己アイデンティティを復元することは、「白系」亡命ロシア人特有の行為であったということが挙げられる。

「満洲の経験」は、全世界に離散したロシア人と、日本に引き揚げた日本人のアイデンティティに影響を与え、満洲の経験を共有する「同僚」を識別する「コード」ともなってきた。時間が経ってから、「満洲の出身者」という共通のアイデンティティを持つロシア人と日本人は、様々な集会の開催、記念クラブの組織などを通じて、満洲についての記憶を復元することを目指していた。

7.1.9. 自殺行為

もう既に言及したように、自殺行為は、長時間続いている精神的緊張の結果である。個人の精神的バランスを崩すファクターとしては、人生の様々な面における、無秩序状態、行き詰まり感覚が挙げられている。落ち込んでいる状態にある個人は、日常生活に伴う追加的なトラウマが受けやすくなる。[659]

「白系」ロシア人女性にとって、自分の家族が崩壊することが、最も恐ろしいことであった。E.ヴォエイコヴァは、自分の主人が他の女性と結婚したいということを知った時、「自殺に近い失望感に陥ってしまった」ということを回想している。

しかし、ロシア系ディアスポラと日系ディアスポラにおける、自殺行為の理由は異なることがあった。ロシア系ディアスポラにおいては、自殺行為が、歴史的出来事とは関係せず、主な理由はパーソナリティの特徴と繋がっていた。その一方で、日本人の自殺行為は、「満

[659] Хрусталева Н., 同上、263 頁。

洲国」の崩壊というような、大規模な歴史的出来事の影響であり、その出来事の巨大なスケールは、自殺者にとっての主な理由ともなった。

ロシア人の回想記において、詩人、ミュージシャンなどを含む、創造的活動に従事している人は、他者によっては、特別のパーソナリティであると評価されている。もう既に言及したように、多くのロシア人の「芸能人」は、芸術以外の活動に関心がなく、適応能力が低い性格であったため、心が弱い芸能人にとっては、イミグレーションの生活の厳しい条件に耐えることが特に大変であった。

ある場合は、そのような自殺者のモチーフも理解することが難しかった。

例としては、『チュラエフカ』詩術クラブの一員であった、G.グラニンと S.セルギンの「共同」自殺という事件が挙げられる。

G.グラニンという詩人は、詩人として、良い評価を受けていたにも関わらず、性格の難しい人でもあった。大学を辞めること、そして、『チュラエフカ』クラブにおいて義務的であった「宿題」を怠ること、詩術を練習する希望がないことが、人々に悪い印象を与えていた。G.グラニンの精神的問題としては、暴飲、そして、『ファシスト党』への加入とそれに伴う『チュラエフカ』クラブ一員の名誉を汚す記事を執筆するという始末である。

そして、『チュラエフカ』の他の参加者である S.セルギンは、内気な性格であり、自信もなかったため、大学卒業後の就職にも失敗する。

G.グラニンと S.セルギンの「共同」自殺の理由は不明であったが、G.グラニンが、この自殺のイニシエータでもあったという疑いが存在していた。[660]

V.スロボッチコフの回想記においては、G.グラニンと S.セルギンは、人生の困難との闘いにおいて不可欠である、気力を欠いている性格のタイプとして、挙げられている。

ロシア人の回想記の著者は、自分の経験を踏まえ、イミグレーションの状況において、現実性を受け止める能力、人生に対する実用的アプローチを持つことの必要性について多く述べている。「自分の世界」に生きている性格のタイプである、芸能人は、困難さの抑圧の下で心を折れることが多かった。

ロシア人の芸能人とは異なり、満洲に移住してきた多くの日本人は、明らかな目的があり、実利的な性格を持っていた。それと同時に、その日本人の中には、「満州国」のイデオロギーを、自分の人生の中心にしていた人も多かったため、国家が崩壊する時、人生の意味も失うことまで、失望感に陥る人が存在していた。その上、軍人による、一般の人に毒を配るなどのような行為も、日本人を自殺へと促していた。

以上、ロシア人と日本人の中には、自殺行為をする人が存在したが、そのモチベーション

---

[660] Таскина Е., 同上、74－82 頁。

においては、相違点が見られる。そして、正教への信仰深いロシア人は、自殺を許されない罪として見ていたため、このような態度がロシア人にとっては、大きな助けにもなったと思われる。

7.1.10. 終戦後の満洲：社会における信頼不足、団体における対立の問題

終戦後の満洲においては、ロシア人と日本人は、自分のディアスポラの一員を支援するため、様々な支援組織を設立していた。例としては、日本人の『藤原日本難民会』という救済施設[661]が挙げられる。そして、一般の人も、お互いに助け合う必要性を理解していた。例えば、ソ連兵による日本人の「男狩り」、白系ロシア人の逮捕が始まった時、ロシア人と日本人は、男性の隣人、友人などを自分の住宅に隠すことを通じて、多くの人の人生を救うことがあった。そして、その集団行為は、日本人にとって特に重要であった。日本への引き揚げの旅においては、団体の形で行われていた。

ロシア人と日本人は、当時の状況において、特に心残り思うこととして、「同胞」の裏切り行為を取り上げている。

当時の多くのロシア人の中には、ソ連兵による財産没収の活動を、自分にとっても、利益になり得る事として見ていた人も存在した。

E.ラチンスカヤは、ソ連兵の「泥棒」に知り合いの人、隣人が持っている貴重な財産に関する情報を提供した「白系」ロシア人について記している。[662]

加藤淑子は、ハルビンになどの街に大量に辿り着いていた、服装が破れ疲弊状態であった、開拓団による避難者に対する日本人都会人の軽蔑的な態度を目撃し、民族が結合しなければならないはずの「敗戦」の状況においても、社会的不平等の問題が残っていることについて残念に思っていた。[663]

藤原ていは、避難生活を回想し、自分の団体における盗難事件などについても言及している。最終的に、団体の一員は、相互理解を達成することができなかったため、団体は分裂する。

日本人の避難団における衝突の理由としては、神経衰弱状態にあった日本人の逸脱行為、そして、自分の利便性を優先する人の利己的行為などが挙げられている。

まとめとして

以上、ロシア人と日本人は、終戦後の混乱という、極端な状況における人間関係について、

---

[661] 柳田、同上、248 頁。
[662] Рачинская Е., 同上、83 頁。
[663] 石村、同上、12 頁。

個人のパーソナリティのネガティブな面も表面に表すことがあったということが言える。その上、この場合には、「民族的属性」というファクターも意味を失い、同郷者に被害を与える人が多かったが、ロシア人、日本人、中国人は、相互支援を与えることも少なくはなかった。

7.2. 心理的防衛方法、精神的サポートにおける対照分析

既に述べたように、心理的防衛は、個人の精神状態を危険な出来事などから守る事において、必要な手段である。異郷における生活はストレスが多いため、心理的防衛とは、本能的な行為としても現れることがある。

しかし、心理的防衛方法の中には「破壊的」な種類もあり、例としては、過度な攻撃性、隠遁生活への傾向などが挙げられる。

ここでは、ロシア人と日本人によって使用されていた、異郷における生活のネガティブな面との闘い方法を分析する。

各個人は、唯一無二のパーソナリティであるため、一般化することが困難であるが、ロシア人と日本人が使用していた心理的防衛方法を分析すれば、一般の人の文化的属性や教育、価値観などに関する、心理的な基盤としての役割をどのように担っているのかについては、考察できると思われる。

ここでは、ロシア人と日本人によって使用されていた心理的防衛方法の分析を通じて、ロシア人と日本人の価値観、育成の仕方などについて、次のようなことを明らかにした。

7.2.1. 他者の前で、感情を見せることに対する態度：ロシア人と日本人の見方における相違点

ロシア人と日本人の、精神的な問題の「処理」の仕方については、個人の育成の仕方と、個人が属している文化の特徴が反映されていると思われる。

ロシア人にとっては、「言い尽くす」ことが、効果的な心の「治療方法」であった：親しい人に「苦情」を述べること、神父に信仰的告白をすることなどが挙げられる。

N.イルイナは、ストレスに溢れている家族内の雰囲気の中で存在していたため、新しい問題が発生する時、いつも親友に自分の心配事を「言い尽くす」癖があった。それと同時に、N.イルイナは、自分の母について、極端な状況においても、貴族特有の冷静な態度を保つことができたと述べている。それにも関わらず、母も、祖母への手紙、そして自分の日記において、全ての問題と自分の気持ちについて詳細に述べていた。

E.ラチンスカヤのロシア人の隣人は、1945 年に、ソ連への連行により夫を失い、自分の悲しみを抑えられず、E.ラチンスカヤの精神的なサポートを要求していた。

しかしその一方、日本人の中では、他者に対し、自分の気持ちを見せることは稀な出来事であった。学生であった勝山は、戦争時代の学校における教員の厳しい扱い方があったにも関わらず、両親に苦情を述べることを控えていた。永井は、避難生活の苦しみを記述する際、母は自分の心の弱さを見せることがなかった。ただ、家族が祖母の所に辿り着いた時にだけ、疲れ果てた母が、自分に涙を許した。このような日本人の心の強さは、ロシア人にも気づかれ、E.ラチンスカヤは、自分の日本人の隣人については、二人の子供が死亡するという、苦しい時にも、涙を見せず、自分の悲劇を一人で乗り越えていたと述べている。[664]

もちろん、日本人は、エモーションを表すことが、絶対的に禁止されていたとは思えない。その反面、学校の教師は、自分の生徒にその能力を教えていた。例えば、満洲の僻地に位置されていた中学校の教師であった稲毛先生は、生活の退屈さに悩んでいた生徒に対し、日記の執筆を、宿題として指示していた。生徒は、日常的に体験したこと、様々な新しい発見と自分の思想を、その日記で記述しなければならなかった。しかし、ロシア人特有の行為である、悩みごとを聞いてくれる人を探すことは、日本人の中では、ありふれた習慣ではなかった。その上、「満洲国」の時代に、軍隊らしく、厳しく訓練されていた学校の生徒は、苦情を述べることを恥ずべきこと、また、心の弱さであると、避けるべきこととして教え込まれていた。

このように、多くの場合、他者の精神的支援を求め、自分の精神的状態を見せることも遠慮しなかったロシア人とは異なり、日本人は、極端な状況においても、エモーションを表さないこと、可能な限り我慢することを身に付けてきたと思われる。

7.2.2. 宗教の意義

ロシア人と日本人は、信仰心のある民族であり、住宅内において、ロシア人はアイコンを、日本人は仏壇を祀っていた。

ここでは、ロシア人と日本人の精神的サポートとしての宗教の重要性について、考察する。

ハルビンにおけるロシア人の文学活動を研究していた G.エフェンディエヴァは、「白系」ロシア人の信仰の深さについて、「極端な状況に置かれた個人は、*本能的に*（ここでは、著者の主張）自分の精神の「洞穴」である、宗教に向けている」というアイディアを述べている。[665]

「白系」ロシア人の信じる心は、日本人の関心をも引き付け、柳田は、ロシア人により熱

[664] Рачинская Е., 同上、44- 51 頁。
[665] Забияко А., Эфендиева Г., 同上、164 頁。

心に施されていた様々な儀式を目撃した時、ロシア人を「狂信者」と名付けることさえあった。

ハルビンにおいては、正教会が多く、長司祭は、「白系」ロシア人の中では、深い尊敬を集めていた。そして、もう既に述べたように、ロシア人は、食料不足の問題が厳しかった第二次世界大戦の時期においても、ロシア正教の祝祭を祝うことを止めず、教会も定期的に訪問したことがある。

「白系」ロシア人の信仰的活動においては、儀式が重要な役割を果たしていたが、それよりも、正教徒特有の価値観、振る舞いが、幼い頃から押し付けられていたため、人生において困難がある時も、謙虚な態度を見せることが、イミグレーションの状況において生き残るための大きな助けとなったと思われる。

しかし、詩人のL.エーシンは、「故郷の喪失」という悲劇を乗り越えるため、日常的に長い時間、一生懸命祈っており、過度な熱心さを見せていた。

その一方で、日本人の回想記においては、宗教のことについての言及が多くない。永井は、知り合いの祖母の例を取り上げ、「信仰心篤い人で大小の仏像を数十体も飾って、毎朝白いご飯を全部の仏像に供え、その下りものを食べているという人でした」という印象を述べている。[666]

その祖母の信仰の深さは、周囲の人の当惑を誘い、避難生活の際に、避難者に仏像を一つずつ預かることを頼んでいたその祖母の行為について、永井は「もっと必要な食料品を少しでも多く入れたいこんな時に、（略）本当の迷惑だった」[667]という意見を述べている。しかし、時間が経って、避難は成功に終わったことについては、永井は、「いろいろな危機から救ってくれる「お守り」となった」この仏像を、重要な役割を示したものとして、評価している。

以上、日本人においても信仰する心は見られたが、「白系」ロシア人のほうが日本人より人生における宗教の存在が重要であったと思われる。宗教的儀式に従うことは、日常性に新しい意味を与えていた。信仰の深い「白系」ロシア人は、祈り、信仰の告白、教会訪問などのような活動を通じて、神秘的な支援を受けていたと思われる。

7.2.3. 創造的活動

創造的活動は、個人のエモーションを表す方法であるため、精神的緊張を和らげる手段としも見ることができると思われる。

---

[666] 永井、同上、199頁。
[667] 永井、同上、199頁。

「白系」亡命ロシア人の中では、プロの芸能人が多かったため、ロシア系ディアスポラにおいては、創造活動が顕著な存在であった。しかし、ロシア人と日本人の「素人」も、創造的活動に従事しており、そこにおいて、精神的サポートを得ていた。

V.スロボッチコフは、『チュラエフカ』詩術クラブの一員の熱心さを次のように説明している：「それはおかしそうに見えるが、全体的な混乱状況と多くの苦しみに溢れている当時においては、多くの人、特に若者は、詩に関心が生まれた。恐らく、当時に、詩は、命の糧の代行のようなものとなった」。[668]

このように、多くのロシア人は、自分の趣味に没頭したため、現実的な問題について一時的に忘れることができた。

日本人について言えば、学生の年齢である日本人にとっては、創造的活動のイニシエータとしては、教師が登場していた。例えば、戦争の時代において、緊張した雰囲気の中で存在していた生徒が、溝口先生により詩を書くことを任せられていた。

永井は、退屈さとの戦い方法としては、学校の宿題である絵を描く時、本当の芸術であるかのように、精を出していた。永井が回想しているように、「手本通りに書きさえすればよかったが、私はなまいきにもムーリン川に映る夕景に挑戦していました」。このように、美しい風景を眺めることを通じて、インスピレーションを受けていた永井は、「夢中で」そのプロセスを楽しんでいた。[669]

以上、ロシア人と日本人の日常生活においては、創造的活動が、重要な存在であった。その趣味は、様々な形を取っていたが、子供から高齢者まで、全ての年齢の人々の関心を引き付けていた。その上、その活動は、回想記では満洲における最も幸せな時期と連想されている。

7.2.4. 精神的に強い女性:子供から神的サポートを得る能力

ロシア人と日本人の女性は、「飢餓」、「避難生活」などのように、極端な状況に直面したことがある。その時、多くの女性は、「諦めること」、「心が折れること」に近い状態にあったことについても、告白している。その時に、子供の存在が、ロシア人と日本人の女性にとって、大きな支援となっていた。

男女の価値観における相違点が存在する証としては、夫婦である加藤淑子と加藤幸四郎によって書かれた、二つの回想記が挙げられる。加藤淑子著の『ハルビンの詩が聞こえる』においては、著者の記述は、主に家庭内生活を巡っている。しかしその一方で、加藤幸四郎

[668] Таскина Н., 同上、67 頁。
[669] 永井、同上、59−60 頁。

は『風来漫歩』において、自分の仕事、政治的問題などについて多く語っている。このように、共に過ごされた生活であるが、男女の人生におけるプライオリティが異なっていることがある。

多くの日本人の男性にとっては、「満洲国」の崩壊は、自分の「世界」が崩壊しているかのような、大きな打撃であった。その理由により、1945 年に、家族全員に毒を飲ませた男性が多かったが、自分の家族のことを優先していた女性にとっては、満洲国の崩壊は二次的なことであり、自分の子供の安全が、主な心配事となっていた。

藤原は、避難の大変さに耐えられないと思った時に、自分の子供について思い出し、歩けない時にも、歩き続けることができた。

ロシア人の女性も、同様の価値観を持っていた。N.イルイナが回想しているように、母の E.ヴォエイコヴァは、仕事と日常的な問題を決めることに疲弊した時も、病気になることがなかった。母親にとって、二人の娘の人生が自分の責任下にあるということが、動機づけともなっていた。

このように、ロシア人と日本人の女性は、満洲における自分の例を通じて、価値観が精神的基盤であることを証明してきたと思われる。

7.2.5. 団結性を維持すること、ロシア人と日本人の人生における社会的関係の重要性

ロシア心理学者の N.フルスタレーヴァは、異郷の環境における快適な生活の重要な条件として、同郷者との団結性の維持を助けている、組織や組合、愛好クラブなどの存在を挙げている。「ロシア文化の日」のような行事を催すことは、ソーシャルな関係を活性化している。そして、新聞、ラジオの支援により、移住者は情報のバキュームの中ではなく、社会的生活に加入していることを感じることができる。

ロシア人と日本人は、ディアスポラとしてそこに存在していたため、同郷者との人間関係で孤立しているという感覚がなかった。

しかし、ロシア人の日本人の回想記の著者は、同郷者との精神的な繋がりの意義を特に強調している。

E.ラチンスカタによれば、ハルビンにおける多くのロシア人は、一つの住宅において、二世代また三世代をも含む、大家族として共生していた。このように、老人は、孤独な生活を避けることができた。そして、祝祭を、プライベートな行事としてではなく、全ての知り合いと親しい人が参加できるように、大規模な催しをしていた。例えば、パスハの時、祝祭料理は、多くのゲストに足りるように、大量に作られていた。[670]

---

[670] Рачинская Е., 同上、23 頁。

そしてロシア人の家族は、社会的貢献をすることも目指していたため、パスハにおける重要な料理である、手作り「クリッチ」を孤児のホームや貧乏な人にも配るという習慣があった。

ロシア人は、多種多様な方法で、同郷人との団結心を保つことを目指していたが、その中には、親しい人との密接な関係と正教会の訪問を通じて、正教徒との繋がりを保つことが特に重要であった。

そして、「満州国」の時代においては、多くの日本人の男性の団結性を維持する手段としては、イデオロギーが挙げられる。「満州国作り」に関するテーマは、プライベートな集会の時にも、話題であった。そして、行政機関の職員は、一つの目標を共有していたため、自分の職場においては、「努力」していた、というより、「協力」していた、と言った方が正しいと思われる。

そして、ロシア人と同様に、日本人も同郷者との精神的な繋がりを欲求していた。

永井の父は、長野県の出身者を自分の住宅で集合させることがあった。そして、日本の学校においては、ハイキングやコンサートなどは、生徒の友人関係作りを促していた。しかし、永井が述べているように、学校においては、「チーム・ワーク」が義務的なものであったため、友人関係作りにおいて、多くの場合、それは無意味であった。

日本人の生活様式に注目すれば、社会的生活より、プライベートな生活の方が、重視されていたと思われる。さらに、転勤生活を送っている家族は、時間的余裕がなかったため、新しい関係を作ることが難しかったこともあった。

例えば、頻繁に転居していた、福山の家族の例に注目すれば、その家族の一員にとって、最も重要な存在は、福山の学校の同僚と複数の友人、そして、父の職場の同僚、というかなり限られた知り合いのサークルであった。

まとめとして

以上、ロシア人と日本人は、自分のディアスポラの一員との団結性を維持することを目指していたことがわかる。しかし、ロシア人は、活発な社会的生活を送ることに傾向があったが、日本人は、主に親しい人との団結性を重視していた。そして、「白系」ロシア人を統合させる重要なファクターとしては、宗教が挙げられるが、日本人にとっては、宗教は、プライベートな生活の一面であった。「満洲国」の時代においては、統一力の最も高い手段として、イデオロギーが登場している。

本章のまとめとして

異郷の環境への適応過程というテーマは、多くの研究者の関心を引き付けている。1920

－1940 年代の満洲に存在していたロシア系ディアスポラと日系ディアスポラにおいては、自国特有の生活条件が形成されたこと、そして、自分の文化をも保持できたため、多くの適応の問題を避けることができた。しかし、ロシア人と日本人の回想記の分析が示しているように、ロシア人と日本人は、「移民者の心理学」において取り上げられている、典型的な問題を避けることができなかった:「心理的双対性」、「孤独」、「親子の対立」、「うつ病」などのような精神的状態を乗り越える必要があった。

そして、イミグレーションの状況への適応が果たせなかったロシア人と日本人の例が示しているように、経済的「基盤」を確保することだけでは、完全なアダプテーションを成し遂げることができない。それに加え、精神的快適さを感じること、自分の関心に相当する活動を通じて、特技を発揮できること、そして、様々な社会的役割を果たせることも、重要な役割として持っている。

心理的防衛方法における対照分析が示しているように、ロシア人と日本人にとっては、自分の家族が、最も重要な精神的サポートであった。特に、ロシア人と日本人の女性は、自分の子供のため、精神的偉業を成し遂げることができた、ということが明らかになった。

ロシア人と日本人の女性は、男性よりも忍耐力が高い例が多く、その理由としては、自分の子供に力の源を得ていたことが挙げられる。

そして、心理的防衛方法として、ロシア人は、「創造された世界において生きること」の方を選んでいたと思われる。宗教、創造的活動、日記の執筆、満洲の社会においては、意義が喪失してしまう「貴族」特有の生活のモデルを、復元することなどを通じて、現実逃避を目指していた。

信仰の深い「白系」ロシア人は、祈り、信仰の告白、教会訪問などのような活動を通じて、神秘的な支援を求めていた。

一方、日本人は、「満洲国」の時代、「王道楽土」、「五族協和」というイデオロギーに従い、「理想的」な国家を作ることを目指していた。そのイデオロギーは、異郷における生活に、意義を与えていた。

しかし、日本人はロシア人とは異なり、もっと現実的な人間であったと思われる。満洲に生きていた日本人は具体的な目的があり、そして、日常生活においては、宗教的儀式などのようなことは、ロシア人程重視されていなかった。

そして、ロシア人にとっては、社会的生活に参加することも、重要な精神的サポートであった。その一方で、日本人は、家族と最も親しい人に限られた、ソーシャル・サークルの中に存在しながら、それを快適に感じていた。もちろん、職場において多くの人と協力していた日本人の男性の社会的活動は、女性より充実していたが、それは必ずしも精神的な要求であったとは言えない。

ロシア人は、「神様」という「儚いもの」までも含み、「他者」においても精神的サポートを探していたが、日本人は、困難に直面する時、忍耐能力を鍛える必要性を意識し、周囲の環境の否定的な抑圧との戦いの際、自分自身の精力のみに任せていたと考えられる。

結論

本研究では、1920－1940 年代の満洲に存在していたロシア系ディアスポラと日系ディアスポラにおける日常生活（「衣食住」の問題）、そして、ディアスポラの一員の精神的状態、心理的防衛方法を検討してきた。

本研究のキーワードは、①「ディアスポラ」、②「日常性」、③「回想記」、そして、④「満洲」である。キーワードについて、以下にまとめる。そして、続けて、対照分析の意義について述べる。

①「デイアスポラ」とは、様々な学問分野で扱われているテーマであるため、その定義を巡る議論が続いている。しかし、20 世紀には、ミグレーションのプロセスが活発化すること、ディアスポラの新しい形が生まれることなどの理由により、20 世紀後半から、「ディアスポラ」の研究への関心が更に高まり、その言葉の意味も拡大してきた。

ディアスポラの定義に関し、様々な見方が存在しているが、ここでは、T.ポォロスコヴァが提案した定義を論述の根拠にした。

学者の意見によれば、まず第一に、ディアスポラという社会グループは、次のような特徴を持つべきであると述べている：

1. 同一民族性
2. 文化的価値観を共有すること
3. 民族的、文化的独自性を保持することへの傾向
4.（多くの場合、典型の形で）同様の歴史的起源を共有することに関するアイディアを分かち合うこと

そして、新しい居住地である異郷と、出身地である故郷との関係に関する、特別のストラテジーを維持すること、ディアスポラの民族的アイデンティティの保持のために不可欠である、ソーシャルなインスティチュートを設立することも示されている。

T.ポォロスコヴァが結論しているように、異郷の領土に存在しているディアスポラの、それ以外のコミュニティとの相違点としては、ディアスポラが、必ずソーシャルなインスティチュートを持っており、民族的、文化的な基盤に限らず、政治的基盤の維持も目指している。[671]

④本研究において、以上挙げたディアスポラの定義を、満洲に存在していたロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの記述にも適用できると考える。しかし、本研究では、同一民族性という概念の代わりに、同一国民性を使用した。

---

671 Обидина Ю., 同上、6 頁。

その理由としては、ロシア系ディアスポラが、ウクライナ人、ユダヤ人、ジョージア人など、多種多様の民族的マイノリティをも含んでいたからである。

現代の世界におけるミグレーションのプロセスが複雑化するため、様々なディアスポラを比較することも、各ディアスポラの独自性を浮き彫りにすることを助けている。この点においても、満洲に存在していた、言葉通り「別の世界」として見られている、ロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの研究の重要性が挙げられる。

②本研究の対象は、ロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの一員である一般人の日常生活である。

「日常性」という定義の分析の結果、その学問上の意義については、次のようなことが明らかになった。

「日常性」とは、常に繰り返している、平凡なことであるため、特別の関心に値しないものとして見えている一方、日常性ということ自体が、個人にとって、最も身近で、実に重要な現実性であるということである。各個人にとっては、周囲の現実的世界だけが存在しており、個人は、自ら影響させられる、自分の努力により変化させられる世界範囲だけに対し、本当の関心を示している。各個人は、日常性に自分の主体的な見方だけに基づいた意味を与えている。

その理由により、日常性は、A.Schütz によって「プライマリ・リアリティー」としても定義されている。

そして、「日常性」は、再生を示している。つまり、日常的に繰り返している行為を通じて、各個人は世界に変化をもたらしている。

20 世紀には、一般人の日常性の重要性が浮き彫りになっている。その個人の生活の一面の研究が発展したのは、A.Ludke、A.Schütz、B.Markov などの学者の貢献によるものである。

A.Ludke の理論を基にして、1920－1940 年代の満洲において居住していた、一般人のロシア人と日本人の日常性の研究の意義が、以下の点で見られた：

１．一般人は、社会に影響を与えている。（満洲に存在していた中国人の物売りは、安い食料品を販売することを通じて、更に厳しい時代に、多くの貧乏なロシア人と日本人を、飢餓から救った。）

２．一般人は、ある歴史的事実に関する、固定化された一般的な見方を変化させることができる。（例えば、ロシアにおいては、1990 年代まで、1917 年のロシア革命と内戦後に外国へ亡命した「白系」ロシア人が、国家の裏切り者、犯罪者などとして、見られていた。回想記の執筆を通じては、「白系」ロシア人が、自分のイメージを「復元」することができた。）

３．一般人の歴史的役割は、評価されるべきものである。（例えば、柳田桃太郎は、自分の

回想記において強調していることが、「満州国」の繁栄は、その目標に自分自身の人生を捧げ、事務室で徹夜を過ごしていた一般の職員の努力の結果である、というアイディアである)。

４．一般人の日常性に注目すれば、歴史的な出来事が、個人の生活に、どのように反映されているかを見ることができる。(例えば、第二次世界大戦の戦局が激化するにつれ、満洲に居住していた日本人の自由が次第に、制限されるようになった。)

そして、ロシア人と日本人の回想記の著者は、ロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの団結性の強さ、その文化的、教育的、創造的レベルの高さ、様々な活動において成功した理由としても、その構成員である、一般人の努力を取り上げている。

③一般人の日常性の研究の対象としては、「回想記」というジャンルが選ばれた。「回想記」とは、現実性と創造活動の間に「挟まっている」かのようなジャンルであり、回想記で記述された記録においては、作者の主観的な立場が反映されている。そして、回想記の著者は、自分の「内」の世界にも注目し、様々な出来事が個人の精神状態にどのような影響を与えているのかについても辿ることができる。

「ディアスポラ」という大きな社会グループを検討する際には、個人のパーソナルな経験を表している「回想記」は、その個人が属している社会グループについても、全体像を形成することを助けている一方、例外も存在することを示している。多くの歴史的出来事、社会的、文化的現象などに関する、一面的な見方が不適当であることが明らかになった。

それに加え、回想記が証明しているように、個人にとっては、様々な歴史的出来事のスケールにも関わらず、最終的に、自分の周りの世界、プライベートな空間などが最も重要な存在である。その点においても、ロシア人と日本人の日常性の研究の意義が見られた。

このように、本研究においては、「ディアスポラ」、「日常性」と「回想記」の研究の意義を明らかにしてきた。

「日常性」とは、物質的な意味を超え、個人の思想、様々な出来事に関する態度などを含む、個人の精神性でもある。

本研究では、ロシア人と日本人の日常性(「衣食住」の問題)と精神状態を検討し、対照分析を試みた。

ロシア系ディアスポラと日系ディアスポラに関する研究は、もう既に沢山存在する。ロシア系ディアスポラの検討には、生田美智子、A.ヒサムツディノフ、I.カプラン、T.レビャキナ、G.メリホフ、O.ゴンチャレンコなどが大きな貢献をし、そして、日系ディアスポラは、塚瀬進、山本有造、小林英夫、山室 信一などによって、研究されてきた。

『セーヴェル』誌に 1995 年から現在にかけて掲載された記事(生田美智子、内山ヴァル―エフ紀子、今井由紀子、ヴデャコバ・エレーナ、広谷和夫等の著作)の中で、満洲におけ

るロシア人の生活が多面的に描写されている。アイデンティティ、文化、教育、有名人の伝記等に関する貴重な情報が挙げられている。そして、満洲におけるロシア人と日本人の交流の例も取り上げられている。

しかし、原則としては、ロシア系ディアスポラと日系ディアスポラは、別の現象として、扱われている。そのため、一つの領土において、隣人として共生していたロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの「満洲」の経験について、対照分析を行うことが、本研究の目的となった。

比較アプローチの一つの特徴としては、同じ現象、出来事などを、異なる文化に属している人の視点から見ることができ、多くのものごとの相対性も表面に表している。

本研究では、次のようなアプローチを適用した：伝記的アプローチ、社会学的アプローチ、文化学的アプローチ、事例研究のアプローチ、比較的アプローチである。

対照分析の結果は、次の通りである。

1.「日常性」

1.1.　仕事

個人にとって、社会的活動に加入することは、「個人性」の成長と発展を意味するものである。ロシア人と日本人にとっては、満洲において受けた経験が、自分自身の能力、性格などもより深く知る助けとなった。

1.1.1.　適応能力

満洲の現実性に関し、特別の期待を持っていなかったロシア人と日本人は、イミグレーションの状況の困難性に対し、忍耐力を発揮できた。それと同時に、自分の実力を過大評価した人、周囲の人に出身地との同様の扱いを要求していた人は、必然的な失望感に陥ったことがある。

1.1.2.　活動とアイデンティティとの繋がりについて

ロシア人と日本人は、自分の活動を通じて、社会における自分の価値を感じることを希望していた。

多くのロシア人は、創造的活動、プロパガンダ的活動を通じて、社会的役割を果たしていた。日本人は、「満洲国」という理想的な国家を作ることを、自分の人生の最大の目標としていた。

ロシア人と日本人の回想記においては、教師について多く言及されている。イミグレーションの状況においては、教師の大きな役割として、教育を与えることに限らず、次世代に自分の故郷特有の価値観を伝えること、今後の進路に関する相談に乗ること、精神的なサポートを与えること、民族的交流を促進させることなども見られた。

1.1.3. イミグレーションの状況における、迷った人

ロシア人と日本人の中では、満洲の社会における自分の立場を見つけられなかった人が存在していた。例としては、社会において自分の必要性を感じていなかった多くのロシア人詩人、特別の目的なしに大陸をさ迷っていた日本人の「大陸浪人」が挙げられる。

1.1.4. 女性の適応能力

当時のロシア人と日本人の女性は、男性に依存していたが、満洲においては、普通の「主婦」としてから、極端な状況においても生き残ることができる「英雄」としてまで、精神的な成長を成し遂げることができた。

1.1.5. 満州国の時代。「支配者」日本人と「被支配者」ロシア人の労働状況

ロシア人は、「被支配者」として扱われたことがあった。例としては、職場において、天皇と天照の像への礼拝、ある職場で導入された日本語の学習が挙げられているが、ロシア人は、日本人により虐待を受けたことについては述べていない。

しかし、日本人との接触の経験は、悪意がなかった場合にも、1945 年のソ連兵によるロシア人と日本人の大量逮捕という悲惨な結果をもたらした。

そして、「支配者」の立場にあった日本人は、回想記において、ロシア人に対し軽蔑な態度を見せておらず、それとは反対に、職場において、ロシア人の同僚との親しい友人関係が結ばれたことについて回想している。

もちろん、日本政府によって行われた様々な改革が、ロシア人の視点からは、無骨な介入だと批判されていたが、その反対に日本人は、その活動について社会的改善と考えていた。

「支配者」日本人と「彼支配者」ロシア人の相違点として、日本人は自分の活動を大きな「スケール」として感じていたが、多くのロシア人の主な心配事は、生き残る事であった。

しかし、「支配者」日本人と「被支配者」ロシア人の一般の職員の共通点としては、特に、第二次世界大戦の時代に、政府にとって望ましくない意見を述べることは、危険であった。その点においては、日本人はロシア人より更に自由であったとは言えない。

1.1.6. 終戦後

日本人は、敗戦者となったため、即座にお金を稼ぐ方法を探した。ロシア人は、ソ連兵からの危険を予期しておらず、以前のような活動を続けていた人が多かった。そして、ある「白系」ロシア人にとっては、自分の職場が逮捕の現場となり、その時点から長年にわたるソ連の収容所での生活が始まった。

しかし、多くの日本人は、自分の立場の弱さを理解していたため、お金を稼ぐという活動については、ロシア人より更に活発的で機知的だったと思われる。

以上、1920–1940 年代の満洲に存在していたロシア系ディアスポラと日系ディアスポラは、団結性が強く、文化的、教育的、組織的レベルの高い社会グループとして、歴史においても刻まれてきた。これらのことは、回想記の作者が強調しているように、一般の人がもたらした貢献についても覚えておくべきことである。

2. 住宅

「住宅」とは、ただ住むところではなく、個人の「プライベート」な空間でもあり、そこでは個人が、様々な社会的な役割から解放でき、本当の自分自身に戻ることができる。

2.1. 生活様式、生活状況の影響について

個人の生活状態は、住宅の様子にも反映されている。

20 世紀の初頭から満洲に居住していたロシア人は、中東鉄道などにおいて、安定した仕事を持っており、快適な住宅に居住していた。そのロシア人の子供は、友人ができ、ロシア国内とは全く変わらない、充実した生活を楽しんでいた。

その一方、貧乏な「白系」ロシア人は、節約の目的で、移住を繰り返し、そのような生活を送っていた人は、足元に土台がないかのような、不安定な状態にあった。

転勤生活を送っていた日本人も、一つの住宅に長い時間、留まることができなかった。このように、自分の住宅との精神的なつながりも、形成されなかった。

2.2. 貧困生活者の住宅

個人の住宅レベルは、経済的成功を反映するものであり、社会における地位も示している。

貧乏な「白系」ロシア人の住宅は、最低限のレベルだったこともある。そのような安い住宅の様子が、精神状態にも悪影響を及ぼしていた。多くのアパートメントは、部屋に太陽の光が入らないこと、冬には極端な寒さ、夏には極端な暑さなどという問題が存在していた。「白系」ロシア人の伝記を辿った結果、時間とともに多くのロシア人の居住状況が改善されなかったということが明らかになった。

そして、ロシア人と日本人の農民の住宅状態もレベルが低いものであった。しかし、農民は、皆が平等であったため、自分の社会グループの中では劣等感に悩むことがなかった。

2.3. 上流社会層の住宅：贅沢さの見方における相違点

ロシア人の上流社会層は、贅沢さを誇示する傾向があった。住宅内のインテリアに限らず、「外」に向けられた贅沢さも、周囲の人の注目を引きつけていた。

日本人の上流社会層の住宅の様子に関しては、サイズの大きさと綺麗な外見についての記述が挙げられているが、他者を魅了するべき特別の設備についての言及が挙げられていない。

2.4. 隣人関係を通じて異文化交流の促進

文化論においては、住宅は「自分の空間」としても見られており、その際には、周りの空間が、「馴染みのない」空間として見られている。そして、国際社会においては、空間の区別方法に新しい意味が生まれ、ロシア人と日本人にとって、異文化である人も「馴染みのない空間」に属している人として受け止められていた。

このように、満洲に居住していたロシア人と日本人は、「自分の空間」の中、つまり、自分のディアスポラの中で存在すること、あるいは、その反対に、自分の空間の枠を超えて、異文化の人が存在している空間の中に溶け込むことからも選ぶことができた。

多くの日本人は、日本人の住宅が密集した地に居住していたが、「白系」ロシア人のアパートに部屋を借りていた人も、特に若い日本人の中では少なくはなかった。

ロシア人は、ロシア文化園の中で存在していた。しかし、回想記では、日本人の隣人、自分のアパートメントで部屋をレンタルしていた借家人との友人関係も維持していた。

つまらない生活面の中で見られている、ロシア人と日本人の隣人の関係は、「満州国」の時代と終戦後の時代においては、民族関係における亀裂を避けることに、重要な役割を果たしていた。それは、満洲国政府のロシア人に対する不正行為、また、1945 年のソ連兵による日本人への暴行行為があったにも関わらず、ロシア人と日本人の密接な関係の結果としては、ポジティブな相互イメージが形成された。

2.5. ステレオタイプの崩壊

当時の満洲に居住していた日本人は、全ての「西洋的な」ものに関し、好奇心を示していた。ロシア風の住宅に住む経験も、珍しく感じられていた。ロシア風の住宅内インテリア、住宅の建築的特徴、マンションの「高さ」などが、日本人を魅了していた。その上、普通のロシア人の田舎特有の住宅についても、理想的な田舎生活のシンボルとなっていた。

そして、ロシア人も、和風のインテリアについて、美術の最高峰としても評価していた。

2.6. 住宅内の空間の扱い方

個人は、自分の住宅内の空間を、その適用性により区分している。金銭的余裕の持つ家主

は、書斎、図書館などを設けることができる。

ロシア人と日本人の上流社会層は、広くて、部屋数の多い住宅を持つことができた。しかし、一般人のロシア人と日本人は、特に広いスペースを要求していなかった。多くの日本人にとっては、「白系」ロシア人の住宅で部屋を借りることで十分であり、ロシア人も、お金を設ける機会を失いたくなく、余っている部屋を貸し出していた。

2.7. 住宅内のインテリア

ロシア人と日本人は、自分の国特有のインテリアを保っていた。しかし、移住を送り返していた日本人は、自分の住宅に対し実利的な態度を持ち、必要な荷物だけを保持していた。

その一方で、ロシア人は、「本物」の家らしい雰囲気を要求していた。1920 年代にハルビンに移住していた「白系」ロシア人は、列車の車両の中においても、家らしい雰囲気を作るため、トランクからティーセットなどを出し、インテリアとして飾った。

2.8. ホスピタリティの文化

ロシア人と日本人は、自分の住宅にゲストを誘う習慣が存在していた。しかし、多くの日本人の家族では、主人だけが働いていたため、主人には活発な社会生活があったが、妻は家庭主婦の役割を担い、住宅の中で「閉じこもっていた」。この理由により、日本人の家族においては、主に主人の友人と知り合いが誘われていた。また、日本人の家族は、「身内」だけを誘うという習慣があった。その反対に、ロシア人は、自分の住宅をかなり大きな文化的イベントの開催場所としても使用し、このように自分の住宅においては、大規模な集会があった。多くのロシア人の最大の恐怖は、孤独であったため、ホスピタリティの文化を維持することを通じて、イミグレーションの生活のネガティブな面から自己を保護していた。

以上、当時の満洲の国際社会において、「住宅」とは、居住場所以上の意義を持っていた。ロシア人と日本人の住宅の特徴に注目すれば、人生における価値観、生活様式、満洲における滞在の目的などについても、仮説を立てることができると思われる。

3. 着衣

「着衣」とは、全ての社会における、多くのシンボリック的な意味がある。その中では、マーキング、識別、属性が挙げられる。そして、着衣は、特別の社会層特有の人生哲学を表す方法としても登場する。

3.1. ハルビン特有の「おしゃれ」文化

「白系」ロシア人のファッションは、満洲において優先的な立場を取っていた。その影響力は、「白系」ロシア人の価値観を排斥していた「赤系」ロシア人にも及ぼし、洋服に関心が高かった日本人をも魅了していた。そして、日本人は、洋服に新しい意味合いを持っていた。それは、日本特有の保守的な社会制度からの解放を目指していた日本人女性にとって、体の動きの自由を制限する着物の代わりに、ロシア人女性のスタイルを真似ることで、自尊心、自身、自由の精神を持つことを目指していた。

3.2. 「ドレス・コード」による社会的セグレゲーション

当時の満洲の社会において、「着衣」とは、特別の社会グループに入る権利者の数を制限させていた。クラシックコンサート、社交ダンス会、高級レストランに限らず、普通のカフェーさえも、ある意味での「ドレス・コード」を要求していた。

そして、各教育機関においても制服に対し、その卓越した状態を求めていた。自分の子供を学校に通わせるため、辛うじて制服に経済的負担を担っていた、貧乏な「白系」ロシア人は、そのような「つまらない」問題に悩まされていた。

周囲の人の意見と評価に敏感な若い世代のロシア人は、綺麗な服装を持つことができなかったことについては、懐かしく回想している。

そして、日本人と「白系」ロシア人は、故郷に戻った時に、自分の服装を通じて、「異質者」として区別されていた。

3.3. 社会層における差異と着衣

ロシア系ディアスポラと日系ディアスポラにおいては、貧富の差が、特に都会においては著しかった。しかし、農民は、自分の社会グループの中では、全員が平等であったため、劣等感を感じていなかった。都会に移動した時だけ、差別的な扱いを受けることがあった。

そして、ロシア人と日本人の上流社会層は、ハルビンにおいては、オペラ、社交ダンスなどを含む、社会的生活が充実していたため、自分のワード・ローブを補充する動機があった。それと同時に、日本人にとっては、着物の価値は、その価格の高さというより親しい人の記憶のシンボルとして大事にされていた。

以上、「着衣」という生活面は、満洲社会において存在していた多種多様な思想、人生哲学、価値観を表すものであったが、貧富の差の存在も誇張されていた。

4. 食事

食事とは、日常生活において欠かせないものであり、無意識的にも、自分の文化の属性を

示している儀式としても、深い意味を持っている。食事の習慣を変えることが大変であるため、他国の料理の味に馴染むことができない人が多く存在する。

ロシア人と日本人は、自分の国の建築物に似ていないタイプの住宅に住むことに慣れることができ、また、日本人は洋服をも日常的な着衣にすることができた。しかし、食生活を完全に変えることは不可能であった。ロシア人と日本人は、家庭料理としては自分の国特有の料理の方を選んでいた。

4.1. 「外食」の文化：民族間のコミュニケーションの手段

ロシア人と日本人は、自分の食文化を保持していたにも関わらず、満洲に形成された国際社会においては、外国の料理に対する好奇心も保っていた。異民族の食文化を試すことは、異文化の他者のことを知る方法でもあった。

ロシア人は、中国料理に対する関心を持っていた。このように、中国語が分からなくても味、その文化に触れることができた。

そして、日本人は、ロシア料理が気に入っていた。その理由の一つとしては、当時の日本人は、西洋世界に属する全てのものに関心があったからである。

満洲に居住していた日本人全員が、ロシア人と密接に交流していた訳ではない。しかし、多くの日本人は、自分の回想記において、ロシアのピロシキ、ボリシチなどという、「満洲風」の味について、懐かしく回想している。

4.2. レストランを通じて社会生活を維持すること

イミグレーションの状況においては、人とのコミュニケーションを維持することが、特にロシア人にとって、重要なことであった。「白系」亡命ロシア人にとっては、レストラン、カフェーなどは、自分の住宅と同じように、ロシア人との団結性を維持する方法、ロシア人としてのアイデンティティを保持する方法でもあった。

日本人は、カフェーに通う習慣を、西洋風の生活様式の一面としても見ており、特に女性がカフェーに通うことを自分の生活の一部にした。しかし、それよりも、ロシア人が祝祭の遊び方で、歓を尽くすことができたということが、日本人もそれを身に付けるべき、生活を楽しむ能力としても見られていた。

4.3. 飢餓との闘い

「食事」という生活面は、個人の人生における、基本的な欲求である。その理由により、ロシア人と日本人は、回想記では、特に厳しい時代を記述する際に、食料を補うことに関する自分の経験を詳しく描写し、終戦後の時代に、天ぷらを作るため、ヒマシ油を使用するこ

と、子供のために食料を補うため、自分の人生をリスクに晒すことなどについて回想している。

そのような、最も厳しい時代においては、ロシア人と日本人は、言葉通り、適応能力を発揮しなければならなかった。

終戦後の満洲においては、インフレーションの状態が厳しかった。その際には、ロシア人と日本人にとっては、ファーム活動、安い中国料理が大きな助けとなった。

以上、満洲における「食事」という生活面は、ロシア人と日本人にとって、異文化の人との「コミュニケーション」の手段であった。そして、「レストラン」文化について言えば、イミグレーション状態において、自分が属しているディアスポラの一員とのコネクションの維持の方法となっていた。その上、食糧不足の問題は、厳しい時代における、生き残る能力を発揮することを促した理由としても、登場してきた。

5. ロシア人と日本人の移民者の精神状態について

エミグラントの心理的問題は、学問的研究に限らず、文学、哲学、詩などにおいても頻繁に取り上げられているテーマである。最終的に、エミグラントが避けられない問題としては、孤独、アイデンティティの問題、新社会における自分の立場を固定化できない問題、「人生に迷った」という問題、親子の対立の問題が挙げられている。

このように、移民生活者の心理的問題においては、民族性、文化的属性などにも関わらず、共通点が存在している。しかし、その状態の理由として、様々な出来事が登場する。

本研究では、ロシア人と日本人の精神状態への特に大きな影響を及ぼしたファクターに関する対照分析を試みた。分析の結果は、以下の通りである。

5.1. 「自分の世界が崩壊した」という個人的悲劇

ロシア人と日本人にとっては、様々な意味での「喪失」を体験することが、最も痛ましい経験であった。そして、物質的な意味での喪失より、自分の信念、理想が実現されなかったことが、諦めがたいことであった。「白系」ロシア人にとっては、ロシア革命、内戦、そして、故郷を失うこと、日本人に自分自身の努力により創造された「満洲国」の崩壊が、巨大な精神的トラウマとなった。

5.2. 心理的双対性の問題

イミグレーション状態の中で存在していた、多くのロシア人と日本人は、自分にとって好ましくない現実性を無視する傾向があった。その現実性の代わりに、自分にとって理想的に

見えた世界を創造することを目指していた。そして、「政府」から押し付けられたイデオロギーも、個人の世界観を変えさせることを目指していた。

多くの「白系」亡命ロシア人は、現在を生きていなかった。一方では、新しい環境において、無意味となった元の地位特有の振る舞い、そしてその世界観を保っていたが、それと同時に、もう一方では、「いつか」必ず到来すべきである、幸せな将来を期待することをやめなかった。

そして、「満洲国」の樹立者は、日本人を理想的な国家についてのアイディアを信じ込ませることができた。その戦略に関する真実を知り、その現実性を自分で評価できたのは、随分時間が経ってからのことである。

5.3. 適応能力の低い人の悲惨な運命

イミグレーションの状況においては、経済的基盤を設立さえすれば、完全な意味での幸せな生活を送ることができるわけではない。ロシア人と日本人の中では、自分の特技を完全に発揮できなかった個人は、自分の行為と今後の自分の人生に関するコントロールを失い、悲惨な運命に遭った。全ての場合には、そのような人の心の弱さは、自分の子供の運命にも、悪影響を与えた。

6. 孤独

孤独の問題の理由としては、地理的なファクターも挙げられる。満洲における、都会と僻地における生活条件が著しく異なっていた。

ロシア人と日本人は、自分のディアスポラの中で存在していたが、お金を稼ぐことなどのような用事で忙しかった両親は、自分の子供の面倒を見ること、自由な時間の過ごし方を考えることための、時間的余裕がなかった。それと同時に、女性の孤独の問題は、ロシア系ディアスポラ特有の問題であった。

6.1. 親子の対立の問題

ロシア人と日本人の前世代は、保守的な性格を保持していたため、自分の理想に相当する価値観、伝統、教育などを、子供と孫に伝えることを希望していた。

その一方で、満洲で生まれ育ったロシア人と日本人の子供は、自分の親との価値観を共有しなかったことがあった。

しかし、ロシア系ディアスポラにおける親子の衝突の問題は、更に厳しかった。多くのロシア人の子供は、ソ連のプロパガンダの影響下で育てられており、見たことのないロシアに戻ることを夢見るようになった。

6.2. アイデンティティの問題

ロシア人と日本人は、「他者」により押し付けられたアイデンティティを受けることがあった。「白系」ロシア人は、1935 年に、国籍の選択を要求された時に、「白系」として残ることは、最も不利益なオプションであった。その時に、多くの「白系」ロシア人は、ソ連の国籍を取ったが、「心の中では」「白系」であり続けていた。そして、日本人が、「満洲っ子」となったのは、日本国内の人によりそのように呼ばれていたからであった。そして、第二次世界大戦時代の「満洲国」の政府は、日本国民の行為に対し、効率的なコントロールが維持できるため、日本人に対し、「国民的な」行為を押し付けていた。

しかし、ロシア人と日本人は、抵抗する方法も探っており、多くの「白系」ロシア人は、国籍を選んだ時、自分のイデオロギーに忠誠心を保ち、日本人も、自分の子供が学校などにおいて「国民」に相当する振る舞いを押し付けられた時、住宅においては、「勝手に」自分の視点から正しく見られた価値観を教えていた。

6.3. 自殺行為

自殺行為とは、個人が極端な状態から、「出口」を見つけられなかったことを示している。

ロシア系ディアスポラにおいて、孤独な生活に悩んでいた女性、精神の敏感な詩人の中には、自決行為をする人が存在していた。

日本人にとっては、「満洲国」の崩壊が精神的なトラウマとなっていた。その時、日本人の軍人による毒の配給、「今後の状態が、更に悪化する」と脅されていたこと、さらに、集団的行為を維持する義務を感じることも、日本人の自殺行為を促していた。

このように、ロシア人と日本人の中には、本当の意味での悲劇に遭った人が多く存在していた。

以上、回想記とは、告白する方法でもあるため、様々な歴史的出来事に巻き込まれたロシア人と日本人は、当時の状態が自分の心理的状態にもどのように反映されていたかについて、語っている。ロシア人と日本人の共通点は、満洲の経験を、幸せな時期も不幸な時期もあったという、極端な評価が適当ではないものとして、記述している。多くの困難を乗り越えたロシア人と日本人は、この経験を通じて精神的成長をも成し遂げられたと思われる。

7. 心理的防衛方法

精神的なトラウマから、自己を守ること、精神的支えを探すことは、本能的な行為でもある。しかし、様々な問題に対し、特別の態度を取ることは、文化、育成の仕方、宗教などに

よっても、影響されている。ロシア人と日本人により適用された、精神的なトラブルを処理する方法に関しても、対照分析を行い、次のような結果が明らかになった：

7.1. 感情を表すことに関する、ロシア人と日本人の見方における相違

ロシア人と日本人は、パーソナルな悩みを表すことに対し、態度が異なっていた。ロシア人は、「言い尽くす」ことを要求していた。隣人、神父、日記、親戚に向けられた手紙などを通じて、非常にパーソナルな思いをこぼすことも、遠慮していなかった。それに対して、日本人は、個人的な悩みを処分する、つまり、自分自身だけの問題であるという見方を優先していた。

7.2. 宗教の意義

「白系」ロシア人にとっては、宗教が精神的なサポートとして、重要な役割を果たしていた。それに対して、日本人は、自分自身だけの能力に任せていた。「白系」ロシア人の信仰心の深さは、そのような日本人さえも感動させていた。

7.3. 自分の子供において精神的サポートを見つけること

当時のロシア人と日本人の女性にとっては、家庭主婦、母親としての社会的役割を果たすことが、最重要のことであった。社会的、政治的な問題の解決に、自分の関与を義務として見ていた多くのロシア人と日本人男性とは異なり、女性は、世俗的な問題に関心が高かった。多くのロシア人と日本人の女性が、極端な状態においても、自分の子供の存在の理由により、不思議な忍耐力を保つことができた。

7.4. 団結性の維持の重要性

「ディアスポラ」の定義においても、その一員の「団結性」が、重要なアトリビュートとして挙げられている。しかし、大規模な社会的組織の存在に限らず、個人的努力も重要であった。

ロシア人は、「身内」を集めることを目指しており、多くの親戚と共生しており、社会的生活も一生懸命維持していた。

日本人にとっても、自分のディアスポラの一員とのコネクションを維持することは重要であったが、ロシア人より「身内」のサークルがもっと薄かった。日本人にとっては、「プライベート」な空間ということの重要性が、ロシア人よりさらに高かったと考えられる。そして、「満洲国」の時代には、多くの日本人に共通させたことが、「王道楽土」、「五族協和」という夢を共有することであった。

以上、イミグレーションの状態にあったロシア人と日本人は、同様の心理的防衛方法を使用したことがあるが、その形においては、文化的相違により説明される相違点が存在している。

このように、個人的経験に基づいた、ロシア人と日本人の回想記の分析を通じて、1920－1940 年代の満洲に存在していたロシア系と日系ディアスポラにおける日常性、その一員の精神的状態、そして、心理的防衛方法に関する対照分析を行ってきた。

ロシア人と日本人は、回想記のテキストにおいて、様々なテーマを取り上げているため、満洲に居住していたロシア人と日本人の経験に関する対照分析研究は、展望のあるテーマとして見ることができる。今後の課題としては、ロシア人と日本人の回想記から見た満洲における①日ロ交流の特徴、②相互イメージの形成の特徴を分析すること、そして、③満洲で生まれ育った新世代の運命に関する、ロシア人と日本人の経験を比較することが挙げられる。

以上挙げたテーマの検討の重要性が、次のような点において、見られると考える。①満洲の領土において「隣人」として共生していたロシア人と日本人の関係の歴史的な意義について、更に深く考察できる。そして、②当時の満洲特有の国際社会における人間関係というテーマにも触れている、ロシア人と日本人の回想記を、異文化の人のイメージとしてどのように捉えられているのか分析することで、自分の国の読者に異文化理解を伝える方法としても扱うことができる。さらに、③異郷の領土で生まれ育ったロシア人と日本人の価値観、アイデンティティ、人生における目標について、その人の両親の視点を対象にすることで、様々な角度から見ることができる。そして、自分の「故郷」となった満洲の経験が、ロシア人と日本人の世界の見方に、どのような影響を与えていたかについても検討できる。

このように、一般人のロシア人と日本人の人生における「満洲の経験」の意義について、更に深く検討できると思われる。

参考文献

理論的文献：

1. Armstrong J.A. (2003) Mobilized and proletarian diasporas// American political science review. - Wash, - Vol. 70, No. 2. Pp. 393-408.

2. Ansbacher H. (1967) Life style. A historical and systematic review//Journal of individual psychology. Vol. 23, n. 2, pp. 191–212.

3. Bacer B., Swain. A. (2003) Diasporas and peacemakers: Third party meditation in Homeland Conflicts// International Journal of words Peace 25, Sept. 3rd edition.

4. Backscheider P. (2013) Reflections on biography, Lightning source UK.

5. Barrington J. (2002) Writing the Memoir. The eighth Mountain Press, Portland.

6. Bolaffi G. (2003) Dictionary of Race, Ethnicity and Culture. SAGE publications London. Thousand Oaks. New Delhi First published.

7. Braziel J. (2008) Diaspora - an introduction (2nd edition.). Abingdon: Routledge.

8. Andrew Brennan A. (1982) Personal Identity and personal survival, Analysis. Personal identity and personal survival. Analysis. No. 42. Pp.44-50.

9. Brubaker R. (2005) The "diaspora" diaspora // Ethnic and Racial Studies. Vol. 28. No. 1. P. 1-1

10. Brubaker R. (2004) Ethnicity without groups. Harvard University Press.

11. Brubaker R. (2004) Accidental diasporas and external "homelands" in Central and Eastern Europe: Past a present. - Wien.

12. Cohen R. (2004) Global diasporas: An introduction// Global diasporas. Ed by R. Cohen. - 2nd edition. - N.Y.P. 219.

13. Coser Lewis A. (2012) The idea of social structure: papers in honor of Robert K. Merton. New Brunswick, N.J.: Transaction Publishers

14. Dillard A. To fashion a text, Boston: Houghton Mifflin, 1987

15. Eric T. Olson (2007) What Are We?: A Study in Personal Ontology: A Study in Personal Ontology. Philosophy University of Sheffield.

16. Esman M. (1986) Diasporas and international relations// Modern diasporas in international politics. Ed. By Sheffer G. - N.Y.P.

17. Felski R. (1999). The Invention of Everyday Life . London: Lawrence & Wishart.

18. Gerard P. (1997) Creative Nonfiction: Researching and crafting the stories of Real life, Cincinnati: Story press.

19. Gewecke F. (2012) Diaspora. University Belfield.

20. Goffman E. (2002) The presentation of Self in Everyday Life//Contemporary sociological theory.
21. Harold W. (2003) Personal Identity. Routledge. 2003.
22. Heller A. (1984) Everyday life. Routledge.
23. Highmore B. (2001) The Everyday Life Reader.
24. José B. Ashfo (2009) Human Behavior in the Social Environment: A Multidimensional Perspective.
25. Janning F. (2015) Philosophy of everyday life//Journal of philosophy of life. Vol. 5, № 1.
26. Kenny K. (2013) Diaspora: A very short introduction. New York. Oxford Unuversity. Press.
27. Lefebvre H. (1984) Everyday life in the modern world. New Brunswick, N.J., U.S.A.: Transaction Boooks.
28. Lefebvre H.(1968) Critique of everyday life. Verso.
29. Mishele de Certeau (2011) The Practise of everyday life. University of California.
30. Norman K. (1989) Denzin Interpretive biography, Sage Publications.
31. Nish I. (2016) The history of Manchuria. 1840-1948. Volume 1: Historical narrative. Renaissance books.
32. Nish I. (2016) The history of Manchuria. 1840-1948. Volume 2: Select primary sources. Renaissance books.
33. Perry J. (2002) Identity, Personal Identity, and the Self. Indianapolis, Hackett.
34. Rokeach M. (1968) Beliefs, attitudes and values, Jossey-Bass, San Francisco.
35. Rokeach M. (1973) The nature of human values. Free Press. New York.
36. Elizabeth Rosdeitcher (2006) The Rhetoric of Everyday Life// Humanities then and Now 29. № 1.
37. Self and Subjectivity; "Identity, Sex, and the Metaphysics of Substance". Edited by Kim Atkins.
38. Sobel M. (1981) Lifestyle and social structure. Concepts, definitions and analyses, Academic Press, New York.
39. Shotter J. (1993) Cultural politics of everyday life: Social constructivism, rhetoric and knowing of the third kind. Toronto University Press.
40. Shaffer G. (1986) A new field of study: Modern diasporas on international politics// Modern diasporas in international politics. L., P.1-15.
41. Артюнов С., Козлов С. (2005) Диаспоры: скрытая угроза или дополнительный ресурс// Независимая газета. 23 ноября.
42. Бромлей Ю. (1988) К типологии этнических общностей. Проблемы типологии в этнографии. М.
43. Дятлов В. (1999). Диаспора: попытка определиться в понятиях//Диаспоры. №1.
44. Елизаветина Г. (1982) Становление жанров автобиографии и мемуаров//Русский и западноевропейский классицизм. Проза. М.
45. Еханурова И. (2011) Теоретические подходы к определению понятия "диаспора". // Вестник Бурятского Государственного Унверситета. Вып. 6. Сс. 104-107.
46. Миграционные процессы в России и СССР. М., 1991.

47. Тощенко Ж. Т., Чапыткова Т.И. Диаспора как объект социологического исследования//Социс. 1996. №12.С. 37

48. Адамян Е.(2011) Художественный и мемуарный портрет в прозе Андрея Белого, Москва.

49. Барахов В. (1980)Литературный портрет начала 20 в. (Вопросы типологии и поэтики). АДДД. М.

50. Барахов В. (1984) В зеркале литературной мемуаристики. (К вопросу о ее роли и художественном своеобразии), //Русская литература. №1.

51. Бронская Л. (2007) Автобиографическая проза русского зарубежья как художественная автобиография нового типа//Герменевтика литературных жанров. Под редакцией М. Головко, Ставрополь.

52. Бушканец Е.（1975）Мемуарные источники. Учебное пособие к спецкурсу. Текст.Казань.

53. Васильев А. (2012) Красота в изгнании. Слово.

54. Винокур Г.О. (1927) Биография и культура, М.

55. Гончаренко О. (2009) Русский Харбин. Издательство ВЕЧЕ, М.

56. Голубцов В. (1970) Мемуары как источник по истории советского общества. М.

57. Забияко А.（2009）Меж двух миров – 351 с. Благовещенск

58. Ильясова А. "История повседневности" в современной российской историографии//Проблемы российской историографии в середине 19-начале 20 в.Сборник трудов молодых ученых, Альчнс-Архео

59. Капран И.（2007）Повседневная жизнь русского населения Харбина - конец 19 в. – 50-е гг. – 20 в.; - 240 с. Владивосток 308 с.

60. Ким А. (2009) Этнополитическое исследование современных диаспор (Конфликтологический аспект). Автореферат на соискание ученой степени д-ра политических наук. Спб.

61. Кириллова Е. (2004) Мемуаристика и ее жанровые модификации. Автореферат диссертации кандидата философских наук. Владивосток.

62. Круглов Д. (1996) Повседневность как предмет философской рефлексии: автореферат диссертации кандидата философских наук. Спб.

63. Левин З. (2001) Менталитет диаспоры .(Системный и социокультурный анализ). М.

64. Лелеко В. (2002) Пространство повседневности в европейской культуре. Спб.

65. Лелеко В. (1994) Эстетика повседневности. Спб.

66. Людке А. (1999)Что такое история повседневности? Ее достижения и перспективы в Германии//Социальная история. Ежегодник

67. Магомедова А. (2000) Феномен повседневности. (Социально-философский анализ). Автореферат кандидата философских наук. Спб.

68. Машинский С. (1960) О мемуарно - автобиографическом жанре// Вопросы литературы. № 3.

69. Милитарев О. (1999) О содержании термина "диаспора". (К разработке дефеници). //Диаспоры. М. № 1. Сс. 24-34.

70. Михайлова М.(2000) Психологическое исследование состояния эмиграции//Психологический журнал. №1.

71. Мыльников А. (2009) Этническая диаспора как субъект политических коммуникаций. Автореферат диссертации кандидата политических наук. Астрахань.

72. Налимов В., Дрогалина Ж. (1995) Реальность нереального. М.

73. Новикова Н. (2003) Повседневность и язык: культурологические основания и эмпирические реалии. Автореферат доктора психологических наук. Саранск.

74. Обидина Ю. (2012) Концептуализация понятия "диаспора" в современных научных исследованиях. "Запад-Восток" Научно-практический ежегодник. №4-5.

75. Повседневность как текст культуры: материалы международной научной конференции "Повседневность как как текст культуры". Киров 27, 29 апреля 2005 г.

76. Петрышева О. (2008) Жанр портрета во французской мемуарной литературе 17в.: Т. Де Рео, Рец, Сен-Симон, Нижний Новгород.

77. Полоскова Т. (2000) Диаспоры в системе международных связей. Дис-я докт. Политических наук. М.

78. Полоскова Т. (2000) Диаспора: фактор конфликта или сближения// Дружба народов. №3.

79. Попков В. (2002) "Классические диапоры": Вопрос о дефениции термина. //Диаспоры. №1. Сс. 6-23

80. Ревякина Т. (2004) Проблемы адаптации и сохраниения национальной идентичности российской эмиграции в Китае. М.

81. Семенов Ю. (2000) Этнос, нация, диаспора// Этнографическое обозрение. № 2. Сс. 64-67.

82. Сутаева З. (1998) Жанровые особенности автобиографической и мемуарной прозы, Москва.

83. Тартаковский А. (1999) Мемуаристика как феномен культуры. № 1.

84. Тишков В. (2003) Реквием по этносу. Исследования по социально-культурной антропологии. М.

85. Тощенко Ж. (1996) Диаспора как объект социологического исследования // Социс.№ 12. Сс. 33-42.

86. Хисамутдинов А. (2001) Российская эмиграция в Азиатско-Тихоокеанском регионе и Южной Америке.

87. Шеффер Г. (2003) Диаспоры в мировой политике//Диаспоры. №1.

88. Шнирельман В. (1999) Мифы диаспоры//Диаспоры. №2-3. Сс. 6-34.

89. Шкляева Е. (2002) Мемуары как текст культуры: Женская линия в мемуаристике 19-20 вв: А. П. Керн, Т.А. Куминская, Л.А. Авилова, Барнаул.

1. 浅野智彦『自己への物語論的接近：家族療法から社会学へ』、勁草書房、2001 年。

2. 生田美智子「ハルビンの白系露人事務総局の活動」阪本秀昭編著『満洲におけるロシア人の社会と生活』ミネルヴァ書房、2013 年。
3. 生田美智子「植民地主義の表象:「満洲」のロシア人ディアスポラの場合」『ロシア・東欧研究』大阪外国語大学ヨーロッパⅠ講座、第 12 号、E.E.アウリレネ、M.B.クロートヴァ「「満洲国」におけるロシア人:「内」と「外」」(杉山真束訳)『セーヴェル』第 30 号、2014 年。
4. 生田美智子編『女たちの満州。多民族の空間を生きて』、大阪大学出版会、2015 年。
5. 伊トウサン『「満洲」文学の研究』明足書店、2010 年。
6. 伊賀上菜穂「日本人が描いたロマノフカ村:出会いと表象」「日本人が見た三河コサック村」、阪本編、159－183 頁。
7. 岡真里『記憶・物語』、岩波書店、2000 年。
8. 阪本秀昭「地方の白系露人事務局の活動」
9. 小林英夫『〈満洲〉の歴史』、講談社、2002 年。
10. 小泉京美「「満洲」の白系ロシア人表象。「桃色」のエミグラントから「満洲」の文学まで」『昭和文学研究』第 6 集、昭和文学研究会、2012 年、1－13 頁。
11. 進塚瀬　『満洲の日本人』、吉川弘文館、2004 年。
12. 中見立夫『満洲とは何だったのか』、ほか書、2004 年。
13. 日本移民会編『移民研究と多文化共生。日本移民学会創設 20 周年記念論文集』、御茶の水書房、2011 年。
14. 満洲回顧集刊行会編集『あっ満洲:国づくり産業開発者の手記』、農林出版、1965 年。
15. 玉野井麻利子『歴史と記憶 - 場所、身体、時間』、藤原書店、2008 年。
16. 『歴史人。満洲帝国の真実』//特集、№19、2012 年。
17. E.E.アウリレネ、M.B.クロートヴァ「「満州国」におけるロシア人:「内」と「外」」(杉山真央訳)『セーヴェル』第 30 号、2014 年、95－107 頁。
18. 伊賀上菜穂[日本人とロマノフカ村:日本側資料に現れる旧満洲ロシア人古儀式派教徒の表象]『セーヴェル』第 25 号、2009 年、55－77 頁。
19. 山田清三郎編『日満露在満作家短編選集』、ゆまに書房、1940 年。
20. 山室信一『キメラ。満州国の肖像』、中公新書、1993 年。
21. 蘭信三『「満洲移民」の歴史社会学』、行路社、1994 年。
22. 山本有造『満洲:記憶と歴史』、京都大学学術出版会、2007 年。

日本人の回想記:

1. 赤坂憲雄、玉野井真理子、三砂ちづる『歴史と記憶』藤原書店、2008 年。
2. 坂部晶子　『「満洲」経験の社会学』世界思想社、2008 年。

3. 勝山妍子『夕映えのスンガリー』光陽出版社、2007 年。
4. 加藤淑子『ハルビンの詩がきこえる』藤原書店、2006 年。
5. 加藤淑子『私がまだ小さい子供だったころ』、東京、2011 年。
6. 石村博子『ハルビン新宿物語』講談社、1995 年。
7. 後藤春吉編『ハルビンの想い出』協和印刷、京都、1973 年。
8. 福山郁子『私の満州・思い出すままに』海鳥社、2006 年。
9. 小関久道『ハルビン・回想』文芸社、2002 年。
10. 小宮清『満州メモリー・マップ』筑摩簿書房、1990 年。
11. 永井瑞江『おばあちゃんの満州っ子日記』信濃毎日新聞社、2005 年。
12. 山崎倫子『回想のハルビン。ある女医の激動の記録』牧洋社、1993 年。
13. 満拓会編『満洲引揚・戦後自分史を語る』あずさ書店、1987 年。
14. 森茂『北満開拓民救援隊始末記』、福岡、1988 年。
15. 古山秀男『一日本人の八路軍従軍物語』、竹下伝吉、1974 年。
16. 藤原てい『流れる星は生きている』、東京、1965 年。
17. マローズ回編『マローズ』回想記集、1988 年。
18. 東京ハルピン会編『東京ハルピン会報』、第 48 号、2000 年。
19. 西条正『中国人として育った私』、中央公論社刊、1978 年。
20. 高野悦子『黒竜江への旅』、新潮社、1986 年。
21. 加藤幸四郎『風来漫歩』、櫻書募、1981 年。
22. 泉湊『終戦の想い出。満洲ハルピンにて』、東京、2003 年。
23. 今ハルビンを語る会編『ハルビン日本人女学校：1933－1945』、1997 年。
24. 溝口筋『さよなら楡の街ハルビン』、東京、1995 年。
25. 武田英克『満洲脱出』、中央公論社編、1985 年。
26. 柳田桃太郎『ハルビンの残照』原書房、1986 年。

ロシア人の回想記:

1. Мелихов Г. (1991) Манчжурия далекая и близкая. Наука.
2. Янковский В.（1994）Харбин-папа - Рубеж: Тихоакеанский альманах.
3. Лопато Л.（2003）Волшебное зеркало воспоминаний - Захаров. Москва.
4. Таскина Е.（1998）Русский Харбин- Издательство Московского Университета
5. Слободчиков В.А（2005）О судьбе изгнанников печальной - Москва Центр-Полиграф.
6. Шапиро М. （1978）Харбин, 1945. Память: исторический сборник

7. Кроль М.（2008）Страницы моей жизни. Мосты культуры. Гершавим
8. Славуцкая А. （2002）Все, что было: записки дочери дипломата. Москва. Книга и бизнес.
9. Трескин Н.（1998）О жизни и о себе - с. 126-144, Австралиада: Русская летопись
10. Шиляев В. （1997）Дом с каменными львами у ворот - Россияне в Азии
11. Андерсен Л. （2007）Одна на мосту – Русский путь.
12. Ильина Н. （1988）Дороги и судьбы – Советский писатель.
13. Рачинская Е. （1982）Перелетные птицы - Сан-франциско, Глобус
14. Лалетина Н. Японцы//Русская Атлантида, №28-34
15. Лалетина Н. Тору Камей//Русская Атлантида, №23
16. Винокуров В. Кавалерийский отряд Асано, Русская Атлантида, №32
17. Сборник воспоминаний русских иммигрантов "Русская Атлантида", №10 - 35, 2007-2009 гг.
18. Абросимов И. (1990) Под чужим небом. Мокодая гвардия
19. Вертински А. (2004) Дорогой длинною. Изд. Астрель
20. Воейкова-Ильина Е. (2010) Нам не уйти от родины навеки, Русский путь
21. Глинце М. (1986) Русская семья дома и в Маньчжурии, Сидней
22. Глэд А. Ещин и Гумилев// Заря №5
23. Ильина-Лаиль О. (2007) Восток и Запад в моей судьбе. ВИКМО-М
24. Крузенштерн-Петерец Ю. (1997) У каждого человека есть своя родина. Россияне в Азии
25. Кулаев И. (1999) Под счастливой звездой: воспоминания. М.: Русский путь
26. Лопато Л. (2003) Волшебное зеркало воспоминаний, Захаров
27. Несмелов А. (1999) Памяти Ещина//Понедельник, №1. Центабрь
28. Чиркин С. (2006) Двадцать лет службы на Востоке, Русский путь
29. Черникова Л. (1995) Вспомнить все...С такой мечтой приехали в город своей молодости русские Шанхайцы
30. Русская Атлантида. (Журнал, издаваемый челябинской ассоциацией Харбин) No. 7-37 (2001 - 2010)
31. Австралиада. (Журнал) No. 16-24 (1997 - 2000)
32. На соплах Маньчжурии. (Журнал) Ассоциация "Харбин". Г. Новосибирск. No. 32-110 (1996 - 2004)

中国人の回想記:

23. Jung C. (1991) Wild swans. Three daughters of China, Happer Perennial, 1991